
志木市

上宿遺跡

令和2年度

0209 交付金(改築)工事(上宿遺跡埋蔵文化財整理業務委託)
一般国道254号／志木市上宗岡地内
埋蔵文化財発掘調査報告

2021

埼玉県
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、埼玉県5か年計画において、「埼玉の活力を高める社会基盤をつくる」という指針を掲げ、企業誘致や観光などによる産業振興、地域の活性化につなげるため、広域的な幹線道路ネットワークを整備しています。県西部を南北に縦貫する一般国道254号は、首都圏中央連絡道路や東京外かく環状道路などの主要幹線道路と連結する、本県の道路ネットワーク上、重要な幹線道路である一方で、県南部においては著しい交通渋滞が生じています。この一般国道254号の渋滞緩和と主要幹線道路へのアクセス強化による県南西部地域の発展を目指し、和光市内の東京外かく環状道路から朝霞市、志木市を経て富士見市内的一般国道463号までの「一般国道254号和光富士見バイパス」の整備を進めています。

事業予定地内における埋蔵文化財包蔵地の確認調査を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が実施したところ、志木市上宗岡に所在する上宿遺跡が新たに確認されました。その取り扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は、同事業に伴う事前調査として、埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、平安時代の住居跡をはじめ、中世の館にまつわる堀や井戸などが発見されたほか、^{すりばち}擂鉢などの当時の人々が生活に使った道具や、中世武士の信仰に深く結びつくキリーク（阿弥陀）と銘ぜられた完形の板碑なども出土しました。かつて、鎌倉街道の脇道とされる羽根倉道と河川（現新河岸川）の交差する交通の要所として栄えた「宗岡」地域の歴史や文化を知るうえで、大変貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県朝霞県土整備事務所、志木市教育委員会、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和3年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例　言

- 1 本書は志木市上宗岡地内に所在する上宿遺跡
第1地点の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名と代表地番、発掘調査届に対する指示
通知は、以下のとおりである。

上宿遺跡第1地点 (No.09-017)
志木市上宗岡2丁目1242-1他
平成31年4月2日付け教文資第2-10号
- 3 発掘調査は、一般国道254号バイパス整備に
伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であ
る。上宿遺跡の調査は、埼玉県教育局市町村支
援部文化資源課が調整し、埼玉県朝霞県土整備
事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵
文化財調査事業団が実施した。
- 4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（令和元年度）
「8225社会资本整備総合交付金（改築）工事（上
宿遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託）」
整理・報告書作成事業（令和2年度）
「0209交付金（改築）工事（上宿遺跡埋蔵文化
財整理業務委託）」
- 5 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示
した組織により実施した。

発掘調査は、令和元年5月1日から令和元年
9月30日まで実施し、渡邊理伊知、赤熊浩一
が担当した。

整理・報告書作成事業は、令和2年7月1日

から令和2年12月31日まで実施し、大谷　徹
が担当した。報告書は令和3年2月24日に埼
玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第466集と
して印刷、刊行した。

- 6 発掘調査における基準点測量は株式会社ソレ
イユに、空中写真撮影は中央航業株式会社に委
託した。
- 7 発掘調査における写真撮影は渡邊、赤熊が行
い、出土遺物の写真撮影は大谷が行った。
- 8 出土品の整理と図版作成は大谷が行い、縄文
土器については金子直行、陶磁器・板碑につい
ては村山　卓、石製品については水村雄功、金
属製品は瀧瀬芳之、井上真帆の協力を得た。
- 9 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村
支援部文化資源課、その他を大谷が行った。
- 10 本書の編集は大谷が行った。
- 11 本書にかかる諸資料は令和3年3月以降、埼
玉県教育委員会が管理・保管する。
- 12 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の関係
機関及び方々から御教示・御協力を賜った。記
して感謝いたします。（敬称略）

志木市教育委員会
石川安司　江原　順　大久保　聰　岡崎裕子
尾形則敏　栗岡眞理子　佐藤一也　坪田幹男
徳留彰紀　堀口智彦　堀　善之　水口由紀子

凡 例

1 遺跡全体におけるX・Y座標の値は、世界測地系による国家標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値であり、Z座標の値は標高を示す。また、各挿図に示した方位はすべて座標北を示す。

A区に位置するD-7グリッド北西杭の座標は、X=-17210.000m、Y=-22940.000m、Z=5.580m、北緯 $35^{\circ} 50' 40.6025''$ 、東経 $139^{\circ} 34' 45.7653''$ である。

2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標第IX系に基づく $10 \times 10\text{m}$ の範囲を1グリッドとし、調査区全体の方眼網を組んだ。

3 グリッドの名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッドと呼称した。

4 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J…住居跡 S K…土壙 S E…井戸跡
S D…溝跡 S X…性格不明遺構
P…ピット・柱穴

5 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全体図 1:600 1:200

遺構図 1:60

遺物実測図・拓影図 1/2・1/3・1/4

6 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

- 地山
- 須恵器は断面を黒塗り、灰釉陶器の釉範囲20%、黒色処理30%のトーンで示し、砥具の砥面は一で範囲を示した。

7 遺構断面図に表記した水準数値は標高（m）で示した。

8 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

- 遺物の計測値は原則cm、g単位で示した。
- （ ）は推定値、〔 〕は残存値を示す。
- 胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石
E:石英 F:軽石 G:砂粒子 H:赤色粒子
I:白色粒子 J:針状物質 K:黒色粒子
L:その他 M:チャート

- 残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
- 焼成は良好・普通・不良の3段階で示した。
- 色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。
- 備考には、出土位置、注記番号、諸特徴等を記した。

9 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図、志木市発行の1/2,500都市計画基本図を編集して使用した。

10 遺構番号は、原則、調査時のものを用いた。変更結果は本文中に示した。

11 文中の引用文献は、（著者（組織名）発行年）の順で表記し、参考文献とともに巻末に掲載した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	3	井戸跡	31
1	発掘調査に至る経過	1	4	溝跡	43
2	発掘調査・報告書作成の経過	2	5	性格不明遺構	62
(1)	発掘調査	2	6	ピット	68
(2)	整理・報告書の作成	2	7	遺構外の出土遺物	91
3	発掘調査・報告書作成の組織	2	(1)	縄文時代の遺物	91
II	遺跡の立地と環境	3	(2)	古代の遺物	91
1	地理的環境	3	(3)	中・近世の遺物	92
2	歴史的環境	4	V	調査のまとめ	102
III	遺跡の概要	8	1	上宿遺跡第1地点の調査成果	102
IV	遺構と遺物	15	2	遺物からみた上宿遺跡の様相	104
1	住居跡	15			
2	土壙	17			
				写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第36図 溝跡（4）	47
第2図 周辺の地形	4	第37図 溝跡出土遺物（2）	48
第3図 周辺の遺跡	5	第38図 溝跡出土遺物（3）	49
第4図 基本土層	8	第39図 溝跡出土遺物（4）	50
第5図 遺跡位置図	9	第40図 溝跡出土遺物（5）	51
第6図 調査区位置図	10	第41図 溝跡出土遺物（6）	52
第7図 全体図	11	第42図 溝跡出土遺物（7）	53
第8図 区割り図（1）	12	第43図 溝跡出土遺物（8）	54
第9図 区割り図（2）	13	第44図 溝跡出土遺物（9）	55
第10図 区割り図（3）	14	第45図 溝跡出土板碑（1）	56
第11図 第1号住居跡	15	第46図 溝跡出土板碑（2）	57
第12図 第1号住居跡出土遺物	16	第47図 性格不明遺構（1）	62
第13図 土壙（1）	18	第48図 性格不明遺構（2）	63
第14図 土壙（2）	19	第49図 性格不明遺構（3）	64
第15図 土壙（3）	20	第50図 性格不明遺構出土遺物（1）	64
第16図 土壙（4）	21	第51図 性格不明遺構出土遺物（2）	65
第17図 土壙出土遺物（1）	22	第52図 性格不明遺構出土板碑	66
第18図 土壙出土遺物（2）	23	第53図 ピット区割り図（1）	69
第19図 第101号土壙遺物出土状況	24	第54図 ピット区割り図（2）	70
第20図 第101号土壙出土遺物	25	第55図 ピット区割り図（3）	71
第21図 土壙出土錢貨（1）	26	第56図 ピット（1）	72
第22図 土壙出土錢貨（2）	27	第57図 ピット（2）	73
第23図 井戸跡（1）	32	第58図 ピット（3）	74
第24図 井戸跡（2）	33	第59図 ピット（4）	75
第25図 井戸跡（3）	34	第60図 ピット（5）	76
第26図 井戸跡（4）	35	第61図 ピット（6）	77
第27図 井戸跡出土遺物（1）	36	第62図 ピット（7）	78
第28図 井戸跡出土遺物（2）	37	第63図 ピット（8）	79
第29図 井戸跡出土遺物（3）	38	第64図 ピット（9）	80
第30図 井戸跡出土板碑（1）	39	第65図 ピット（10）	81
第31図 井戸跡出土板碑（2）	40	第66図 ピット（11）	82
第32図 井戸跡出土板碑（3）	41	第67図 ピット（12）	83
第33図 溝跡（1）・出土遺物（1）	44	第68図 ピット（13）	84
第34図 溝跡（2）	45	第69図 ピット出土遺物（1）	88
第35図 溝跡（3）	46	第70図 ピット出土遺物（2）	89

第71図	ピット出土錢貨	89	第76図	遺構外出土遺物（4）	95
第72図	遺構外出土遺物 繩文土器	91	第77図	遺構外出土板碑（1）	96
第73図	遺構外出土遺物（1）	92	第78図	遺構外出土板碑（2）	97
第74図	遺構外出土遺物（2）	93	第79図	遺構外出土錢貨	98
第75図	遺構外出土遺物（3）	94			

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	6	第11表	性格不明遺構出土遺物観察表	67
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	16	第12表	性格不明遺構出土板碑観察表	67
第3表	土壙出土遺物観察表	28	第13表	ピット一覧表	85
第4表	第101号土壙出土遺物観察表	29	第14表	ピット出土遺物観察表	89
第5表	土壙出土錢貨観察表	30	第15表	ピット出土錢貨観察表	90
第6表	井戸跡出土遺物観察表	41	第16表	遺構外出土遺物観察表（1）	99
第7表	井戸跡出土板碑観察表	43	第17表	遺構外出土遺物観察表（2）	100
第8表	溝跡出土遺物観察表（1）	58	第18表	遺構外出土板碑観察表	101
第9表	溝跡出土遺物観察表（2）	60	第19表	遺構外出土錢貨観察表	101
第10表	溝跡出土板碑観察表	61			

写真図版

- | | | |
|------|----------------|---------------------|
| 図版1 | 1 調査区全景（上が北西） | 7 第18号土壙 |
| 図版2 | 1 調査区遠景（南東から） | 8 第19号土壙 |
| | 2 調査区遠景（北西から） | 図版11 1 第20号土壙遺物出土状況 |
| 図版3 | 1 調査区遠景（北東から） | 2 第21号土壙 |
| | 2 調査区遠景（南西から） | 3 第23号土壙 |
| 図版4 | 1 A区全景（南東から） | 4 第24号土壙 |
| | 2 A区全景（南から） | 5 第101号土壙 |
| 図版5 | 1 A区全景（北から） | 6 第101号土壙遺物出土状況（1） |
| | 2 A区全景（西から） | 7 第101号土壙遺物出土状況（2） |
| 図版6 | 1 B区全景（南東から） | 8 第102号土壙 |
| | 2 B区全景（東から） | 図版12 1 第105号土壙 |
| 図版7 | 1 B区北半部全景（北から） | 2 第105号土壙遺物出土状況 |
| | 2 B区南半部全景（北から） | 3 第107号土壙 |
| 図版8 | 1 第1号住居跡 | 4 第108号土壙 |
| | 2 第1号住居跡カマド | 5 第109号土壙 |
| | 3 第1・3号土壙 | 6 第110号土壙 |
| | 4 第1号土壙 | 7 第112号土壙 |
| | 5 第2号土壙 | 8 第113号土壙 |
| | 6 第3号土壙 | 図版13 1 第1号井戸跡 |
| | 7 第4号土壙 | 2 第2号井戸跡 |
| | 8 第4号土壙遺物出土状況 | 3 第2号井戸跡土層断面 |
| 図版9 | 1 第5・17号土壙 | 4 第3・5号井戸跡 |
| | 2 第6号土壙 | 5 第3号井戸跡 |
| | 3 第6号土壙土層断面 | 6 第3号井戸跡土層断面 |
| | 4 第7号土壙 | 7 第4号井戸跡 |
| | 5 第8号土壙 | 8 第5号井戸跡土層断面 |
| | 6 第9号土壙 | 図版14 1 第6号井戸跡 |
| | 7 第9号土壙土層断面 | 2 第6号井戸跡土層断面 |
| | 8 第10号土壙 | 3 第7号井戸跡 |
| 図版10 | 1 第12号土壙 | 4 第8号井戸跡 |
| | 2 第12号土壙遺物出土状況 | 5 第8号井戸跡土層断面 |
| | 3 第13号土壙 | 6 第9号井戸跡 |
| | 4 第14号土壙 | 7 第9号井戸跡土層断面 |
| | 5 第15号土壙 | 8 第10号井戸跡 |
| | 6 第16号土壙 | |

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 図版15 | 1 第10号井戸跡土層断面
2 第11号井戸跡
3 第11号井戸跡土層断面
4 第12号井戸跡
5 第12号井戸跡土層断面
6 第13号井戸跡
7 第13号井戸跡土層断面
8 第14号井戸跡土層断面 | 図版20 | 1 第1号性格不明遺構
2 第1号性格不明遺構土層断面
3 第2号性格不明遺構
4 第3号性格不明遺構（1）
5 第3号性格不明遺構（2）
6 第4号性格不明遺構
7 遺物出土状況（1）
8 第4号性格不明遺構
9 遺物出土状況（2） |
| 図版16 | 1 第15号井戸跡
2 第15号井戸跡土層断面
3 第17号井戸跡
4 第17号井戸跡土層断面
5 第18号井戸跡
6 第18号井戸跡土層断面
7 第19号井戸跡
8 第101号井戸跡 | 図版21 | 1・2 第12号土壤
3 第20号土壤
4 第109号土壤
5 第10号井戸跡
6 第5号溝跡
7 C-5 グリッド P12
8 C-6 グリッド P8
9 C-7 グリッド P43 |
| 図版17 | 1 第1・2号溝跡
2 第1号溝跡
3 第1号溝跡土層断面
4 第2号溝跡
5 第2号溝跡土層断面 | 図版22 | 1 第1号土壤
2・3 第4号井戸跡
4・5 第9号井戸跡
6 第14号井戸跡
7～13 第3号溝跡
14 第3・7号溝跡 |
| 図版18 | 1 第3・7号溝跡
2 第3・7号溝跡トレンチ1土層断面
3 第3号溝跡土層断面
4 第3号溝跡遺物出土状況（勾玉）
5 第7号溝跡 | 図版23 | 1～3 第3・7号溝跡
4 第4号溝跡
5～13 第5号溝跡
14 第7号溝跡 |
| 図版19 | 1 第4号溝跡
2 第4号溝跡土層断面
3 第5号溝跡
4 第5号溝跡遺物出土状況
（墨書土器）
5 第6号溝跡
6 第6号溝跡土層断面
7 第8号溝跡
8 第101号溝跡 | 図版24 | 1・2 第7号溝跡
3 第8号溝跡
4・5 第2号性格不明遺構
6～9 第4号性格不明遺構
10 B-6 グリッド P41
11 B-6 グリッド P46
12 C-6 グリッド P6
13 C-6 グリッド P22
14 B-6 グリッド
15 B-6 グリッド |

図版25 1・2 C - 5 グリッド
3~5 D - 5 グリッド
6・7 D - 6 グリッド
8 A区
9・10 E - 3 グリッド
11~13 E - 5 グリッド
14・15 F - 5 グリッド
16 試掘

図版26 1 第3号溝跡
2 C - 5 グリッド P10
3 D - 5 グリッド
4 第101号土壙
5 繩文土器
6~8 第4号井戸跡

図版27 1・2 第11号井戸跡
3 第7号井戸跡
4 第11号井戸跡
5・6 第14号井戸跡
7~10 第3号溝跡

図版28 1・2 第5号溝跡
3・4 第4号性格不明遺構
5 B・C - 5 グリッド
6・7 C - 5 グリッド
8・9 D - 5 グリッド
10 D - 6 グリッド
11 F - 4 グリッド

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成29年度からの5年間の県政運営の基本となる『埼玉県5か年計画－希望・活躍・うるおいの埼玉－』を策定し、各分野での施策に取り組んでいる。このうち成長の活力をつくる分野では、「埼玉の活力を高める社会基盤をつくる」という基本目標を掲げ、埼玉の活力を高める道路ネットワーク整備のなかで橋りょうなど道路施設の適切な維持管理を進めている。

こうした中で埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

一般国道254号和光富士見バイパス事業における埋蔵文化財の所在及びその取扱いについては、朝霞県土整備事務所長から平成30年8月21日付け朝整第429号で文化資源課長宛てに、照会がなされた。

これに対し、文化資源課では試掘による確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認した。この結果を基に、平成31年1月25日付け教生文第1967号で次の内容で回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
上宿遺跡 (No. 09-017)	集落跡	平安	志木市上宗岡2丁目

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在します。包蔵地内で工事着手する場合は、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別添図の「工事に着手して差し支えない場所」とした箇所については、工事に着手して差し支えありませんが、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて当課と協議してください。「今後試掘調査を要する場所」とした箇所については、試掘調査の開始時期について、引き続き当課と協議してください。「発掘調査を要する場所」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとした。

調査に当たっては、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と朝霞県土整備事務所、文化資源課の三者で、調査日程や調査区域について協議を行った。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が朝霞県土整備事務所長から平成31年4月1日付け朝整第36号で提出され、それに対する記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨の指示通知は次のとおりである。

平成31年4月1日付け教文資第4-84号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は次のとおりである。

平成31年4月2日付け教文資第2-10号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

上宿遺跡第1地点の調査は、令和元年5月1日から令和元年9月30日にかけて実施した。調査面積は2,626m²である。

平成31年4月2日に埋蔵文化財発掘届等を志木市教育委員会に提出し、事務手続きを行った。元号が平成から令和に変わった5月に事務所を設置し、重機による表土掘削作業に着手した。表土掘削終了後、基準点測量を実施し、人力による遺構確認作業を開始した。遺構確認作業の結果、調査区からは大規模な溝跡によって区画された範囲から、夥しい数の柱穴や井戸跡などの遺構が検出された。順次遺構の精査と図面作製、写真撮影を行った。遺構の調査が終了した9月5日に空中写真撮影を実施した。

9月下旬に事務所等を撤収し、9月24日に発見届と保管証を提出し、調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書の作成作業は、令和2年7月1日か

ら令和2年12月31日まで実施した。

7月から出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。復元を終えた掲載遺物は、実測とトレース、必要に応じて採拓を行った。実測には磁気式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機などを活用した。トレース図と拓本は、スキャナでデータ化し、印刷用の版下を作成した。11月には図版用の遺物写真を撮影し、遺構写真と合わせて、写真図版用の版下データを作成した。発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は、照合・修正を加え、画像編集ソフトを用いてトレースした。これに土層説明等を組み込み、印刷用の版下データを作成した。9月から原稿の執筆と報告書の割付・編集を行った。その後、印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、令和3年2月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第466集『上宿遺跡』を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、12月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3 発掘調査・報告書作成の組織

令和元年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二
常務理事兼総務部長	高 津 導
総務部	
総務部副部長	山 本 靖
総務課長	新 井 了 悟

調査部	
調査部長	黒 坂 穎 二
調査部副部長	吉 田 稔
主幹兼調査第二課長	大 谷 徹
主任	渡 邊 理伊知
主任専門員	赤 熊 浩 一

令和2年度（整理・報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二
常務理事兼総務部長	福 沢 景
総務部	
総務部副部長	山 本 靖
総務課長	鈴 木 裕 一

調査部	
調査部長	吉 田 稔
調査部副部長兼整理第一課長	上 野 真由美
主幹兼整理第二課長	大 谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

埼玉県は関東平野の内部に位置する内陸県で、面積は約3,800km²である。県土の西側約3分の1を山地と丘陵地が占め、残りの中央から東にかけては、台地と低地からなる平野部（埼玉平野）が広がっている。

県西の山地部は、関東山地の東端にあたる秩父山地で、埼玉県で最高峰の三宝山（標高2,483m）をはじめ、2,000mを超える山々がそびえている。山に四方を囲まれた中央には秩父盆地が形成され、荒川や赤平川などが東流する。山地部は東に向かって徐々に標高を下げ、台地と丘陵地に至る。

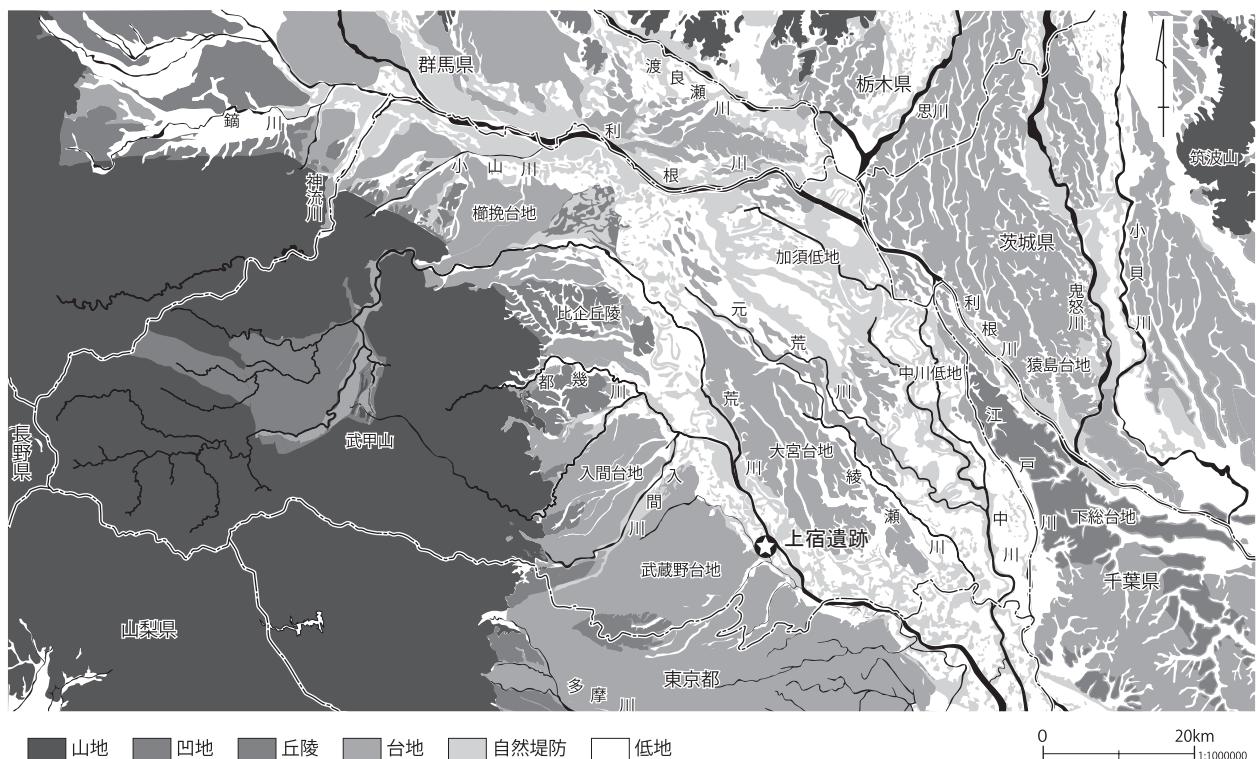
台地・丘陵地は、南から北へ武蔵野台地（北部）、入間台地、比企丘陵、櫛挽台地と連なり、東側には大宮台地が位置している。大宮台地は西を荒川、東を元荒川に挟まれた南北に長い台地で、標高は13～30mである。大宮台地の東側には加須低地

や中川低地などの利根川中流域低地と呼ばれる沖積低地が発達している。

上宿遺跡の所在する志木市は、埼玉県南東部に位置し、おおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.05km²、人口約7万5千人の自然と文化の調和する都市である。

志木市周辺の地理的景観は、荒川（旧入間川）と新河岸川によって形成された標高6m前後の「荒川低地」と呼ばれる沖積低地が、市域東半部に広がっている。その一方で、市域南西部には標高約20mの古多摩川によって形成された武蔵野台地（野火止台地）が広がり、その北西縁を縁取るように流れる柳瀬川の谷を挟んで、入間郡三芳町及び富士見市域に広がる武蔵野台地（川越台地）と対峙している。

上宿遺跡は、東武東上線「志木駅」から北へ約2.5



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の地形（富士見市教育委員会1994より引用、一部改変）

km離れた、富士見市との市境付近に位置している。江戸時代に江戸と小江戸川越を結ぶ舟運に利用された新河岸川の左岸に発達した自然堤防上に立地する。小字名に「宿」地名を残し、同じ自然堤防上の北側には平安時代から中・近世に継続する集落跡と考えられる宿遺跡が隣接し、一つの遺跡群を形成している。

2 歴史的環境

上宿遺跡（1）の所在する宗岡地区は、新河岸川の形成した自然堤防や後背湿地が広がっている。そのため、遺跡の分布が全体に希薄で、上宿遺跡の北に隣接する宿遺跡（2）や、古墳時代前期の器台やS字状口縁台付甕の破片が出土した馬場遺跡（4）、岩付城の落武者の伝承を残す関根兵庫館跡（3）などが確認されているにすぎない。

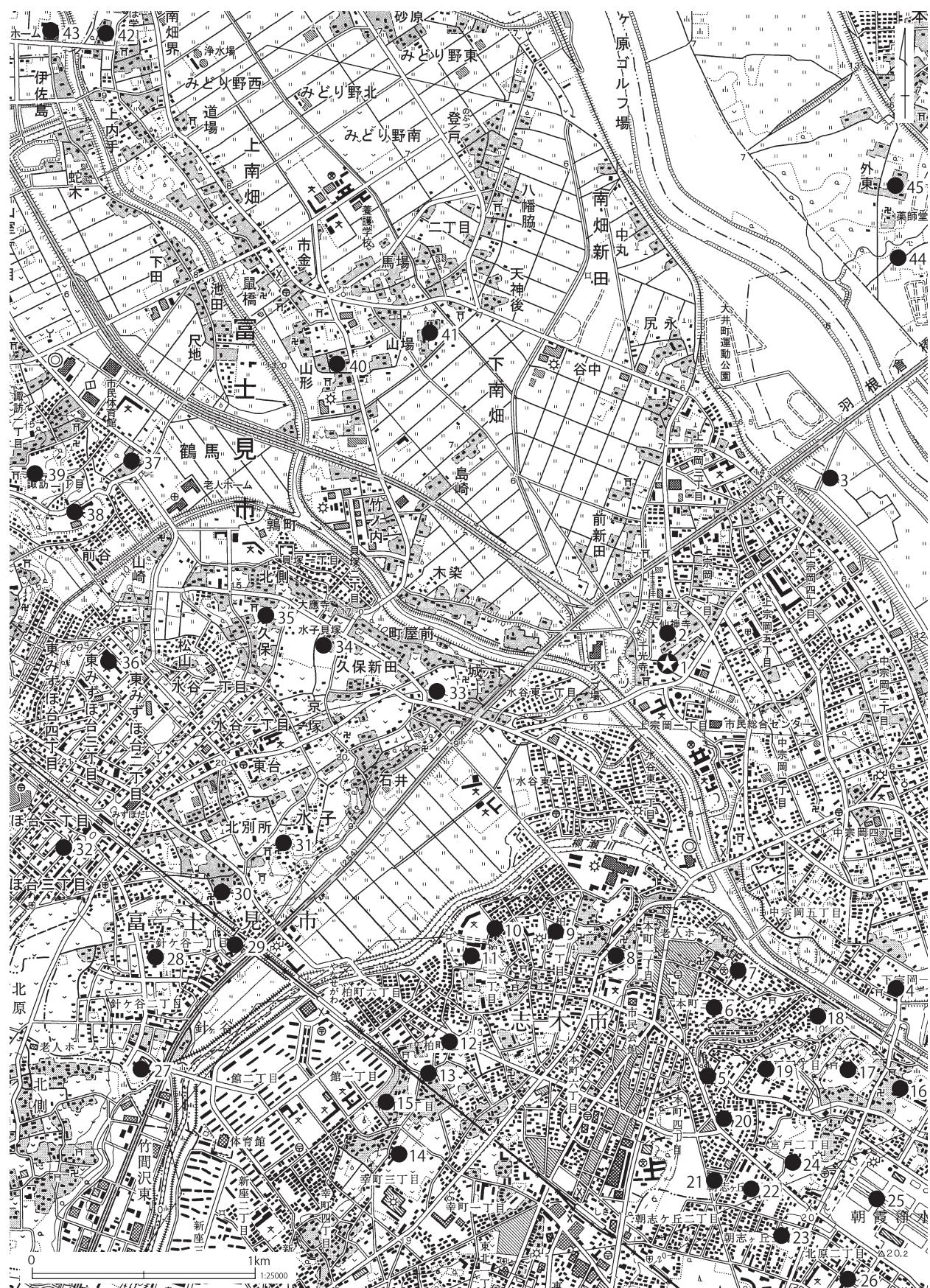
それに対し、志木市内の遺跡の多くは、柳瀬川や新河岸川右岸流域に展開する標高10～20mの

周辺に眼を転じれば、新河岸川沿いの自然堤防上には、北からふじみ野市城山遺跡、伊佐島遺跡、富士見市上内出遺跡、山形遺跡、難波田氏館跡、下流には和光市榎堂遺跡などの遺跡が分布しており、古墳時代以降に低地の開発が本格化したことか窺われる。

武蔵野台地縁辺部を中心に分布している。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は柳瀬川右岸の中野遺跡（9）をはじめ、城山遺跡（11）、中道遺跡（12）、西原大塚遺跡（14）などから、立川ローム層中に複数の文化層が認められ、礫群や石器集中地点が検出されている。黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、剥片、安山岩や凝灰岩、頁岩の石核や剥片なども出土している。



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（第3図）

所 在 地	遺 跡 名				
志 木 市	1 上宿遺跡	2 宿遺跡	3 関根兵庫館跡	4 馬場遺跡	5 大原遺跡
	6 富士前遺跡	7 田子山遺跡	8 市場裏遺跡	9 中野遺跡	10 城山貝塚
	11 城山遺跡	12 中道遺跡	13 新邸遺跡	14 西原大塚遺跡	15 塚の山古墳
朝 霞 市	16 ハケタ・中道遺跡	17 大瀬戸遺跡	18 大山第一遺跡	19 大山第二遺跡	20 立出遺跡
	21 大新田第一遺跡	22 大新田第二遺跡	23 中道第二遺跡	24 道合・立出遺跡	25 八塚遺跡
富士見市	27 南通遺跡	28 北通遺跡	29 別所遺跡	30 栗谷ツ遺跡	31 正網遺跡
	32 松ノ木遺跡	33 観音前遺跡	34 水子貝塚	35 氷川前遺跡	36 打越遺跡
	37 宿遺跡(多門氏館跡)	38 殿山遺跡	39 黒海戸遺跡	40 山形遺跡	41 難波田氏館跡
	42 上内出遺跡				
ふじみ野市	43 伊佐島遺跡				
さいたま市	44 神田天神後遺跡	45 外東遺跡			

縄文時代

縄文時代の遺跡は、草創期では城山遺跡で爪形文系土器や多縄文系土器が出土しているほか、田子山遺跡（7）で有舌尖頭器が出土している。

早期では、中道遺跡で早期末葉（条痕文系）の住居跡1軒が見つかっている。田子山遺跡では撫糸文・沈線文・条痕文系土器が出土している。また、城山遺跡、中野遺跡、田子山遺跡では、条痕文系土器を伴う炉穴が検出されている。

前期では、西原大塚遺跡、新邸遺跡（13）から黒浜式期、城山遺跡から諸磯式期の住居跡がそれぞれ検出されている。そのうちの新邸遺跡、城山遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。城山貝塚（10）も縄文海進期にあたるこの時期に形成された斜面貝塚と考えられる。

最も遺跡が増加するのは、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利E式期である。とりわけ西原大塚遺跡では、これまでに180軒以上の住居跡が環状に配置されていることが判明しつつある。その後、中期末葉から遺構数が減少し、後期には極めて少なくなる。わずかに西原大塚遺跡から堀之内式期と加曽利B式期の住居跡が、中野遺跡からは称名寺式期の柄鏡形住居（敷石住居）が1軒見つかっている。晚期では、中野遺跡、田子山遺跡から安行IIIc式・千綱式の土器片が少量出土している。

弥生時代～古墳時代前期

弥生時代の遺跡としては、前期に遡る遺跡は確

認されていないが、城山遺跡からは中期宮ノ台式の高壙や壺、甕とともに、抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土した住居跡と四隅切れの方形周溝墓が確認されている。このほか中野遺跡では、後期前葉の久ヶ原式土器を出土する住居跡、田子山遺跡からは後期中葉の多数の土器とともに、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土した住居跡が調査されている。西原大塚遺跡では、後期末から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒検出されており、中核的な集落跡であることが判明している。

古墳時代中・後期

前期末葉から中期にかけては遺跡が減少する傾向にある。中期の遺跡としては、中道遺跡、城山遺跡、中野遺跡などが挙げられる。中道遺跡では5世紀中葉の初源期のカマドをもつ住居跡が検出されている。5世紀末葉からは遺跡数が増加に転じ、6世紀後半から7世紀後半にかけて爆発的な増加がみられる。代表的な遺跡として、約230軒の住居跡が調査されている城山遺跡、約55軒の住居跡を数える中野遺跡などがある。中野遺跡では7世紀前葉の一辺10mを超す大型住居跡や、8本・12本柱を有する特徴的な住居跡がみられる。

また、田子山遺跡では6世紀後半の小型円形周溝墓1基が調査されているほか、遺跡範囲内に鎮座する御獄神社を取り囲むように巡る、外径約33mの溝跡の存在が明らかになり、古墳の周溝の可

能性が指摘されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代では、田子山遺跡と城山遺跡が代表的な遺跡である。田子山遺跡では、住居跡のほかに掘立柱建物跡や100基を超える土壙などが検出されている。特徴的な遺物として、灰釉陶器や銅製の丸瓶、鉄製紡錘車などが出土している。城山遺跡からは「富」と刻まれた銅印や、皇朝十二錢の一つである富壽神寶2枚が出土しており、注目される。

中・近世

中・近世の遺跡としては、柏の城跡を含む城山遺跡が挙げられる。柏の城跡の発掘調査では『鎌村旧記』にみえる「柏之城落城後の屋敷割の図」に対応する堀跡が検出されている。また、鋳造関連の遺構も検出されており、大量の鉄滓、炉壁、鉄鍋の鋳型、三叉状の土製品、砥石などの鋳造関連遺物が出土している。

志木市の北側に隣接する富士見市域では、埼玉県指定旧跡難波田氏館跡(41)、山形遺跡(40)が新河岸川の自然堤防上に立地している。また、台地上には国指定史跡水子貝塚(34)をはじめとする数多くの遺跡が知られている。

宗岡の歴史

上宿遺跡の所在する宗岡地区は、『新編武藏風土記稿』(成立:1830年頃)によると、柳瀬川、新河岸川を境に北側を入間郡宗岡村、南側を新座郡館村に分かれており、奈良・平安時代においても、この境をもとに入間郡、新座郡が分かれていたと考えられている(大久保2018)。

「宗岡」の地名は、室町時代まで遡ることが知られている。寛正4年(1463)4月に室町幕府(堀越公方)が対立する古河公方足利成氏を抑えるため、赤塚(東京都板橋)に駐在していた鹿王院の雑掌に対して、それまで仙波対馬守の影響下にあった「宗岡郷」に入部した長田弥九郎清仲への協力を命じた内容を記す文書が『鹿王院文書』

に残されている。また、文明18年から19年(1486~1487)に関東を巡遊した本山派修験の総帥道興准后がその紀行文『廻国雜記』の中で「夕烟あらそう暮を見せてけり我が家々の宗岡の宿」と宗岡の宿という地名を用い、歌を詠んでいることは良く知られている。さらに、小田原の後北条氏が永禄2年(1559)に作成した『小田原衆所領役長』に難波田弥太郎が棟岡(むねおか)に30貫文の役高をもっていたことが記されている。

遺跡に隣接して千光寺と大仙寺の二つの寺院が所在している。両寺院とも、創建の歴史は古く、新義真言宗智山派寺院の千光寺は、天慶4年(941)の開基と伝えられ、志木市内では最古の寺院である。西隣に鎮座する宿氷川神社も承暦2年(1078)の創建と伝えられている。曹洞宗寺院で龍澤山と号する大仙寺は、さいたま市浦和区大久保領家に所在する曹洞宗大泉院の第五世喜翁良悦大和尚により開山され、弘治2年(1556)2月に創建されている。千光寺には応永25年銘(1418)の鰐口が、大仙寺には弘長年間(1261~1264)の紀年銘を刻む板碑が残されている。

伝承によると鎌倉街道の脇道である「羽根倉道」が、荒川を羽根倉の渡しで越え、大仙寺の前を通り、千光寺の裏を抜け、富士見市水子方面に通じていたと言われており、遺跡周辺の「宿」地名が物語るように、中世には「宿」が形成されていたと考えられる。遺跡の西側には「のりこえ乗越」という渡しを連想させる地名も残っている。このように宗岡の地は、古くから河川交通と陸上交通の交差する要衝の地であったことが窺われる。

さらに、遺跡の北側には江戸時代に宗岡村と南畠村の境に、氾濫した水をくいとめるために築かれた「佃堤」が今も残っている。古くから大雨や長雨による洪水の被害を蒙りやすく、宗岡村全体を取り囲むように堤を巡らし、暮らしを守るために、絶え間ない努力を続けてきた農民たちの強い意志が垣間見られる。

III 遺跡の概要

上宿遺跡は、荒川と新河岸川に挟まれた沖積低地の標高約5mの微高地上に立地している。遺跡は南北約138m、東西約72mの範囲で、北から南に向かって緩やかに傾斜し、調査区南東側は自然堤防の後背湿地と推定される埋没谷が入り込む。今回の調査は、一般国道254号線バイパスの整備事業に伴い実施されたものである。調査時は、生活道路によって二分された調査区を便宜的に東側の調査区をA区、西側の狭い調査区をB区と呼称した。なお、遺構番号の編号方法については、A区は1番から、B区は101番からの連番として遺構名称を付けている。

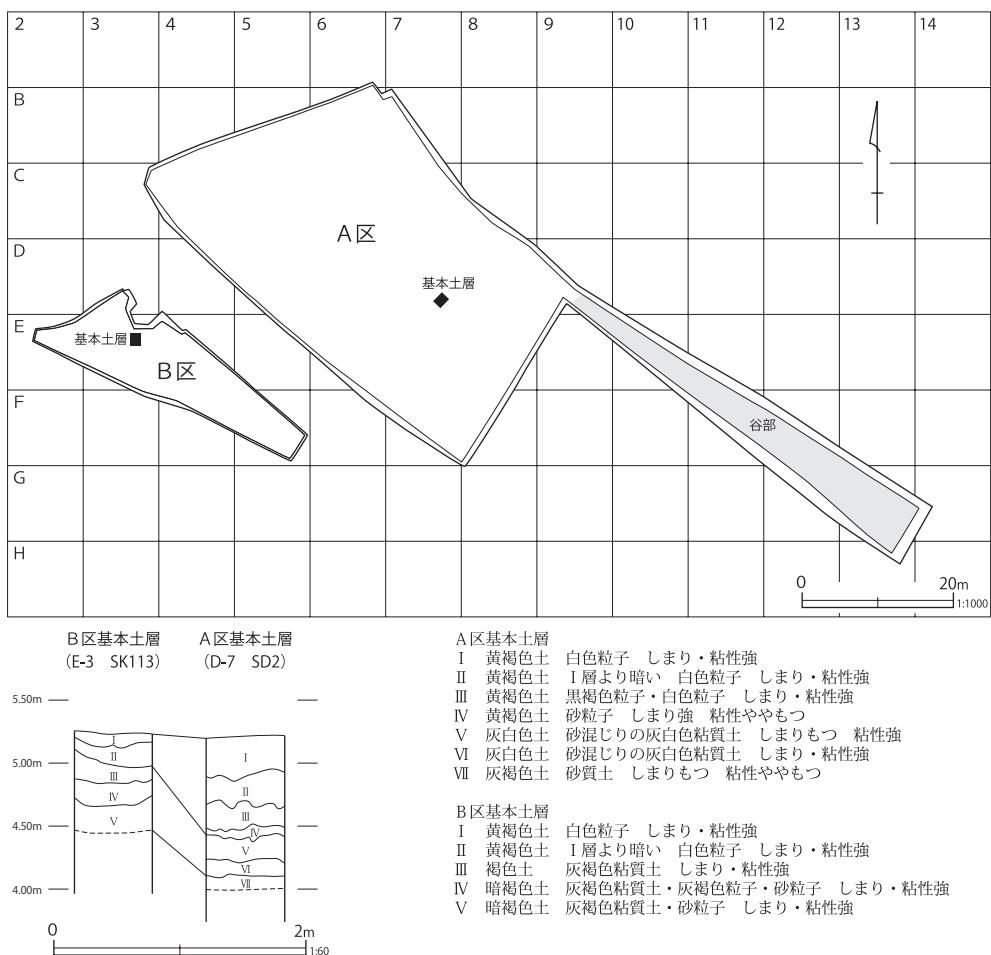
検出された遺構は、平安時代の住居跡1軒、土壙3基、井戸跡2基、溝跡1条、中・近世の土壙

32基、井戸跡17基、溝跡8条、性格不明遺構4基、ピット426基である。

調査の結果、A区からは平安時代を中心とする集落跡と、中世以降に掘削された二重に巡る築堀によって画された空間に、井戸跡や土壙、掘立柱建物跡を構成していたと推定される多数の柱穴（ピット）が検出された。

他方、B区からは古刹千光寺に関連する近世から近現代まで連綿と続いた、墓域の一部が明らかになった。六道錢として寛永通寶を副葬する土壙墓や、七輪や土鍋、土瓶、燭徳利などの精巧に作られた飯事道具を副葬する事例もみられた。

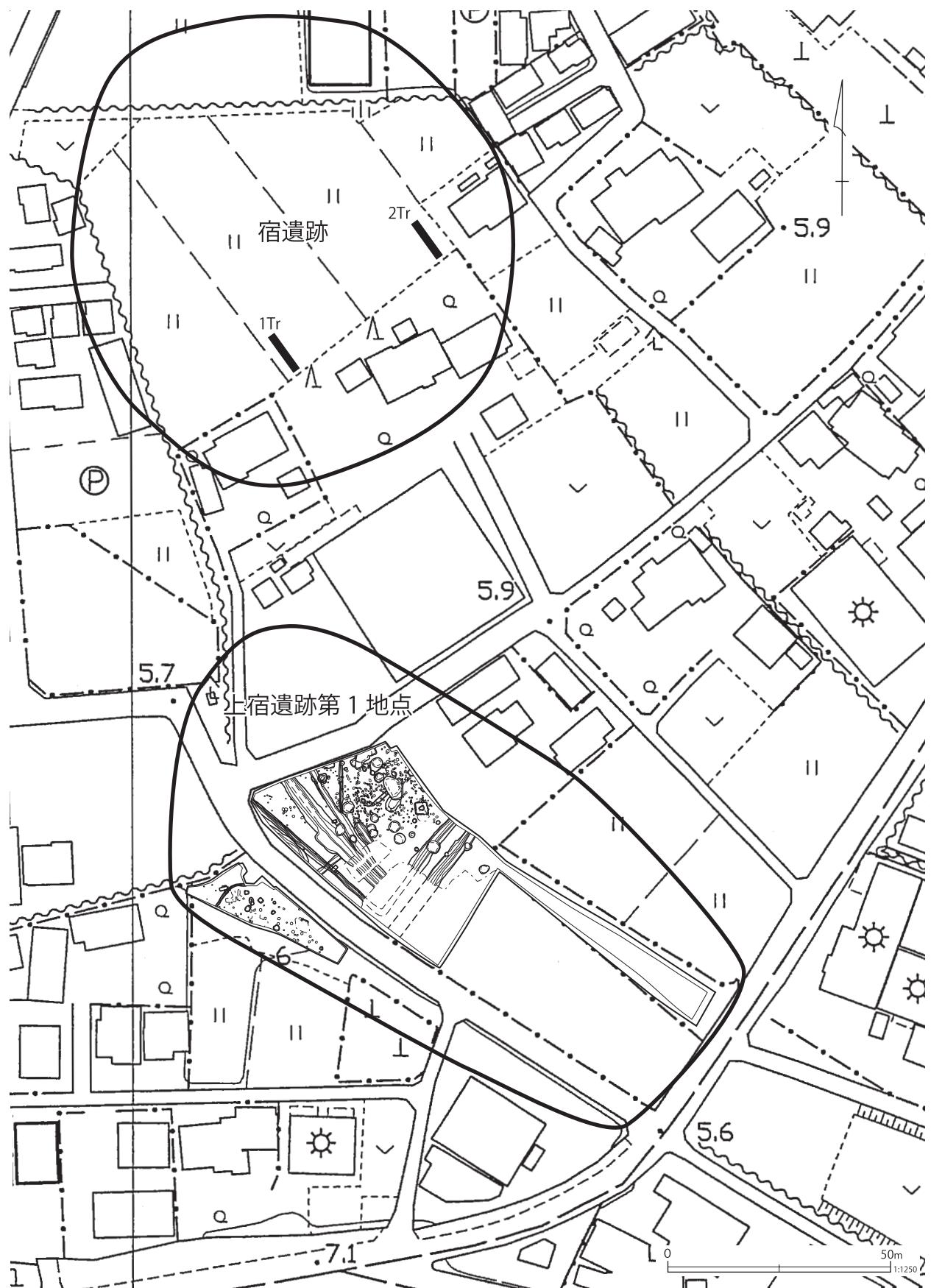
調査区の基本土層は、二次堆積ロームと想定される粘性の強い黄褐色土を基盤層としている。



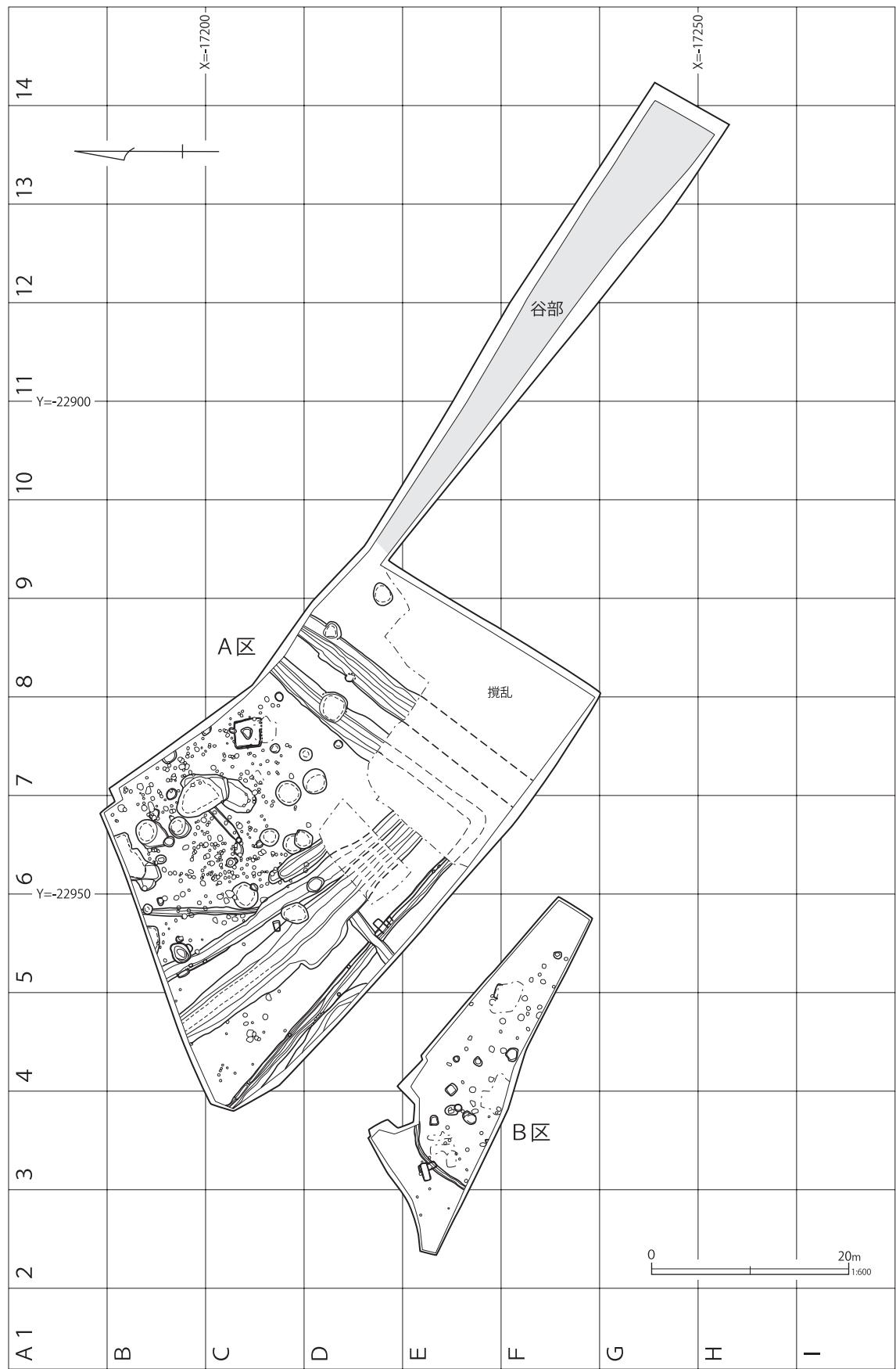
第4図 基本土層



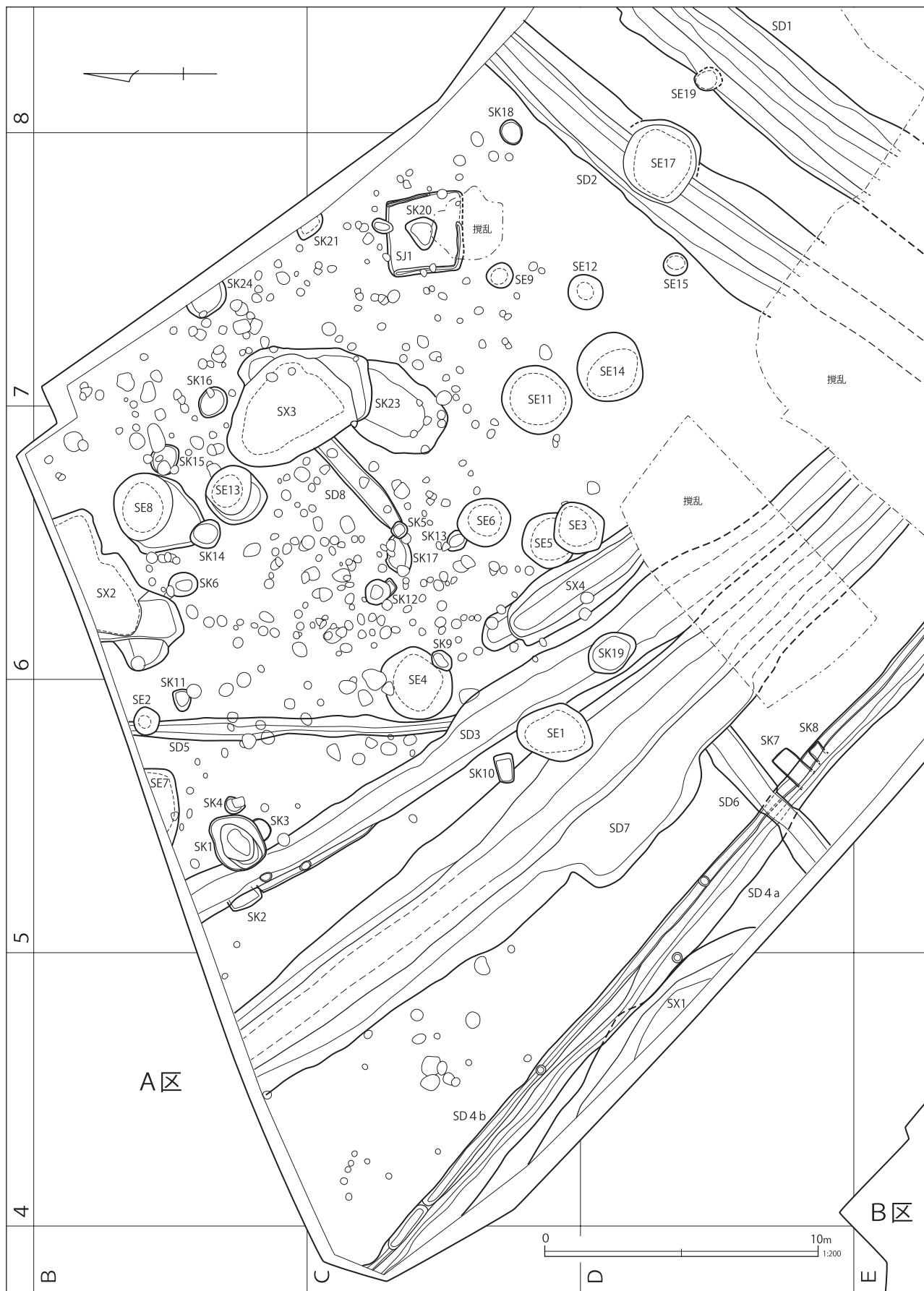
第5図 遺跡位置図



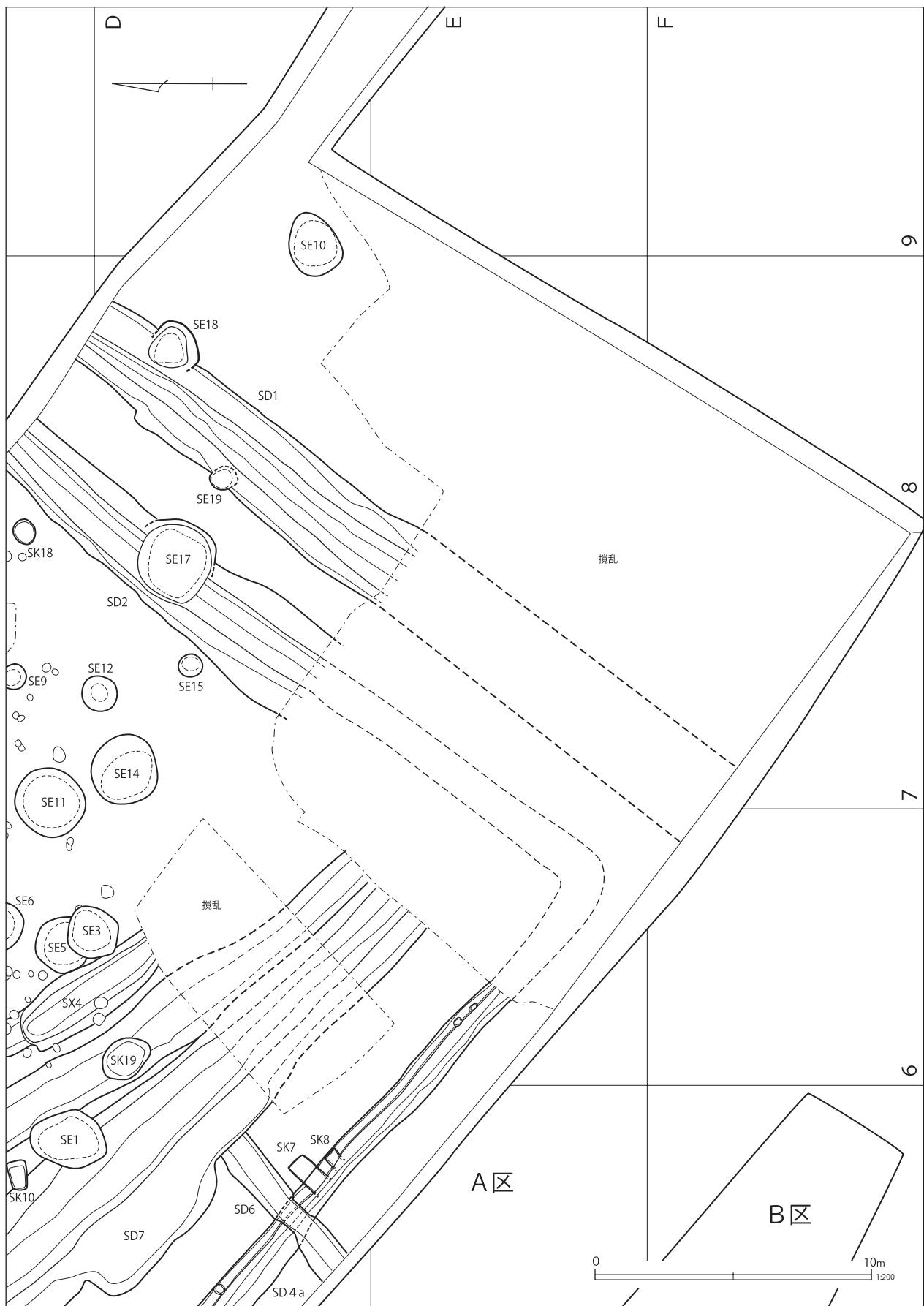
第6図 調査区位置図



第7図 全体図



第8図 区割り図（1）





第10図 区割り図（3）

IV 遺構と遺物

1 住居跡

平安時代の遺構は、住居跡1軒、土壙3基、井戸跡2基、溝跡1条が検出された。古代の遺構・遺物の大半は、後世の土地利用によって削平され、遺構確認作業中や中・近世に帰属する遺構の埋土中から出土している。遺物量から推して、本来は相当数の遺構が存在したものと考えられる。

第1号住居跡（第11図）

A区の中央東寄り、C-7グリッドに位置する。住居跡の南壁から中央にかけて、浅い搅乱によつて壊されている。北壁の中央やや東寄りにカマドを付設する小型の住居跡である。規模は長軸2.95m、短軸2.92m、床面までの深さは0.14mである。カマドの中心を通る主軸はN-14°-Eと、やや東に振れているが、西壁を基準とした住居跡の主軸はN-7°-Wを示す。住居の平面形状は方形を基調としているが、歪みも大きい。床面の中央に第20号土壙が重複し、床面を壊す。

カマドは長さ78cm、幅44cm、深さ15cmの楕円形

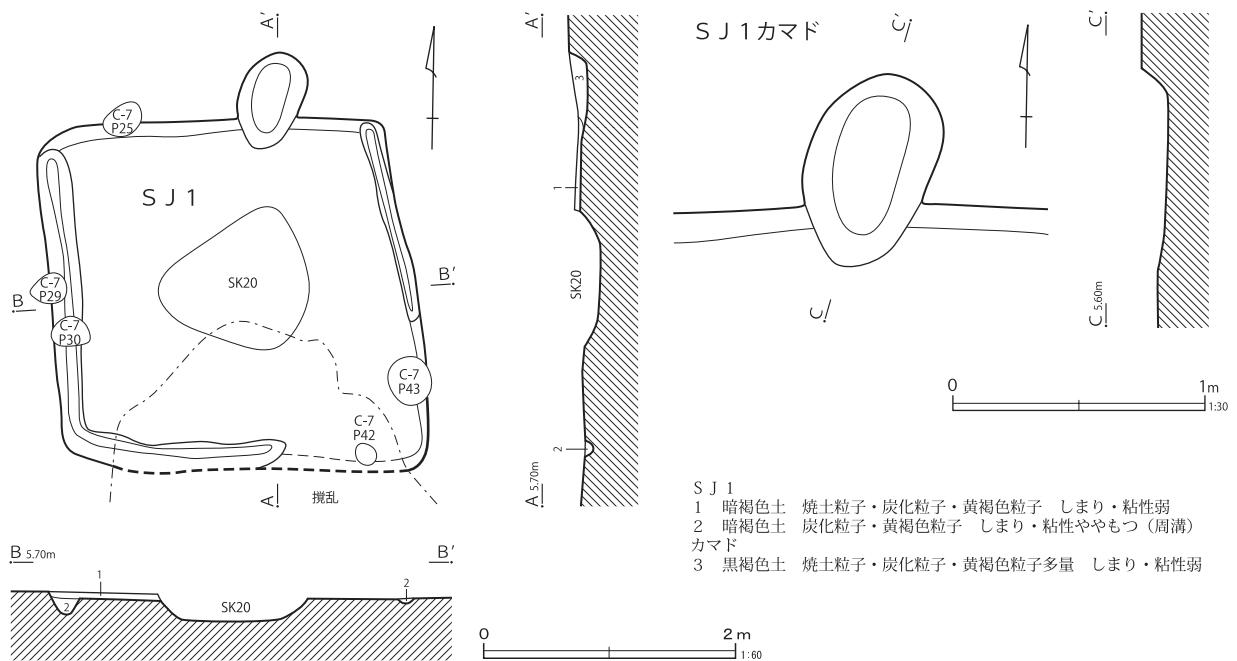
で浅く掘り込まれる。埋土は焼土粒子や炭化粒子を含む黒褐色土で、火床面などはみられない。

床面は平坦で、北壁を除く、各壁際に周溝を巡らす。住居に伴う貯蔵穴やピットなどはない。

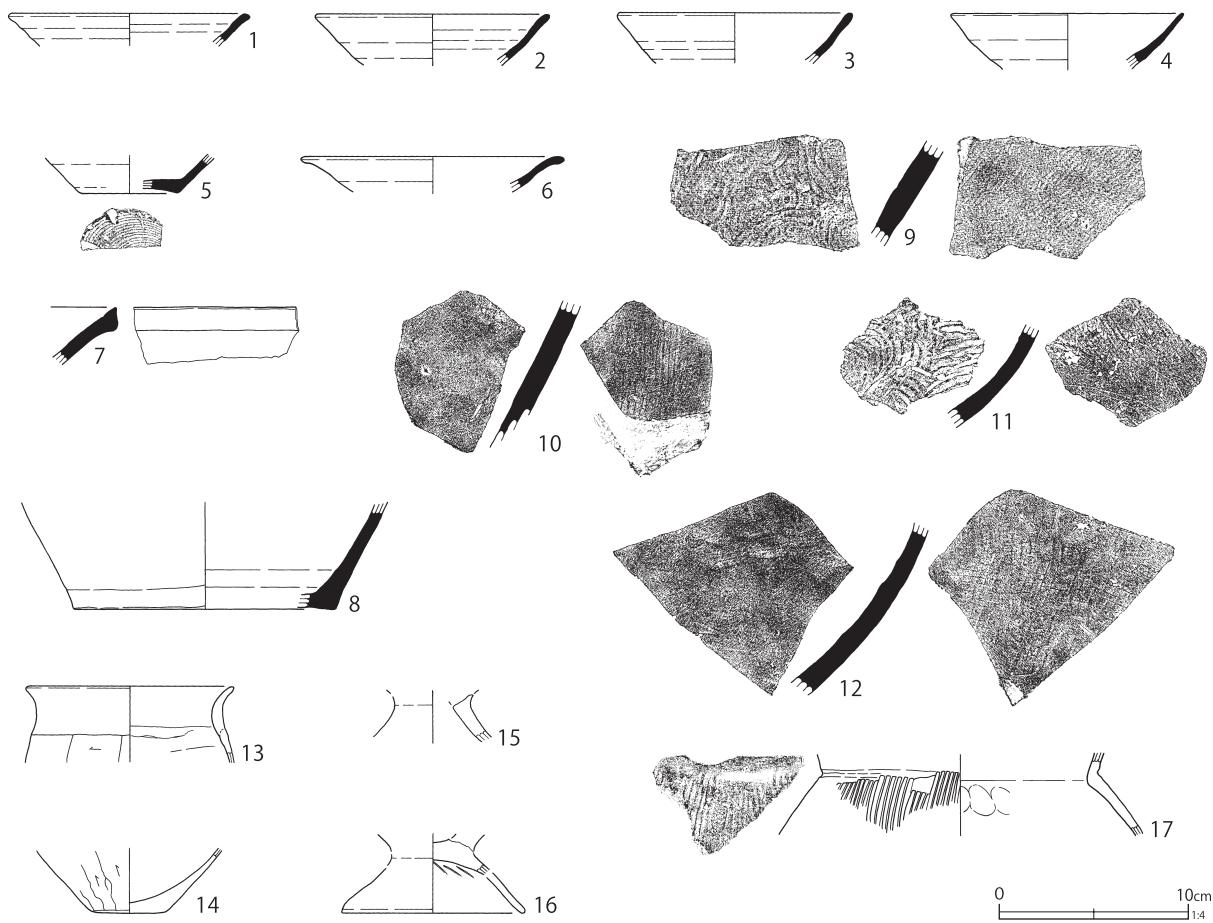
遺物は、埋土中から須恵器坏・皿・甕、土師器甕・台付甕が出土した（第12図）。

須恵器は小破片が多い。底部回転糸切離し未調整の坏が主体で、南比企産によって占められる。6の皿としたものだけが、酸化焰焼成に近い焼き上がりである。甕は胴部外面に平行叩き、内面に同心円文当具痕を残す9・11と、特徴的な格子目叩きの12がある。土師器は、14のコの字甕の底部破片や、13・15・16の小型台付甕がみられる。このほかに胎土に雲母微粒子を含み、胴部外面に叩き整形が施された東関東系と推定される17の甕がある。

住居跡の時期は、出土した須恵器坏・皿の特徴から、9世紀中頃から後葉に位置づけられる。



第11図 第1号住居跡



第12図 第1号住居跡出土遺物

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(12.4)	[1.7]	—	IJK	10	良好	灰	旧SJ2 B区 南北企産	
2	須恵器	壺	(12.0)	[2.7]	—	IJK	10	良好	黄灰	旧SJ2 南北企産	
3	須恵器	壺	(12.2)	[2.6]	—	IJK	10	良好	灰	旧SJ2 D区 南北企産	
4	須恵器	壺	(12.2)	[2.9]	—	IJM	10	良好	灰	旧SJ2 D区 南北企産	
5	須恵器	壺	—	[2.0]	(5.2)	IJK	30	良好	灰白	旧SJ2 A区 南北企産 底部糸切痕	
6	須恵器	皿	(13.6)	[1.9]	—	IKM	15	普通	灰白	旧SJ2 南北企産か 酸化焰焼成	
7	須恵器	甕	—	[3.0]	—	IJK	10	良好	灰	旧SJ2 南北企産	
8	須恵器	甕	—	[5.7]	(13.8)	IJK	20	良好	灰	旧SJ2 南北企産	
9	須恵器	甕	—	[5.5]	—	IJK	5	良好	灰	旧SJ2 A区 南北企産	
10	須恵器	甕	—	[7.8]	—	IJK	5	良好	灰	旧SJ2 A区 南北企産	
11	須恵器	甕	—	[5.5]	—	EIJK	5	良好	灰	旧SJ2 南北企産	
12	須恵器	甕	—	[9.1]	—	EIK	5	良好	灰	旧SJ2 产地不明 胎土緻密	
13	土師器	台付甕	(10.8)	[4.0]	—	AHI	15	不良	にぶい橙	旧SJ2	
14	土師器	甕	—	[3.4]	(3.9)	HIK	10	普通	にぶい橙	旧SJ2 D区 外面スス付着	
15	土師器	台付甕	—	[2.5]	—	CHI	30	不良	橙	旧SJ2	
16	土師器	台付甕	—	[1.9]	—	AHI	60	不良	橙	旧SJ2	
17	土師器	甕	—	[4.3]	—	AEHI	10	普通	にぶい褐	旧SJ2 東関東系か 脊部叩き整形	

2 土壙

土壙は合計35基検出された。平面形状や埋土、遺物などから判断した時期別内訳は、平安時代3基、中・近世32基である。このうち平安時代に比定した土壙は、A区の第12・13号土壙、B区の第109号土壙の3基である。以下、概要を説明する。

第1号土壙（第13図）

B-5グリッドに位置する。平面形は橢円形で、長軸方位はN-63°-Eを指す。規模は長軸2.12m、短軸1.80m、深さ0.28mである。第3号溝跡に接し、それを壊している。遺物は、瀬戸美濃系の蓋物と考えられる陶器のほか、京都信楽系の碗、瀬戸美濃系の徳利が出土している（第18図29～31）。時期は18～19世紀を主体とする。

第2号土壙（第13図）

B-5グリッドに位置する。平面形は方形を基調とする。長軸方位はN-28°-Wを指す。第3号溝跡によって大部分が壊される。規模は長軸1.22m、深さ0.25mである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第3号土壙（第13図）

B-5グリッドに位置する。平面形は円形と推定される。長軸方位はN-60°-Eを指す。規模は長軸0.84m、深さ0.06mで、皿状に掘り込まれ、第1号土壙によって壊される。遺物は須恵器甕の破片が出土したのみで、時期は特定できない。

第4号土壙（第13図）

B-5グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸方位はN-38°-Eを指す。規模は長軸0.69m、短軸0.59m、深さ0.17mである。

埋土中から中国の北宋と明の渡来銭6枚と人骨片が出土した（第21図1～5）。銭貨は6枚が固着していたが、そのうちの1枚は小片のため図示できなかった。かろうじて「政和通寶（北宋1111年初鑄）」もしくは「宣和通寶（北宋1119年初鑄）」と推定される「和」字（篆書）がみられる。渡来銭による六道銭から、中世の土壙墓と考えられる。

第5号土壙（第13図）

C-6グリッドに位置する。平面形は隅丸方形である。長軸方位はN-42°-Wを指す。規模は長軸0.57m、短軸0.56m、深さ0.15mである。第17号土壙、第8号溝跡と重複する。

遺物は、須恵器坏（第17図1）を図示したが、埋土中にはかわらけの破片もみられることから、土壙の時期は、近世に帰属すると考えられる。

第6号土壙（第13図）

B-6グリッドに位置する。平面形は橢円形で、長軸方位はN-6°-Wを指す。規模は長軸1.06m、短軸0.87m、深さ0.35mである。

遺物は須恵器長頸瓶・甕（第17図2・3）を図示したが、長石釉の陶器皿（第18図32）や擂鉢が含まれることから、土壙の時期は近世に帰属すると考えられる。

第7号土壙（第13図）

D-5グリッドに位置する。平面形は長方形と推定される。長軸方位はN-43°-Eを指す。規模は長軸1.30m以上で、短軸0.78m、深さ0.26mである。第4号溝跡を壊している。

遺物は少なく、江戸在地系の土師質土器の鉢（第18図33）が出土しただけである。

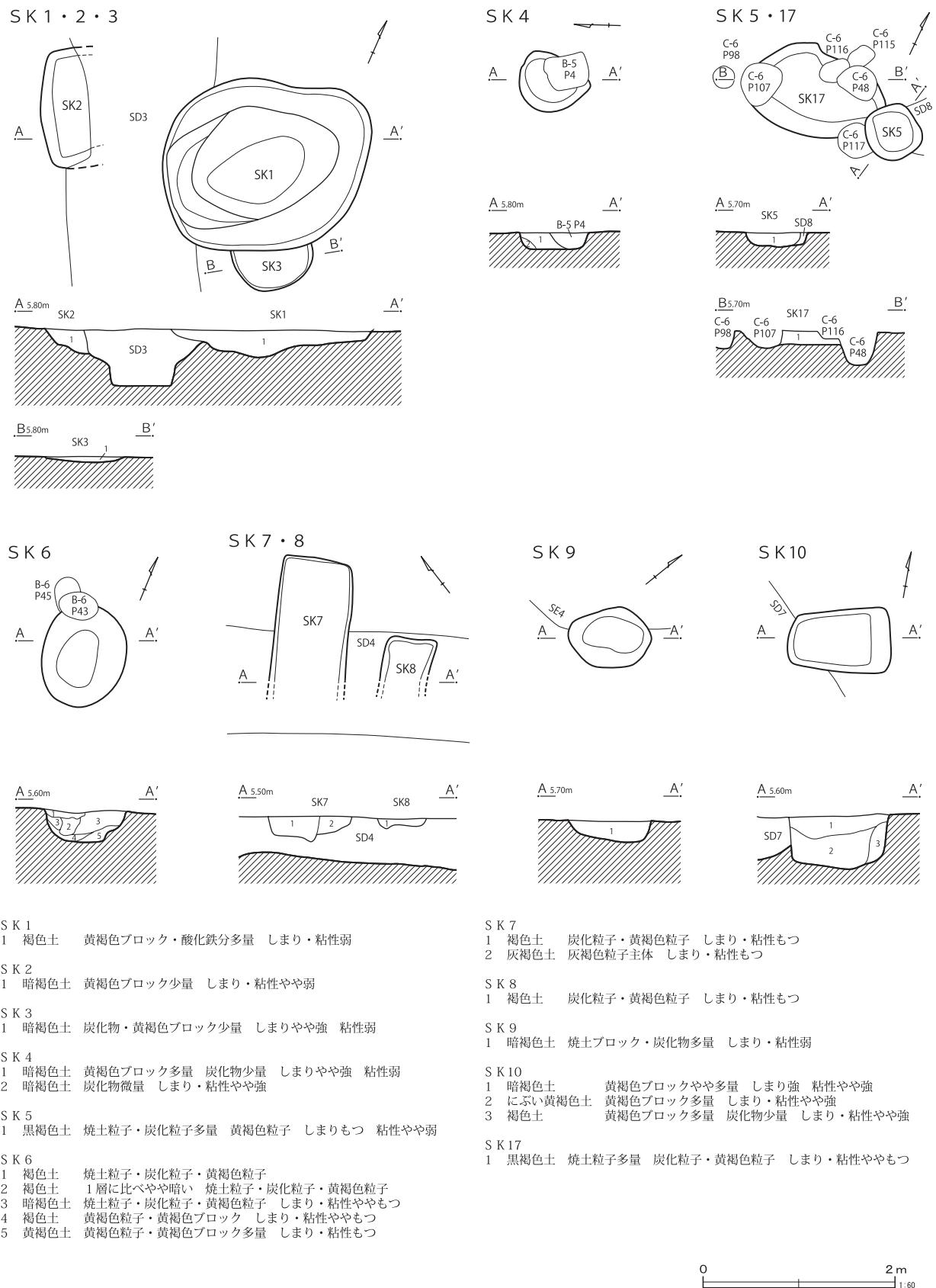
第8号土壙（第13図）

D-5グリッドに位置する。平面形は長方形と推定される。長軸方位はN-43°-Wを指す。規模は長軸0.51m以上、短軸0.41m、深さ0.11mと浅い。第7号土壙と並列する。遺物は須恵器片が出土しただけで、時期は不明である。

第9号土壙（第13図）

C-6グリッドに位置する。平面形は橢円形で、長軸方位はN-38°-Eを指す。規模は長軸0.86m、短軸0.63m、深さ0.24mである。第4号井戸跡と重複し、それを壊している。

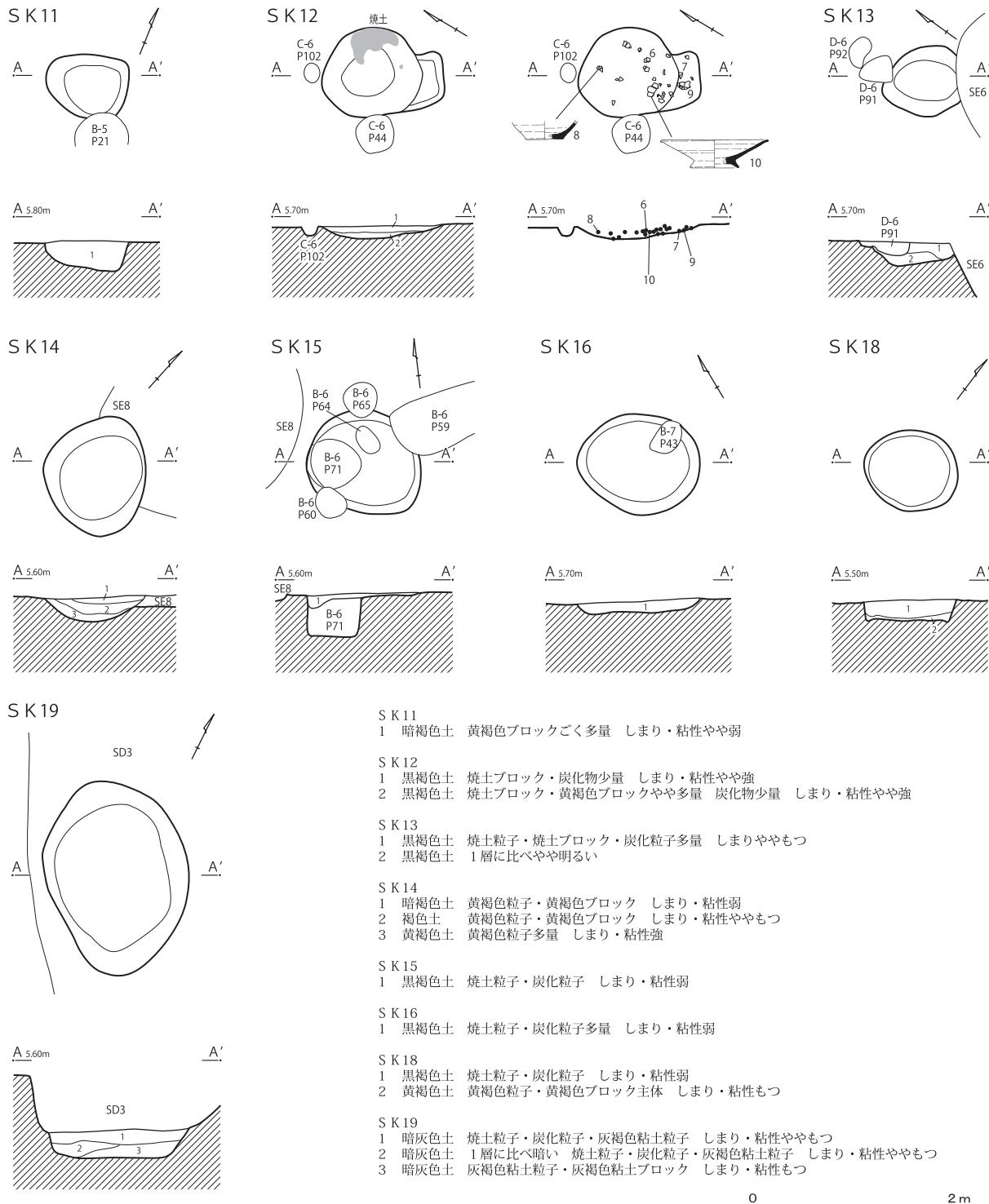
遺物は図示していないが焙烙やかわらけが含まれることから、土壙の時期は近世であろう。



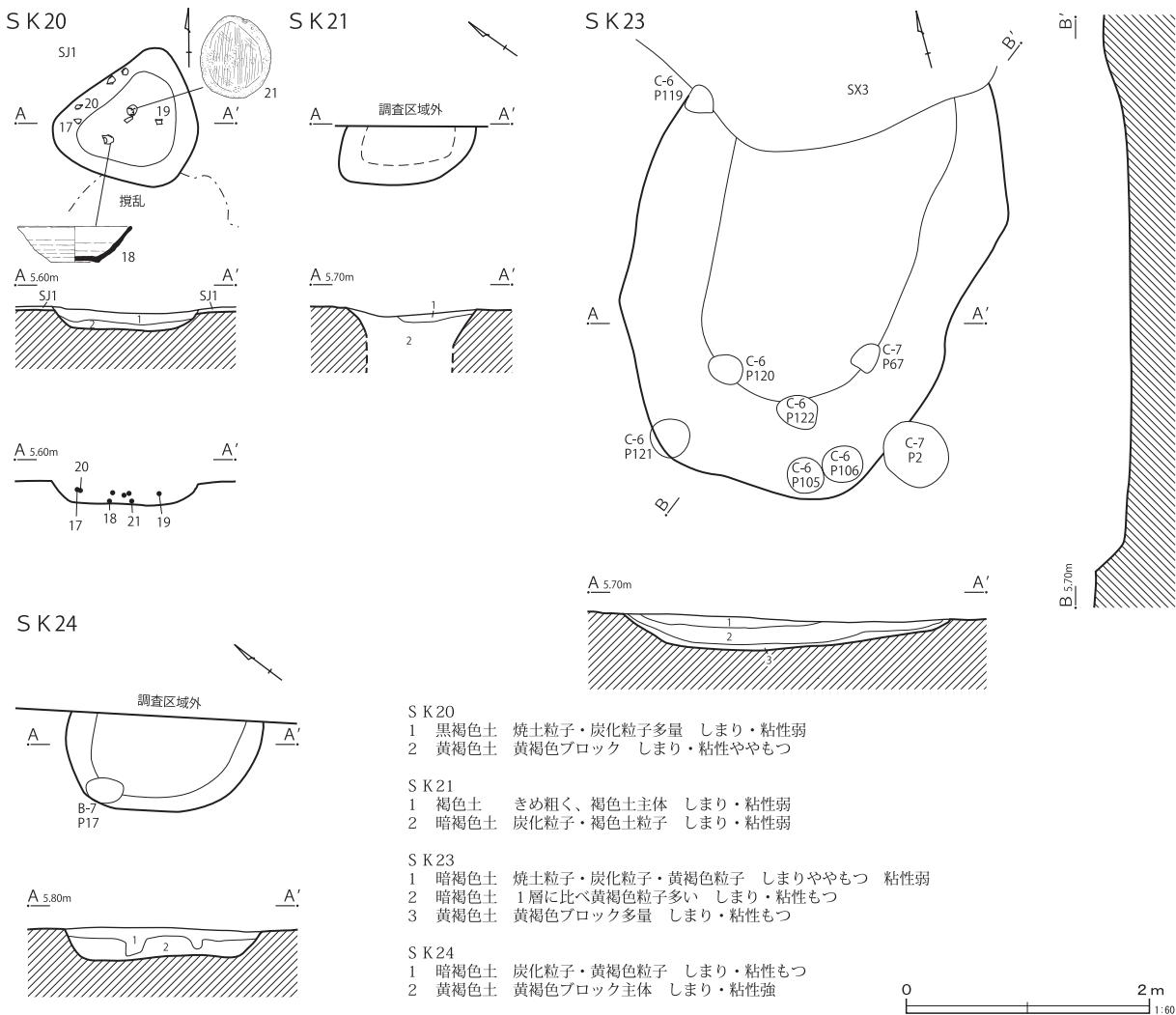
第13図 土壌 (1)

第10号土壌 (第13図)

C-5 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長軸方位はN-80°-Eを指す。規模は長軸1.07m、短軸0.64m、深さは0.57mで、ほぼ垂直に掘り込まれる。第7号溝跡を壊している。



第14図 土壌 (2)



第15図 土壌 (3)

で、長軸方位はN-84° - Eを指す。規模は長軸0.80m、短軸0.62m、深さ0.28mと浅い。

底部に糸切痕をもつ須恵器坏（第17図5）が出
土しているが、混入品であろう。

第12号土壌（第14図）

C-6グリッドに位置する。平面形は不整形で、長軸方位はN-31° - Wを指す。規模は長軸1.17m、短軸0.87m、深さ0.12mと浅い。埋土は焼土粒子・炭化粒子を多量に含む黒褐色土で、カマドの痕跡の可能性も考えたが、明確でない。

遺物は、須恵器坏・塊・高台付皿（第17図6～10）が出土した。二次被熱を受けたものも含まれる。このほかに鉄製紡錘車（11）と鉄釘（12）がある。おそらく、鉄釘は後世の混入であろう。

土壌の時期は、高台付皿の形態的特徴から9世紀後半と考えられる。

第13号土壌（第14図）

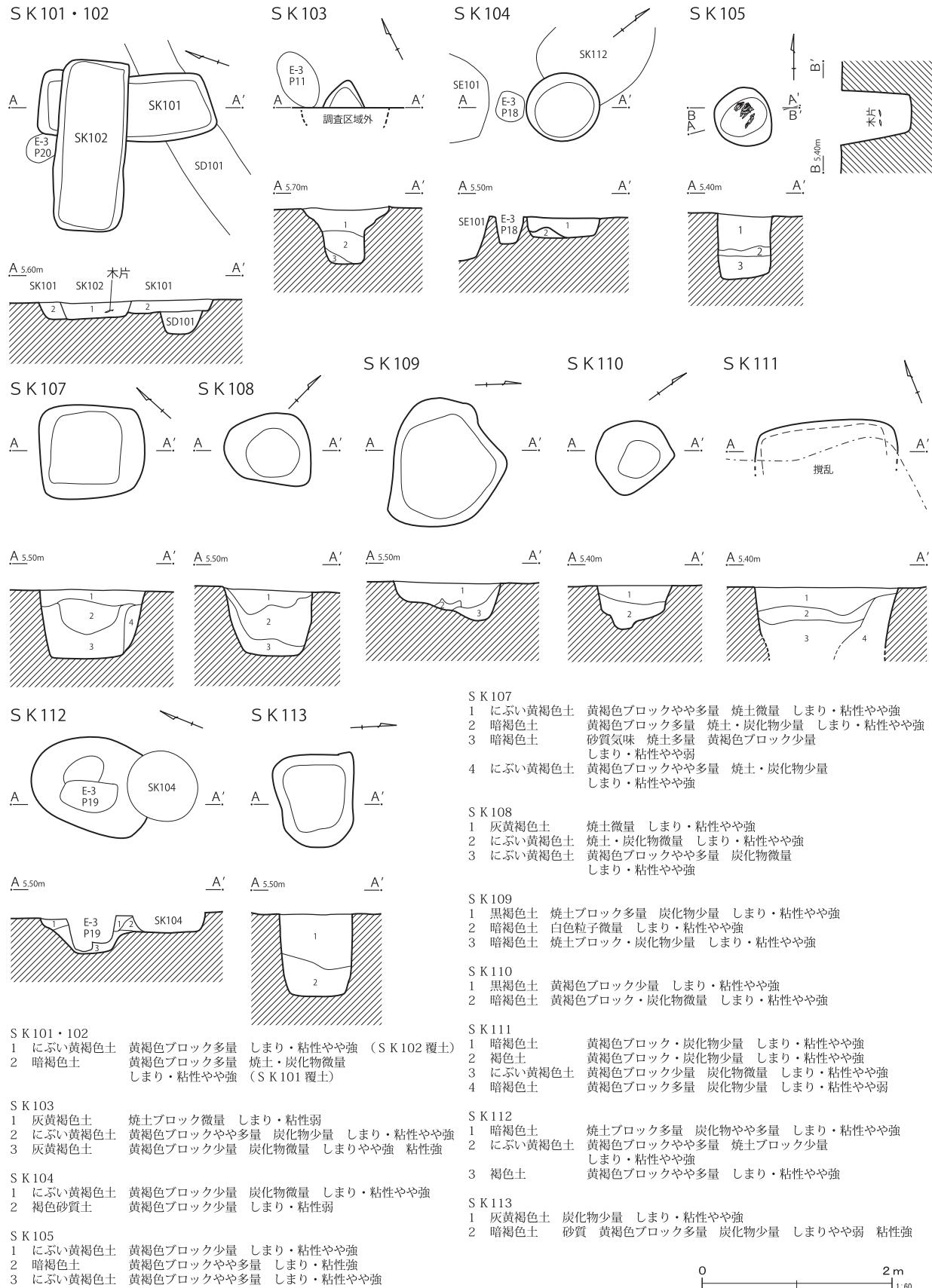
C-6グリッドに位置する。平面形は橢円形である。長軸方位はN-37° - Wを指す。規模は長軸0.72m以上、短軸0.69m、深さ0.23mと浅い。

遺物は、須恵器坏・甕、灰釉陶器皿（第17図13～15）が出土している。中・近世の遺物の混入がないことから、平安時代に帰属すると判断した。

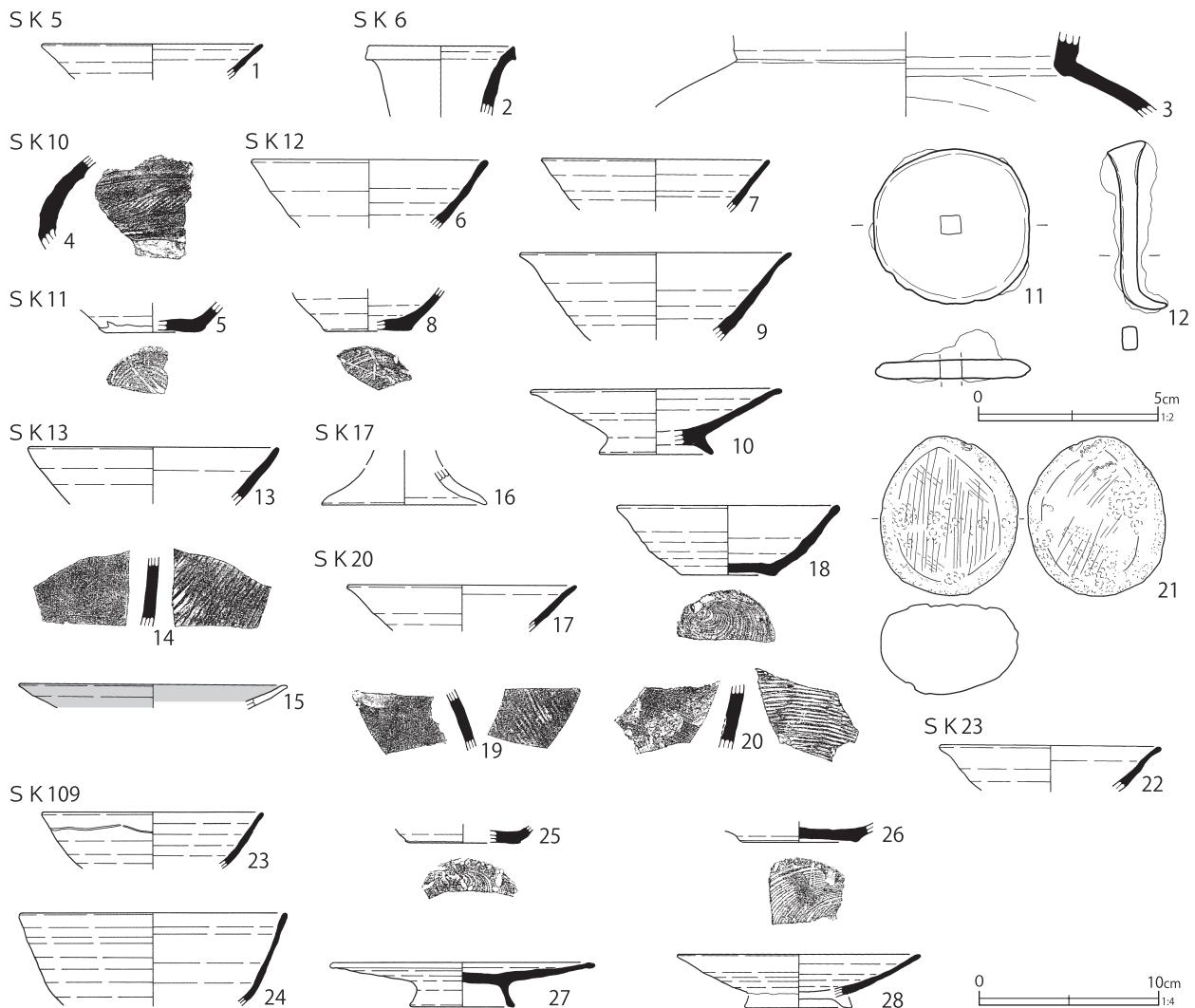
第14号土壌（第14図）

B-6グリッドに位置する。平面形は略円形である。長軸方位はN-59° - Wを指す。規模は長軸1.10m、短軸0.98m、深さ0.26mと浅い。

遺物が出土していないため、時期は不明である。



第16図 土壌 (4)



第17図 土壌出土遺物（1）

第15号土壌（第14図）

B-6 グリッドに位置する。平面形は橢円形で、長軸方位はN-55°-Wを指す。規模は長軸1.12m、短軸0.98m、深さ0.15mと浅い。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第16号土壌（第14図）

B-6・7 グリッドに位置する。平面形は橢円形である。長軸方位はN-60°-Wを指す。規模は長軸1.20m、短軸0.99m、深さ0.16mと浅い。

遺物は土師器、須恵器の小片が出土したのみで、図示できるものはない。

第17号土壌（第13図）

C-6 グリッドに位置する。平面形は橢円形で

ある。長軸方位は、N-85°-Wを指す。規模は長軸1.38m、短軸0.95m、深さ0.14mと浅い。第5号土壌と重複する。遺物は土師器台付甕の脚台部（第17図16）の小片が出土しただけである。

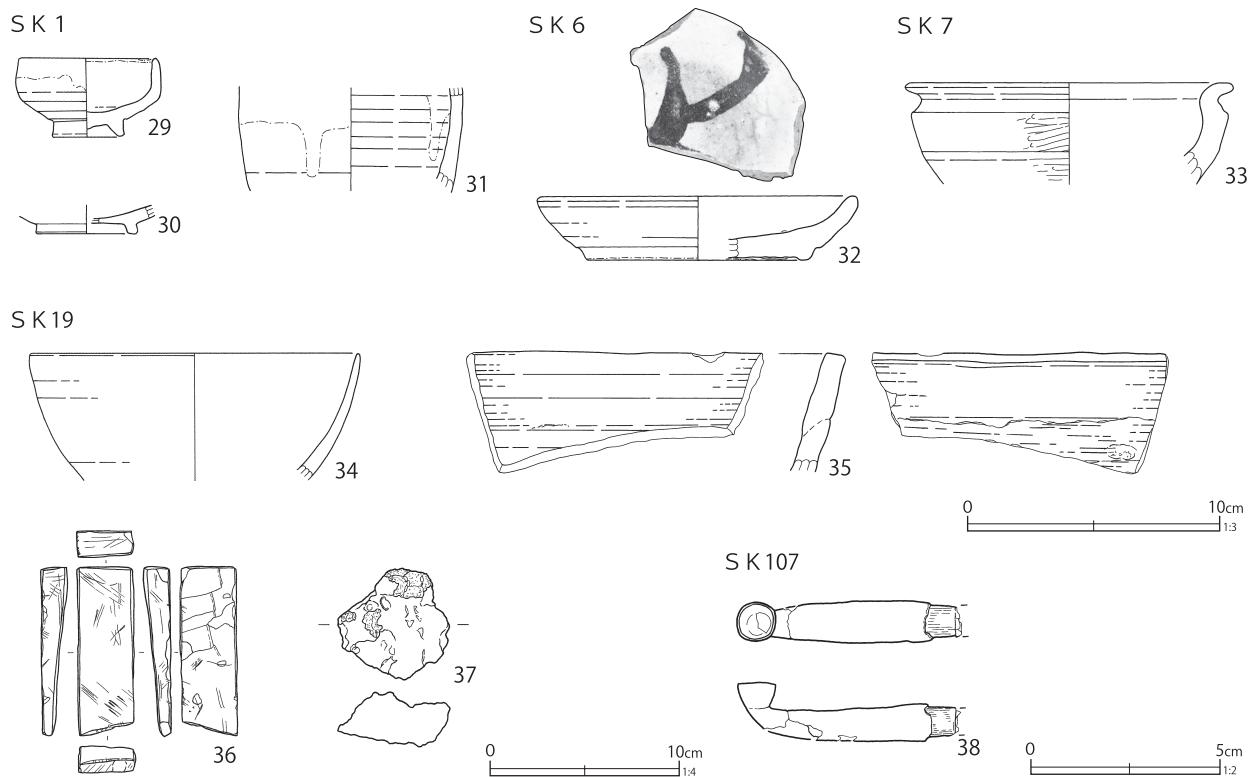
第18号土壌（第14図）

C-7・8 グリッドに位置する。平面形は橢円形である。長軸方位はN-59°-Eを指す。規模は長軸0.93m、短軸0.79m、深さ0.20mである。底面の壁際が、浅く溝状に凹むことから、木桶が埋設されていた土壌のようである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第19号土壌（第14図）

D-6 グリッドに位置する。平面形は橢円形で、



第18図 土壌出土遺物（2）

長軸方位はN-38°-Wを指す。規模は長軸1.90m、短軸1.38m、深さ0.30mである。第3号溝跡と重複し、上部を削平されている。第3号溝跡に先行する遺構であるが、第3号溝跡と一連の遺構の可能性も残す。遺物は、陶器碗、焙烙、砥石、鉄滓（第18図34～37）が出土した。

土壌の時期は、18～19世紀に位置づけられる。

第20号土壌（第15図）

C-7グリッドに位置する。平面形は不整形である。長軸方位はN-53°-Eを指す。規模は長軸1.14m、短軸1.00m、深さ0.20mである。第1号住居跡の埋土を掘り込んだ、新しい時期の土壌であろう。

遺物は、本来第1号住居跡に伴っていたものが中心となり、須恵器坏・甕、角閃石安山岩製の磨石（第17図17～21）が出土した。

第21号土壌（第15図）

B・C-7グリッドに位置する。北東側が調査区域外にかかるため平面形は不明である。長軸方

位はN-34°-Wを指す。規模は長軸1.08m、調査区の制約から底面まで掘り下げられなかつたが、小規模な井戸跡の可能性もある。

遺物は陶器片のみの出土であることから、土壌の時期は近世と推定される。

第22号土壌（欠番）

第4号性格不明遺構に名称を変更した。

第23号土壌（第15図）

C-6・7グリッドに位置し、第3号性格不明遺構と重複する平面楕円形の大型土壌である。長軸方位はN-35°-Eを指し、規模は長軸3.75m以上、短軸2.83m、深さ0.30mである。

遺物は須恵器坏（第17図22）が出土しているが、正確な時期は特定できない。

第24号土壌（第15図）

B-7グリッドに位置し、北西部は調査区域外にかかる。平面形は楕円形と推定される。長軸方位はN-34°-Wを指す。規模は長軸1.58m、短軸0.79m以上、深さ0.27mである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第101号土壙（第16・19図）

調査区B区北西端のE-3グリッドに位置する。第101号溝跡を壊し、第102号土壙によって壊されている。平面長方形の土壙で、同形同規模の第102号土壙と主軸方向を90°ずらして重なる。長軸方位はN-19°-W、規模は長軸1.80m、短軸0.70m、深さ0.17mである。

南側の底面からミニチュアの飯事道具（第20図1～14）がまとまって出土した。このほかにも周囲からは漆椀と考えられる漆製品の塗膜も出土している（同図20～27）。また、埋土中からは固着した状態の寛永通寶5枚（第21図6～10）が出土した。銭貨の組成は、古寛永2、新寛永3である。

飯事道具は、子供が日常生活における作法や教養を擬似体験することで身につけさせるための玩具と考えられている。やはり子供の墓からの出土例が多いが、性別・年齢を問わず、乳幼児から老年までの墓に副葬されている例も知られている。そのため人骨の残っていなかった本例は、被葬者の性別や年齢を特定することは難しいといえる。

なお、図示したガラス製品（第20図15～19）は

出土位置も明確でなく、共伴するかどうかは判然としないが、参考資料として掲載した。

第102号土壙（第16図）

E-3グリッドに位置する。平面形は長方形である。長軸方位はN-75°-Eを指し、規模は長軸1.80m、短軸0.75m、深さ0.18mと浅い掘り込みである。第101号土壙を壊している。

平面形状は第101号土壙と同じで、おそらく伸展葬による土壙墓であろう。図示していないが、埋土中から一銭銅貨（昭和8年発行）が出土している。混入の可能性も払しょくできないが、座葬と考えられる、平面方形ないし円形の土壙墓よりも新しい時期の所産であろう。

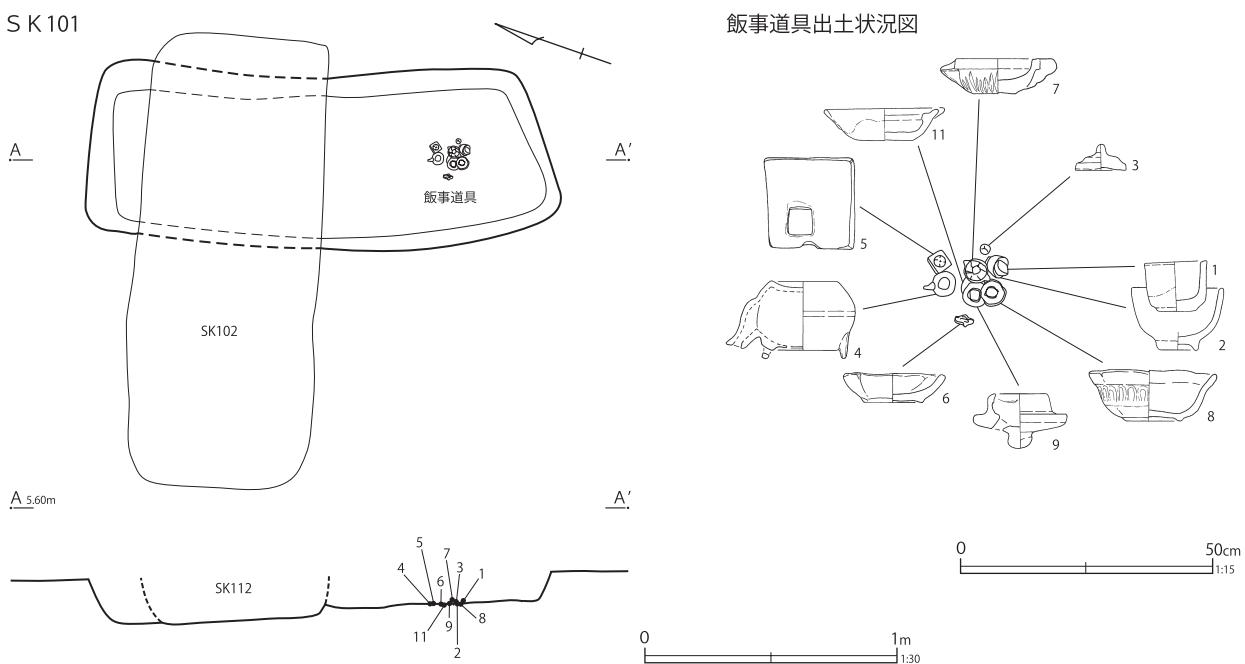
第103号土壙（第16図）

E-3グリッドに位置する。南半分が調査区域外にかかるため、平面形は不明である。長軸方位は、N-64°-Wを指す。規模は長軸0.91m、深さは0.65mである。

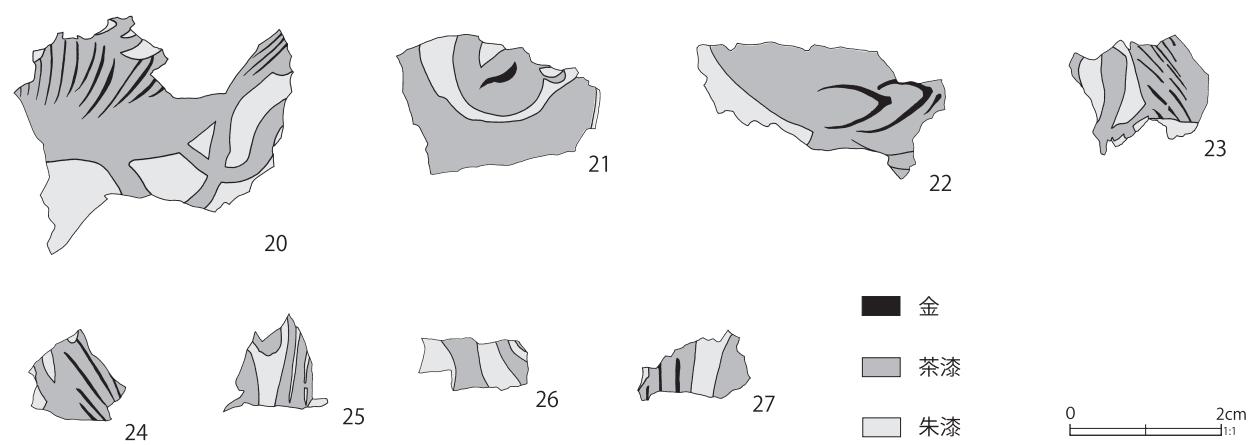
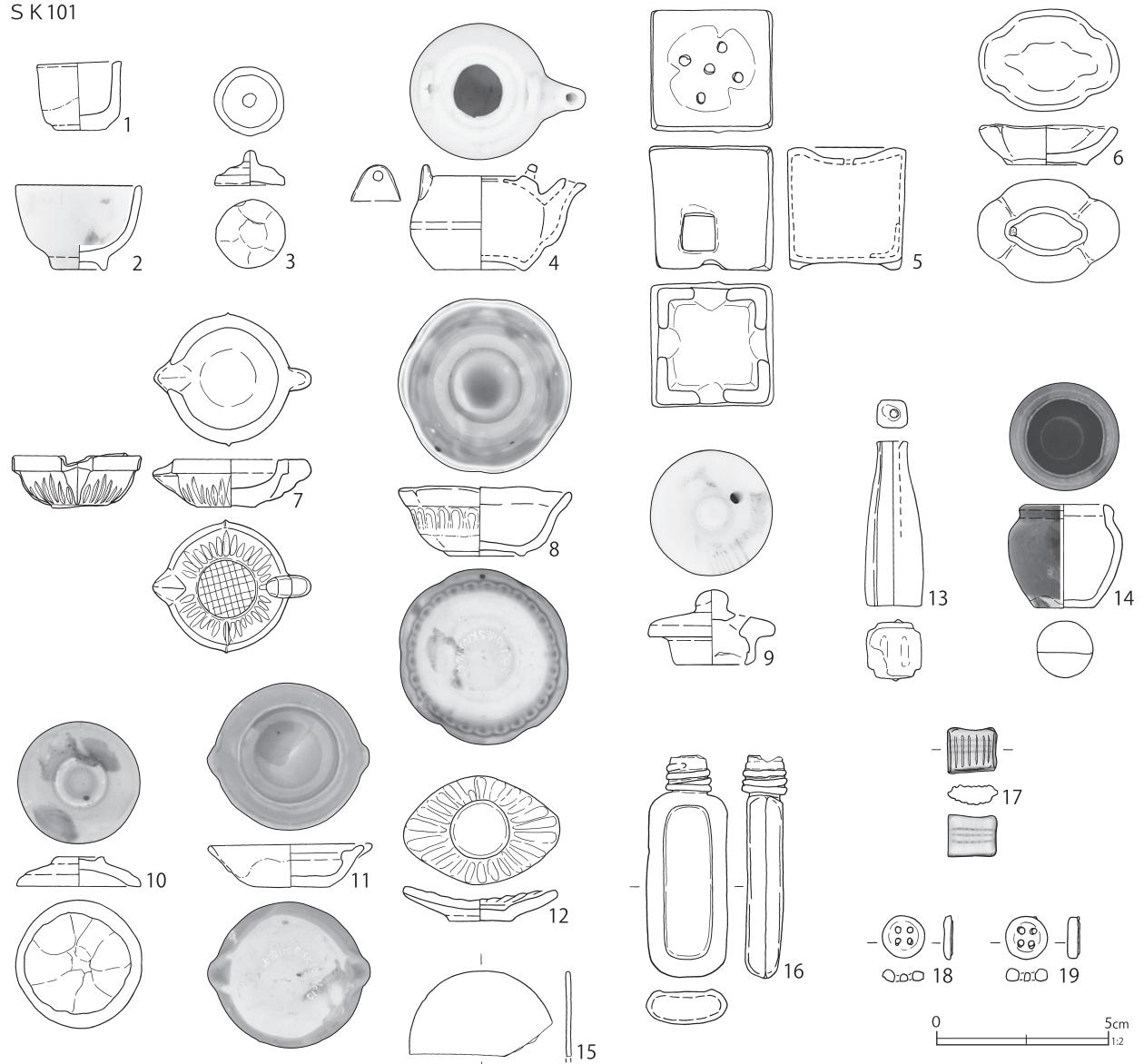
遺物を出土していないため、時期や性格を特定することは難しい。

第104号土壙（第16図）

E-3グリッドに位置する。平面形は橢円形で

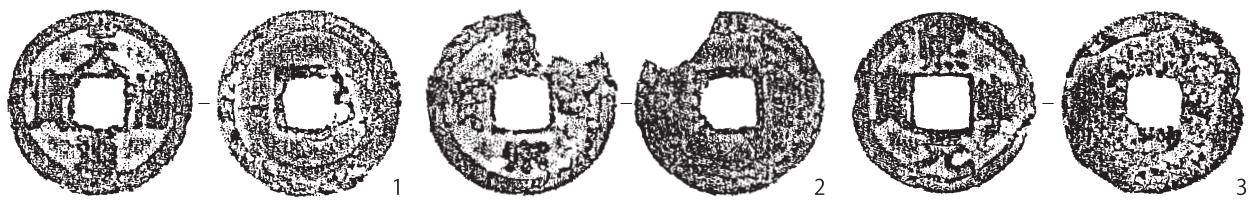


S K101

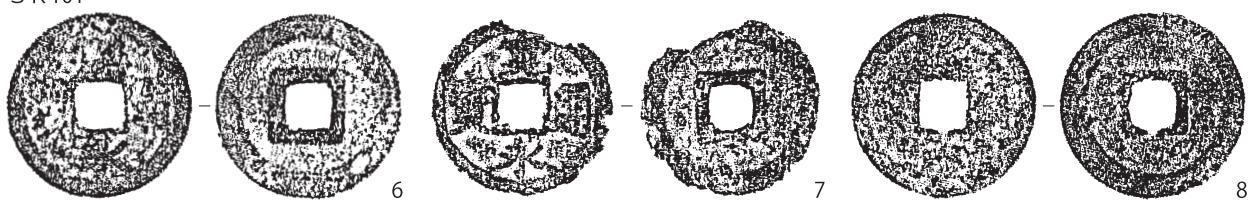


第20図 第101号土壤出土遺物

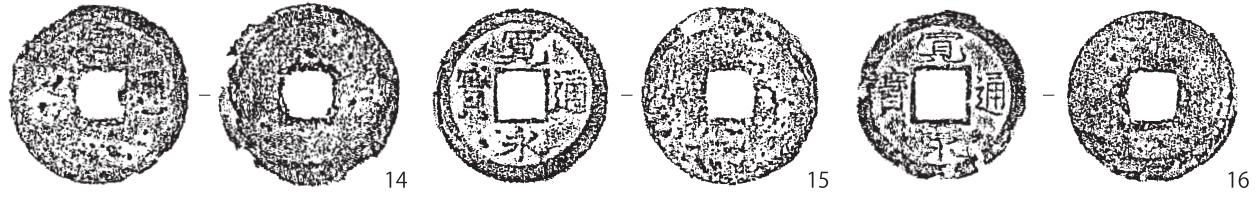
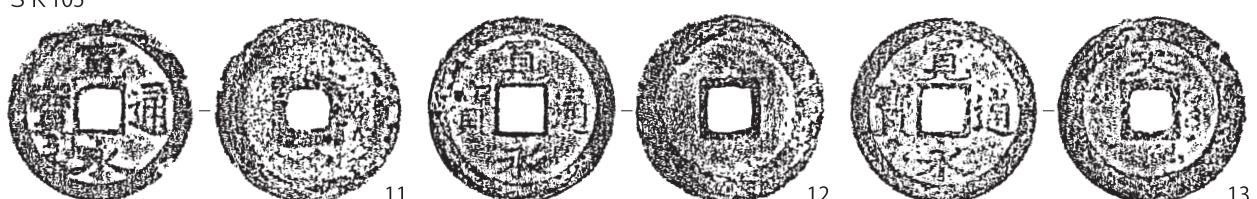
SK 4



SK 101



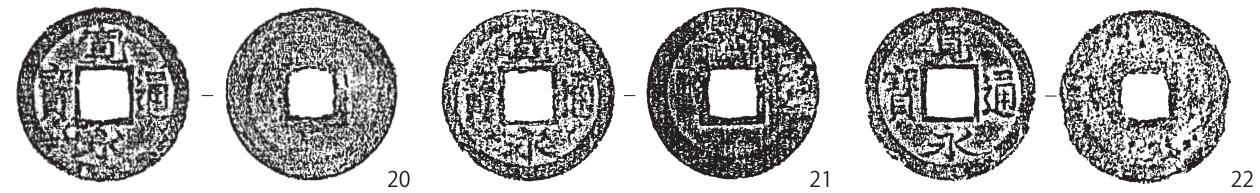
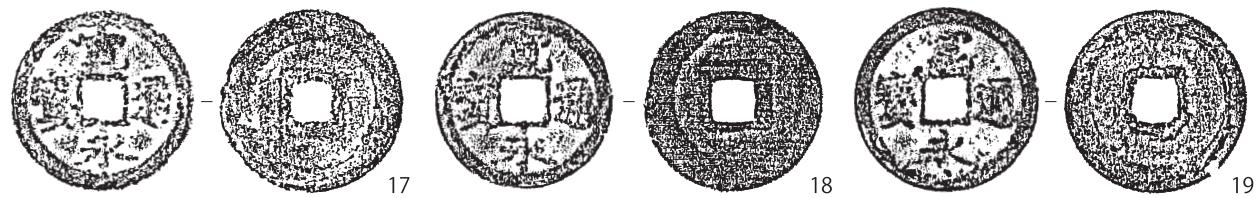
SK 105



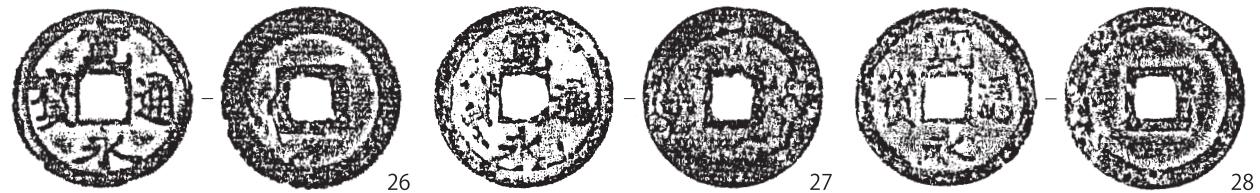
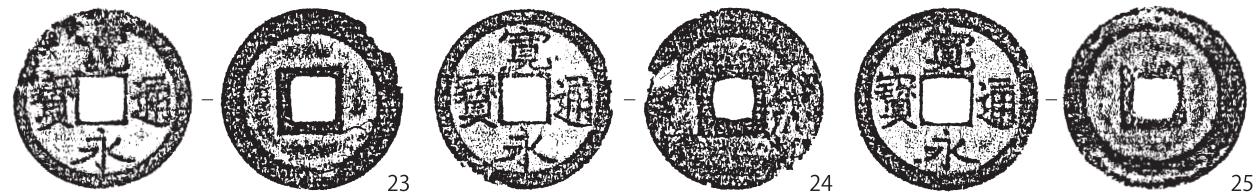
0 2cm

第21図 土壤出土錢貨（1）

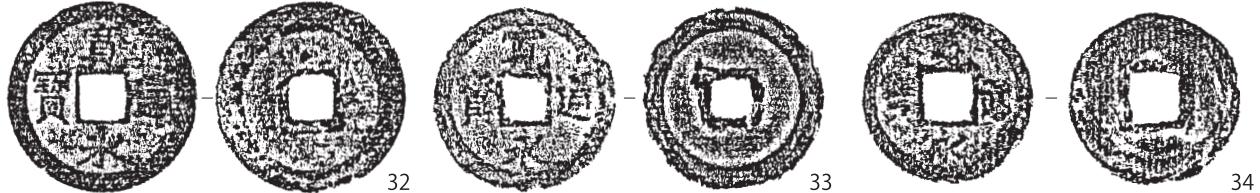
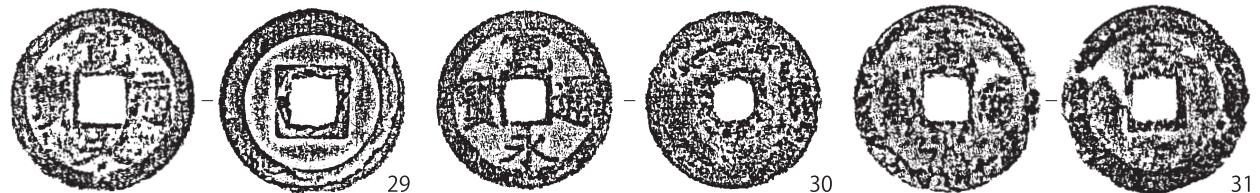
SK108



SK110



SK111



第22図 土壌出土錢貨（2）

第3表 土壌出土遺物観察表（第17・18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(12.2)	[1.9]	—	IJK	5	良好	灰	SK5 C-6 南比企産	
2	須恵器	長頸瓶	(8.0)	[3.8]	—	IK	10	良好	灰	SK6 東金子産 口縁部内面降灰	
3	須恵器	甕	—	[4.7]	—	IJK	10	良好	灰	SK6 南比企産 脊部外面降灰	
4	須恵器	甕	—	[5.1]	—	IK	5	良好	灰オリーブ	SK10 湖西産か 胎土緻密	
5	須恵器	壺	—	[1.6]	(5.2)	IJ	10	良好	灰褐	SK11 南比企産 底部糸切痕	
6	須恵器	壺	(13.0)	[3.8]	—	HIK	15	不良	灰白	SK12 No.15 酸化焰焼成 ロクロ土師器か	
7	須恵器	壺	(12.6)	[2.9]	—	HIK	20	不良	淡橙	SK12 No.3 酸化焰焼成	
8	須恵器	壺	—	[2.4]	(4.8)	IK	15	良好	灰白	SK12 No.19 底部糸切痕	21-1
9	須恵器	塊	(15.0)	[4.9]	—	AHIK	30	不良	灰白	SK12 No.1 軟質	
10	須恵器	高台付皿	(13.8)	3.6	(6.2)	ACI	45	不良	灰白	SK12 No.9 产地不明 二次被熱痕	21-2
11	鉄製品	紡錘車	縦4.3 横4.3 厚さ0.5 重さ24.1			—	—	—	—	SK12 紡軸部を欠損し、紡輪のみを残す 紡軸は断面方形	
12	鉄製品	釘	長さ4.7 幅0.65 厚さ 0.4 重さ9.0			—	—	—	—	SK12 断面長方形 混入か	
13	須恵器	壺	(13.8)	[3.2]	—	IJK	10	良好	灰	SK13 南比企産	
14	須恵器	甕	—	[3.8]	—	IJK	5	良好	灰	SK13 南比企産	
15	灰釉陶器	皿	(14.8)	[1.3]	—	IK	40	良好	灰白	SK13 猿投産 K-90号窯後期 灰釉淡緑色 内外面施釉	
16	土師器	台付甕	—	[2.0]	(9.0)	AEHI	20	不良	橙	SK17 器面風化	
17	須恵器	壺	(12.6)	[2.5]	—	HIK	10	普通	灰褐	SK20 No.4 酸化焰焼成	
18	須恵器	壺	(12.2)	3.9	(5.2)	IJK	50	良好	灰	SK20 No.5 南比企産 底部糸切痕	21-3
19	須恵器	甕	—	[3.4]	—	IK	5	良好	暗灰	SK20 No.7 外面光沢	
20	須恵器	甕	—	[3.6]	—	IJK	5	良好	灰	SK20 No.3 南比企産	
21	石製品	磨石	長さ8.9 幅7.7 厚さ5.0 重さ232.5 角閃石安山岩			—	—	—	—	SK20 No.8 完形 多孔質 転石素材 砥面1	
22	須恵器	壺	(12.0)	[2.5]	—	IJK	10	良好	灰	SK23 南比企産 胎土精緻	
23	須恵器	壺	(12.4)	[3.1]	—	IJ	20	良好	黒褐	SK109 南比企産 体部外面粘土紐痕	
24	須恵器	塊	(15.0)	[5.2]	—	Hijk	40	良好	黄灰	SK109 南比企産	
25	須恵器	壺	—	[1.0]	(6.4)	IJK	25	良好	灰	SK109 南比企産 底部糸切痕	
26	須恵器	壺	—	[1.1]	(6.6)	GHIJ	25	良好	黄灰	SK109 南比企産 底部糸切痕	
27	須恵器	高台付皿	(14.6)	2.5	5.8	GHIJK	20	良好	灰	SK109 南比企産	21-4
28	須恵器	高台付皿	(13.4)	[2.4]	—	GIJ	15	良好	灰	SK109 南比企産 高台剥離	
29	陶器	蓋物か	(5.3)	3.1	2.6	IK	65	良好	灰白	SK1 濑戸美濃系 内外面灰釉 口唇部内面のみ釉剥ぎ 19c前	22-1
30	陶器	碗	—	[1.1]	4.0	K	5	良好	淡黄	SK1 京都信楽系 内面透明釉 18c後	
31	陶器	徳利	—	[4.1]	—	HI	5	普通	淡黄	SK1 濑戸美濃系 外面灰釉・体部下位ふきとり 18c	
32	陶器	皿	(12.5)	2.5	(8.8)	D	20	普通	にぶい黄橙	SK6 濑戸美濃系 内外面長石釉 内面鉄絵 内面と高台内に目跡	
33	土師質土器	鉢	(12.5)	[4.0]	—	AHI	5	普通	橙	SK7 江戸在地系 外面ミガキ・スス付着	
34	陶器	碗	(13.0)	[5.0]	—	K	5	良好	灰白	SK19 濑戸美濃系 内外面灰釉 胎土硬質 18-19c	
35	瓦質土器	焙烙	—	[5.7]	—	CEIK	5	普通	灰白	SK19 内外面ヨコナデ 弱く焦し 17c	
36	石製品	砥石	長さ8.9 幅3.0 厚さ1.4 重さ51.7 流紋岩			—	—	—	—	SK19 完形 平面長方形 断面長方形 刃幅の広い工具痕 砥面5	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
37	鉄製品	楕形滓	縦5.8 横5.9 厚さ2.7 重さ75.2		—	—	—	—	—	SK19 ガラス質発泡 磁着なし	
38	銅製品	煙管	長さ[5.9] 高さ1.5 厚さ1.1 重さ4.1		—	—	—	—	—	SK107 雁首 羅宇一部残存 脂返しが短く屈曲する 18c後半以降	

第4表 第101号土壌出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	ミニチュア	2.5	2.0	1.5	—	100	良好	オリーブ灰	SK101 No.6 碗 内外面施釉	26-4
2	陶器	ミニチュア	3.7	2.4	1.6	—	100	良好	白	SK101 No.7 碗 内外面施釉 露胎部施釉なし	26-4
3	陶器	ミニチュア	2.0	1.0	—	—	100	良好	白	SK101 No.8 蓋 無釉 内面中央に指頭圧痕を残す	26-4
4	陶器	ミニチュア	2.5	3.0	2.5	—	100	良好	白	SK101 No.2 土瓶 無釉	26-4
5	陶器	ミニチュア	上面3.4×3.4 高さ3.5 底部3.2×3.3			—	100	良好	白	SK101 No.1 箱形七輪 上面穿孔5箇所 直径0.3cm 脊部側面に方形孔1.0×0.9cm	26-4
6	陶器	ミニチュア	長4.1 短3.0	1.1	長2.4 短1.5	—	100	良好	青	SK101 No.5 花弁皿 内外面施釉 露胎部 施釉なし	26-4
7	ガラス製品	ミニチュア	3.6	1.4	1.7	—	100	良好	透明	SK101 No.3 把手付片口鉢 最大幅4.6cm	26-4
8	陶器	ミニチュア	5.1	2.0	2.3	—	100	良好	白	SK101 No.4 鉢 内外面施釉 六花弁	26-4
9	陶器	ミニチュア	3.7	2.1	—	—	100	良好	白	SK101 No.9 土瓶蓋 蓋内径2.3cm つま み径0.9cm 内外面施釉	26-4
10	陶器	ミニチュア	3.6	0.9	—	—	100	良好	灰白	SK101 土鍋蓋 外面施釉 内面無釉・指 頭による整形痕 つまみ径1.4cm	26-4
11	陶器	ミニチュア	4.3	1.3	2.3	—	100	良好	灰白	SK101 No.10 土鍋 内面～外面上位施釉	26-4
12	陶器	ミニチュア	長4.5 短3.1	1.0	1.9	—	100	良好	白	SK101 皿 内外面施釉なし	26-4
13	陶器	ミニチュア	0.8	4.8	1.6	—	100	良好	白	SK101 爐徳利 外面施釉 底部型打の痕 跡を残す	26-4
14	陶器	ミニチュア	2.6	3.0	1.7	—	100	良好	灰白	SK101 甕 内外面施釉 底部外面無釉・ 型打の痕跡を残す	26-4
15	ガラス製品	加工円板	長[2.4] 幅4.2 厚さ0.1			—	50	良好	透明	SK101 曙りガラス	
16	ガラス製品	薬瓶	長6.4 幅2.3 厚さ0.9			—	95	良好	透明	SK101 口縁部わずかに欠損 気泡をやや 多く含む	
17	ガラス製品	おはじき	縦1.3 横1.4 厚さ0.5 重さ1.7			—	100	良好	白	SK101 方形 表裏面ともに白地に青・橙・ 緑の線がはいる	
18	ガラス製品	ボタン	直径1.2 厚さ0.25 重さ0.5			—	100	良好	白	SK101 円形 孔4	
19	ガラス製品	ボタン	直径1.2 厚さ0.35 重さ0.5			—	100	良好	白	SK101 円形 孔4	
20	漆製品	漆椀か	縦[3.2] 横[3.7]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
21	漆製品	漆椀か	縦[1.9] 横[2.7]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
22	漆製品	漆椀か	縦[1.8] 横[3.3]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
23	漆製品	漆椀か	縦[1.6] 横[1.8]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
24	漆製品	漆椀か	縦[1.2] 横[1.3]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
25	漆製品	漆椀か	縦[1.3] 横[1.4]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
26	漆製品	漆椀か	縦[0.7] 横[1.5]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	
27	漆製品	漆椀か	縦[0.9] 横[1.5]			—	—	—	—	SK101 塗膜 草花文を描く	

第5表 土壙出土錢貨観察表（第21・22図）

番号	種別	器種	法量（単位：mm/g）	出土遺構	備考	図版
1	銅製品	錢貨	縦24.7 横24.6 厚さ1.1 重さ2.3	SK4	天禧通寶（北宋）1017年	
2	銅製品	錢貨	縦24.9 横25.5 厚さ1.3 重さ2.0	SK4	皇宋通寶（北宋）1038年	
3	銅製品	錢貨	縦24.4 横24.3 厚さ1.4 重さ2.6	SK4	熙寧元寶（北宋）1068年	
4	銅製品	錢貨	縦24.9 横24.5 厚さ1.2 重さ3.0	SK4	聖宋元寶（北宋）1101年	
5	銅製品	錢貨	縦[24.0] 横25.3 厚さ1.4 重さ1.8	SK4	永樂通寶（明）1408年	
6	銅製品	錢貨	縦24.9 横24.9 厚さ1.2 重さ2.9	SK101	寛永通寶（古）	
7	銅製品	錢貨	縦[23.5] 横24.0 厚さ1.2 重さ2.8	SK101	寛永通寶（古）	
8	銅製品	錢貨	縦24.6 横24.5 厚さ1.2 重さ2.8	SK101	寛永通寶（新）	
9	銅製品	錢貨	縦22.8 横[22.1] 厚さ1.2 重さ2.0	SK101	寛永通寶（新）	
10	銅製品	錢貨	縦23.0 横[20.5] 厚さ1.3 重さ1.6	SK101	寛永通寶（新）	
11	銅製品	錢貨	縦24.5 横24.7 厚さ1.2 重さ2.3	SK105	寛永通寶（古）	
12	銅製品	錢貨	縦25.1 横25.1 厚さ1.0 重さ3.1	SK105	寛永通寶 文	
13	銅製品	錢貨	縦24.8 横25.0 厚さ1.3 重さ3.3	SK105	寛永通寶 文	
14	銅製品	錢貨	縦24.5 横24.1 厚さ1.1 重さ2.5	SK105	寛永通寶（新）	
15	銅製品	錢貨	縦23.5 横23.5 厚さ1.0 重さ2.0	SK105	寛永通寶（新）	
16	銅製品	錢貨	縦22.8 横22.4 厚さ1.1 重さ1.9	SK105	寛永通寶（新）	
17	銅製品	錢貨	縦24.4 横24.3 厚さ1.3 重さ3.7	SK108	寛永通寶（古）	
18	銅製品	錢貨	縦23.8 横23.9 厚さ1.2 重さ3.2	SK108	寛永通寶（古）	
19	銅製品	錢貨	縦24.6 横24.5 厚さ1.3 重さ3.4	SK108	寛永通寶（古）	
20	銅製品	錢貨	縦23.1 横23.1 厚さ1.0 重さ2.4	SK108	寛永通寶（新）	
21	銅製品	錢貨	縦23.0 横23.0 厚さ0.9 重さ1.8	SK108	寛永通寶（新）	
22	銅製品	錢貨	縦23.0 横[22.6] 厚さ1.2 重さ2.5	SK108	寛永通寶（新）	
23	銅製品	錢貨	縦24.2 横24.2 厚さ1.5 重さ3.0	SK110	寛永通寶（古）	
24	銅製品	錢貨	縦24.2 横24.0 厚さ1.3 重さ2.2	SK110	寛永通寶（古）	
25	銅製品	錢貨	縦24.4 横24.4 厚さ1.2 重さ2.5	SK110	寛永通寶（古）	
26	銅製品	錢貨	縦24.2 横24.3 厚さ1.2 重さ2.8	SK110	寛永通寶（古）	
27	銅製品	錢貨	縦24.2 横24.3 厚さ1.3 重さ3.3	SK110	寛永通寶（新）	
28	銅製品	錢貨	縦24.3 横24.4 厚さ1.3 重さ2.4	SK110	寛永通寶（新）	
29	銅製品	錢貨	縦24.8 横24.8 厚さ1.1 重さ3.1	SK111	寛永通寶（古）	
30	銅製品	錢貨	縦23.8 横23.7 厚さ1.3 重さ3.5	SK111	寛永通寶（古）	
31	銅製品	錢貨	縦25.2 横25.1 厚さ0.9 重さ1.6	SK111	寛永通寶 文	
32	銅製品	錢貨	縦25.4 横25.5 厚さ1.1 重さ2.9	SK111	寛永通寶（新）	
33	銅製品	錢貨	縦24.2 横24.5 厚さ1.4 重さ3.1	SK111	寛永通寶（新）	
34	銅製品	錢貨	縦22.9 横22.8 厚さ0.9 重さ1.8	SK111	寛永通寶（新）	

ある。長軸方位はN-38° -Eを指す。規模は長軸0.77m、短軸0.71m、深さ0.21mである。第112号土壙を壊している。遺物は出土していない。

第105号土壙（第16図）

E-4グリッドに位置する。平面形は橢円形である。長軸方位はN-38° -Wを指す。規模は長

軸0.64m、短軸0.59m、深さ0.70mと深い。第2層から早桶と考えられる木片が出土した。

埋土中からは固着した状態の寛永通寶6枚（第21図11～16）が出土した。古寛永1、文銭2、新寛永3の組成である。六道銭の出土から近世以降の土壙墓と考えられる。

第106号土壙（欠番）

第101号井戸跡に遺構名称を変更した。

第107号土壙（第16図）

E-3・4グリッドに位置する。平面形は方形で、長軸方位はN-43°-Wを指す。規模は長軸1.10m、短軸0.99mで、深さ0.72mまでほぼ垂直に掘り込まれている。

埋土中から人骨の破片や歯牙が出土しており、墓壙であると判断される。木片等とともに煙管の雁首（第18図38）が出土した。木片から棺構造を復元することは難しい。

土壙の時期は、近世に位置づけられる。

第108号土壙（第16図）

E-4グリッドに位置する。平面形は不整方形である。長軸方位はN-45°-Eを指す。規模は長軸0.91m、短軸0.74mで、深さ0.73mと掘り込みが深い。

埋土から固着した寛永通寶6枚（第22図17～22）が出土した。古寛永3、新寛永3の組成である。

土壙の時期は、近世に位置づけられる。

第109号土壙（第16図）

F-4グリッドに位置する。平面形は不整形である。長軸方位はN-6°-Eを指す。規模は長軸1.36m、短軸1.19m、深さ0.39mである。埋土は、焼土ブロック・炭化物を含む黒褐色土を主体とする。遺物は、須恵器壺・塊・高台付皿（第17図23～28）が出土した。

土壙の時期は、須恵器の特徴から9世紀後葉に位置づけられる。

3 井戸跡

井戸跡は合計19基検出された。そのうちの18基がA区に集中している。

出土遺物が少なく、時期を特定することは難しい。平面形状や埋土の特徴、出土遺物の様相を検討した結果、A区の第10号井戸跡と第18号井戸跡の2基は、平安時代に位置づけられる。

第110号土壙（第16図）

F-5グリッドに位置する。平面形は不整円形である。長軸方位はN-6°-Eを指す。規模は長軸0.77m、短軸0.71m、深さ0.46mである。

埋土中から固着した状態の寛永通寶6枚（第22図23～28）が出土した。古寛永4、新寛永2の組成である。近世の土壙墓と考えられる。

第111号土壙（第16図）

F-4・5グリッドに位置し、南側を搅乱によって壊される。平面形は方形系であろう。長軸方位はN-71°-Wを指し、規模は長軸1.50m、深さ0.56mまで掘り下げを行ったが、湧水が激しく調査を断念した。

埋土中から固着した寛永通寶6枚（第22図29～34）が出土した。古寛永2、文銭1、新寛永3の組成である。近世の土壙墓と考えられる。

第112号土壙（第16図）

E-3グリッドに位置する。平面形は橢円形である。長軸方位はN-6°-Eを指す。規模は長軸1.31m、短軸0.98m、深さ0.39mで、断面形は皿状である。第104号土壙によって壊される。

遺物が少なく、時期を特定することはできない。

第113号土壙（第16図）

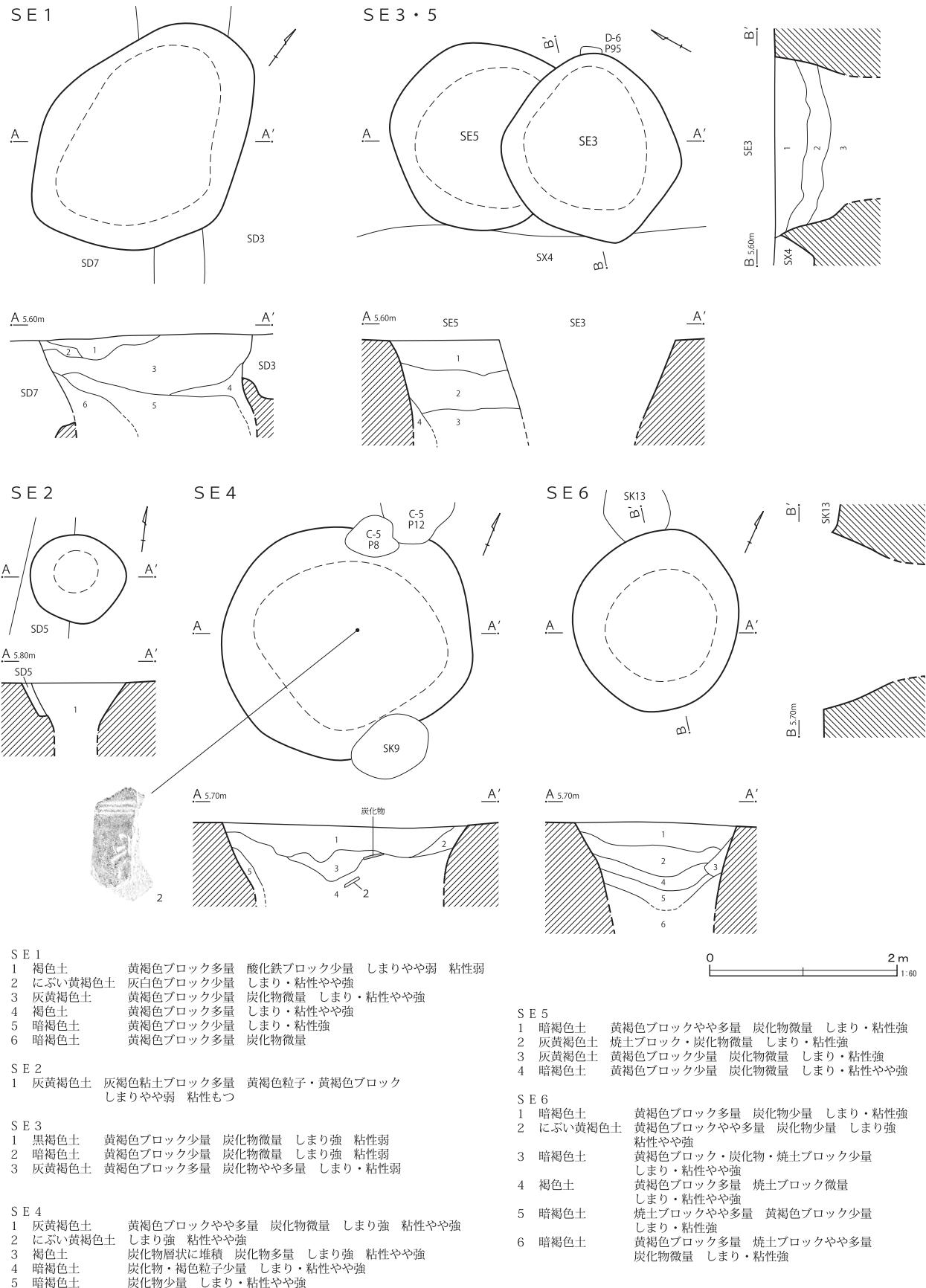
E-3グリッドに位置する。平面形は方形で、長軸方位はN-1°-Wを指す。規模は長軸0.98m、短軸0.83m、深さ0.86mで、壁面は直線的に深く掘り込まれる。

遺物は出土していないが、形状からみて近世以降の土壙墓であろう。

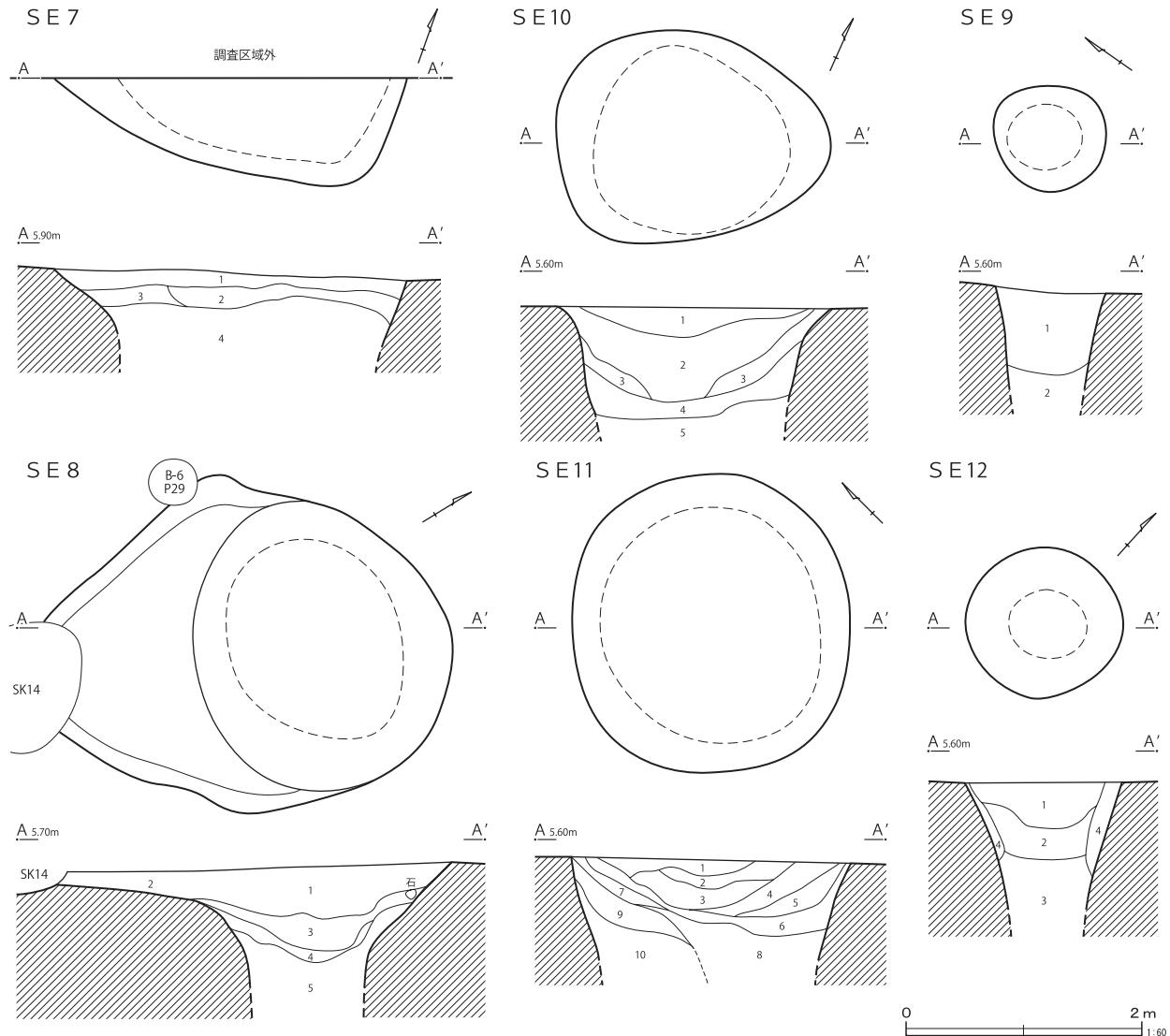
それ以外の井戸跡については、古代と中・近世の遺物が混在しているものがほとんどで、中世以降に帰属するものと判断した。

第1号井戸跡（第23図）

C-D-5グリッドに位置する。平面形は不整橢円形である。規模は長軸2.68m、短軸2.12



第23図 井戸跡 (1)



S E 7

1 暗褐色土	黄褐色ブロックやや多量 焼土ブロック・炭化物少量 しまり強 粘性やや強
2 黒褐色土	黄褐色ブロックやや多量 焼土ブロック・炭化物少量 しまり強 粘性やや強
3 灰黄褐色土	焼土ブロック・炭化物・黄褐色ブロック少量 しまり強 粘性やや強
4 暗褐色土	黄褐色ブロック多量 炭化物少量 烧土ブロック微量 しまり・粘性やや強

S E 8

1 灰褐色土	炭化粒子・黄褐色粒子 しまり強 粘性ややもつ
2 褐色土	炭化粒子・黄褐色粒子少量 しまりややもつ 粘性弱
3 暗褐色土	炭化粒子・炭化物・黄褐色粒子を混在 しまり・粘性弱
4 黄褐色土	黄褐色ブロック多量 しまり・粘性もつ
5 黑褐色土	焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性弱

S E 9

1 黑褐色土	焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまりややもつ 粘性弱
2 黑褐色土	1層に比べ黄褐色粒子多い しまりもつ 粘性弱

S E 10

1 暗褐色土	黄褐色ブロック多量 烧土・炭化物少量 しまり良 粘性中
2 黑褐色土	黄褐色ブロック多量 灰と焼土帶状に堆積 しまりなし
3 にぶい黄褐色土	黄褐色ブロック多量 暗灰色粘土少量 しまりややなし
4 灰黄褐色土	灰色粘土・黄褐色ブロック しまりなし
5 にぶい黄橙色土	黄褐色ブロック多量 灰色粘土少量 しまりもつ

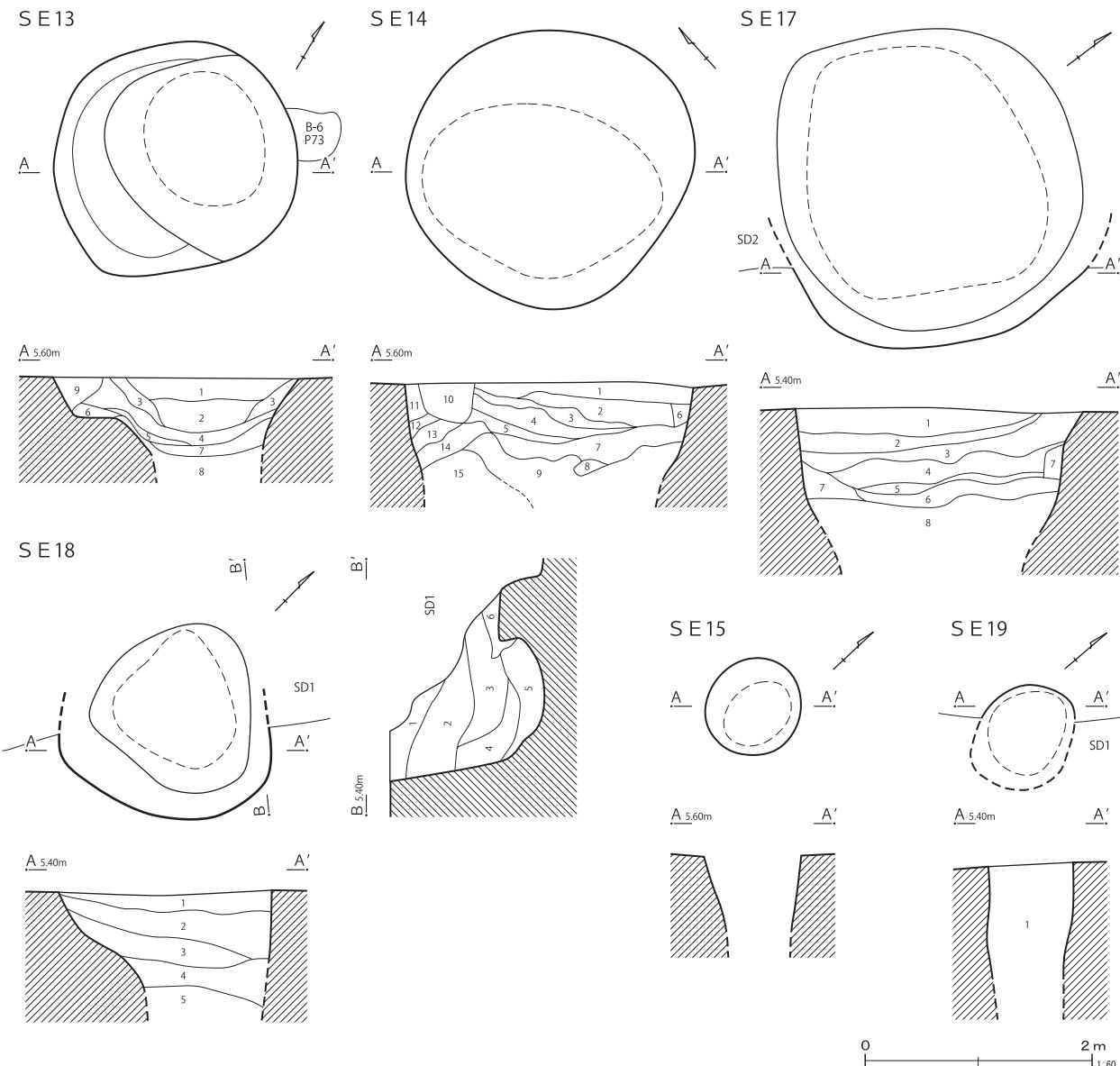
S E 11

1 灰褐色土	灰褐色粘土ブロック・黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまりやや弱
2 暗灰褐色土	黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまりややもつ 粘性もつ
3 黄褐色土	黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまり・粘性ややもつ
4 暗褐色土	黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性ややもつ
5 黄褐色土	黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまり・粘性もつ
6 暗褐色土	黄褐色粒子・炭化粒子 しまり・粘性弱
7 灰褐色土	8層に類似
8 灰褐色土	灰褐色粘土ブロック しまり・粘性もつ
9 暗褐色土	黄褐色粒子・黄褐色ブロック少量 しまり・粘性弱
10 黑褐色土	黄褐色粒子 しまり・粘性もつ

S E 12

1 暗褐色土	焼土粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子・黄褐色粒子 しまりややもつ 粘性弱
2 暗褐色土	焼土粒子・炭化粒子・灰褐色粘土粒子・黄褐色粒子 しまり強 粘性ややもつ
3 黑褐色土	灰褐色粘土粒子・黄褐色粒子 しまり強 粘性ややもつ
4 黄褐色土	黄褐色粒子多量 しまり・粘性もつ

第24図 井戸跡 (2)



S E 13	
1	黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性弱
2	黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性もつ
3	黄褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性ややもつ
4	黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性ややもつ
5	黒褐色土 炭化粒子多量 しまり・粘性弱
6	黒褐色土 炭化粒子多量 しまり・粘性弱
7	暗褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性ややもつ
8	黄褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまり・粘性ややもつ
9	黄褐色土 黄褐色ブロック主体

S E 14	
1	黄褐色土 黄褐色ブロック多量 しまり・粘性もつ
2	灰褐色土 灰色粘土ブロック多量 しまり・粘性もつ
3	褐色土 褐色土主体 黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性ややもつ
4	黄褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまり・粘性ややもつ
5	暗褐色土 暗褐色土主体 焼土粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性ややもつ
6	暗褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまりもつ
7	暗灰色土 灰色粘土ブロック・暗褐色土多量 しまり・粘性もつ
8	灰褐色土 灰色粘土ブロック・粘土粒子 しまり・粘性もつ
9	暗褐色土 暗褐色土 黄褐色粒子混在 しまり・粘性もつ
10	褐色土 灰色粘土ブロック しまり・粘性ややもつ
11	暗褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック混在 しまり・粘性もつ
12	暗褐色土 黄褐色ブロック しまり・粘性もつ
13	黄褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性強
14	暗褐色土 9層に類似 黄褐色粒子 しまり・粘性もつ
15	黄褐色土 黄褐色ブロック主体 しまり・粘性強

S E 17	
1	暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性弱
2	黄褐色土 黄褐色土多量 しまり・粘性もつ
3	暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性弱
4	青灰色土 青灰色粘土主体 しまり・粘性もつ
5	黄褐色土 黄褐色土多量 しまり・粘性もつ
6	暗褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまり・粘性弱
7	黄褐色土 黄褐色ブロック主体 しまり・粘性強
8	黒褐色土 炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性ややもつ

S E 18	
1	黒褐色土 焼土粒子・白色粒子・黄褐色粒子 しまりもつ 粘性弱
2	暗褐色土 黄褐色粒子・白色粒子 しまり・粘性ややもつ
3	黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性ややもつ
4	黒褐色土 3層に比べ暗い 黄褐色粒子少ない しまり・粘性ややもつ
5	暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 黑褐色土主体 しまり・粘性ややもつ
6	黒褐色土 4層に類似 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性ややもつ

S E 19	
1	黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性弱

第25図 井戸跡 (3)

m、深さ0.75mまで掘り下げを行った。第3・7号溝跡の埋没後に掘削されている。遺物は、磁器碗、かわらけ小皿、擂鉢、砥石、加工礫（第28図27～31）がある。16世紀代の遺物も含まれているが、18世紀前葉の肥前系磁器の出土から、最終埋没は近世に下るものと考えられる。

第2号井戸跡（第23図）

B-5グリッドに位置する。平面形は円形で、断面漏斗状を呈する。長軸方位はN-63°-Wを指す。規模は長軸0.97m、短軸0.93mで、深さは0.5mまで掘り下げを行った。第5号溝跡の埋没後に掘削されている。遺物は出土していない。

第3号井戸跡（第23図）

C・D-6グリッドに位置する。北側の第5号井戸跡と重複し、それを壊している。平面形は略円形で、長軸方位はN-75°-Wを指す。規模は長軸1.83m、短軸1.79m、深さは0.80mまで掘り下げを行った。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第4号井戸跡（第23図）

C-5・6グリッドに位置する。平面形は円形である。長軸方位はN-31°-Wを指す。規模は長軸2.73m、短軸2.67m、深さは0.67mまで掘り下げた。第9号土壙によって一部壊されている。

遺物は、埋土上層から完形の応安四年銘（1371）の板碑をはじめ（第30・31図1～4）、かわらけ小皿、瀬戸美濃系の陶器擂鉢、鉄滓（第28図32～35）などが出土している。遺物の様相から16世紀後半以降の埋没と考えられる。

第5号井戸跡（第23図）

C-6グリッドに位置し、南側に重複する第3号井戸跡によって大きく壊される。平面形は円形である。規模は長軸2.02m、短軸1.17m、深さは0.90mまで掘り下げを行った。埋土中から丹波系の陶器擂鉢（第28図36）が出土している。

出土遺物の様相から17世紀前半以降の埋没と考えられる。

第6号井戸跡（第23図）

C-6グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.81m、短軸1.79m、深さは0.85mまで掘り下げを行った。北側で第13号土壙と重複し、それを壊している。埋土中から瀬戸美濃系の折縁皿（第28図37）が出土している。大窯第4段階に比定される。出土遺物の様相から16世紀後半以降の埋没と考えられる。

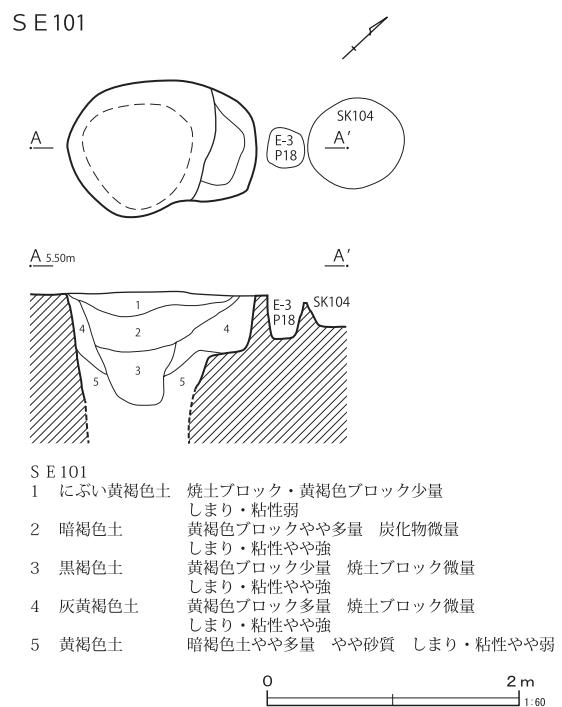
第7号井戸跡（第24図）

B-5グリッドに位置する。北側が調査区域外にのびることから、平面形は不明である。長軸方位はN-70°-Eを指し、規模は長軸2.95m、深さは0.63mまで掘り下げを行った。遺物は、須恵器壺・甕（第27図2～4）、かわらけ小皿（第28図38）、板碑片（第31図5）がある。

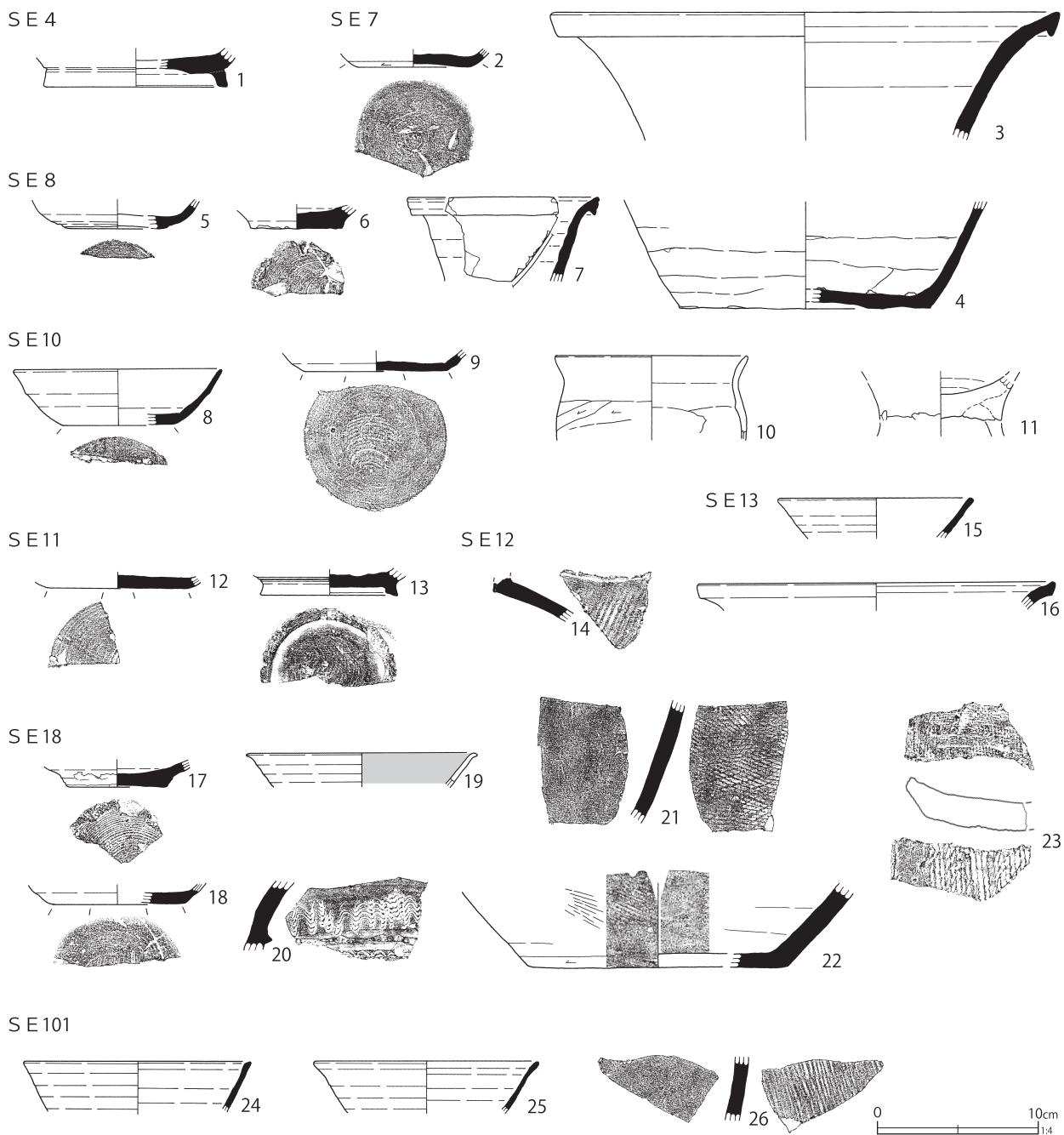
出土遺物から16世紀以降の埋没と考えられる。

第8号井戸跡（第24図）

B-6グリッドに位置する。井筒部分の平面形は橢円形であるが、南側に舌状の張出が付属している。長軸方位はN-13°-Eを指し、規模は長軸3.38m、短軸2.60m、深さは1.01mまで掘り



第26図 井戸跡（4）



第27図 井戸跡出土遺物（1）

下げを行った。断面形は漏斗状である。遺物は須恵器杯・長頸瓶(第27図5～7)、かわらけ小皿(第28図39)が出土した。

出土遺物から16世紀以降の埋没と考えられる。

第9号井戸跡（第24図）

C-7グリッドに位置する。平面形は楕円形で、径の細い、筒形の素掘り井戸である。長軸方位はN-49°-Wを指し、規模は長軸0.94m、短軸0.91

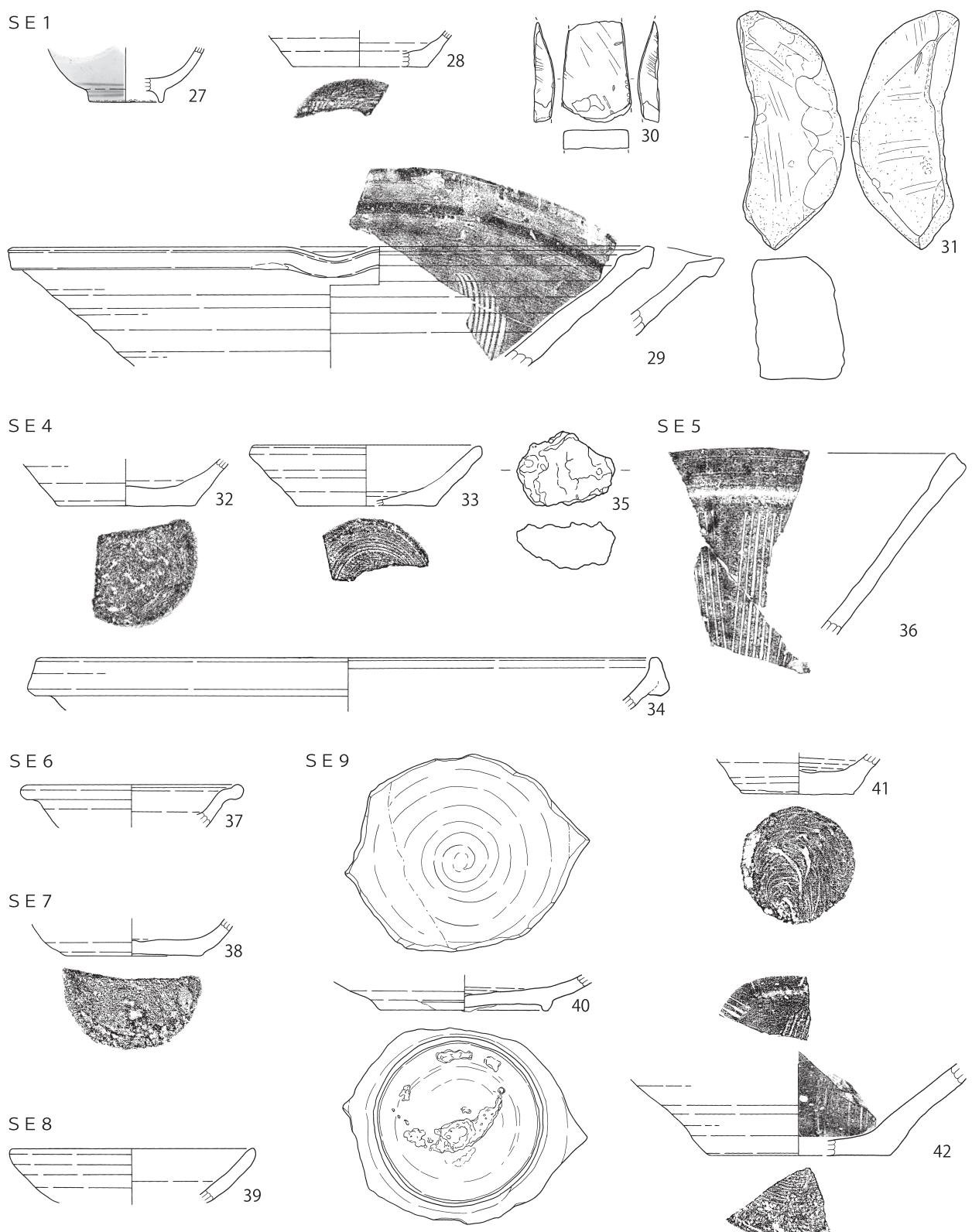
m、深さは0.88mまで掘り下げを行った。

遺物は古瀬戸の擂鉢、大窯期の丸皿と擂鉢、かわらけ小皿(第28・29図40～43)が出土した。

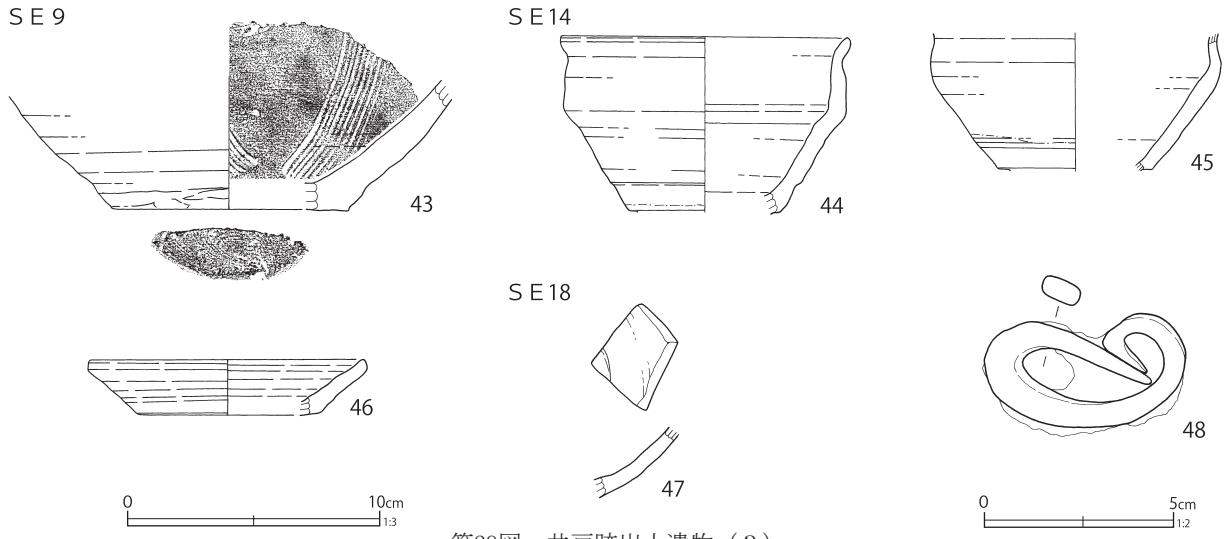
出土遺物から16世紀後半以降の埋没である。

第10号井戸跡（第24図）

D-8・9グリッドに位置し、平面形は楕円形である。長軸方位はN-67°-Eを指す。規模は長軸2.31m、短軸1.78m、深さは0.92mまで掘



第28図 井戸跡出土遺物（2）



第29図 井戸跡出土遺物（3）

り下げを行った。

遺物は、底部糸切後、再調整を施す須恵器壺・塊、土師器台付甕（第27図8～11）が出土しており、平安時代の井戸跡と推定される。

第11号井戸跡（第24図）

C-6・7グリッドに位置する。平面形は略円形で、長軸方位はN-45°-Eを指す。規模は長軸2.53m、短軸2.36m、深さは0.85mまで掘り下げた。遺物は、第31・32図6～9に図示した板碑片が出土している。

「応永」の紀年銘を有する板碑が出土しており、14世紀末以降の埋没と考えられる。

第12号井戸跡（第24図）

D-7グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は円錐状に近い。長軸方位はN-48°-Eを指し、規模は長軸1.34m、短軸1.29m、深さは1.05mまで掘り下げを行った。遺物は須恵器甕（第27図14）が出土しただけで、時期は不明である。

第13号井戸跡（第25図）

B-6グリッドに位置し、平面形は橢円形で、西側にステップ状の段差を作り出す。長軸方位はN-42°-Eを指し、規模は長軸2.13m、短軸1.98m、深さは0.67mまで掘り下げを行った。遺物は須恵器壺・甕（第27図15・16）が出土した。

第14号井戸跡（第25図）

C・D-7グリッドに位置する。平面形は略円形である。長軸方位はN-48°-Wを指し、規模は長軸2.52m、短軸2.45m、深さは0.75mまで掘り下げを行った。遺物は、瀬戸美濃系の白天目と鉄釉の天目茶碗、かわらけ小皿（第29図44～46）と板碑片（第32図10・11）が出土している。

出土遺物から17世紀前葉以降の埋没であろう。

第15号井戸跡（第25図）

D-7グリッドに位置する。平面形は円形で、上部が漏斗状に開く素掘りの井戸跡である。規模は長軸0.87m、短軸0.84m、深さ0.86mまで掘り下げを行った。遺物は須恵器片が出土したのみで、正確な時期は不明である。

第16号井戸跡（欠番）

第4号性格不明遺構に名称を変更した。

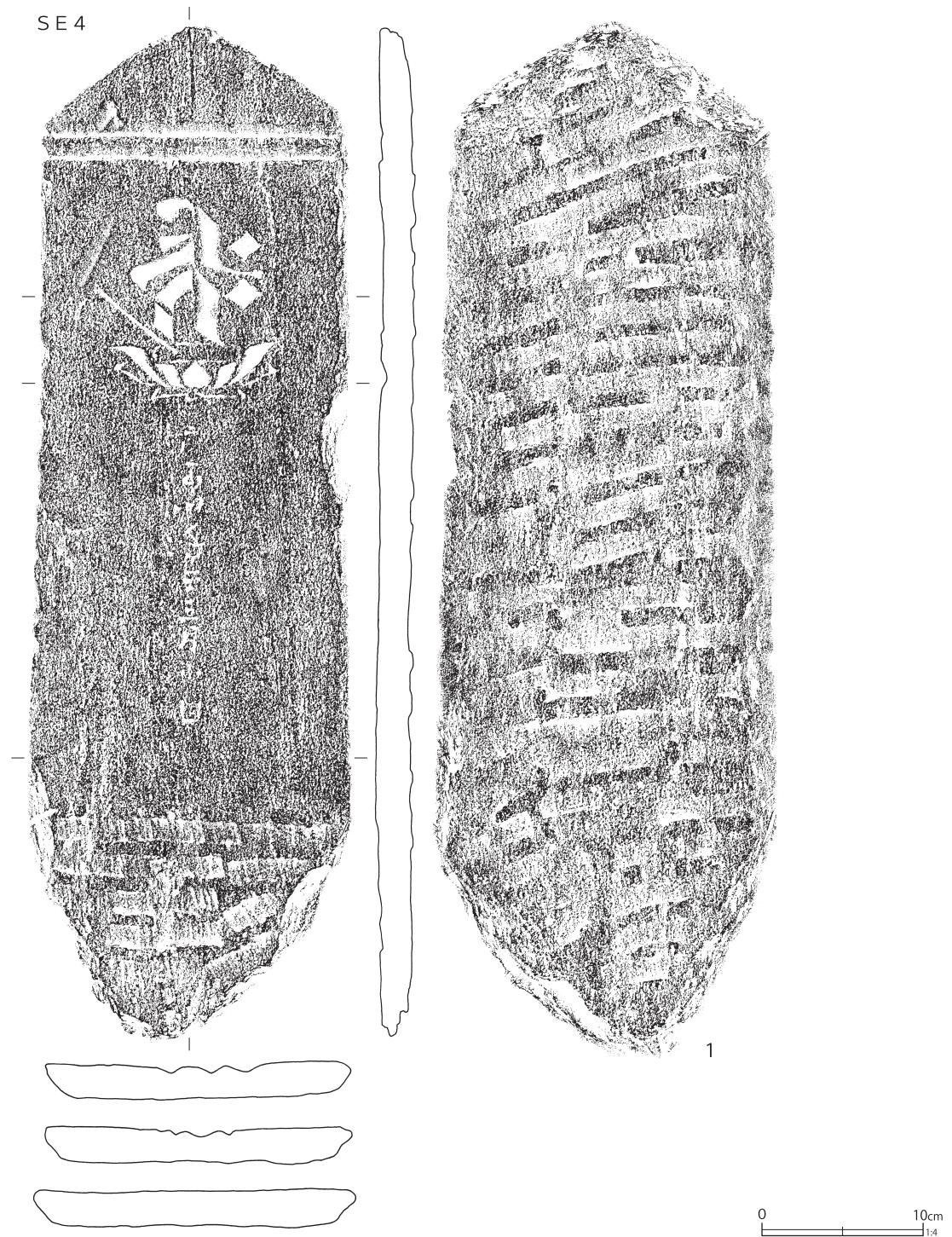
第17号井戸跡（第25図）

D-7・8グリッドに位置し、第2号溝跡によって壊される。平面形は橢円形で、長軸方位はN-58°-Eを指す。規模は長軸2.78m、短軸2.63mと大きく、深さは1.00mまで掘り下げを行った。

遺物が出土していないため、時期は明確でないが、重複関係から近世以降と考えられる。

第18号井戸跡（第25図）

D-8グリッドに位置し、第1号溝跡に壊されている。平面形は橢円形と推定される。長軸方位



第30図 井戸跡出土板碑（1）

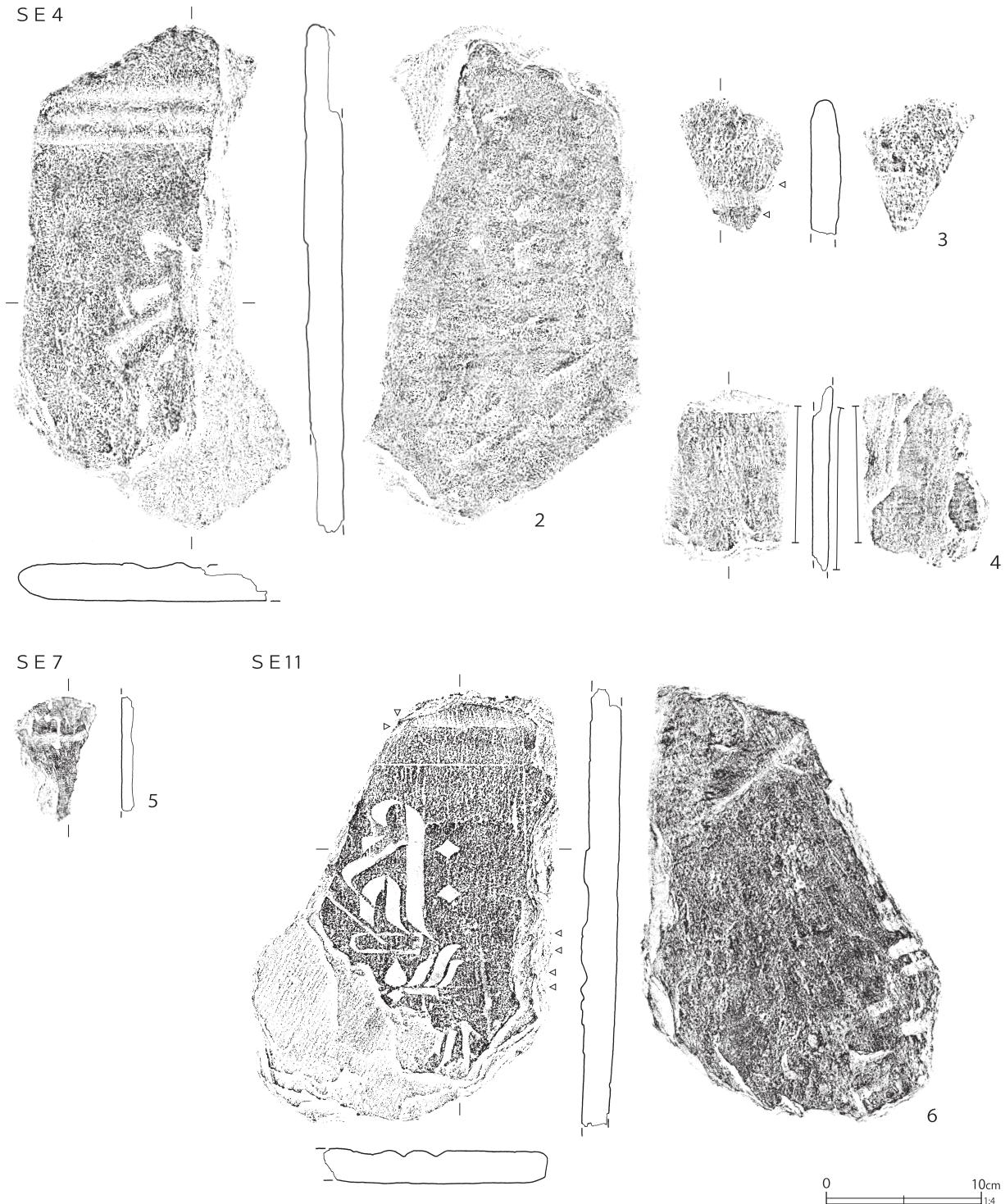
はN-44°-Eを指す。規模は長軸1.83m、短軸1.67mで、深さは1.03mまで掘り下げを行った。

遺物は、須恵器皿・壺・甕、灰釉陶器碗、平瓦（第27図17～23）などが主体であることから、平安時代の井戸跡と判断した。白磁碗（第29図47）は、

重複する第1号溝跡からの混入であろう。

第19号井戸跡（第25図）

D-8グリッドに位置し、第1号溝跡によって壊される。平面形は橢円形で、長軸方位はN-45°-Wを指す。規模は長軸0.82m、短軸0.82m



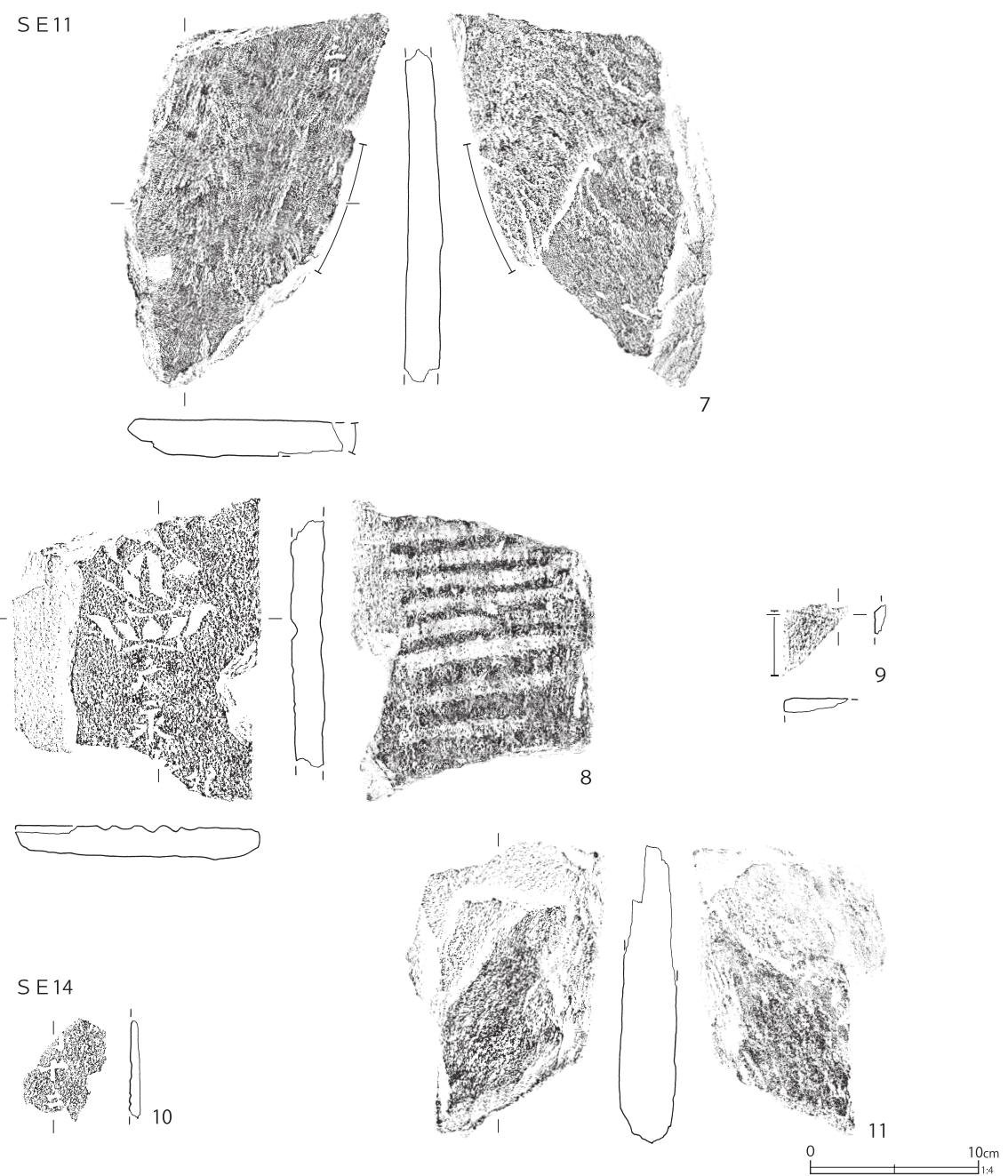
第31図 井戸跡出土板碑（2）

で、深さ1.06mまで掘り下げを行った。径の細い、筒形をした素掘りの井戸である。遺物が出土していないため、時期は不明である。

第101号井戸跡（第26図）

B区のE-3グリッドに位置する。平面形は不

整橢円形で、北東側にステップ状の張出部を造作する。長軸方位はN-43°-Eを指し、規模は長軸1.50m、短軸1.08mで、深さは0.89mまで掘り下げを行った。遺物は須恵器壺・甕(第27図24～26)の破片が出土しているのみである。



第32図 井戸跡出土板碑（3）

第6表 井戸跡出土遺物観察表（第27～29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	瓶	—	[2.4]	(11.4)	GIK	40	良好	灰黄	SE4上層 SD5 産地不明	
2	須恵器	壺	—	[1.1]	7.2	IJK	80	良好	灰白	SE7 南比企産 底部ヘラケズリ	
3	須恵器	甕	(31.6)	[8.0]	—	EIK	15	良好	灰白	SE7 外面弱い平行叩き目	
4	須恵器	甕	—	[7.7]	(15.7)	IK	40	良好	黄灰	SE7 底部内面に自然釉付着	
5	須恵器	壺	—	[1.8]	(6.2)	IJK	10	普通	灰白	SE8 南比企産 底部糸切痕	
6	須恵器	壺	—	[1.4]	(5.6)	IKL	10	普通	灰白	SE8 産地不明 底部糸切痕	
7	須恵器	長頸瓶	(11.8)	[5.2]	—	HI	20	良好	灰黄	SE8 東金子産 破損面を砥具として転用	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
8	須恵器	壺	(12.8)	3.4	(6.8)	IJK	40	良好	黄灰	SE10 南比企産 底部周辺ヘラケズリ	21-5
9	須恵器	壺	—	[1.3]	(9.0)	IJK	80	良好	灰褐	SE10 南比企産 底部糸切後周辺ヘラケズリ 8c末-9c初	
10	土師器	台付甕	(11.8)	[5.2]	—	HIK	20	普通	橙	SE10	
11	土師器	台付甕	—	[2.7]	—	HIK	50	普通	明黄褐	SE10 厚手 粗製	
12	須恵器	壺	—	[0.8]	(8.6)	CIJK	30	普通	灰白	SE11 南比企産 底部周辺ヘラケズリ	
13	須恵器	高台付壺	—	[1.6]	(8.4)	IJK	50	良好	黄灰	SE11 南比企産 底部糸切痕	
14	須恵器	甕	—	[2.6]	—	IJK	5	良好	灰	SE12 南比企産 外面平行叩き目	
15	須恵器	壺	(12.0)	[2.5]	—	IJK	10	良好	灰	SE13 南比企産	
16	須恵器	甕	(22.2)	[1.7]	—	GIK	20	良好	褐灰	SE13 内面降灰	
17	須恵器	皿	—	[1.7]	(6.0)	IJK	45	良好	灰	SE18 底部糸切痕	
18	須恵器	壺	—	[1.2]	(8.0)	IJK	40	良好	黄灰	SE18 南比企産 底部周辺ヘラケズリ	
19	灰釉陶器	碗	(14.0)	[2.1]	—	IK	10	良好	灰白	SE18 猿投産 K-90号窯前期 内面施釉	
20	須恵器	甕	—	[4.3]	—	IK	5	良好	灰白	SE18 湖西産 胎土緻密	
21	須恵器	甕	—	[8.6]	—	DIJK	5	良好	灰	SE18 南比企産 脊部外面斜格子叩き目	
22	須恵器	甕	—	[5.3]	(16.2)	GIJK	10	良好	灰	SE18 南比企産 脊部外面弱い平行叩き目	
23	瓦	平瓦	長さ[3.8] 幅[6.9] 厚さ1.9			IJKM	10	普通	黄灰	SE18 南比企産 凹面布目 凸面縄	22-1
24	須恵器	壺	(14.2)	[3.1]	—	IJ	10	良好	灰	SE101 (SE102誤記か) 南比企産	
25	須恵器	壺	(14.0)	[3.2]	—	GIJ	10	良好	灰	SE101 (旧SK106) 南比企産	
26	須恵器	甕	—	[3.9]	—	EIK	5	良好	灰	SE101 (旧SK106) 外面降灰	
27	磁器	碗	—	[2.7]	(3.8)	—	15	良好	灰白	SE1 No.2 肥前系 内外面施釉 外面染付 高台疊付部砂付着あり 18c前	
28	かわらけ	小皿	—	[1.8]	(6.9)	EI	5	普通	にぶい黄橙	SE1 底部糸切痕 胎土粉質	
29	陶器	擂鉢	(32.8)	[6.2]	—	DH	15	普通	浅黄	SE1 濑戸美濃系 内外面錆釉 内面擂目 大窯第4段階	
30	石製品	砥石	長さ[6.9] 幅[4.7] 厚さ [1.4] 重さ64.8 ホルン フェルス			—	—	—	—	SE1 上端部欠損 断面長方形 砥面3	
31	石製品	加工礫	長さ6.4 幅7.4 厚さ8.4 重さ1368.3 安山岩			—	—	—	—	SE1 砥石の可能性あり 欠損後再利用 両面研磨	
32	かわらけ	小皿	—	[2.4]	(6.9)	H	25	普通	浅黄橙	SE4上層 底部糸切痕(左) 胎土粉質	22-2
33	かわらけ	小皿	(11.5)	3.1	(7.0)	CEHK	20	普通	褐灰	SE4上層 底部糸切痕 胎土粉質 体部内 面磨耗激しい	22-3
34	陶器	擂鉢	(31.3)	[2.6]	—	I	5	普通	浅黄橙	SE4上層 濑戸美濃系 内外面錆釉 大窯 第3段階	22-4
35	鉄製品	楕形滓	総5.1 横6.7 厚さ3.2 重さ133.1			—	—	—	—	SE4 磁着なし	
36	陶器	擂鉢	—	[9.3]	—	DE	5	普通	褐灰	SE5 丹波系 内外面降灰・擂目 17c前- 中	
37	陶器	折縁皿	(10.9)	[2.2]	—	HIK	10	普通	灰白	SE6 濑戸美濃系 内外面灰釉 大窯第4 段階	
38	かわらけ	小皿	—	[1.9]	(7.0)	HI	20	普通	灰黃	SE7 底部糸切痕(右) 胎土粉質	
39	かわらけ	小皿	(12.1)	[2.7]	—	CE	15	普通	にぶい黄橙	SE8 胎土粉質 磨耗激しい	
40	陶器	丸皿か	—	[1.8]	8.6	DE	50	普通	にぶい黄橙	SE9 濑戸美濃系 内外面灰釉 高台内輪 トチ痕 大窯期	
41	かわらけ	小皿	—	[2.1]	5.7	EHI	25	良好	橙	SE9 底部糸切痕(右) 胎土粉質	
42	陶器	擂鉢	—	[4.7]	(9.3)	DK	5	良好	灰黄	SE9 古瀬戸 底部糸切痕 内外面錆釉 内面擂目	22-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
43	陶器	擂鉢	—	[5.2]	(9.4)	DI	10	普通	にぶい黄橙	SE9 濑戸美濃系 底部糸切痕(右) 内外面鋸釉 内面擂目 大窯期	
44	陶器	天目茶碗	(11.3)	[6.9]	—	HK	50	普通	灰白	SE14 濑戸美濃系 内外面長石釉 白天目 17c前	22-6
45	陶器	天目茶碗	—	[5.4]	—	K	15	普通	灰白	SE14 濑戸美濃系 内外面鉄釉 露胎部 鉄化粧 大窯第4段階	
46	かわらけ	小皿	(10.8)	2.1	(7.0)	EHI	10	普通	明黄褐	SE14 胎土粉質	
47	磁器(白磁)	碗	—	[2.7]	—	K	5	普通	灰白	SE18 中国産 内外面施釉 内面下位沈線 大宰府碗V類 12c	
48	鉄製品	鉤状金具	縦3.0 横5.3 厚さ1.0 重さ30.9			—	—	—	—	SE18 フック状に折り曲がる	

第7表 井戸跡出土板碑観察表 (第30~32図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	板碑	63.3	20.0	2.3	5860.0	緑泥片岩	SE4	完形 二条線 種子(キリーク・異体字) 蓮座 銘文「応安四年三月日」(1371) 側縁全体的にケズリ 背面押し削り痕(幅1.3cm)	26-6
2	石製品	板碑	[33.0]	[19.1]	2.5	2486.3	緑泥片岩	SE4	上層 二条線 種子(キリーク・異体字) 14c前半 側面一部ケズリ 背面工具痕(二次加工か) 磁鉄鉱含む	26-7
3	石製品	板碑	[9.4]	[6.9]	1.9	186.5	緑泥片岩	SE4	上層 二条線 ケガキ線 長石目立つ 背面押し削り痕(幅0.8cm)	26-8
4	石製品	砥石	[12.0]	[8.4]	1.1	206.0	緑泥片岩	SE4	上層 裏面・側面研磨 板碑の再利用か	
5	石製品	板碑	[8.5]	[5.6]	[0.8]	48.9	緑泥片岩	SE7	銘文「圓門」背面剥離	27-3
6	石製品	板碑	[28.0]	[19.4]	2.2	2033.3	緑泥片岩	SE11	二条線 柵線 種子(キリーク・正体字・サ・[サク]) ケガキ線 15c 側面粗くケズリ 背面押し削り痕(幅0.8cm)	27-1
7	石製品	板碑	[21.5]	[16.5]	2.0	1818.7	緑泥片岩	SE11	銘文「三日」側縁打ち割り成形 基部押し削り痕(幅1.2cm) 二次使用(研磨)	27-2
8	石製品	板碑	[18.0]	[14.5]	1.9	855.2	緑泥片岩	SE11	種子(キリーク・異体字) 蓮座 銘文「応永/[卯]」側面粗いケズリ 背面押し削り痕 被熱	27-4
9	石製品	板碑	[4.5]	[4.0]	[0.8]	18.7	緑泥片岩	SE11	種子ないし蓮座の一部 側縁を二次加工 背面剥離 板碑としての上下不明	
10	石製品	板碑	[6.4]	[5.1]	[0.6]	26.3	緑泥片岩	SE14	銘文「圆十三〔〕」背面剥離 工具による二次加工痕	27-5
11	石製品	板碑	[18.2]	[10.9]	3.3	879.7	緑泥片岩	SE14	基部 側縁部打ち割り成形 一部粗いケズリ 被熱	27-6

4 溝跡

溝跡は、A区8条、B区1条の合計9条が検出された。A区では、二重に巡る薬研堀の第1・2号溝跡や近世の区画溝と推定される第3・7号溝跡などが検出されているが、調査区の南西側が大きく搅乱を受けているため、それぞれの溝跡の延長線上の様相は明らかでない。

溝跡に伴う遺物は総体的に少なく、掘削時期や廃絶時期を明らかにすることは難しい。ただ

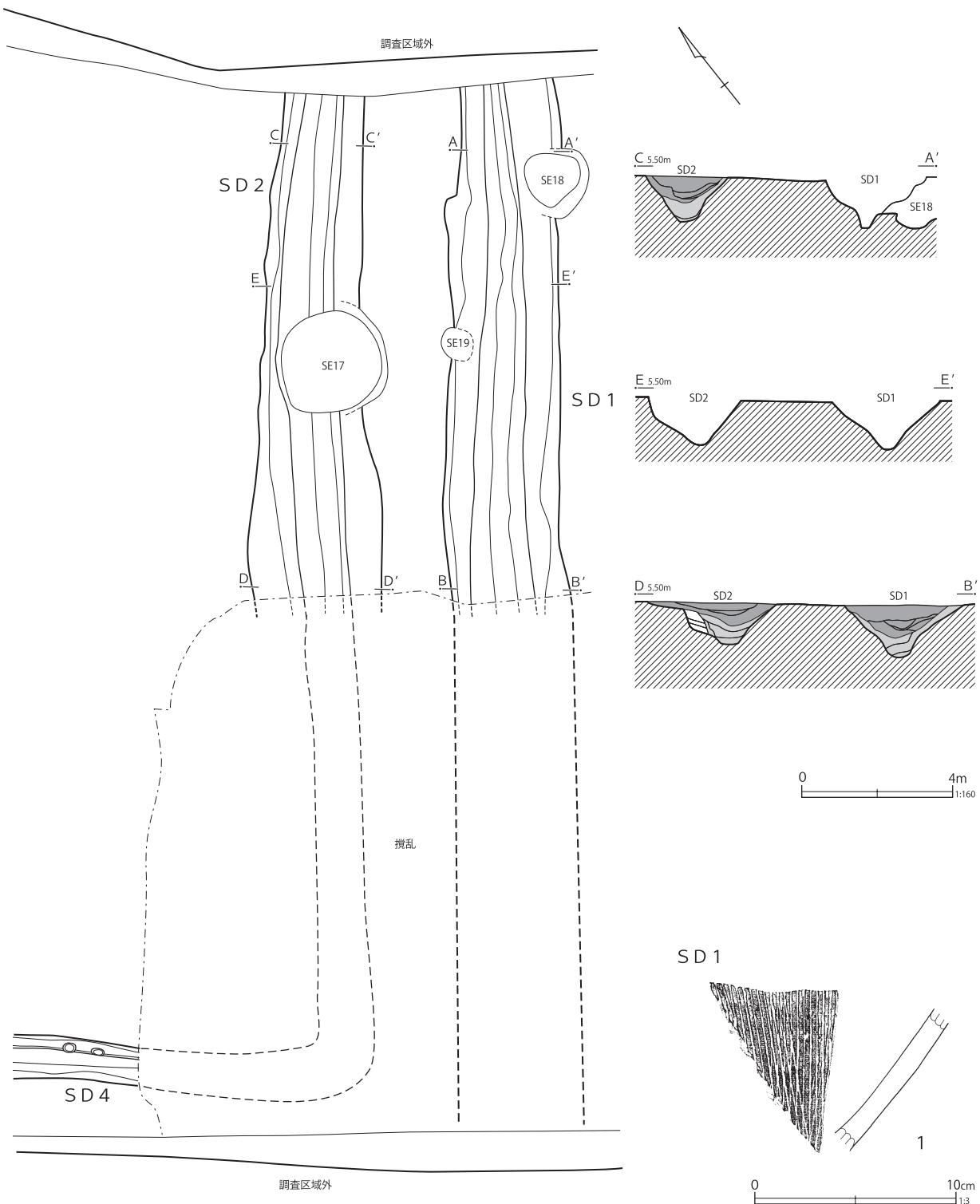
し、B区の第101号溝跡は、断面形状や埋土の特徴及び出土遺物から、平安時代に帰属する可能性が高い。特徴的な遺物として、第4・7号溝跡から出土した灰釉陶器がある。このほかに第13号土壙、第18号井戸跡、C-6グリッドのP95からも灰釉陶器が出土しており、遺跡全体で6点を数える。いずれも愛知県猿投窯跡群の製品で、黒釜14号窯式から黒釜90号窯式に位置づけられる。

第1号溝跡（第33・34図）

C-8、D・E-7・8グリッドに位置する。西側に2.4~2.6mの距離を隔て、第2号溝跡が並走する。走行方向はN-40°-Eを指す。第18・19号井戸跡と重複する。土層断面の観察によれば、

第18号井戸跡の方が溝跡より古い。規模は、検出長13.83m、幅は2.49~3.07m、深さは1.36~1.42mで、薬研状の断面を呈する。埋土の状態から複数回の掘り直しが想定される。

遺物は、第37図2~4の須恵器壊・塊・長頸瓶



第33図 溝跡(1)・出土遺物(1)

の破片のほか、溝跡に伴う遺物としては第33図1に示した堺明石系陶器の擂鉢がみられる。しかし、全体的な遺物の様相から混在の可能性もある。

第2号溝跡（第33・34図）

C・D-7・8グリッドに位置する。第1号溝跡の西側に平行するように掘削されている。走行方向はN-44°-Eを指す。第17号井戸跡によつて大きく壊されている。規模は検出長13.34m、幅は2.16~3.53m、深さは1.14~1.25mである。葉研状の断面を呈し、西側壁面には部分的に犬走り状のテラス面を作り出す。埋土の状態から複数回掘り直しが行われ、改修されたようである。

遺物は、内面黒色処理を施したロクロ土師器壺、須恵器皿（第37図5・6）のほか、板碑片（第45

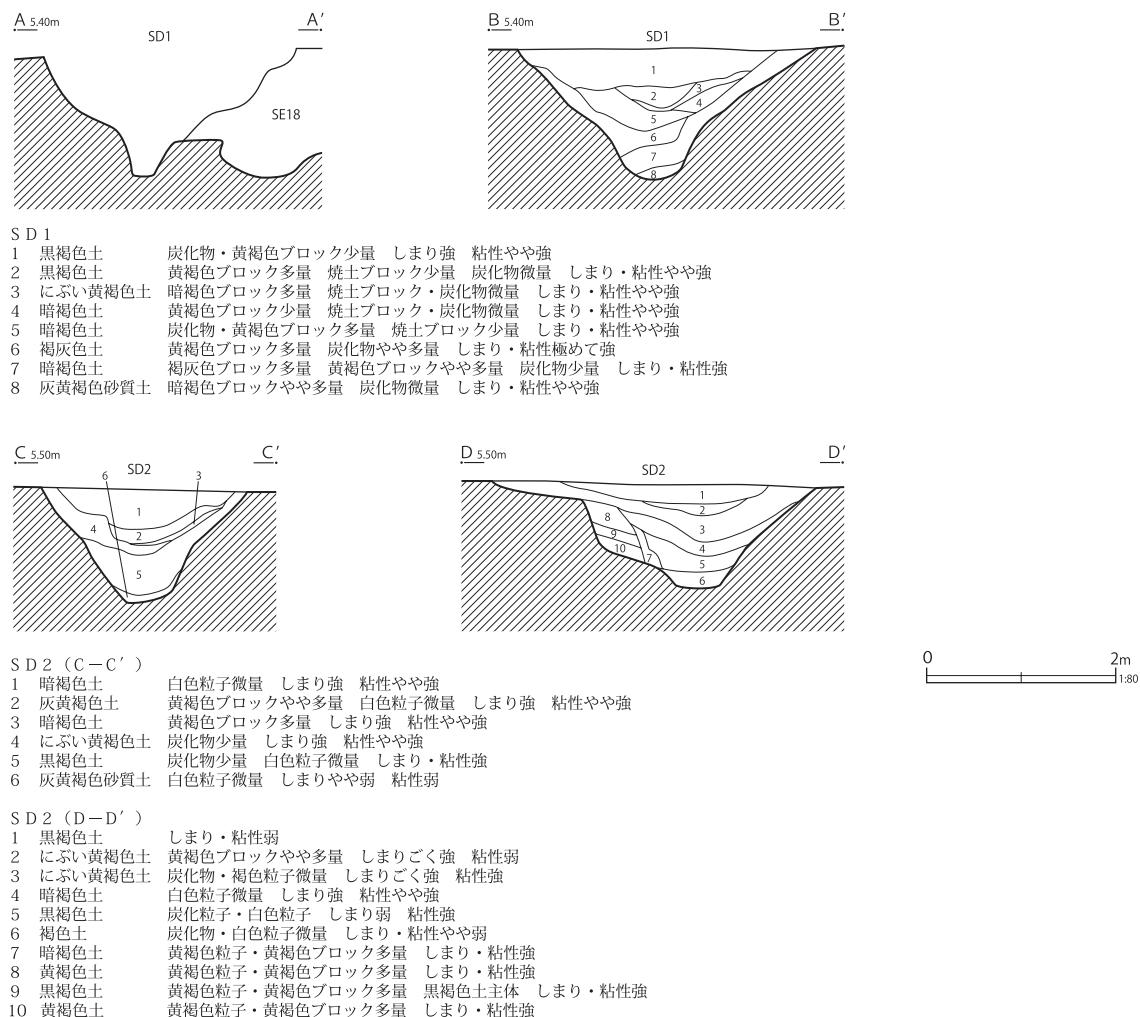
図1）が出土しているが、溝跡の時期を示すような遺物はほとんどない。

第3号溝跡（第35・36図）

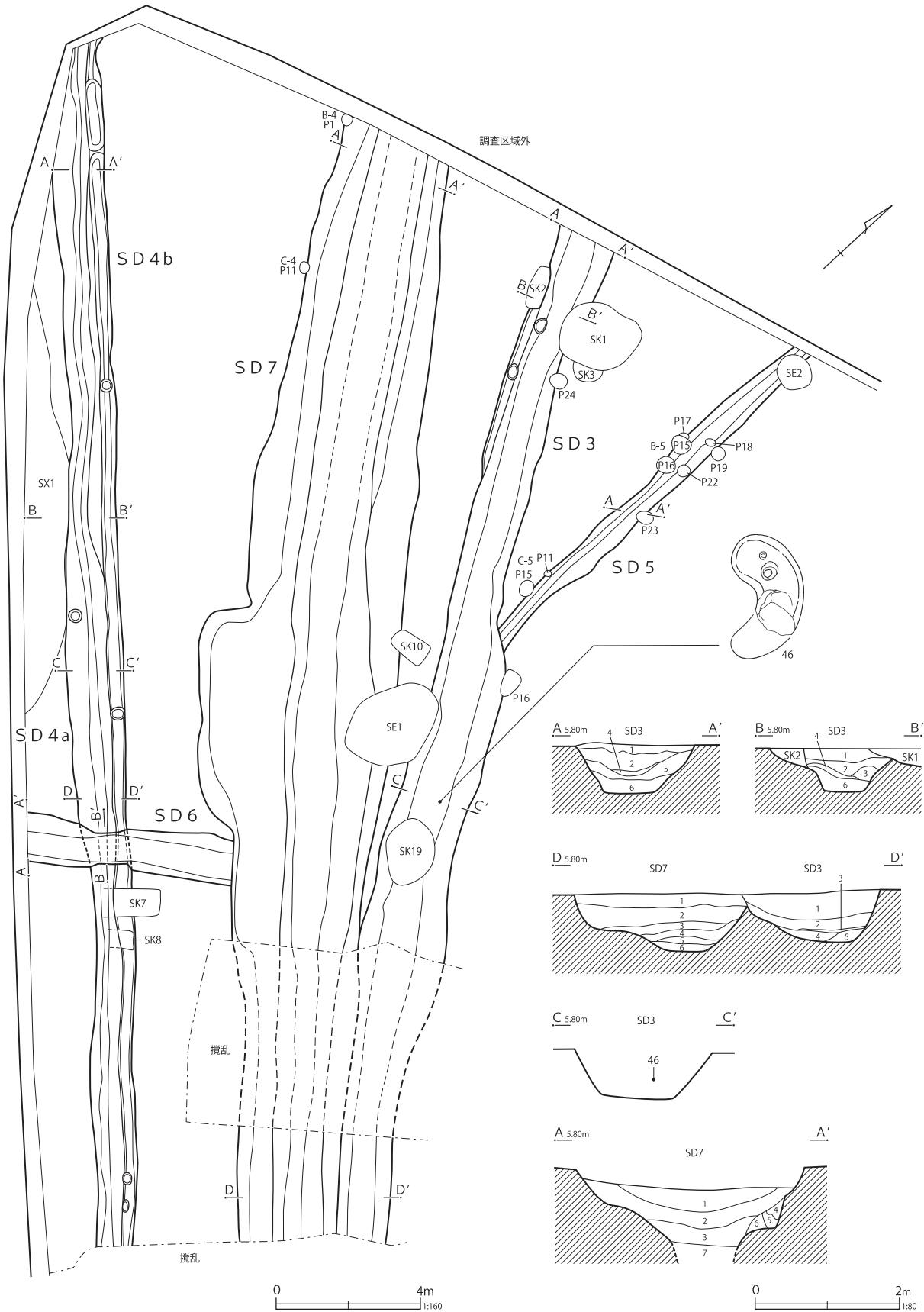
B-5、C・D-5・6グリッドに位置する。南東方向に走行し、南端で第7号溝跡と接する。搅乱により延長線上の詳細は不詳である。土層断面の観察では、第7号溝跡に先行することが確認されている。走行方向はN-34°-Wを指し、規模は検出長27.78m、幅は1.32~2.28m、深さは0.59~0.74mで、断面逆台形を呈する。

遺物は、須恵器や陶磁器、砥石、鐵滓、板碑など比較的多い（第38・39・44・45図）。注目される遺物として、勾玉1点（第38図46）が出土した。

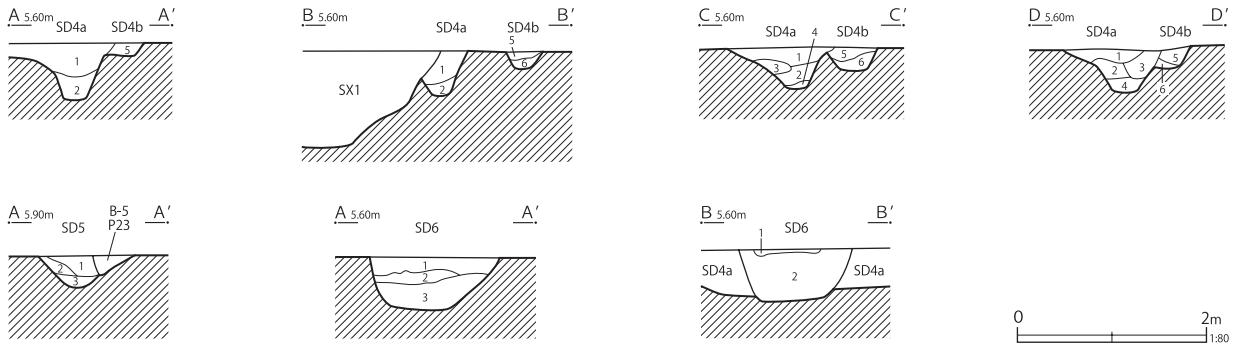
陶磁器の年代幅が大きく16~18世紀のものが主



第34図 溝跡（2）



第35図 溝跡（3）



S D 3 (A-A' B-B')

- 1 にぶい黄褐色土 酸化鉄分多量 黄褐色ブロック微量 しまりやや強 粘性やや弱
- 2 灰黄褐色土 炭化物・黄褐色ブロック少量 しまり・粘性やや強
- 3 暗褐色土 黄褐色ブロック少量 炭化物微量 しまり・粘性やや強
- 4 にぶい黄褐色土 黄褐色ブロック多量 炭化物微量 しまり・粘性やや強
- 5 黄褐色土 黄褐色ブロック少量 しまり・粘性やや強
- 6 暗褐色土 黄褐色ブロックやや多量 しまり・粘性やや強
- 7 黄褐色土 褐灰色土少量 しまり・粘性やや強 地山層か

S D 3 (D-D')

- 1 褐灰色土 砂粒子やや多量 炭化粒子 黄褐色ブロック しまり・粘性ややもつ
- 2 褐灰色土 炭化物・砂粒子 黄褐色ブロック しまり・粘性もつ
- 3 暗褐色土 砂質土 砂多量
- 4 黒灰色土 黒色土に砂粒子を多く含む しまり・粘性もつ
- 5 黒灰色土 黒色土に砂粒子を含む しまり・粘性強

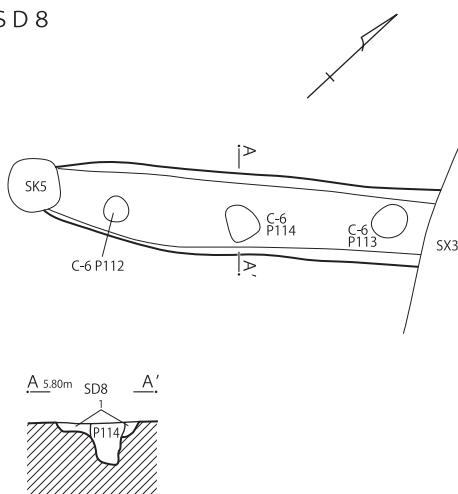
S D 4

- 1 暗褐色土 黄褐色ブロックやや多量 白色粒子微量 しまり・粘性やや弱
- 2 にぶい黄褐色土 黄褐色ブロックやや多量 炭化物・白色粒子微量 しまりやや強 粘性やや弱
- 3 黄褐色土 黄褐色ブロック多量 しまり・粘性ややもつ
- 4 にぶい黄褐色土 黄褐色ブロック多量 しまりもつ 粘性ややもつ
- 5 暗褐色土 黄褐色ブロックやや多量 しまり・粘性やや弱
- 6 黄褐色土 黄褐色ブロック多量 しまり・粘性ややもつ

S D 5

- 1 褐色土 きめやや粗い 黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性ややもつ
- 2 褐色土 きめ粗い 黄褐色粒子・黄褐色ブロック・粘土ブロック しまりやや弱 粘性もつ
- 3 褐色土 きめやや細かい 黄褐色粒子多量 しまり・粘性もつ

S D 8



- S D 8
1 暗褐色土 燃土粒子・炭化粒子・黄褐色粒子 しまりやや弱 粘性弱

S D 6 (A-A')

- 1 暗褐色土 炭化物少量 しまり・粘性やや弱
- 2 灰黄褐色土 炭化物・白色粒子微量 しまり・粘性やや強
- 3 にぶい黄褐色土 炭化物少量 しまりやや強 粘性強

S D 6 (B-B')

- 1 黄褐色土 黄褐色ブロック多量 黒褐色土混在 しまり・粘性もつ
- 2 褐色土 粘性の強い褐色土主体 炭化粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性もつ

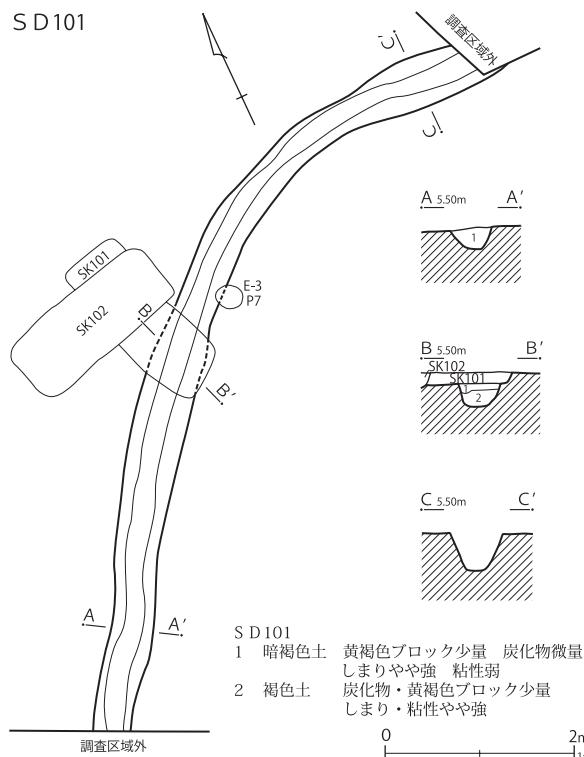
S D 7 (A-A')

- 1 褐色土 炭化粒子・黄褐色粒子 硬くしまる 粘性弱
- 2 褐色土 炭化粒子・黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまりややもつ
- 3 黄褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック多量 しまり・粘性強
- 4 暗褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック 暗褐色土主体 しまりややもつ
- 5 暗褐色土 黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性弱
- 6 黄褐色土 砂質土 砂混じりの黄褐色土 しまりややもつ
- 7 褐色土 黄褐色粒子 黄褐色ブロック しまりややもつ 粘性弱

S D 7 (D-D')

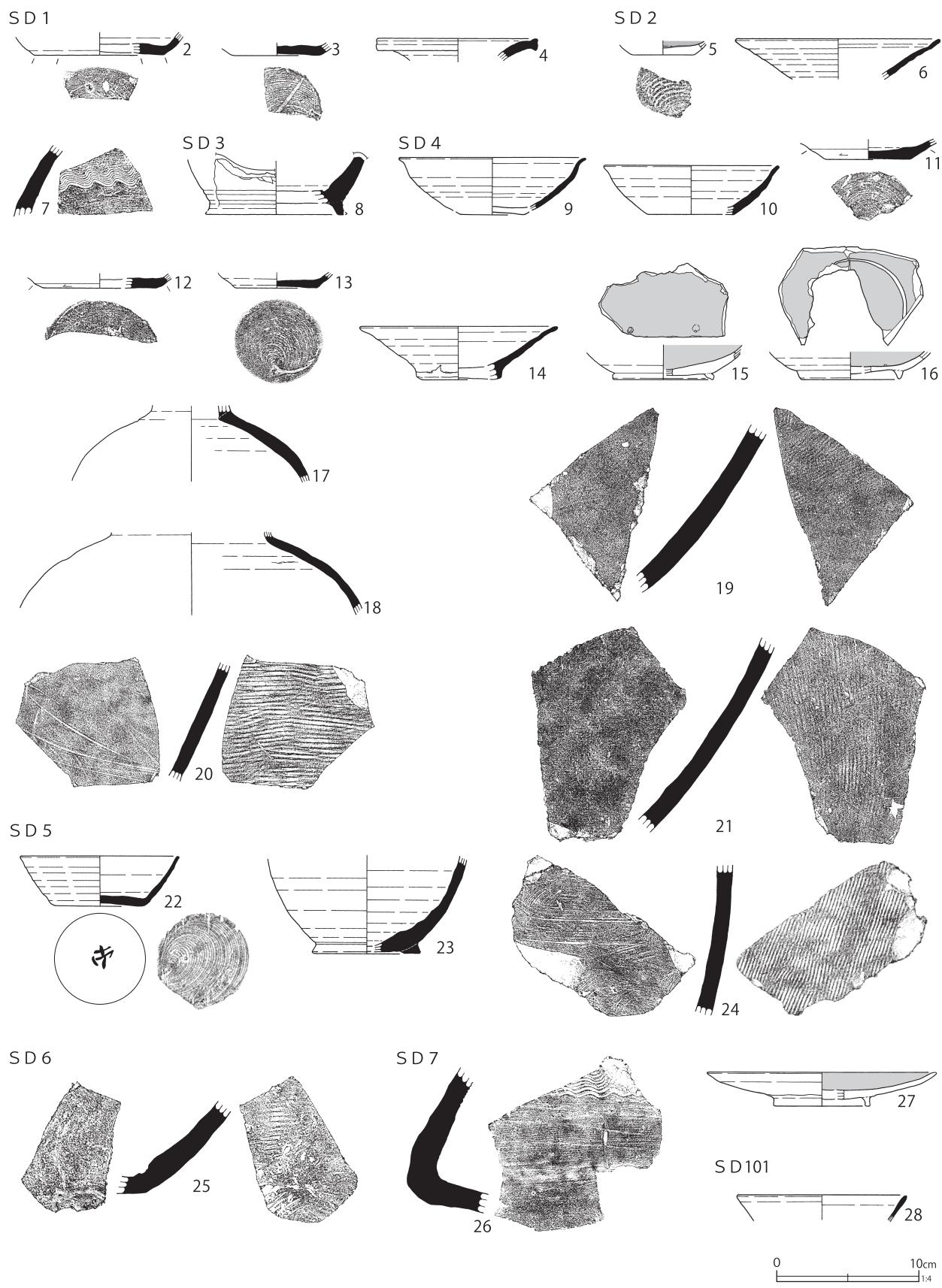
- 1 暗褐色土 燃土粒子・炭化粒子・砂粒子・灰褐色土 しまりややもつ 粘性弱
- 2 暗褐色土 燃土粒子・炭化粒子・砂粒子・灰褐色土 しまり・粘性ややもつ
- 3 黑褐色土 燃土粒子・炭化粒子・砂粒子 しまり・粘性もつ
- 4 灰黄褐色土 炭化粒子・砂粒子・黄褐色粒子 しまり・粘性もつ
- 5 灰黄褐色土 炭化粒子・砂粒子・黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性もつ
- 6 灰黄褐色土 炭化粒子・砂粒子・黄褐色粒子・黄褐色ブロック しまり・粘性もつ

S D 101



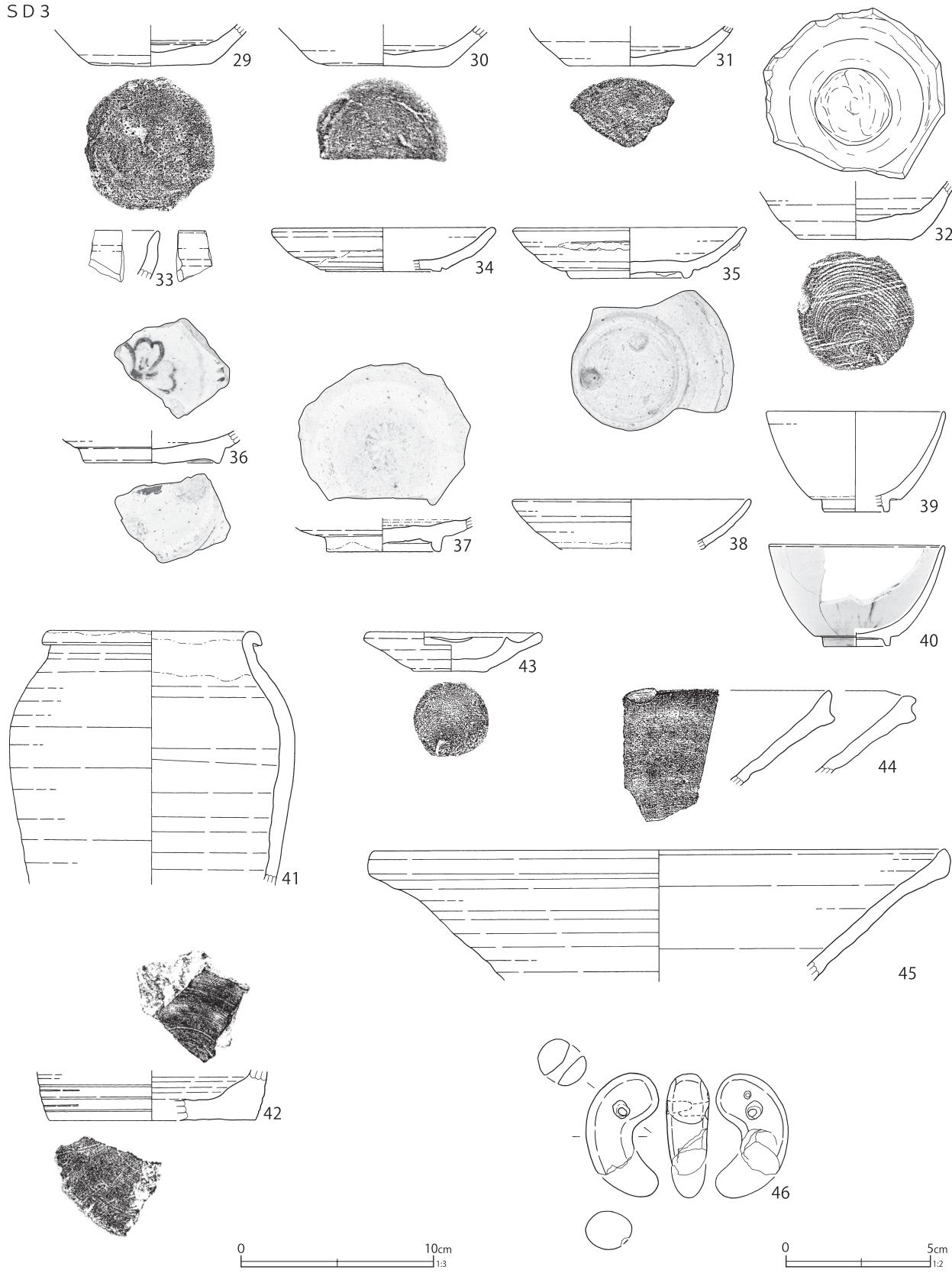
- S D 101
1 暗褐色土 黄褐色ブロック少量 炭化物微量 しまりやや強 粘性弱
2 褐色土 炭化物・黄褐色ブロック少量 しまり・粘性やや強

第36図 溝跡 (4)



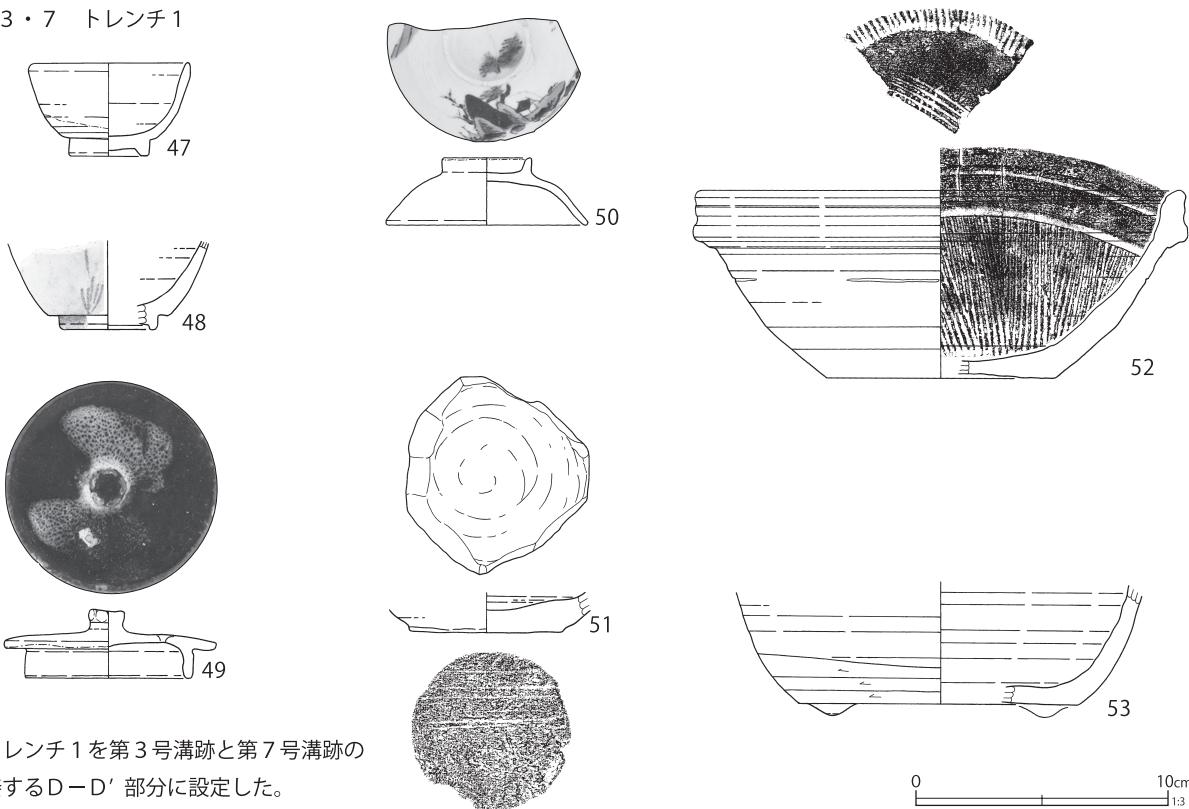
第37図 溝跡出土遺物（2）

SD 3



第38図 溝跡出土遺物（3）

SD 3・7 トレンチ1



※トレンチ1を第3号溝跡と第7号溝跡の接するD-D'部分に設定した。

第39図 溝跡出土遺物（4）

体である。中でも17世紀前葉の陶器皿類にまとまりがみられる。この頃には溝として機能しており、19世紀初めには埋没したものと考えられる。

第4号溝跡（第35・36図）

C-3・4、D-4・5、E-5・6グリッドに位置する。2条の溝が重なり合いながら、北西から南東に向かって直線的に走行する。走行方向はN-50°Wを指す。東側の第4 b号溝跡が先行し、埋没後に西側の第4 a号溝跡が掘削され、第6号溝跡や第1号性格不明遺構などによって壊されている。規模は検出長33.36m、幅は0.22~1.14m、深さは0.15~0.60mである。断面形は第4 a号溝跡は薬研形、第4 b号溝跡は逆台形を呈している。

南東側は搅乱によって削平されているため明確ではないが、薬研堀の第2号溝跡にほぼ直交し、断面形状の類似性から同一の溝跡の可能性が高い。

遺物は須恵器、灰釉陶器（第37図9~21）が主

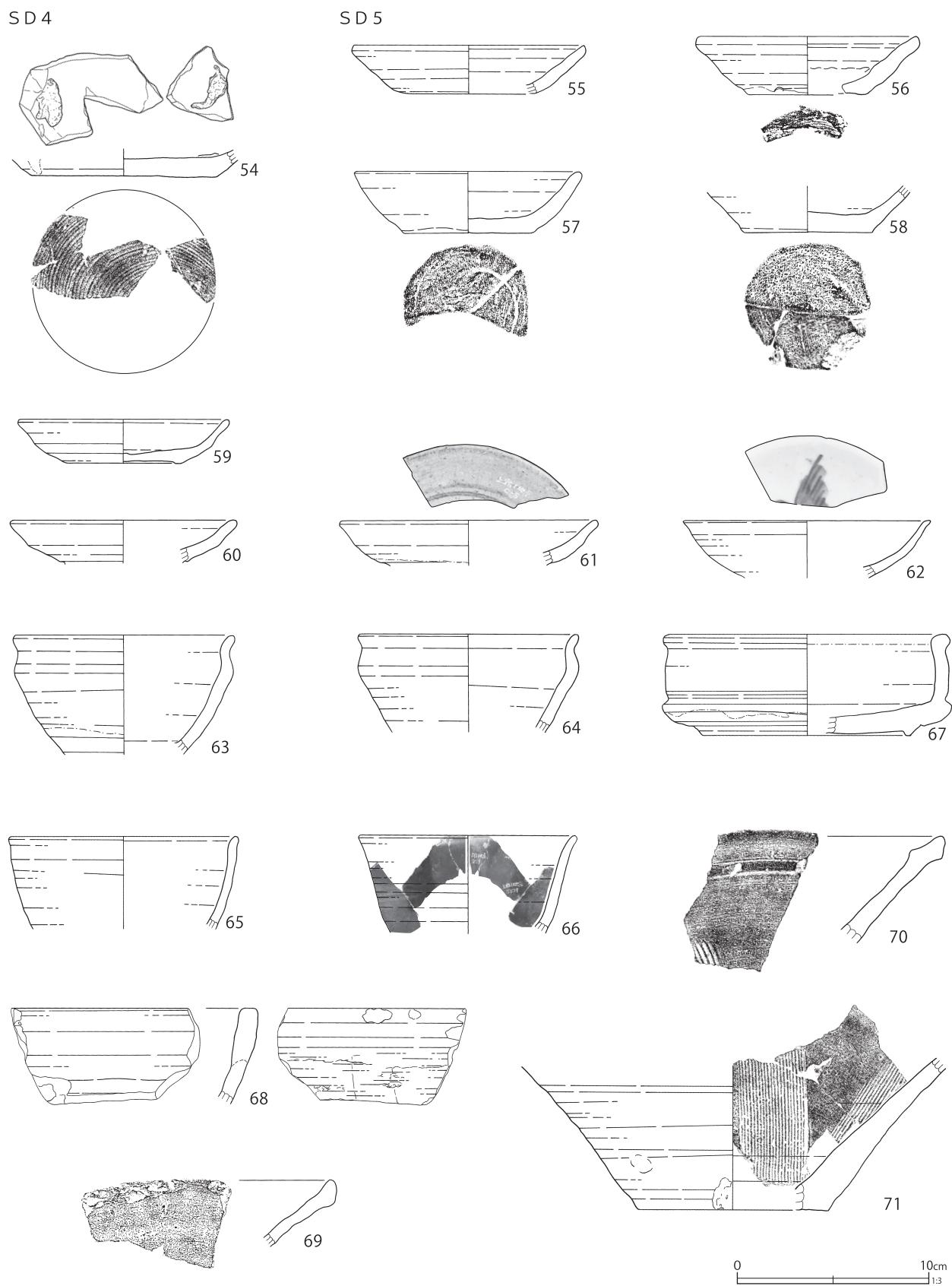
体であるが、古瀬戸の折縁中皿（第40図54）や砥石（第44図93）、板碑片（第45図9）なども出土している。

溝跡の廃絶時期は、古くみても14世紀以降の埋没と考えられる。

第5号溝跡（第35・36図）

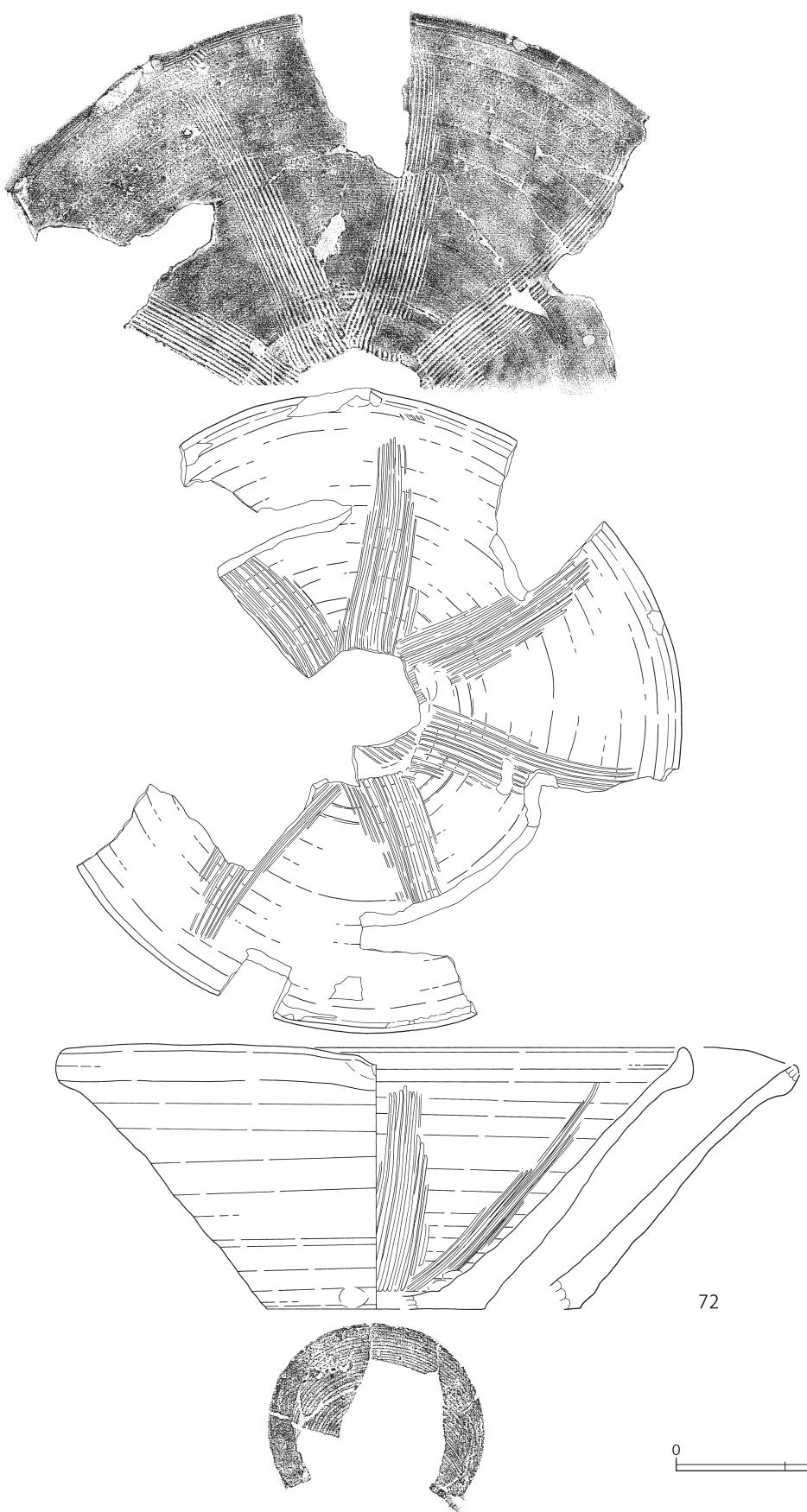
B・C-5グリッドに位置する。第3・7号溝跡とは斜行するように重なる。走行方向はN-2°-Wで、ほぼ南北方向に走行する。規模は検出長11.82m、幅は0.45~0.85mで、深さは0.36mである。断面形は逆台形を呈する。

遺物は、底部外面に「市」と書かれた墨書き器や長頸瓶・甕（第37図22~24）などの須恵器のほか、陶器擂鉢に古瀬戸製品もみられるが、総じて16世紀後半~17世紀前半の陶器類が主体で（第40図55~73）、17世紀後葉には廃絶していると考えられる。このほかに石製品の火打石、石臼、砥石（第44図94~97）、鉄製品の椀形滓、延板状製品、



第40図 溝跡出土遺物（5）

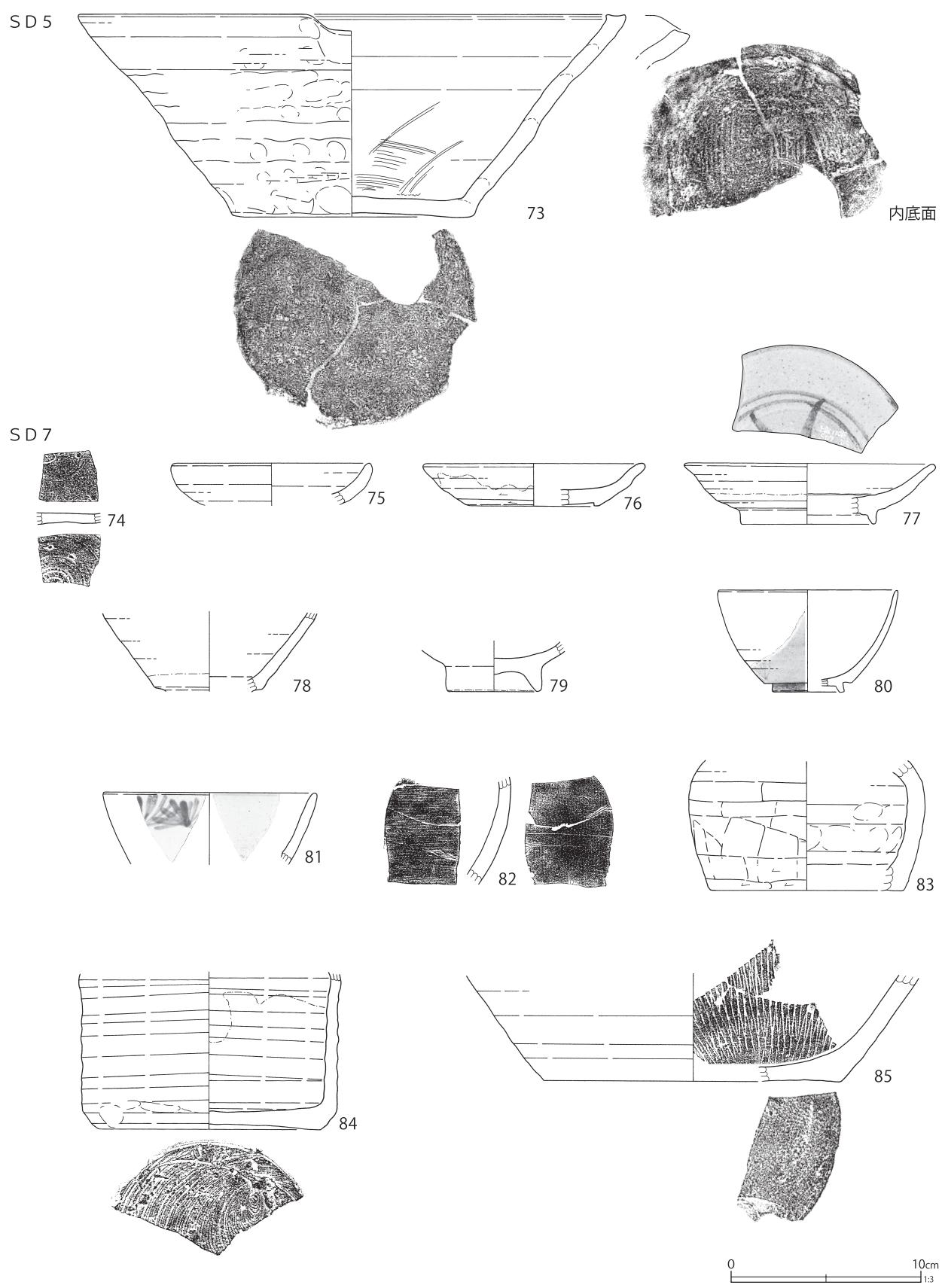
SD 5



72

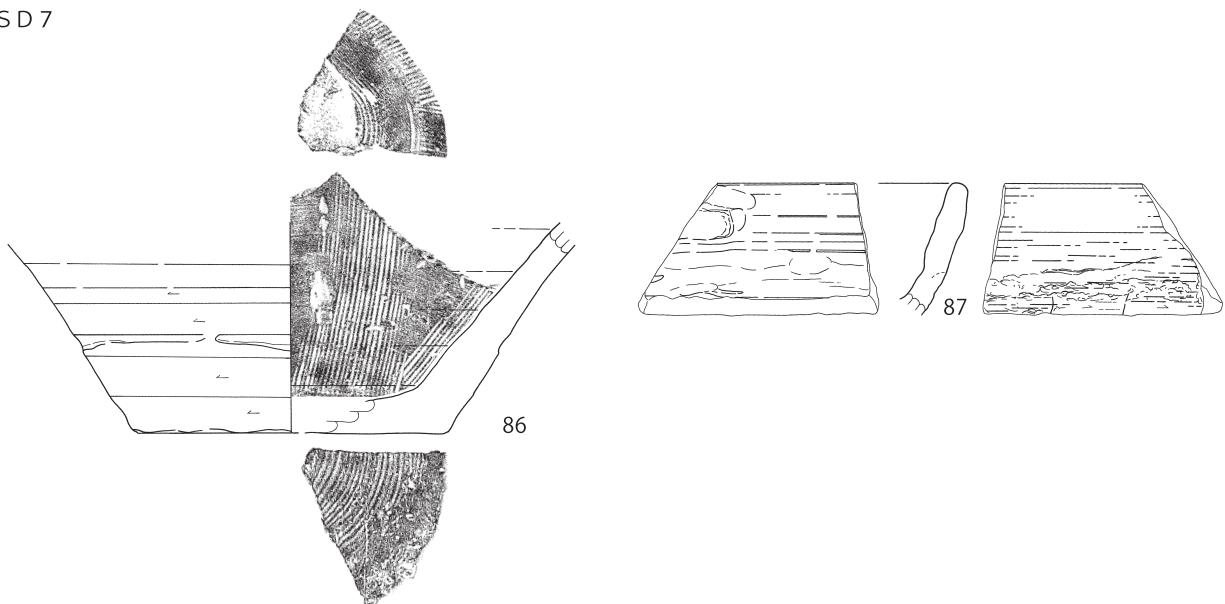
第41図 溝跡出土遺物（6）

0 10cm 1:3

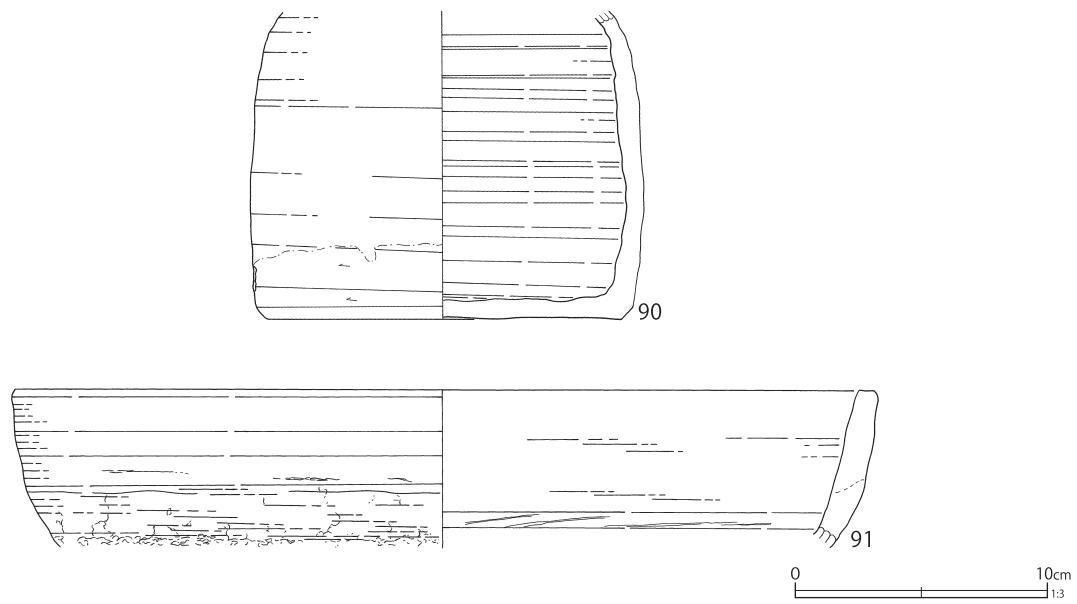


第42図 溝跡出土遺物（7）

SD 7



SD 8



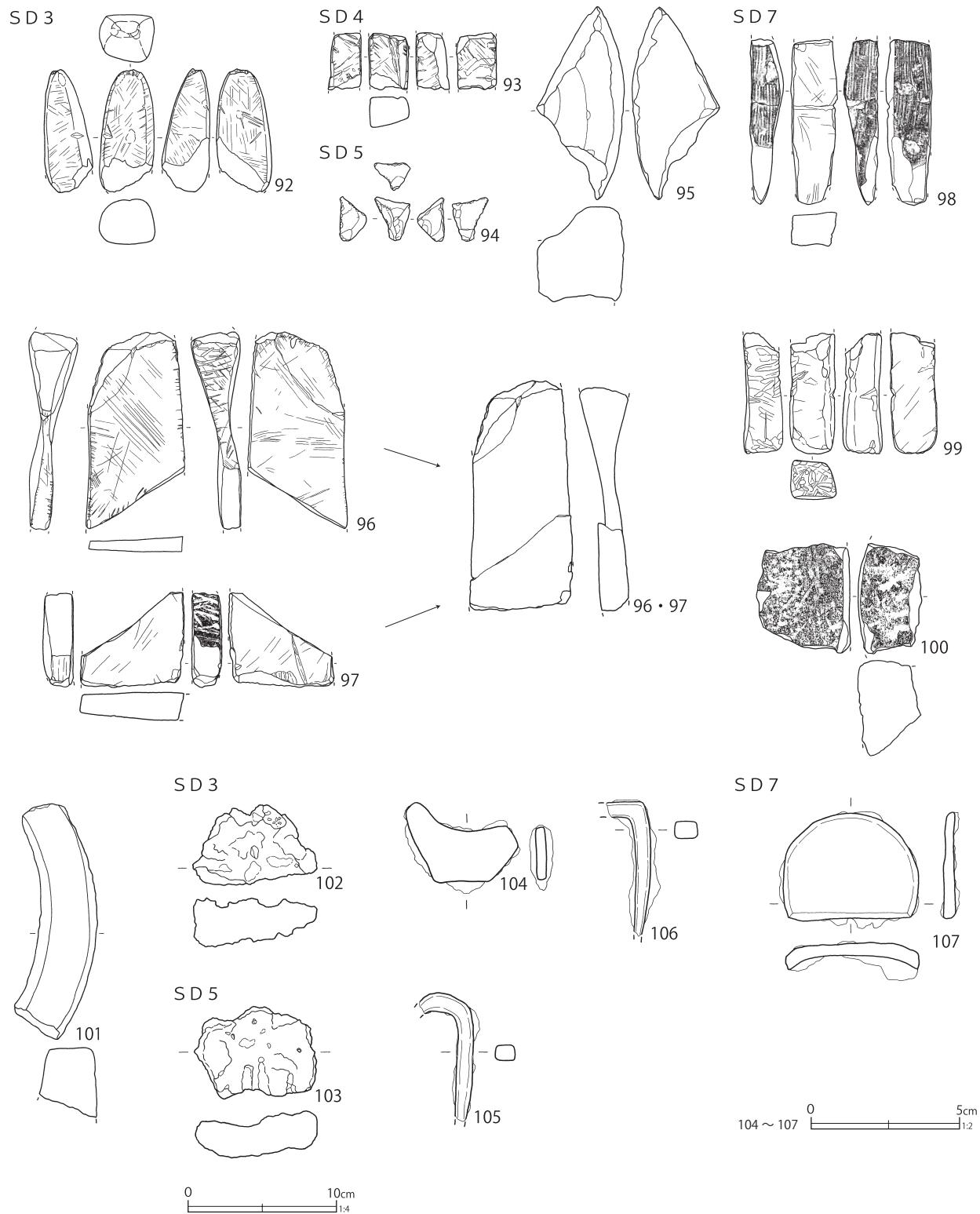
第43図 溝跡出土遺物（8）

鉄釘（第44図103～106）、板碑片（第46図10～14）などが出土している。

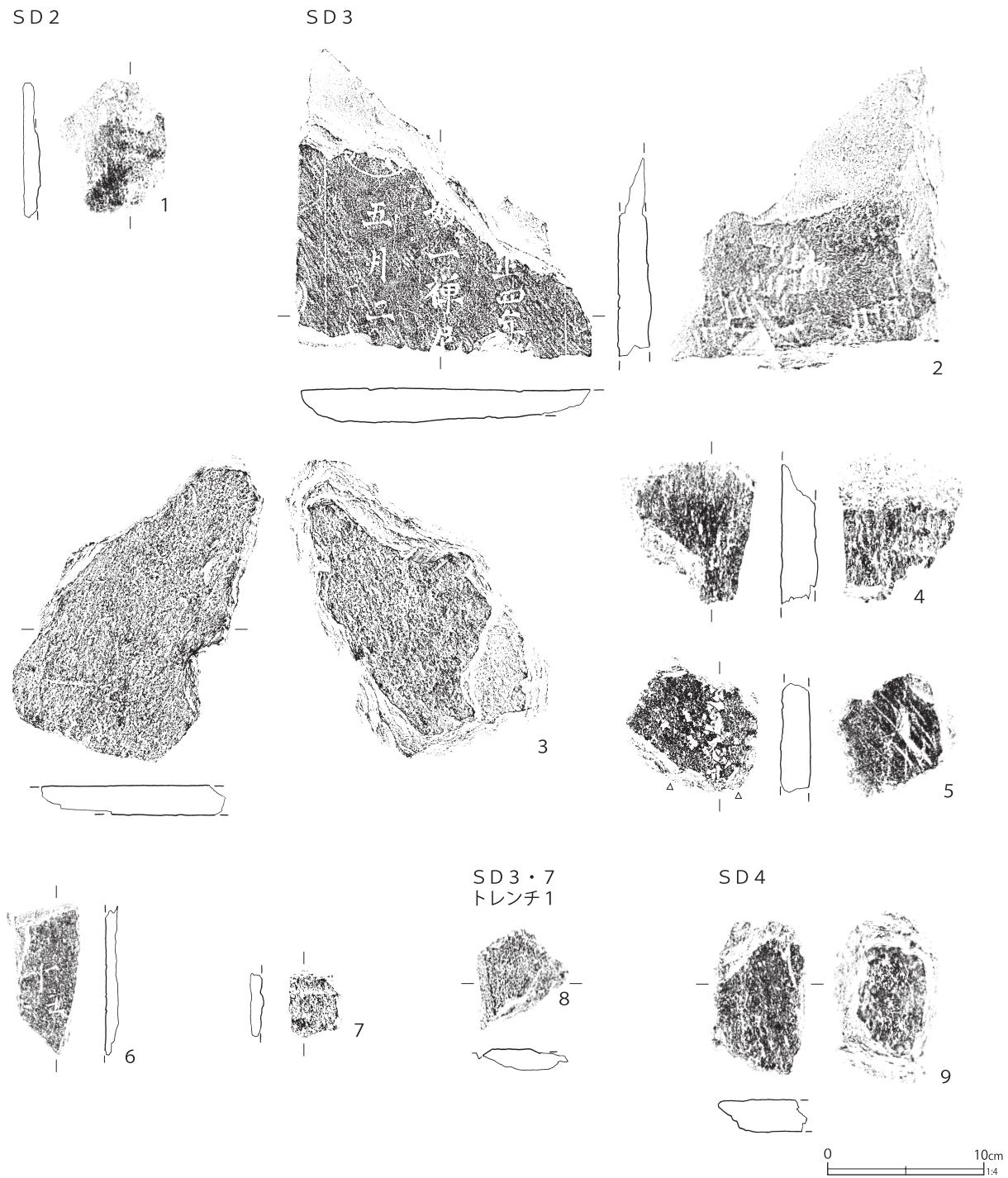
第6号溝跡（第35・36図）

D-5グリッドに位置する。第4号溝跡を壞

し、東側は第7号溝跡によって壞される。南西方向に直線的に延び、走行方向はN-51°-Eを指す。規模は検出長5.94m、幅は1.39m、深さは0.84mで、断面逆台形である。遺物は出土していない。



第44図 溝跡出土遺物（9）



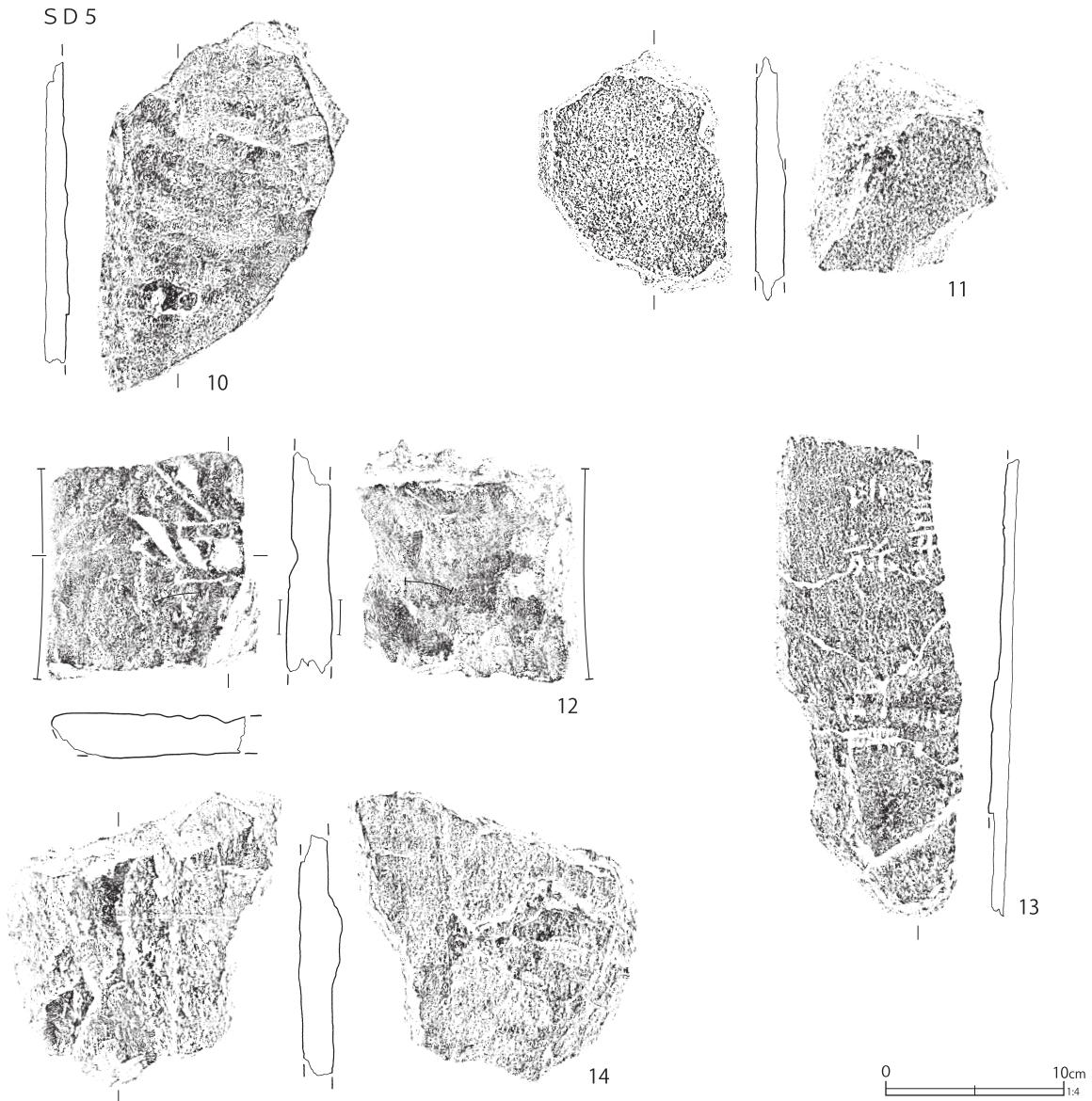
第45図 溝跡出土板碑（1）

第7号溝跡（第35・36図）

B-4、C-4・5、D-5・6、E-6グリッドに位置する。A区の西側を南東方向に延びる溝で、走行方向はN-41°-Wを指す。規模は検出長31.50m、幅は2.82~5.64m、深さは0.82~1.20mで、北半部は湧水のため底面まで完掘でき

なかった。断面形は逆台形を呈し、西壁面に大きく張り出した平坦面を作り出している。

遺物は、須恵器甕や猿投産の灰釉陶器皿（第37図26・27）、13~14世紀の常滑片口小瓶を含むが、17世紀前半~18世紀前半の陶器類（第42・43図74~89）が主体である。このほかに砥石、石臼（第



第46図 溝跡出土板碑（2）

44図99～101)、小鉤状金具(第44図107)なども出土している。土層断面では平行する第3号溝より古いと観察されている。しかし、出土遺物はほぼ同時期で17世紀前葉に主体があり、19世紀初めには廃絶している。出土遺物からみると、2条の溝は同時期に併存していた可能性が高い。

第8号溝跡(第36図)

C-6グリッドに位置する。第3号性格不明遺構と第5号土壙に壊された小規模な溝である。走行方向はN-50°-Eを指す。規模は検出長4.14m、幅は0.48～0.88mで、深さは0.46mである。

遺物は、瀬戸美濃系の陶器徳利と焙烙(第43図90・91)が出土した。出土遺物から17世紀代を中心に機能した溝と考えられる。

第101号溝跡(第36図)

B区の西端、E-3グリッドに位置する。南西方向から北東方向に大きくカーブしながら走行する。第101号土壙と重複し、一部削平される。規模は検出長8.80m、幅は0.36～0.57m、深さは0.23～0.39mである。断面形は逆台形である。

遺物は、須恵器壊(第37図28)が出土していることから、平安時代に帰属するものと判断した。

第8表 溝跡出土遺物観察表(1)(第33・37~43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	播鉢	—	[7.1]	—	DE	5	良好	橙	SD1 堆明石系 内面播目 18~19c	
2	須恵器	壺	—	[1.6]	(9.0)	IJK	10	普通	青灰	SD1 南北企産 底部周辺ヘラケズリ	
3	須恵器	壺	—	[0.9]	(6.0)	IJK	30	良好	青灰	SD1 南北企産 底部糸切痕	
4	須恵器	長頸瓶	(11.0)	[1.5]	—	IK	10	良好	灰	SD1 产地不明	
5	口クロ土師器	壺	—	[1.0]	(4.2)	EHK	15	普通	にぶい黄橙	SD2 C-8 内面黒色処理	
6	須恵器	皿	(14.2)	[2.8]	—	IK	10	良好	灰	SD2 C-8 产地不明	
7	須恵器	甕	—	[5.0]	—	EIJK	5	良好	灰	SD2 南北企産 内外面降灰	
8	須恵器	瓶	—	[4.0]	(9.8)	IJK	40	良好	にぶい赤褐	SD3 南北企産 硬具として転用	
9	須恵器	壺	(13.0)	[3.7]	—	IJK	10	普通	灰白	SD4 E-6 南北企産	
10	須恵器	壺	(12.0)	3.4	(6.0)	IJK	30	良好	灰白	SD4 E-6 南北企産	
11	須恵器	皿	—	[1.4]	(6.0)	IJK	30	良好	灰	SD4 南北企産 底部糸切痕 体部下端ヘラケズリ	
12	須恵器	壺	—	[1.0]	(7.8)	EIJK	40	普通	灰	SD4 D-5 体部下端ヘラケズリ	
13	須恵器	壺	—	[1.1]	(5.6)	IJK	90	普通	灰白	SD4 C-4 南北企産 底部糸切痕	
14	須恵器	皿	(13.6)	3.7	(5.4)	EHIK	30	不良	灰白	SD4 D-5 产地不明	
15	灰釉陶器	碗	—	[2.4]	(7.0)	IK	45	良好	灰白	SD4 C-4 猿投産 K-14号窯 内面施釉・三叉トチ痕	
16	灰釉陶器	碗	—	[1.9]	(6.8)	IK	30	良好	灰白	SD4 E-6 猿投産 K-19号窯 内面施釉・直接重ね焼き痕	
17	須恵器	瓶	—	[5.3]	—	IK	20	良好	灰白	SD4 C-4 外面淡緑色自然釉付着	
18	須恵器	瓶	—	[5.8]	—	IJK	30	良好	黄灰	SD4 D-5 外面黒褐色自然釉付着	
19	須恵器	甕	—	[11.8]	—	IK	5	良好	褐灰	SD4 D-5 外面平行叩き	
20	須恵器	甕	—	[8.3]	—	EIK	5	良好	灰	SD4 D-4 外面平行叩き	
21	須恵器	甕	—	[13.6]	—	DIK	5	良好	灰	SD4 E-6 外面平行叩き	
22	須恵器	壺	(11.0)	3.5	6.4	HIK	60	良好	灰	SD5 C-6 東金子産 底部外面墨書「市」 底部糸切痕	21-6
23	須恵器	瓶	—	[6.9]	(7.4)	EIK	30	良好	灰	SD5 東金子産	
24	須恵器	甕	—	[10.6]	—	EIK	5	良好	灰白	SD5 外面自然釉	
25	須恵器	甕	—	[6.5]	—	IJK	5	良好	灰	SD6 南北企産	
26	須恵器	甕	—	[10.2]	—	GIJK	5	良好	灰	SD7 南北企産 頸部推定径40cm	
27	灰釉陶器	皿	(16.2)	2.4	(6.8)	IK	20	良好	灰白	SD7-1-2 猿投産 角高台に近い	
28	須恵器	壺	(11.8)	[1.8]	—	GIJ	10	良好	灰	SD101 南北企産	
29	かわらけ	小皿	—	[2.1]	6.4	CHI	40	普通	にぶい橙	SD3 B-5 全体磨耗 胎土粉質	22-7
30	かわらけ	小皿	—	[2.1]	6.3	EHI	35	普通	橙	SD3 B-5 全体磨耗 胎土粉質	
31	かわらけ	小皿	—	[2.1]	(6.6)	EH	20	普通	橙	SD3 B-5 全体磨耗 胎土粉質	
32	かわらけ	小皿	—	[3.0]	6.0	IJ	50	良好	橙	SD3 C-5 底部糸切痕(右)	22-8
33	陶器	天目茶碗	—	[2.6]	—	H	5	普通	灰白	SD3 古瀬戸 内外面鉄釉 後II期	
34	陶器	皿	(11.4)	2.2	(2.9)	DI	10	普通	灰白	SD3 C-5 瀬戸美濃系 内外面長石釉	
35	陶器	皿	(11.7)	2.6	6.0	EK	55	普通	にぶい黄橙	SD3 瀬戸美濃系 内外面長石釉 高台内 目跡 体部外面上位重焼痕 17c前	22-9
36	陶器	皿	—	[1.6]	(6.8)	IK	15	普通	にぶい橙	SD3-1-3 瀬戸美濃系 内外面長石釉 内底面鉄絵 高台内目跡2遺存 17c初	22-10
37	陶器	皿	—	[1.7]	5.8	HIK	30	普通	灰白	SD3 C-5 瀬戸美濃系 内外面長石釉 内 底面蛇の目状釉剥・印花(菊花文) 17c前 -中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
38	陶器	皿	(12.1)	[2.5]	—	K	20	普通	灰白	SD3 肥前系 内面銅緑釉 外面透明釉 17c後-18c初	
39	陶器	碗	(9.2)	5.2	(3.3)	H	20	良好	灰白	SD3 京都信楽系 内外面透明釉 18c後-19c前	
40	陶器	碗	9.0	5.2	3.4	I	75	良好	灰白	SD3・7-トレンチ4 京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵 18c後-19c前	22-11
41	陶器	有耳壺	10.5	[13.0]	—	DEK	20	普通	明褐灰	SD3 濬戸美濃系 内面上位～外面鉄釉・ 口縁部釉ふきとり 17c後～18c	22-12
42	陶器	瓶類	—	[2.6]	(10.7)	I	5	普通	灰白	SD3 C-5 外面鉄化粧	
43	施釉土器	灯明皿	8.9	2.0	3.8	I	100	普通	橙	SD3 江戸在地系 底部糸切痕(左) 内外 面透明釉 口縁部わずかにスス付着	22-13
44	陶器	擂鉢	—	[4.9]	—	DEK	5	普通	明褐灰	SD3 C-5 濬戸美濃系 内外面錆釉 内面 擂目 大窯第1段階	
45	陶器	擂鉢	(29.7)	[6.8]	—	DGI	15	普通	浅黄橙	SD3-トレンチ3 古瀬戸 内外面錆釉 内面擂 目 後IV新期	
46	石製品	勾玉	長さ[3.5] 幅1.6～1.8 厚さ1.3～1.4 重さ17.8 石英質(大理石)			—	—	—	—	SD3 No.1 復元長4.3cm 節理面で破損 両面穿孔 金属製工具使用 孔大きくズ レる 未貫通孔あり 色調乳白色	26-1
47	陶器	壺	(6.1)	3.7	3.1	K	60	良好	灰白	SD3・7-トレンチ1 濬戸美濃系 内外面灰釉 18c後	22-14
48	陶器	碗	—	[3.5]	(3.7)	H	10	良好	浅黄橙	SD3・7-トレンチ1 京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵 18c後-19c前	
49	陶器	蓋	6.3	2.7	—	H	100	普通	灰白	SD3・7-トレンチ1 上面鉄釉・ウノフ釉流掛け ・二次穿孔 土瓶蓋 19c前-中 最大 径8.4cm つまみ径1.3cm	23-1
50	磁器	蓋	(7.9)	2.6	—	—	50	良好	白	SD3・7-トレンチ1 肥前系 内外面施釉 外面 染付 19c初 端反碗蓋 つまみ径3.4cm	23-2
51	かわらけ	小皿	—	[1.6]	6.0	HJK	20	普通	橙	SD3・7-トレンチ1 底部板目状压痕 胎土粉質 全体磨耗	
52	陶器	擂鉢	(19.0)	7.4	(9.2)	EI	25	良好	明黄褐	SD3・7-トレンチ1 堆明石系 砂目底 内面擂 目 小型 18c後	23-3
53	土師質土器	火鉢	—	[5.3]	(11.0)	AHI	20	普通	橙	SD3・7-トレンチ1 江戸在地系 底部ナデ・脚 1遺存 内面黒色物質(タール状)顕著に付 着	
54	陶器	折縁中皿	—	[1.4]	(9.6)	DE	10	良好	灰白	SD4 D-4 SX1-トレンチ1 古瀬戸 底部糸切痕 内外面灰釉 内底面目跡 中期様式	23-4
55	かわらけ	小皿	(12.0)	2.5	(6.8)	EH	15	普通	灰白	SD5 白色味強い 胎土粉質	23-5
56	かわらけ	小皿	(11.2)	3.0	(6.2)	EH	20	普通	にぶい黄橙	SD5 底部糸切痕 胎土粉質	23-6
57	かわらけ	小皿	(11.7)	3.2	(6.6)	CEH	40	普通	にぶい橙	SD5 底部糸切痕 全体磨耗 胎土粉質	23-7
58	かわらけ	小皿	—	[2.4]	6.7	ACH	30	普通	橙	SD5 全体磨耗 胎土粉質	23-8
59	陶器	稜皿	(10.9)	2.2	(5.9)	HK	25	普通	浅黄橙	SD5 濬戸美濃系 内外面鉄釉・高台内ふ きとり 大窯第4段階	23-9
60	陶器	皿	(11.4)	[2.2]	—	DE	10	普通	灰白	SD5 濬戸美濃系 内外面長石釉 17c前- 中	
61	陶器	皿	(13.1)	[2.3]	—	IK	15	良好	褐灰	SD5 C-5 濬戸美濃系 内外面長石釉 内 面鉄絵 17c前-中	
62	磁器	皿	(12.5)	[2.9]	—	—	15	普通	白	SD5 肥前系 内外面施釉 内面染付 初 期伊万里様式 17c中	
63	陶器	天目茶碗	(11.4)	[6.2]	—	IK	15	良好	灰白	SD5 濬戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第4 段階後半～末 64と同一個体か	
64	陶器	天目茶碗	(11.4)	[6.1]	—	I	35	良好	灰白	SD5 濬戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第4 段階後半～末 63と同一個体か	23-10
65	陶器	碗	(12.0)	[4.8]	—	DIK	15	良好	灰白	SD5 濬戸美濃系 内外面鉄釉 17c	23-11

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
66	陶器	碗	(11.1)	[5.0]	—	K	20	良好	灰白	SD5 SK19 C-5 濑戸美濃系 内外面鉄釉 17c前-中	
67	陶器	香炉	(14.5)	5.2	(10.7)	IK	30	普通	灰白	SD5 濑戸美濃系 口縁部～外面鉄釉	23-12
68	瓦質土器	焙烙	—	[5.0]	—	CFHI	5	普通	灰黄	SD5 やや酸化焙成 弱く燻す 外面スス付着	
69	陶器	擂鉢	—	[3.4]	—	IK	5	普通	黄橙	SD5 古瀬戸 内外面鉄釉 後IV新期	
70	陶器	擂鉢	—	[5.5]	—	DE	5	普通	灰白	SD5 濑戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目 大窯第4段階	
71	陶器	擂鉢	—	[8.0]	(10.0)	DEGHI	15	普通	浅黄橙	SD5 濑戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目	
72	陶器	擂鉢	28.5	12.1	10.0	HI	70	普通	にぶい黄橙	SD3 SD5 SK6 SE4上層 C-5・6 古瀬戸 内 外面鉄釉 底部糸切痕(右) 内面擂目 後IV新期	23-13
73	瓦質土器	擂鉢	(28.8)	10.6	12.6	CFHI	35	普通	浅黄橙	SD5 底部ナデ調整 内面擂目(磨耗激し い) 弱く燻す	
74	陶器	皿	—	[0.5]	—	IK	5	良好	灰	SD7-レンチ4 初山系 内外面鉄釉 16c後	23-14
75	かわらけ	小皿	(10.3)	[2.2]	—	CHIK	10	普通	浅黄橙	SD7 D-5 胎土砂質	
76	陶器	皿	(11.3)	2.2	(6.6)	IK	30	普通	灰白	SD7-レンチ2 濑戸美濃系 内面～外面上位 長石釉 17c前-中	
77	陶器	皿	(12.9)	3.2	(6.9)	IK	20	良好	灰白	SD7 D-5 濑戸美濃系 内外面灰釉 内面 鉄絵・重焼痕 17c前-中	24-1
78	陶器	天目茶碗	—	[4.2]	—	DK	15	良好	浅黄	SD7 濑戸美濃系 内外面鉄釉 大窯期	
79	陶器	碗	—	[2.6]	(4.8)	H	15	普通	浅黄橙	SD7-レンチ2 肥前系 内外面灰釉 17c中- 後	
80	陶器	碗	(9.2)	5.3	(3.8)	K	15	普通	灰白	SD7 D-5 京都信楽系 内外面透明釉 外 面鉄絵 18c後-19c前	
81	陶器	碗	(11.2)	[3.7]	—	IK	5	普通	灰白	SD7-レンチ4 濑戸美濃系 内外面施釉・吳 須絵 太白手 18c末	
82	陶器	徳利	—	[5.7]	—	—	5	良好	灰	SD7 D-5 備前系 外面塗土 近世	
83	陶器	片口小瓶	—	[6.8]	(10.2)	DEIK	15	良好	灰黄褐	SD7 常滑 13-14c	
84	陶器	壺	—	[8.3]	(11.6)	DEGH	20	普通	灰白	SD7-レンチ4 SX4(SE16) 濑戸美濃系 底 部糸切痕(右) 内面上位～外面鉄釉 17c 前 有耳壺か	24-2
85	陶器	擂鉢	—	[5.6]	(15.6)	DE	5	良好	橙	SD7 D-5 堆明石系 内面擂目 18c前-中	
86	陶器	擂鉢	—	[8.3]	(12.5)	H	20	普通	灰白	SD7 D-5 濑戸美濃系 底部糸切痕 内外 面鉄釉 内面擂目 大窯期	
87	瓦質土器	焙烙	—	[5.2]	—	CI	5	普通	黄灰	SD7 D-5 内耳部剥離 燻す 外面スス付 着	
88	瓦質土器	焙烙	(37.3)	5.7	(33.3)	CI	10	普通	灰白	SD7 D-5 底部シワ状痕 燻す	
89	瓦質土器	焙烙	(33.8)	5.4	(30.8)	CEH	35	普通	黒褐	SD7-レンチ4 砂目底をナデ調整か 内耳部 は接点なし 別破片から図上復元 16c後	
90	陶器	徳利	—	[12.2]	14.4	IK	35	普通	灰白	SD8 SD7 C-7P8 C-6 濑戸美濃系 外面柿 釉・底部ふきとり 外底面目跡・砂付着	24-3
91	瓦質土器	焙烙	(34.2)	[6.2]	—	CHI	10	普通	にぶい黄橙	SD8 SD7 燻す 外面スス付着 17c前	

第9表 溝跡出土遺物観察表（2）（第44図）

番号	種別	器種	法量（単位：cm/g）	遺構	備考	図版
92	石製品	砥石	長さ[8.3]幅3.7厚さ3.2重さ117.4 流紋岩	SD3	欠損 被熱により表面劣化 砥面4	
93	石製品	砥石	長さ[3.8]幅2.7厚さ2.2重さ31.0 流紋岩(緑色)	SD4	表裏側縁部刃物痕 砥面4	
94	石製品	火打石	長さ2.9 幅2.4 厚さ1.8 重さ8.1 チャート	SD5		
95	石製品	石臼	長さ[13.0] 幅[5.9] 厚さ[10.0] 重さ543.2 砂岩	SD5	上臼 推定径20cm	

番号	種別	器種	法量(単位:cm/g)	遺構	備考	図版
96	石製品	砥石	長さ[13.3] 幅[6.7] 厚さ3.3 重さ203.4 ホルンフェルス	SD5	97と接合 刃物痕側縁部顕著 砥面4	
97	石製品	砥石	長さ[6.4] 幅7.1 厚さ2.0 重104.3 ホルンフェルス	SD5	96と接合 砥面4	
96・97	石製品	砥石	長さ[15.5] 幅[6.9] 厚さ3.3 重307.7	SD5	破損後の使用痕跡顕著 接合部に研ぎ減りによる段差がみられる	
98	石製品	砥石	長さ[11.2] 幅3.1 厚さ2.3 重93.4 流紋岩(緑色)	SD7	トレンチ2 上端部欠損 平面長方形 断面長方形 櫛歯状工具痕 砥面1	
99	石製品	砥石	長さ[8.1] 幅[3.1] 厚さ2.6 重95.1 流紋岩	SD7	トレンチ2 上端部欠損 平面長方形 刃物痕 被熱により黒色化 砥面4	
100	石製品	石臼	長さ[7.4] 幅[4.3] 厚さ[6.4] 重251.8 砂岩	SD7	下臼 推定径24cm 上面に目の一部 側面工具によるツキ痕跡	
101	石製品	石臼	長さ[15.9] 幅[5.6] 厚さ[4.8] 重404.1 砂岩	SD7	上臼 推定径28cm 内面櫛歯状工具痕	
102	鉄製品	楕円錐	縦5.4 横8.3 厚さ3.3 重さ166.2	SD3	磁着あり	
103	鉄製品	楕円錐	縦6.2 横8.2 厚さ3.1 重さ197.9	SD5	磁着あり	
104	鉄製品	延板品	縦2.8 横3.7 厚さ0.3 重さ5.5	SD5	不整形 刃部なし	
105	鉄製品	釘	縦[4.3] 横[1.8] 厚さ0.5 重さ4.8	SD5	逆U字状に折り曲げる	
106	鉄製品	釘	縦[4.5] 横[1.5] 厚さ0.8 重さ8.4	SD5	逆L字状に折り曲げる	
107	鉄製品	小鉤状金具	縦3.7 横4.7 厚さ0.5 重さ27.5	SD7	D-5 外縁部緩やかな曲線を描く	

第10表 溝跡出土板碑観察表（第45・46図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	板碑	[9.2]	[7.2]	[1.0]	97.8	緑泥片岩	SD2	表面剥離 背面押し削り痕(幅0.8cm)	
2	石製品	板碑	[19.5]	[18.7]	2.2	980.1	緑泥片岩	SD3	SD3 B-5 脇侍月輪 銘文「圓正四年关[/妙一禪尼/五月二口」(1463) 枠線側縁打ち割り成形 背面押し削り痕(幅1.1cm) 黄鉄鉱含む	27-7
3	石製品	加工石材	[19.7]	[15.7]	1.9	691.8	緑泥片岩	SD3	板碑の台石か 二次加工痕あり 被熱	27-8
4	石製品	板碑	[9.2]	[8.5]	2.2	227.0	緑泥片岩	SD3	SD3 C-5 表面痕跡無し 背面押し削り痕(幅0.9 ~ 1.0cm) 黄鉄鉱含む	
5	石製品	板碑	[8.5]	[8.2]	1.9	206.5	緑泥片岩	SD3	側縁一部ケズリ 梵字光明真言 ケガキ線 背面二次使用 弱く被熱	27-9
6	石製品	板碑	[9.6]	[4.7]	[0.8]	57.1	緑泥片岩	SD3	SD3 C-5 背面剥離 銘文「]十壬口[」 被熱	27-10
7	石製品	板碑	[4.2]	[3.5]	[0.8]	18.7	緑泥片岩	SD3	SD3 B-5 背面押し削り痕か	
8	石製品	板碑	[6.6]	[5.7]	[1.3]	49.6	緑泥片岩	SD3・7	SD3・7-トレンチ1 種子の一部 背面全面剥離	
9	石製品	板碑	[10.0]	[6.1]	2.0	191.3	緑泥片岩	SD4	表面月輪の一部か 側縁打ち割り成形 長石目立つ	
10	石製品	板碑	[20.7]	[13.9]	[1.3]	503.1	緑泥片岩	SD5	表面全面剥離 側縁打ち割り成形 背面押し削り痕(幅1.1cm) 磁鉄鉱含む 長石目立つ 13の裏面の可能性大	
11	石製品	板碑	[13.8]	[11.0]	1.6	358.0	緑泥片岩	SD5	側縁ケズリ	
12	石製品	板碑	[13.4]	[12.4]	2.5	760.4	緑泥片岩	SD5	種子(キリーク・異体字) 蓮座 側縁ケズリ 背面押し削り痕(幅1.1cm) 表裏面・側縁二次使用(研磨) 被熱 14c中後	28-1
13	石製品	板碑	[27.0]	[10.2]	[1.0]	403.1	緑泥片岩	SD5	背面全面剥離 銘文「]口三年/口弥」 長石多い 10の表面の可能性大	28-2
14	石製品	板碑	[16.6]	[15.2]	2.4	685.6	緑泥片岩	SD5	基部破片 表裏面ともに押し削り痕 表面工具による二次加工痕(工具痕状) 一部被熱・赤化 長石目立つ	

5 性格不明遺構

性格不明遺構は、A区から合計4基が検出された。ここで性格不明遺構としたものは、調査区の制約や湧水のため、底面まで完掘することのできなかった、井戸跡を除く比較的規模の大きな遺構が該当する。いわゆる地下式土壙を想定しているものの、個々の遺構の性格を確定するには至らなかつた。

第1号性格不明遺構（第47図）

C-4、D-4・5グリッドに位置する。西側の大半が調査区域外にかかり、東側に第4号溝跡が近接する。長軸方位はN-46°-Wを指し、規模は長軸12.00m、短軸1.47m以上、深さは1.03mで、底面は中央部に向かって擂鉢状に深くなっている。

遺物は須恵器甕（第50図1）のほか、海鼠釉状に発色した釉を掛けた、上部に窓をもつ火鉢類や丹波系の擂鉢の破片が出土した（第51図8・9）。

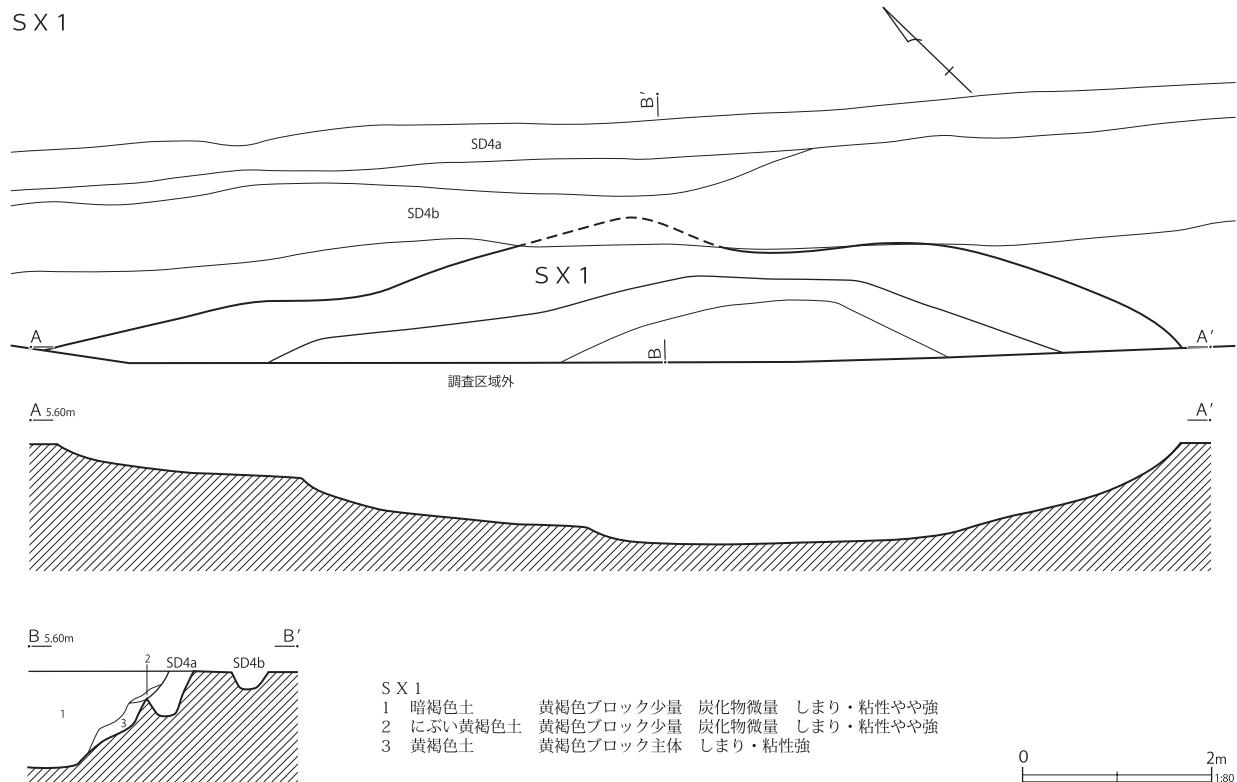
出土遺物から18世紀以降の埋没と考えられる。

遺構の性格は調査区の制約により不明である。

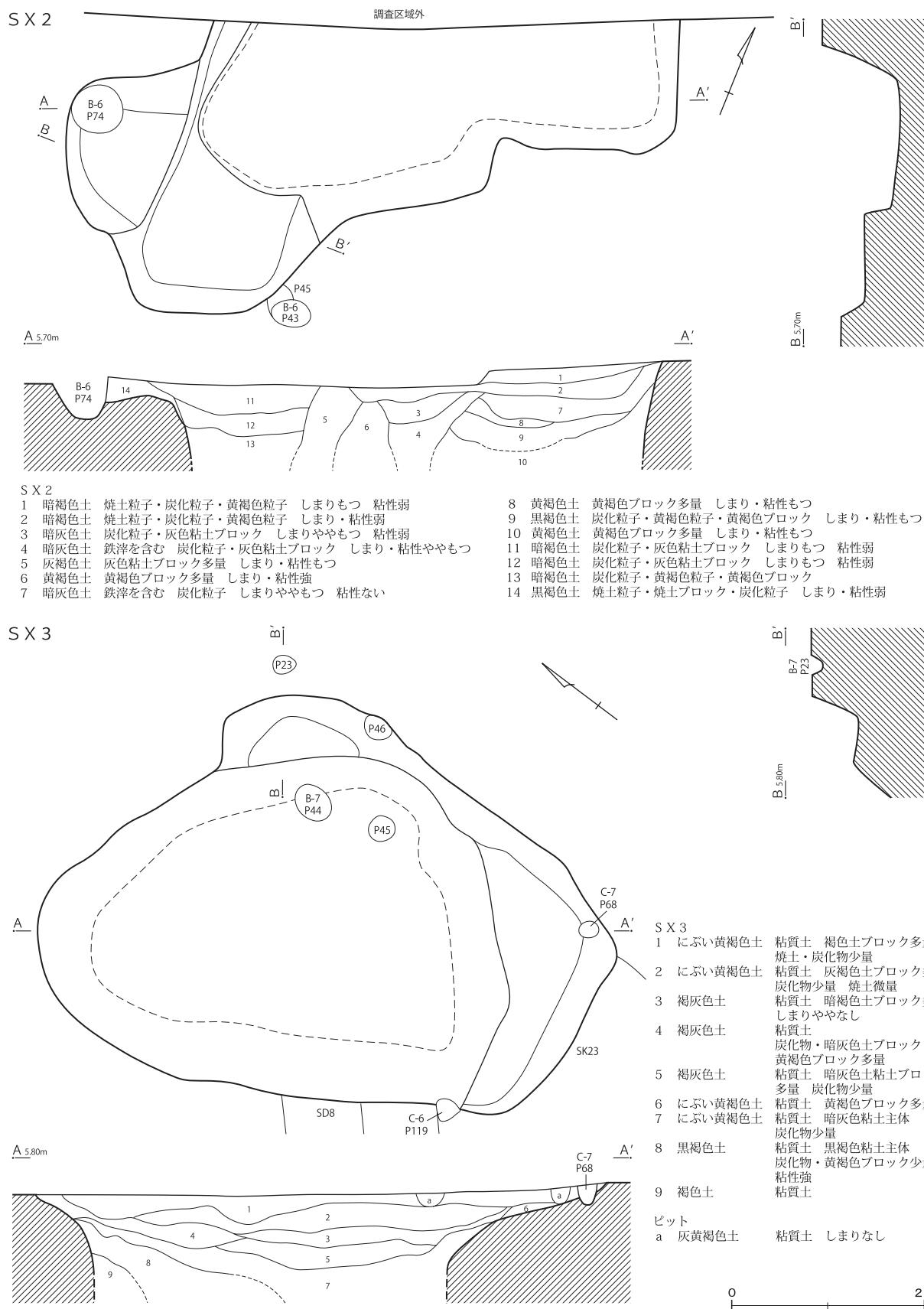
第2号性格不明遺構（第48図）

B-6グリッドに位置する。北側が調査区域外にかかるため、全容は不明である。平面形は不整形で、南側にステップ状の出入口部を付設した地下式壙とも考えられるが、調整区の制約もあり、判断できなかつた。長軸方位はN-64°-Eを指し、規模は長軸6.34m、短軸2.93m以上で、深さは1.15m以上である。土層断面の観察では、数回にわたる掘り直しと、人為的な埋め戻しが想定されるものの、明確に判断し得なかつた。

遺物は須恵器甕や破損面を砥具として再利用した須恵器甕（第50図2・3）のほか、かわらけ小皿、陶器碗や羽口、鉄塊、鍛治滓、椀形滓などの鍛冶関連遺物（第51図10～17）、板碑片（第52図1）など多種多様な遺物が出土している。



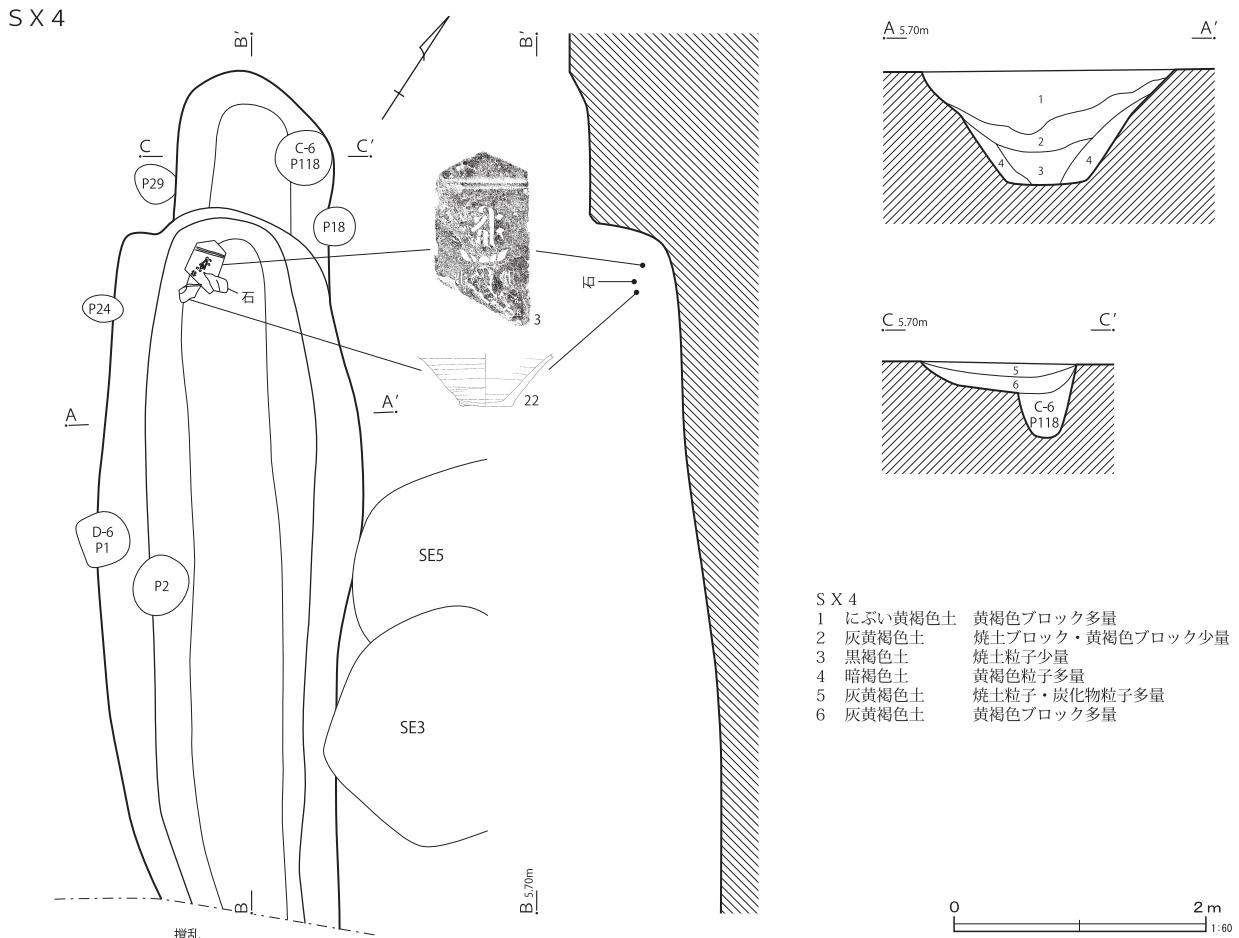
第47図 性格不明遺構（1）



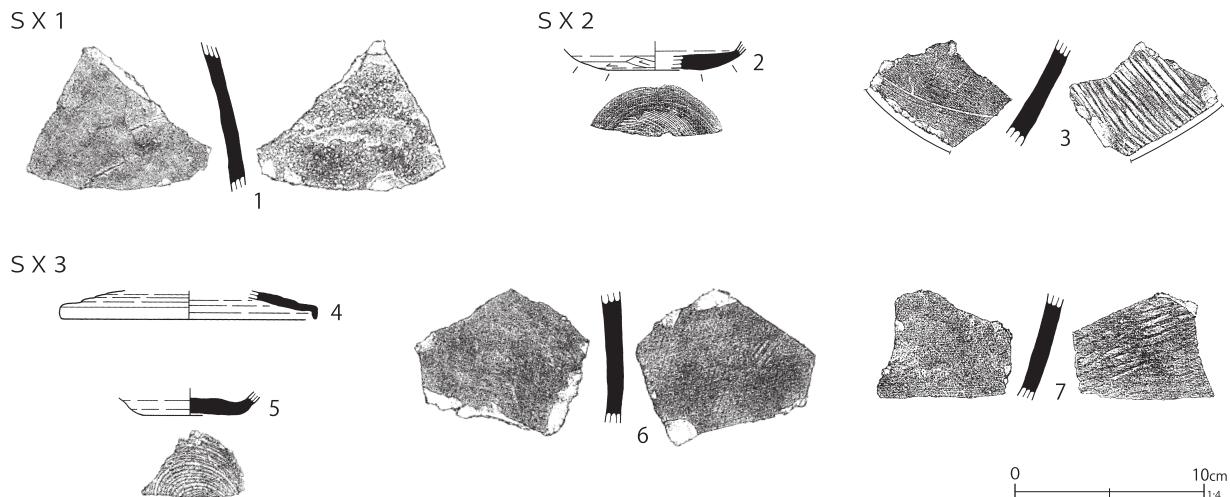
第48図 性格不明遺構 (2)

鍛冶関連遺物は、第4・7層からまとめて出土している。埋土中に廃棄された状態を示すことから、周辺に小鍛冶遺構の存在を示唆するものであ

る。小振りの椀形鍛冶津が多く、古代から中世的な様相である。出土した陶器の年代から18世紀後半の埋没と考えられる。



第49図 性格不明遺構（3）



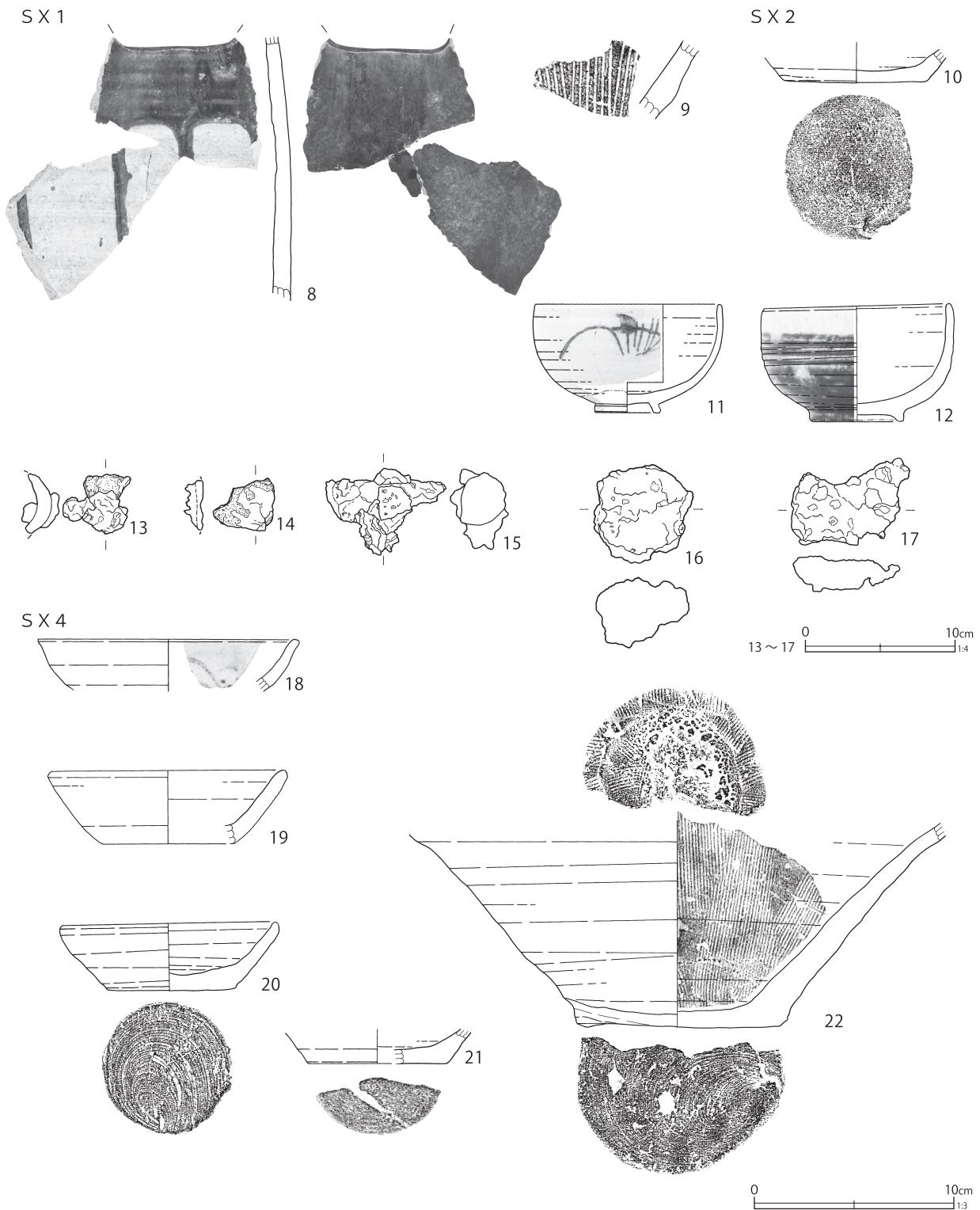
第50図 性格不明遺構出土遺物（1）

第3号性格不明遺構（第48図）

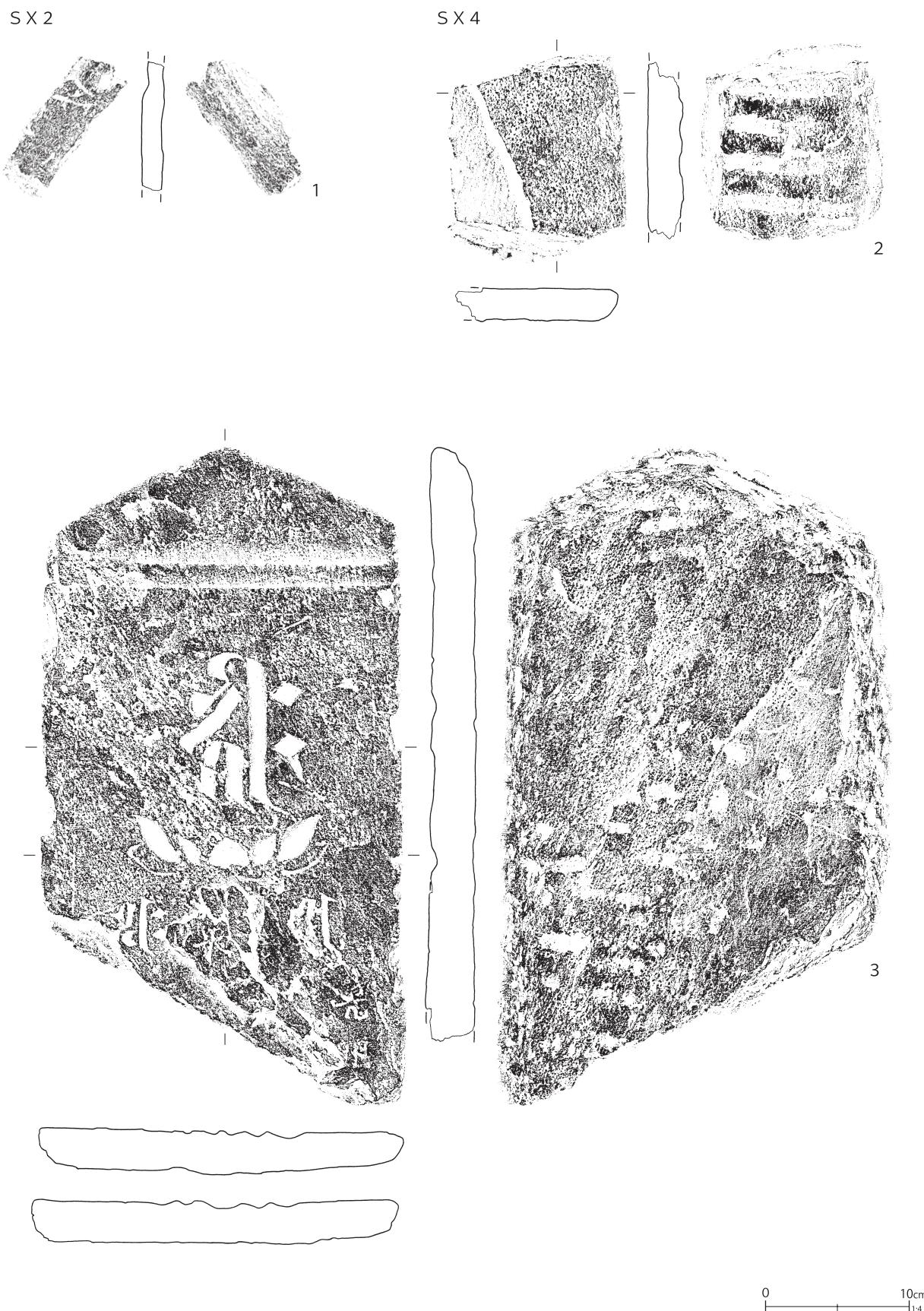
B・C-6・7グリッドに位置する。第23号土壙、第8号溝跡と重複がみられるが、相互の先後

関係は明確でない。

平面形は、北東側に半円形の張出部を付設する不整形である。長軸方位はN-27°-Wを指す。



第51図 性格不明遺構出土遺物（2）



第52図 性格不明遺構出土板碑

規模は、長軸5.75m、短軸4.13m、深さは0.90m以上である。

土層断面の観察では、黒褐色粘土や暗灰褐色粘

土を主体とする下層は、人為的に埋め戻された可能性が高いが、その後は自然堆積を示している。

遺物は、須恵器蓋・坏・甕（第50図4～7）が

第11表 性格不明遺構出土遺物観察表（第50・51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[7.8]	—	IK	5	良好	灰白	SX1 外面自然釉	
2	須恵器	坏	—	[1.5]	(5.2)	GIJK	30	良好	灰	SX2 南北企産 底部周辺ヘラケズリ	
3	須恵器	甕	—	[5.6]	—	IK	5	良好	灰	SX2 産地不明 破損面を研具として使用	
4	須恵器	蓋	(13.4)	[1.5]	—	GIJK	10	良好	灰白	SX3 南北企産	
5	須恵器	坏	—	[1.2]	(5.4)	GIJ	30	良好	黄灰	SX3 南北企産 底部糸切痕	
6	須恵器	甕	—	[6.9]	—	IK	5	良好	灰白	SX3 産地不明 外面一部降灰	
7	須恵器	甕	—	[5.6]	—	IK	5	良好	灰	SX3 産地不明 外面降灰	
8	陶器	火鉢類か	—	[13.2]	—	HI	10	普通	淡黄	SX1 内面上位～外面施釉(海鼠釉状に発色) 上部に窓か 19c以降	
9	陶器	擂鉢	—	[3.9]	—	DEG	5	良好	褐灰	SX1 丹波系 内面擂目 17c後-18c前	
10	かわらけ	小皿	—	[1.7]	7.0	HK	25	普通	橙	SX2 全体磨耗 胎土粉質	
11	陶器	碗	9.2	5.4	(3.2)	K	70	良好	灰白	SX2 B-6 京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵 18c中	24-4
12	陶器	碗	9.3	5.8	4.5	I	90	普通	灰黄	SX2 濑戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛分け 18c中-後	24-5
13	鉄製品	羽口	縦4.0 横4.6 厚さ2.4 重さ18.6			—	—	—	—	SX2 先端部 淬付着 一部鋳化	
14	鉄製品	羽口	縦3.5 横4.1 厚さ1.3 重さ14.7			—	—	—	—	SX2 先端部 外面ガラス質に発泡 内面赤化	
15	鉄製品	鉄塊	縦5.8 横8.0 厚さ3.7 重さ133.6			—	—	—	—	SX2 楔状鉄素材 淬付着 磁着あり	
16	鉄製品	鍛冶滓	縦6.6 横6.6 厚さ4.7 重さ186.4			—	—	—	—	SX2 磁着なし	
17	鉄製品	椀形滓	縦5.8 横8.0 厚さ2.4 重さ71.9			—	—	—	—	SX2 磁着なし	
18	陶器	皿	(12.8)	[2.6]	—	HI	5	普通	にぶい黄橙	SK22 濑戸美濃系 内外面長石釉 内面鉄絵 17c初	24-6
19	かわらけ	小皿	(11.7)	3.6	(6.6)	EHIK	20	普通	にぶい黄橙	SE16 胎土粉質 磨耗する	
20	かわらけ	小皿	(10.7)	3.3	6.3	EGK	65	普通	にぶい黄橙	SK22 底部糸切痕(右)・弱い板目状圧痕 胎土緻密	24-7
21	かわらけ	小皿	—	[1.7]	(6.9)	HI	10	普通	浅黄橙	SX4 底部糸切痕 胎土粉質	24-8
22	陶器	擂鉢	—	[10.2]	10.2	DEG	30	普通	浅黄橙	SE16 No.1 濑戸美濃系 底部糸切痕(右) 内外面鋳釉 内面擂目 大窯期	24-9

第12表 性格不明遺構出土板碑観察表（第52図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	板碑	[9.4]	[8.6]	1.5	115.3	緑泥片岩	SX2	蓮座の一部	
2	石製品	板碑	[12.8]	[11.8]	2.5	709.2	緑泥片岩	SX4	SX4 No.2 側縁一部粗いケズリ 背面押し削り痕 被熱 再加工痕	28-3
3	石製品	板碑	[46.5]	25.5	2.8	7070.0	緑泥片岩	SX4	SE16 No.3 二条線 種子(キリーグ・正体字・サ・サク) 蓮座 銘文「口永[/光明[]」応永年間(1394-1428)「光明遍照」偶 桟線 側縁打ち割り成形後一部ケズリ 背面押し削り痕	28-4

みられるが、遺構には直接は伴わないと思われる。

遺構の性格は判然としないが、土層の堆積状況から地下式壙よりも、井戸跡の可能性が高い。

第4号性格不明遺構（第49図）

C・D-6グリッドに位置する。搅乱によって南東側が壊されているため、全容を把握することはできなかったが、遺構北西隅に舌状の張出部を付設した溝状遺構と考えられる。長軸方位はN-33°-Wを指し、検出された範囲における規模は、長軸6.80m、短軸2.00mである。遺構本体の横断面形は逆台形で、深さは最深部で1.19mある。底面は平坦でなく、緩やかな起伏がみられる。

遺物は、張出部側の壁際から、被熱を受けた石とともに板碑（第52図3）と擂鉢（第51図2）が、底面から浮いた状態でまとまって出土した。

第51図18～22は出土した陶磁器・土器類である。18は瀬戸美濃系陶器の皿で、いわゆる鉄絵志野である。17世紀初頭の所産である。19～21はかわらけ小皿である。19と21の胎土は粉っぽく、雲

母とみられる微細な光沢のある鉱物が含まれる。一方、20は胎土が比較的緻密である。石英細粒とみられる光沢のある鉱物や、黒色粒子が多く含まれる。いずれも、16世紀後半～17世紀前半における在地の製品であろう。22は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、鋳釉が施釉される。擂目は一单位26本である。大窯期の所産で16世紀代に位置づけられる。

第52図2・3は出土した板碑である。2は側縁部の破片で、背面に押し削り痕が明瞭に残る。3は先述した擂鉢とともに遺構北西隅から出土したもので、阿弥陀三尊種子を彫刻する。銘文は多くを欠落するが、右下に「光明遍照」から始まる偈頌が、中央に「□永（以下欠失）」の紀年銘が認められる。種子・蓮座の形態からみて、応永年間の銘を刻むものと考えられる。

遺構の時期は、板碑に伴って出土した擂鉢の年代から16世紀を中心とするもと想定される。

なお、第4号性格不明遺構は、第16号井戸跡と第22号土壙から遺構名を変更した。

6 ピット

調査区内からはピット（柱穴）が、合計426基検出された。その内訳はA区が375基（第53～66図）、B区が51基（第10・67・68図）である。

A区におけるピットの分布は、一見して分かるように、南東側を画する第1・2号溝跡と、西側の第4号溝跡によって囲まれた範囲の、きわめて限定された空間に集中している。とりわけ、B・C-6グリッドには、半数近くのピットが密集する。それに対し、第1・2号溝跡の外郭にあたる、谷部に面した南東側には、大きく搅乱が入るもの、ほとんどピットは存在していない。

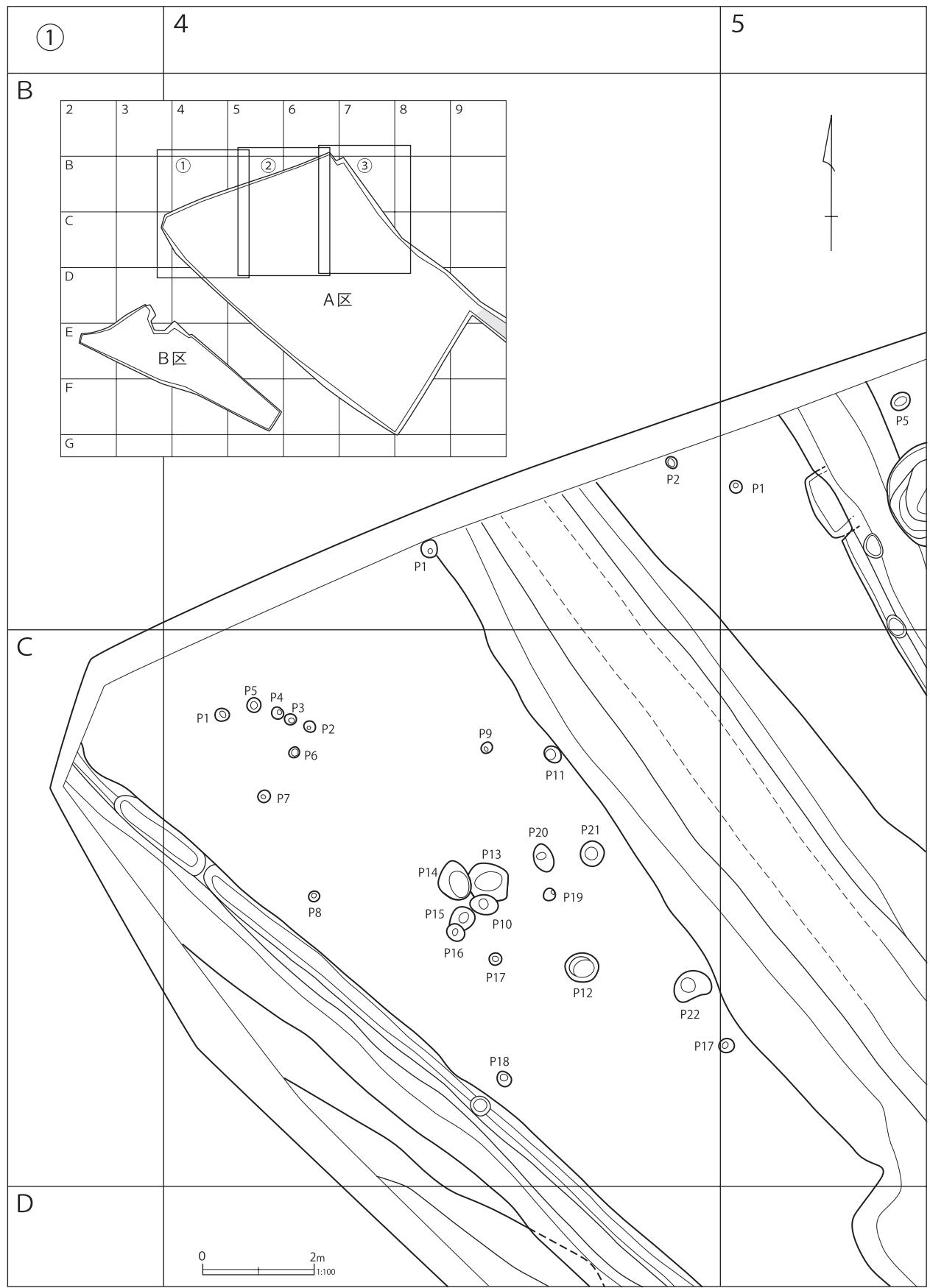
ピットの平面形は、円形もしくは橢円形のものが大半を占めている。規模は、直径30～50cmのものが多く、深さは14～81cmとやや幅がみられるが、概ね30～50cmの範囲にまとまっている（第13表）。

ピットの埋土は、暗褐色土や灰黃褐色土などの

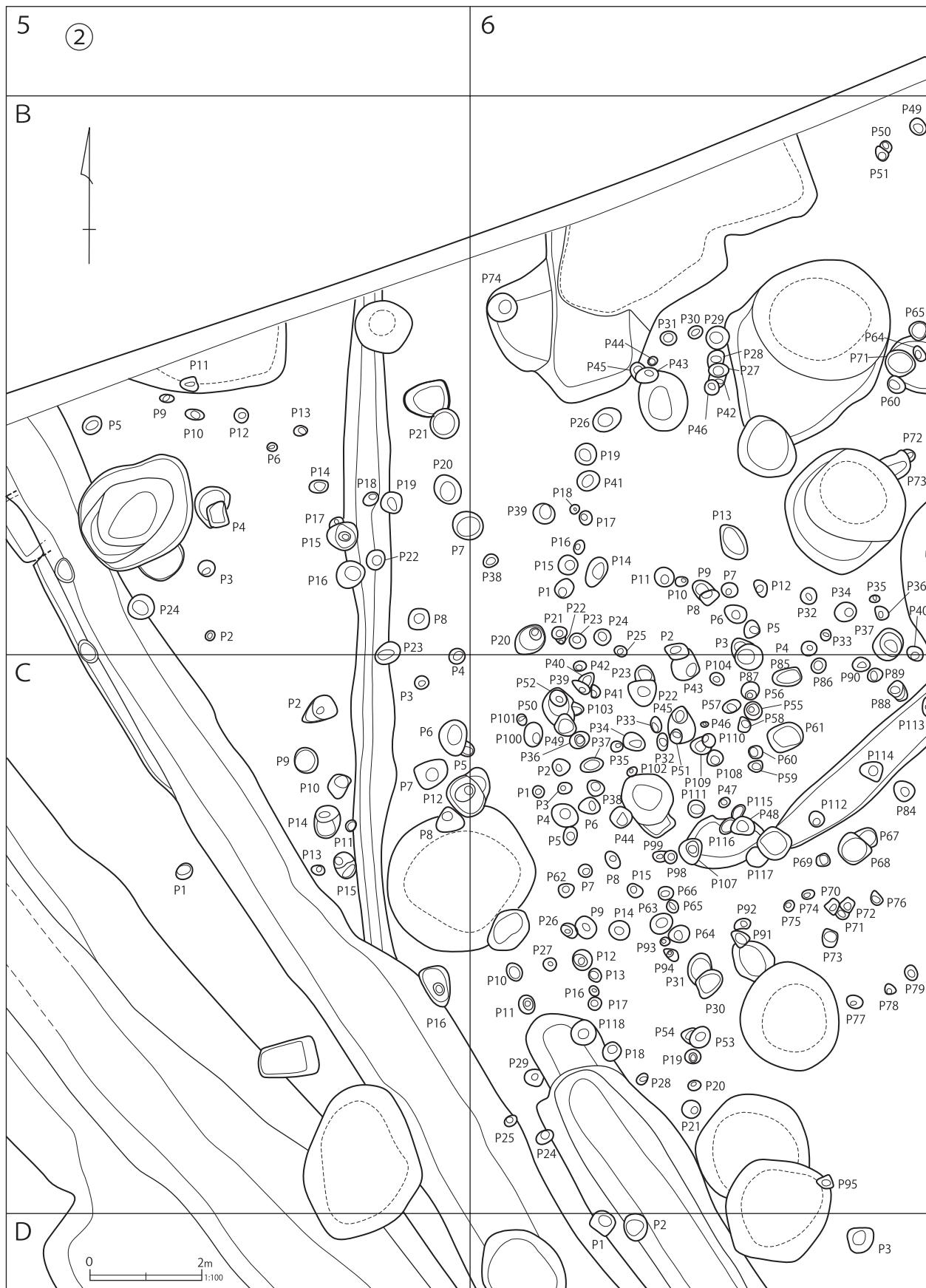
単一層が多いものの、柱の抜き取り痕や柱痕（9層）の認められるものも多い。中には柱を固定するために、地山の黄褐色土と暗褐色土を互層にしているものや、C-7グリッド P22のように底面に根石を置いたものもみられる。

このようにA区ではピットの数量や密集度が高く、重複が著しいため、調査段階では明確に建物跡や柵列跡等を認識することはできなかった。しかし、何らかの構築物が存在していたことは明白であり、出土遺物から判断すれば、古代から中・近世にわたる時期幅のあるものと考えられる。

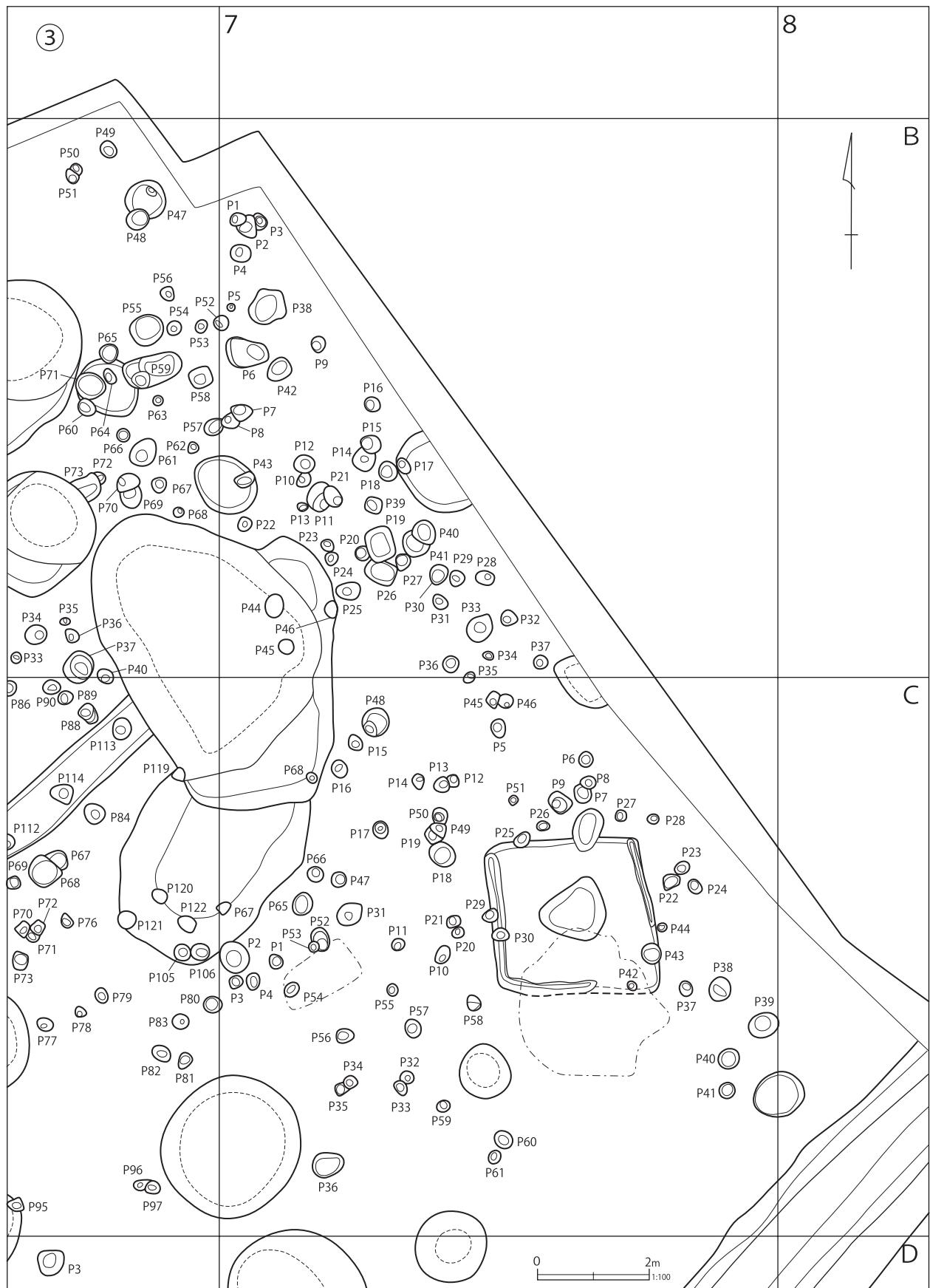
出土遺物については、第69～71図にまとめた。特徴的なものとして、A区では湖西産の坏Gの蓋（第69図11）、刻書と想定されるヘラ描きをもつ須恵器坏（同8）、B区では固着した状態の寛永通寶を出土した土壙（第71図）などがある。



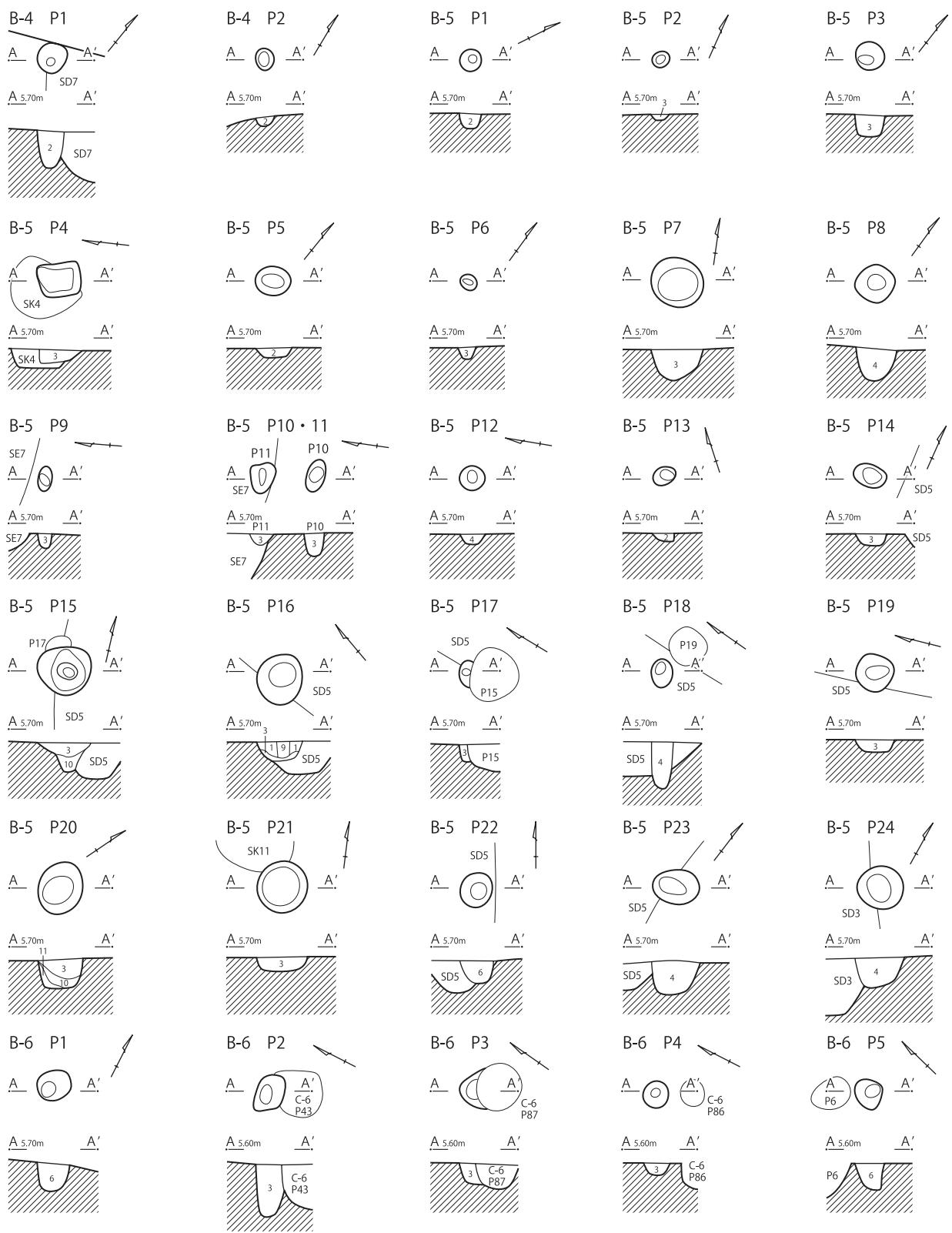
第53図 ピット区割り図（1）



第54図 ピット区割り図 (2)

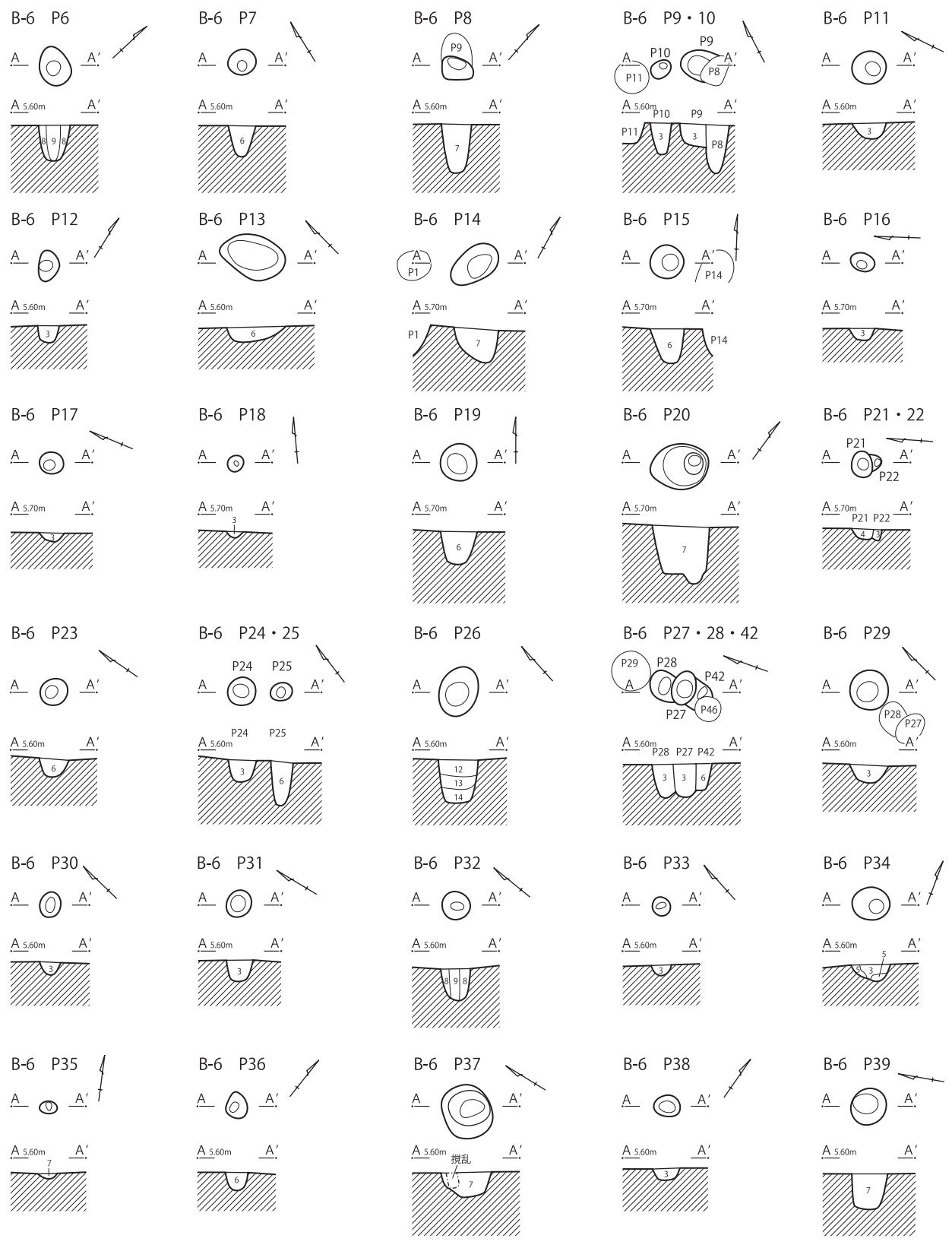


第55図 ピット区割り図（3）

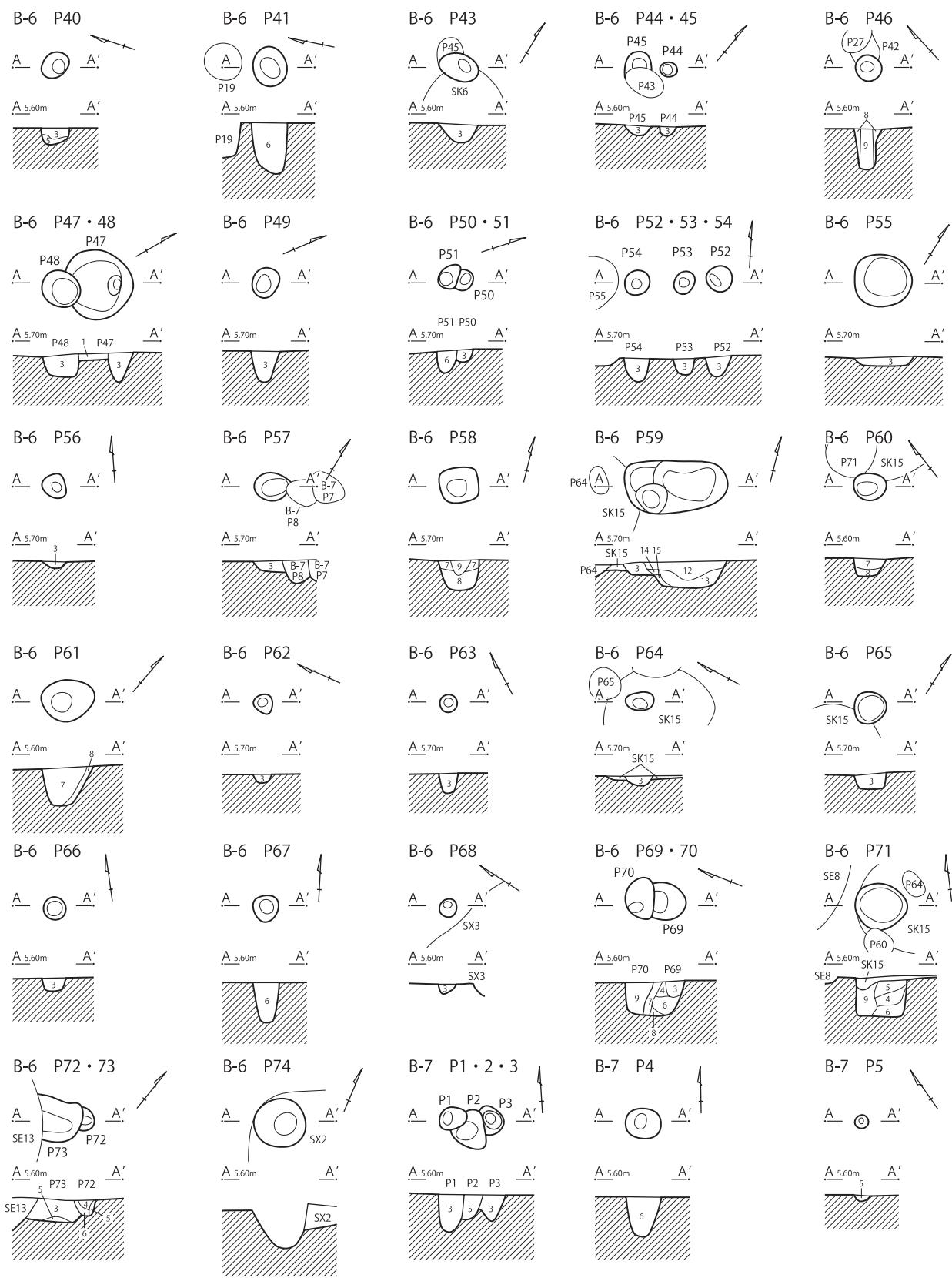


0 2 m
1:60

第56図 ピット(1)

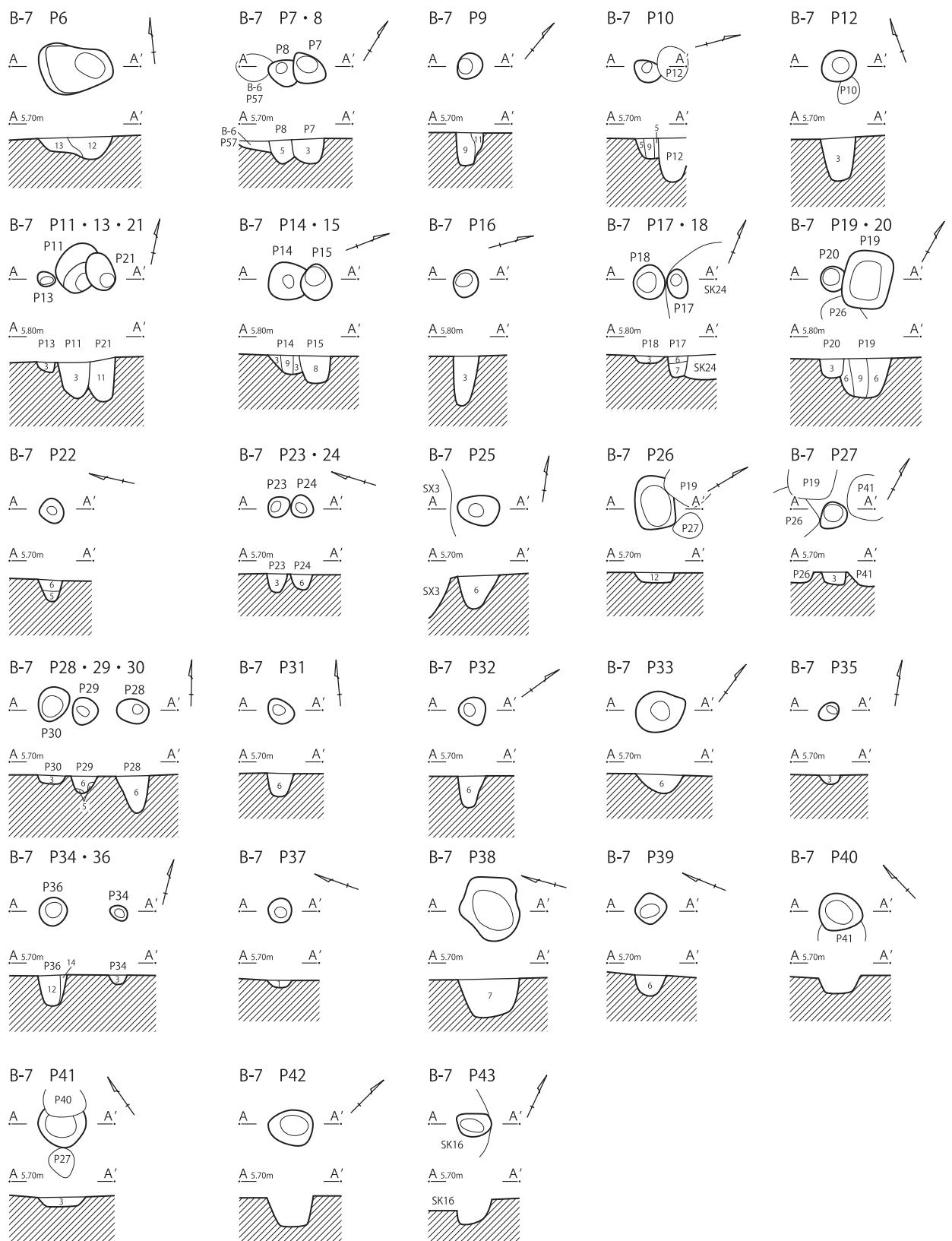


第57図 ピット (2)



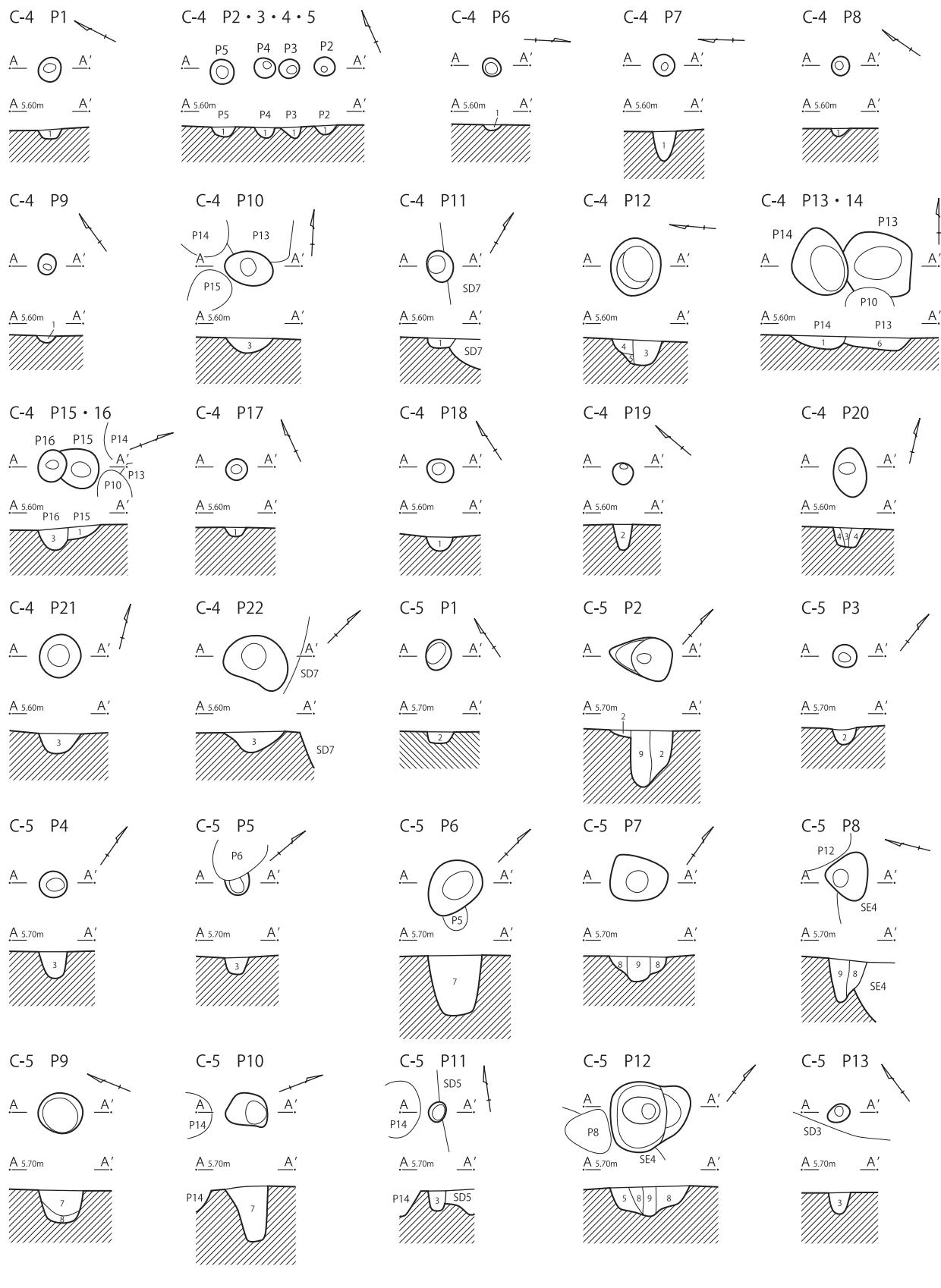
0 2 m
1:60

第58図 ピット (3)

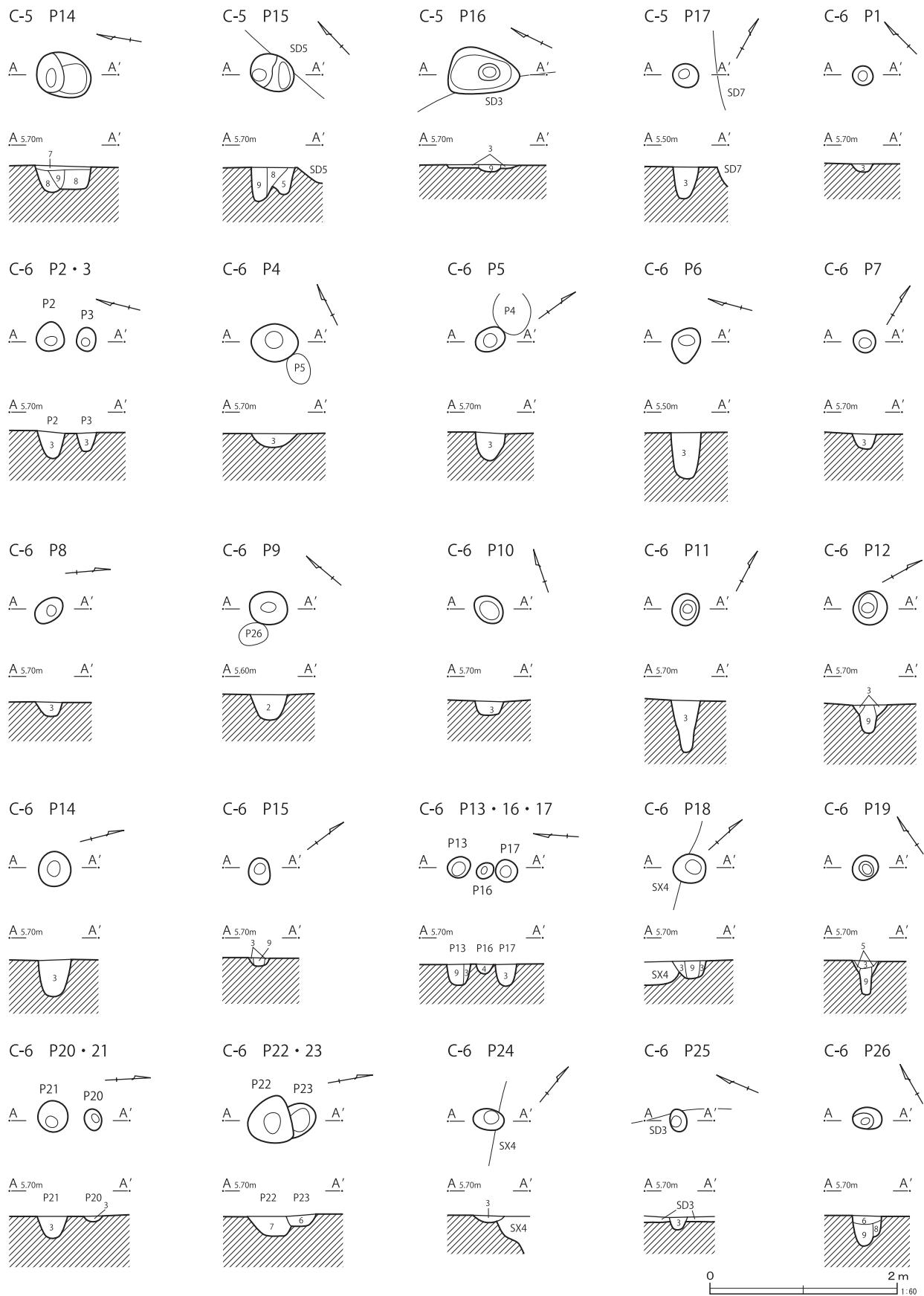


0 2 m 1:60

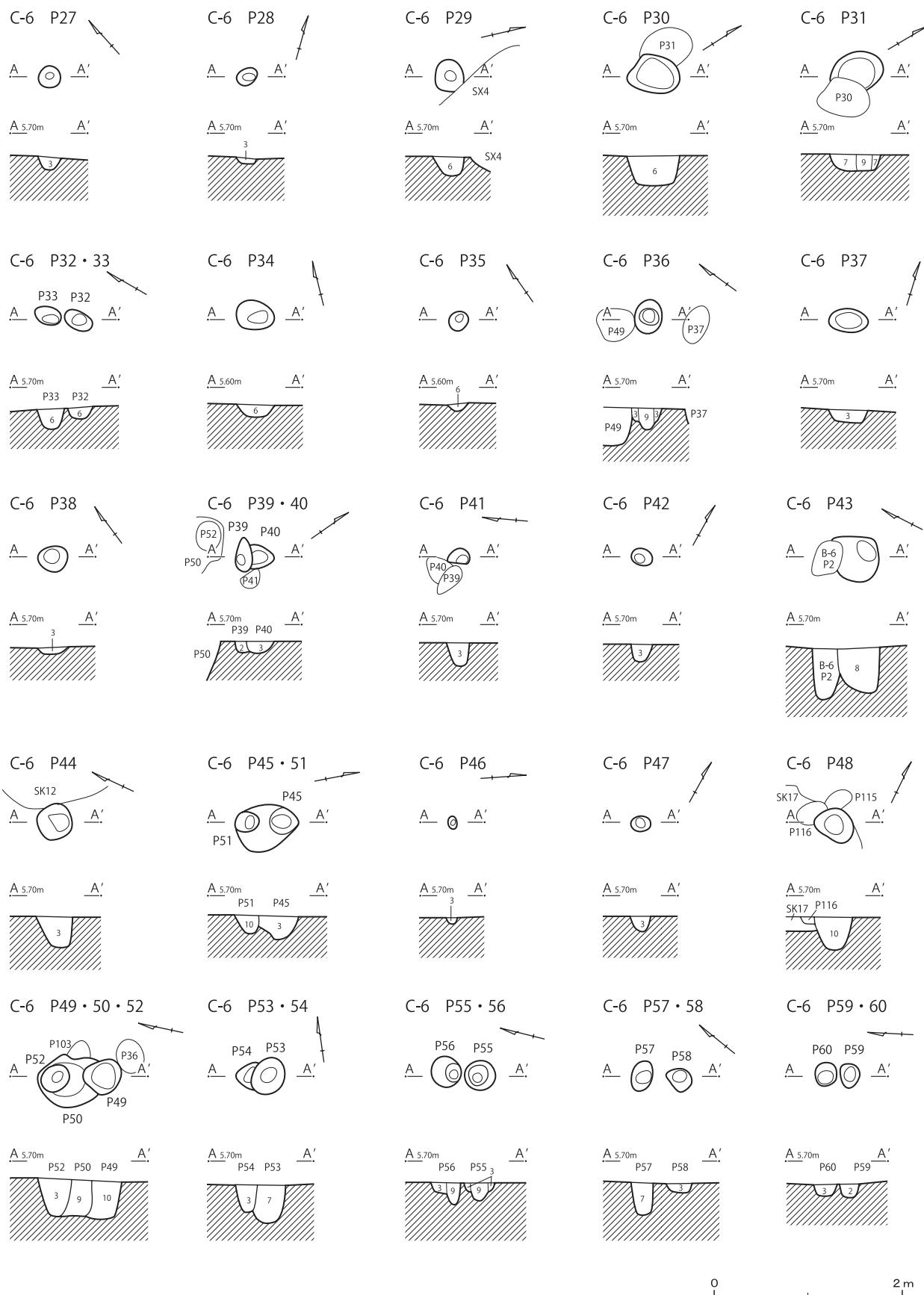
第59図 ピット (4)



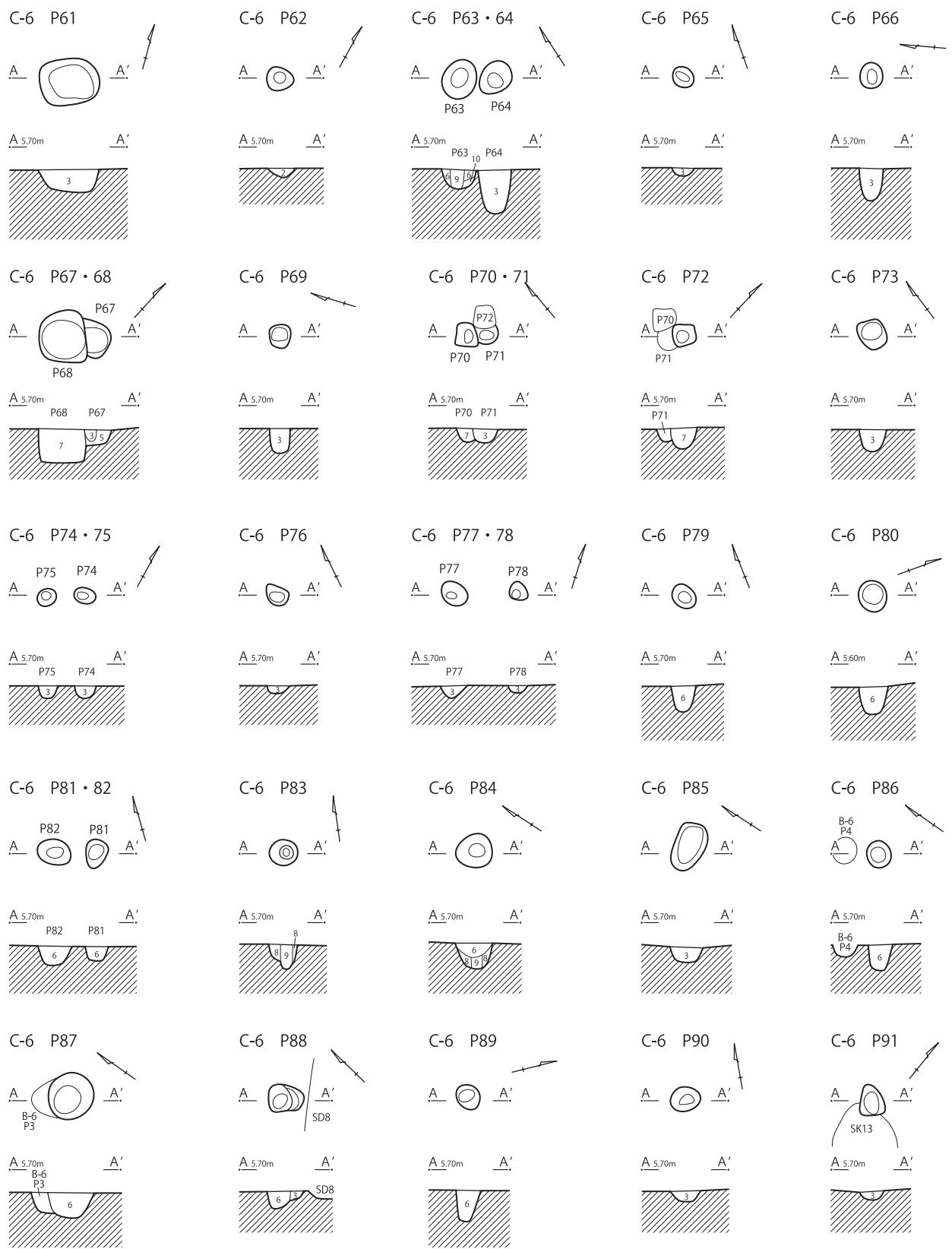
第60図 ピット (5)



第61図 ピット (6)

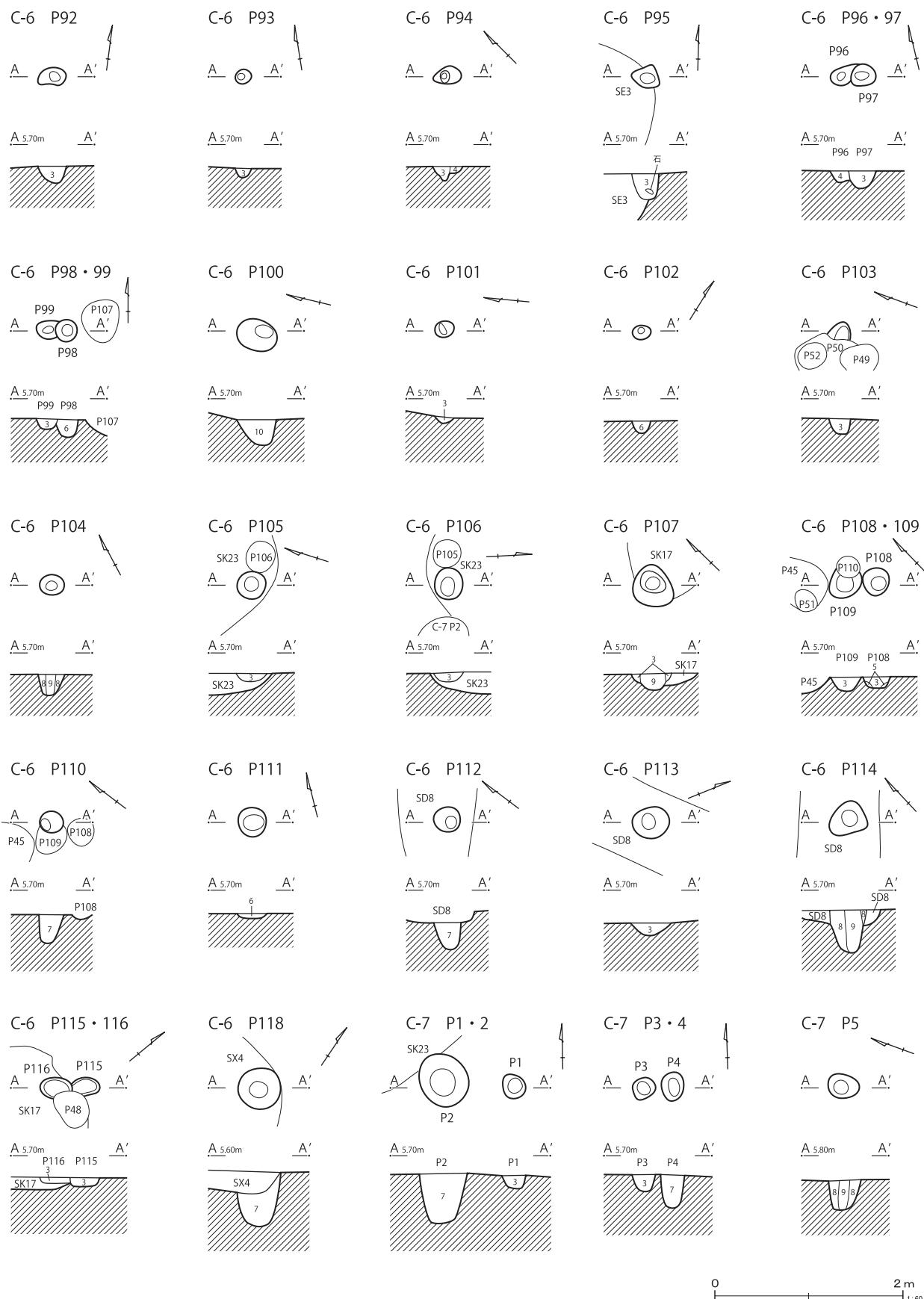


第62図 ピット (7)

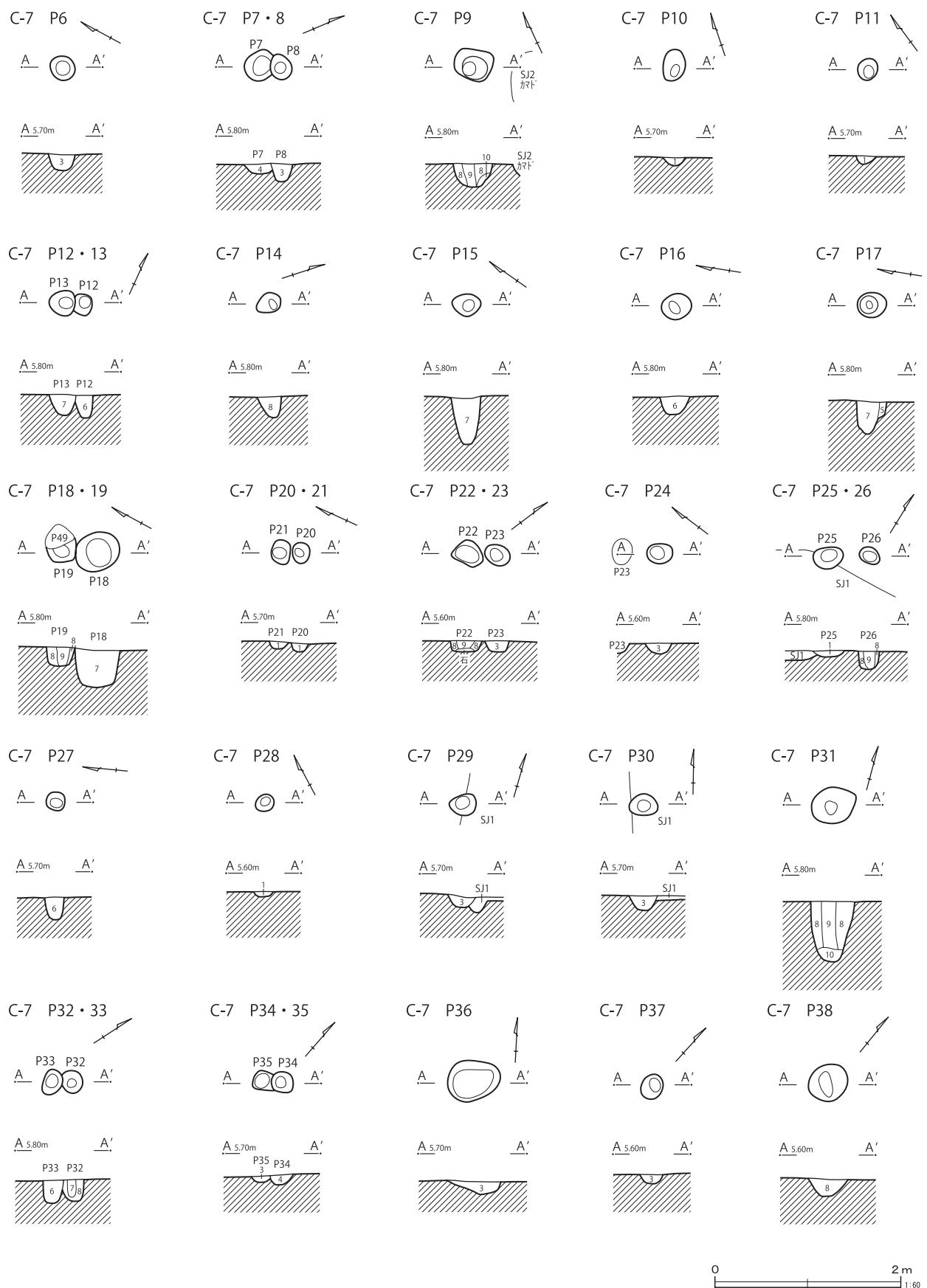


第63図 ピット (8)

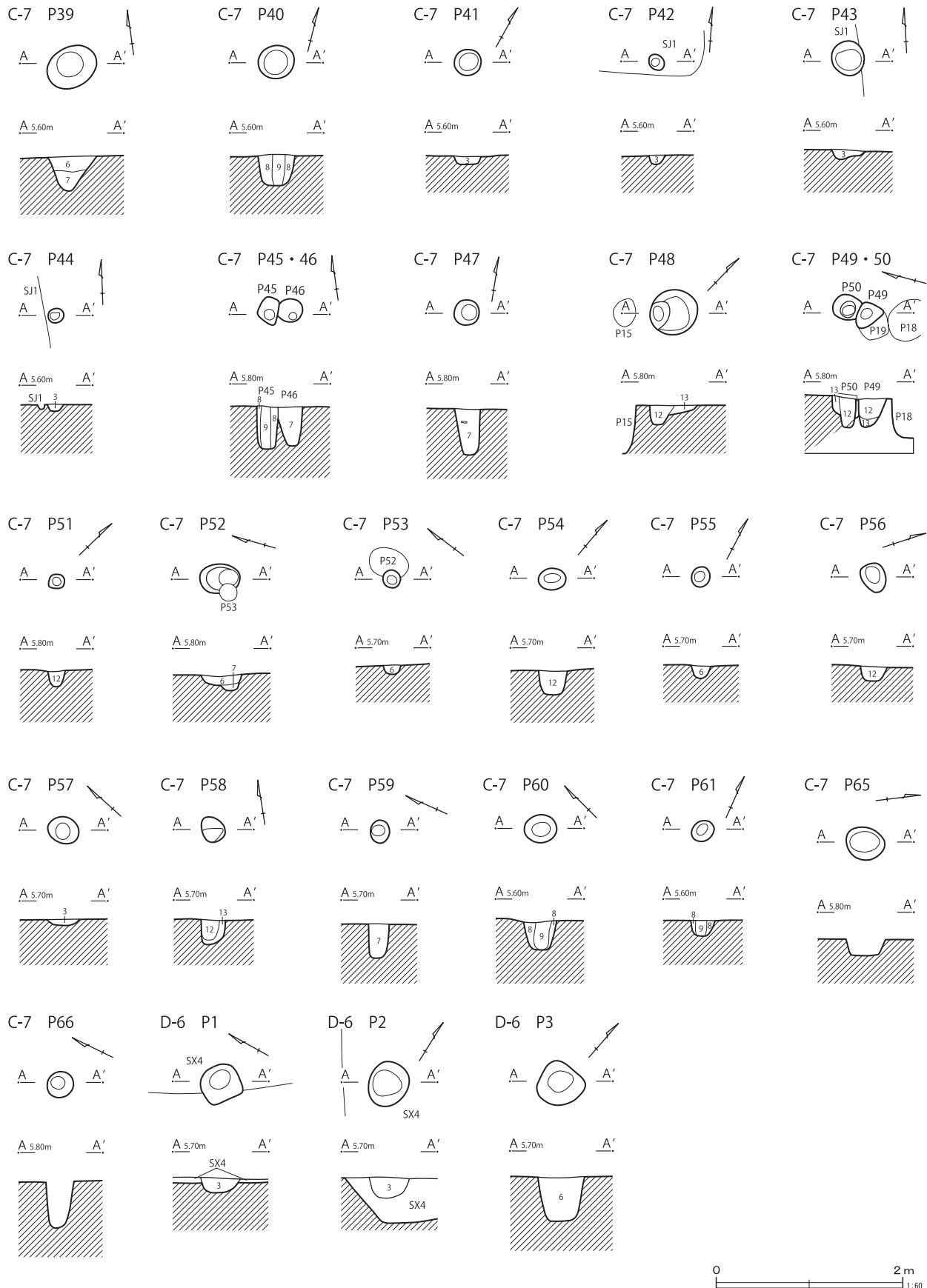




第64図 ピット (9)



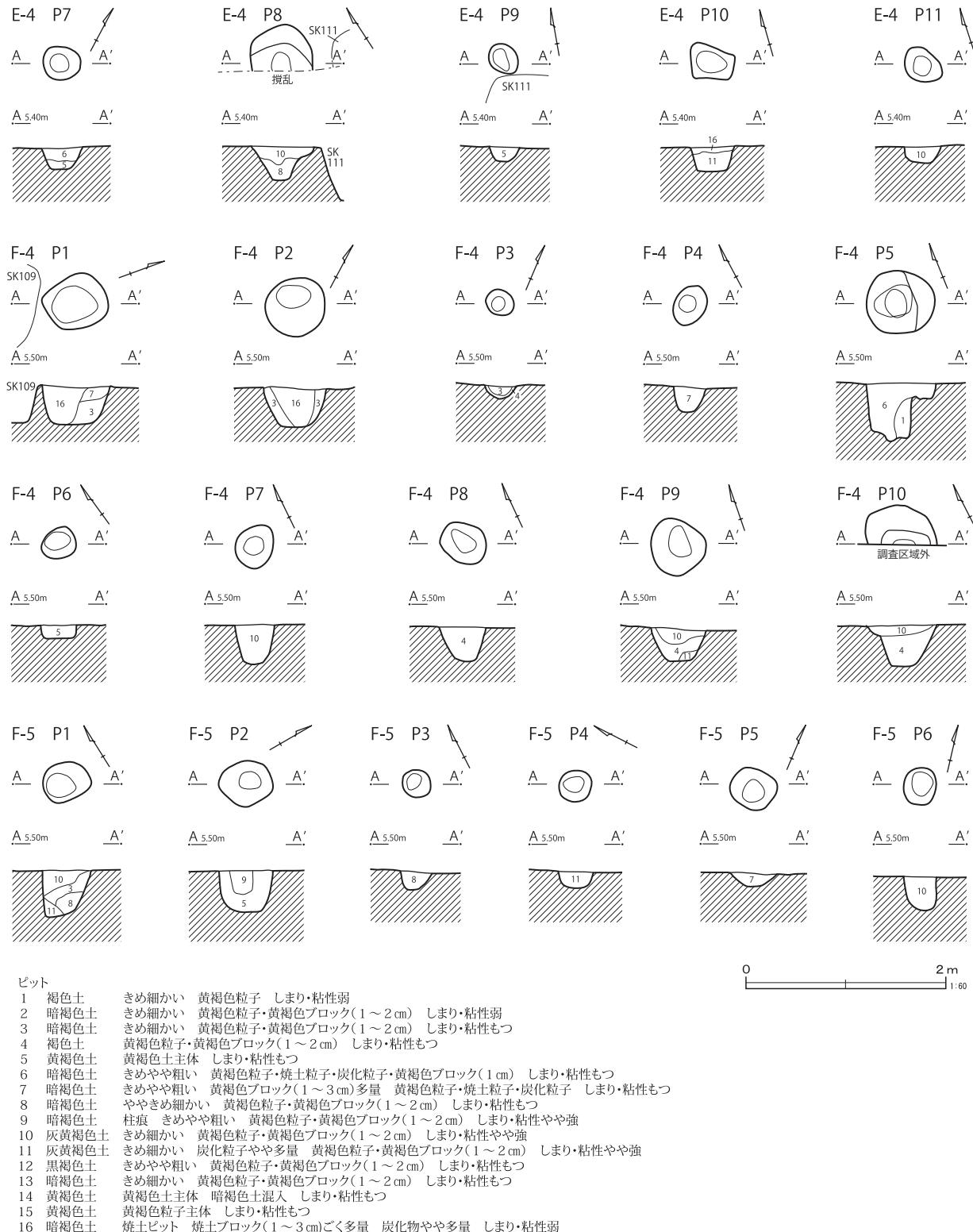
第65図 ピット (10)



第66図 ピット (11)



第67図 ピット (12)



第68図 ピット (13)

第13表 ピット一覧表 (分布図: 第10・53~55図、平・断面図: 第56~68図)

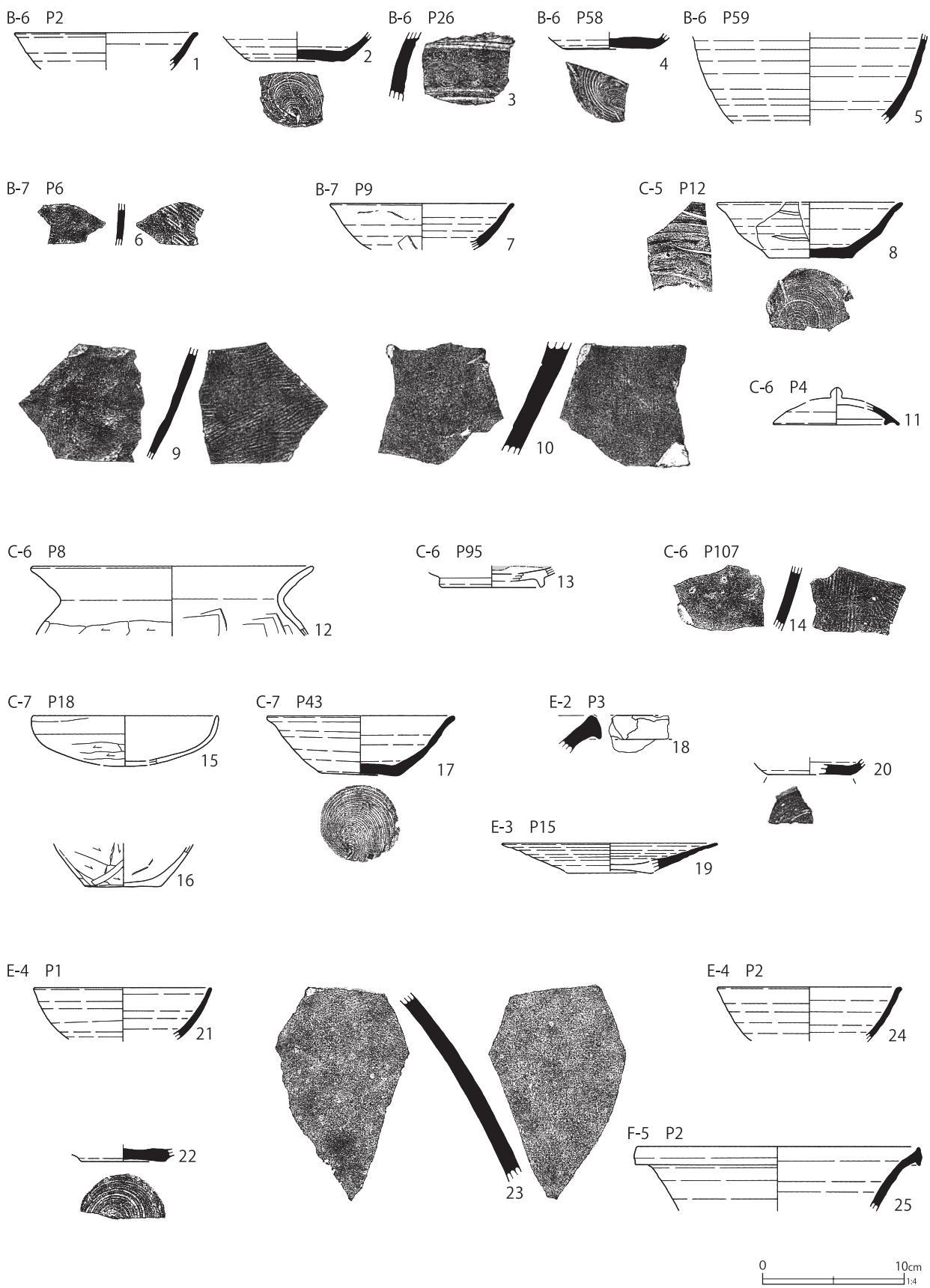
グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考	グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
B-4 (A 区)	P1	0.31	0.29	0.38	SD7	B-6 (A 区)	P47	0.72	(0.55)	0.30	柱痕 P48
	P2	0.22	0.19	0.11			P48	0.40	0.37	0.24	柱痕 P47
B-5 (A 区)	P1	0.23	0.22	0.17			P49	0.32	0.27	0.33	
	P2	0.18	0.17	0.07			P50	0.50	(0.23)	0.13	P51
	P3	0.32	0.29	0.23			P51	0.26	0.17	0.24	P50
	P4	0.45	0.34	0.14	SK4		P52	0.28	0.27	0.22	
	P5	0.37	0.30	0.10			P53	0.24	0.20	0.16	
	P6	0.18	0.15	0.13			P54	0.25	0.24	0.23	
	P7	0.54	0.50	0.53	SE7		P55	0.61	0.55	0.09	
	P8	0.42	0.38	0.33	柱痕		P56	0.26	0.24	0.05	
	P9	0.26	0.14	0.15			P57	0.40	0.30	0.11	B-7P8
	P10	0.34	0.19	0.25			P58	0.41	0.38	0.29	柱痕
	P11	0.34	0.25	0.12	SE7		P59	1.06	0.54	0.27	SK15
	P12	0.26	0.25	0.11			P60	0.31	0.29	0.19	SK15
	P13	0.24	0.18	0.09			P61	0.56	0.44	0.41	
	P14	0.34	0.22	0.12			P62	0.21	0.19	0.08	
	P15	0.55	0.50	0.30	SD5 P17		P63	0.18	0.17	0.20	
	P16	0.50	0.47	0.22	柱痕 SD5		P64	0.31	0.20	0.09	SK15
	P17	0.25	(0.11)	0.17	SD5 P15		P65	0.34	0.33	0.16	SK15
	P18	0.30	0.22	0.48	SD5		P66	0.24	0.23	0.13	
B-6 (A 区)	P19	0.41	0.40	0.14	SD5		P67	0.27	0.27	0.40	
	P20	0.55	0.45	0.31			P68	0.19	0.19	0.10	
	P21	0.53	0.51	0.15	SK11		P69	0.39	(0.33)	0.36	P70
	P22	0.36	0.33	0.23	SD5		P70	0.43	0.31	0.36	柱痕 P69
	P23	0.48	0.35	0.34	SD5		P71	0.53	0.47	0.43	柱痕 SK15
	P24	0.49	0.44	0.33	SD3		P72	0.24	(0.15)	0.15	P73
	P1	0.34	0.31	0.30			P73	(0.50)	0.45	0.26	SE13 P72
	P2	0.37	0.28	0.54	C-6P43		P74	0.53	0.50	0.44	SX2
	P3	0.42	(0.18)	0.21	C-6P87	B-7 (A 区)	P1	0.29	0.23	0.39	P2
	P4	0.27	0.27	0.11			P2	(0.30)	0.37	0.27	P1・3
	P5	0.29	0.28	0.28			P3	0.30	(0.18)	0.28	P2
	P6	0.42	0.33	0.36	柱痕		P4	0.36	0.31	0.41	
	P7	0.30	0.26	0.33			P5	0.15	0.14	0.07	
	P8	0.32	0.28	0.51	P9		P6	0.73	0.56	0.23	
	P9	0.32	(0.25)	0.21	P8		P7	0.35	0.31	0.26	P8
	P10	0.23	0.19	0.31			P8	(0.27)	0.28	0.25	P7 B-6P57
	P11	0.36	0.35	0.17			P9	0.29	0.26	0.35	柱痕
	P12	0.31	0.21	0.16			P10	(0.29)	0.22	0.22	柱痕 P12
	P13	0.71	0.46	0.16			P11	0.52	(0.32)	0.39	P21
	P14	0.57	0.35	0.38			P12	0.37	0.32	0.46	P10
	P15	0.35	0.35	0.38			P13	0.19	0.14	0.11	
	P16	0.26	0.19	0.14			P14	(0.33)	0.39	0.19	柱痕 P15
	P17	0.25	0.23	0.10			P15	0.34	0.32	0.31	P14
	P18	0.19	0.15	0.08			P16	0.28	0.25	0.53	
	P19	0.39	0.39	0.34			P17	0.31	0.20	0.23	SK24
	P20	0.57	0.47	0.62			P18	0.35	0.32	0.08	
B-6 (A 区)	P21	0.28	0.22	0.10	P22		P19	0.60	0.49	0.42	柱痕 P20・26
	P22	0.19	(0.10)	0.11	P21		P20	0.26	(0.22)	0.18	P19
	P23	0.30	0.28	0.21			P21	0.40	0.28	0.45	P11
	P24	0.30	0.30	0.22			P22	0.26	0.23	0.24	
	P25	0.28	0.20	0.46			P23	0.24	0.19	0.19	
	P26	0.54	0.41	0.43			P24	0.24	0.22	0.16	
	P27	0.37	0.26	0.35	P28・42		P25	0.44	0.29	0.35	
	P28	(0.32)	0.30	0.35	P27		P26	0.55	0.42	0.12	P19・27
	P29	0.42	0.41	0.19			P27	0.30	0.25	0.14	P26
	P30	0.27	0.22	0.14			P28	0.35	0.24	0.39	
	P31	0.29	0.27	0.21			P29	0.28	0.26	0.18	
	P32	0.30	0.30	0.33	柱痕		P30	0.36	0.30	0.09	
	P33	0.21	0.18	0.11			P31	0.29	0.22	0.24	
	P34	0.41	0.35	0.17			P32	0.30	0.28	0.34	
	P35	0.19	0.13	0.05			P33	0.55	0.41	0.22	
	P36	0.38	0.21	0.18			P34	0.20	0.15	0.09	
	P37	0.57	0.50	0.27			P35	0.22	0.16	0.09	
	P38	0.28	0.22	0.14			P36	0.29	0.28	0.31	
	P39	0.39	0.36	0.36			P37	0.25	0.23	0.08	
	P40	0.31	0.25	0.17			P38	0.72	0.60	0.42	
	P41	0.41	0.36	0.54			P39	0.31	0.28	0.21	
	P42	0.32	(1.90)	0.28	P27・46		P40	0.45	0.38	0.18	P41
	P43	0.42	0.29	0.19	SK6 P45		P41	0.50	(0.31)	0.12	P40
	P44	0.18	0.15	0.09			P42	0.47	0.37	0.32	
	P45	(0.31)	0.28	0.10	P43		P43	0.36	0.24	0.26	SK16
	P46	0.28	0.27	0.41	柱痕 P42		P44	0.41	0.33	—	SX3

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考	グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
B-7 (A 区)	P45	0.28	0.27	—	SX3	C-6 (A 区)	P32	0.31	0.19	0.14	
	P46	0.32	(0.23)	—	SX3		P33	0.30	0.19	0.21	
C-4 (A 区)	P1	0.26	0.24	0.10			P34	0.42	0.32	0.13	
	P2	0.23	0.20	0.09			P35	0.22	0.21	0.08	
	P3	0.23	0.21	0.11			P36	0.38	0.30	0.22	柱痕
	P4	0.22	0.21	0.11			P37	0.42	0.31	0.13	
	P5	0.26	0.26	0.12			P38	0.31	0.28	0.07	
	P6	0.22	0.18	0.06			P39	0.35	0.19	0.12	P40
	P7	0.24	0.22	0.31			P40	0.27	(0.23)	0.12	P39
	P8	0.20	0.19	0.09			P41	0.24	0.16	0.25	
	P9	0.22	0.18	0.08			P42	0.23	0.22	0.19	
	P10	0.51	0.36	0.17	P13		P43	0.49	(0.49)	0.47	
	P11	0.34	0.29	0.11	SD7		P44	0.37	0.36	0.33	
	P12	0.52	0.49	0.27			P45	0.28	0.23	0.19	P51
	P13	0.72	0.66	0.13	P10・14		P46	0.14	0.09	0.07	
	P14	0.71	0.56	0.13	P13		P47	0.21	0.17	0.16	
	P15	0.42	0.42	0.16	P16		P48	0.42	0.32	0.34	P16
	P16	0.35	0.30	0.26	P15		P49	0.38	0.33	0.40	P50・52
	P17	0.23	0.22	0.10			P50	(0.65)	0.51	0.37	柱痕 P49・52
	P18	0.29	0.24	0.15			P51	0.53	0.46	0.20	P45
	P19	0.24	0.22	0.26			P52	0.33	0.29	0.42	P49・50
	P20	0.51	0.36	0.21	柱痕		P53	0.41	0.35	0.41	P54 鉄釘
	P21	0.44	0.43	0.22			P54	0.30	(0.25)	0.28	P53
	P22	0.69	0.50	0.20			P55	0.33	0.32	0.19	柱痕
C-5 (A 区)	P1	0.32	0.26	0.11			P56	0.33	0.31	0.23	柱痕
	P2	0.65	0.43	0.59	柱痕		P57	0.33	0.22	0.34	
	P3	0.25	0.22	0.17			P58	0.26	0.21	0.09	
	P4	0.29	0.28	0.28			P59	0.26	0.21	0.14	P60
	P5	(0.18)	0.24	0.17	P6		P60	0.24	0.24	0.12	P59
	P6	0.63	0.49	0.63	P5		P61	0.63	0.49	0.23	
	P7	0.59	0.45	0.27	柱痕		P62	0.28	0.24	0.11	
	P8	0.54	0.45	0.46	柱痕		P63	0.41	0.35	0.21	柱痕
	P9	0.46	0.42	0.36			P64	0.39	0.30	0.46	
	P10	0.44	0.33	0.47	石製円盤		P65	0.23	0.21	0.09	
	P11	0.21	0.17	0.21			P66	0.27	0.25	0.34	
	P12	0.81	0.70	0.32	柱痕 刻書土器		P67	0.37	0.33	0.16	P68
	P13	0.23	0.17	0.22			P68	0.54	0.49	0.36	P67
	P14	0.59	0.46	0.29			P69	0.25	0.22	0.24	
	P15	0.47	0.37	0.36	柱痕		P70	0.24	0.21	0.15	P71
	P16	0.75	0.47	0.07	柱痕		P71	(0.23)	(0.16)	0.14	P70
	P17	0.28	0.25	0.33			P72	0.26	0.24	0.23	P71
C-6 (A 区)	P1	0.22	0.21	0.09			P73	0.31	0.27	0.21	
	P2	0.29	0.31	0.29			P74	0.23	0.16	0.13	
	P3	0.26	0.21	0.20			P75	0.21	0.17	0.13	
	P4	0.51	0.41	0.13			P76	0.24	0.20	0.08	
	P5	0.34	0.25	0.31			P77	0.31	0.22	0.13	
	P6	0.40	0.29	0.49			P78	0.21	0.18	0.08	
	P7	0.25	0.24	0.16			P79	0.28	0.23	0.27	柱痕
	P8	0.34	0.24	0.16			P80	0.33	0.29	0.29	
	P9	0.40	0.36	0.27			P81	0.31	0.23	0.15	
	P10	0.34	0.27	0.17			P82	0.36	0.27	0.20	
	P11	0.34	0.29	0.56			P83	0.29	0.28	0.26	柱痕
	P12	0.36	0.36	0.30	柱痕		P84	0.39	0.35	0.27	柱痕
	P13	0.24	0.21	0.21	柱痕		P85	0.51	0.32	0.17	
	P14	0.36	0.36	0.39			P86	0.29	0.26	0.12	
	P15	0.29	0.23	0.09	柱痕		P87	0.49	0.47	0.28	B-6P3
	P16	0.21	0.16	0.11			P88	0.37	0.29	0.17	
	P17	0.24	0.23	0.23			P89	0.28	0.24	0.31	
	P18	0.35	0.31	0.19	柱痕		P90	0.31	0.25	0.12	
	P19	0.29	0.26	0.37	柱痕		P91	0.36	0.26	0.09	
	P20	0.24	0.20	0.06			P92	0.26	0.18	0.17	
	P21	0.34	0.32	0.23			P93	0.17	0.14	0.09	
	P22	0.50	0.48	0.20	P23		P94	0.29	0.19	0.15	
	P23	(0.33)	0.33	0.12	P22		P95	0.28	0.25	0.27	柱痕 石
	P24	0.33	0.22	0.09	SX4		P96	0.35	0.20	0.13	P97
	P25	0.24	0.17	0.12			P97	0.27	0.23	0.18	P96
	P26	0.31	0.22	0.33	柱痕		P98	0.24	0.23	0.24	P99
	P27	0.24	0.24	0.13			P99	0.21	0.18	0.11	P98 石
	P28	0.23	0.17	0.07			P100	0.44	0.34	0.28	
	P29	0.34	0.31	0.21	SX4		P101	0.22	0.18	0.07	
	P30	0.56	0.40	0.32			P102	0.20	0.16	0.12	
	P31	0.57	0.43	0.18	柱痕		P103	0.25	(0.22)	0.16	

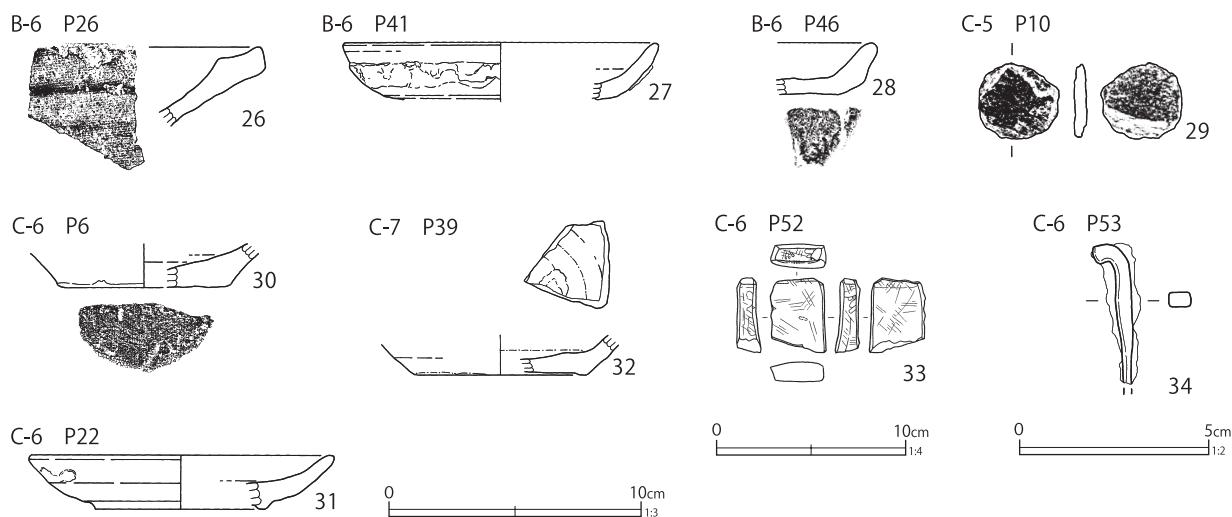
グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
C-6 (A 区)	P104	0.27	0.22	0.23	柱痕
	P105	0.32	0.29	0.08	
	P106	0.35	0.30	0.09	
	P107	0.47	0.40	0.14	柱痕
	P108	0.29	0.29	0.11	
	P109	0.38	0.32	0.14	
	P110	0.26	0.23	0.29	
	P111	0.31	0.30	0.05	
	P112	0.29	0.27	0.29	
	P113	0.39	0.33	0.11	
	P114	0.41	0.32	0.44	柱痕 SD8
	P115	0.30	0.19	0.10	
	P116	0.33	0.23	0.07	SK17 P115
	P117	0.32	0.29	—	
	P118	0.46	0.46	0.57	SX4
	P119	0.29	0.23	—	
	P120	0.29	0.24	—	
	P121	0.34	0.33	—	
	P122	0.34	0.26	—	
C-7 (A 区)	P1	0.65	0.51	0.13	
	P2	0.57	0.50	0.54	
	P3	0.24	0.21	0.17	
	P4	0.29	0.24	0.35	
	P5	0.33	0.25	0.31	柱痕
	P6	0.27	0.26	0.17	
	P7	0.33	0.30	0.11	P8
	P8	0.29	0.22	0.20	P7
	P9	0.41	0.31	0.26	柱痕
	P10	0.33	0.24	0.08	
	P11	0.25	0.21	0.10	
	P12	0.23	(0.17)	0.24	P13
	P13	0.28	0.25	0.23	P12
	P14	0.28	0.21	0.23	
	P15	0.31	0.25	0.52	
	P16	0.32	0.27	0.20	
	P17	0.32	0.28	0.36	柱痕
	P18	0.50	0.41	0.42	P19 須恵器坏
	P19	0.32	(0.17)	0.21	柱痕 P18・49
	P20	0.22	0.18	0.09	
	P21	0.26	0.19	0.07	
	P22	0.30	0.25	0.13	柱痕 石
	P23	0.28	0.22	0.13	
	P24	0.28	0.21	0.11	
C-7 (B 区)	P25	0.32	0.23	0.06	SJ1
	P26	0.23	0.17	0.20	柱痕
	P27	0.21	0.20	0.24	
	P28	0.21	0.18	0.06	
	P29	0.30	0.23	0.12	SJ1
	P30	0.31	0.23	0.16	SJ1
	P31	0.51	0.40	0.65	柱痕
	P32	0.25	(0.21)	0.23	柱痕 P33
	P33	0.28	0.20	0.25	P32
	P34	0.24	0.21	0.09	P35
	P35	(0.20)	0.20	0.08	P34
	P36	0.58	0.42	0.16	
	P37	0.27	0.23	0.10	
	P38	0.43	0.39	0.19	
	P39	0.54	0.43	0.38	
	P40	0.38	0.36	0.34	柱痕
	P41	0.29	0.28	0.10	
	P42	0.19	0.15	0.09	SJ1
	P43	0.37	0.34	0.11	SJ1
	P44	0.18	0.16	0.08	
	P45	0.25	0.20	0.47	柱痕 P46
	P46	0.25	0.25	0.42	柱痕 P45
	P47	0.17	0.16	0.50	柱痕 石
	P48	0.51	0.49	0.21	
	P49	0.30	0.22	0.31	柱痕
	P50	(0.26)	0.27	0.35	柱痕
	P51	0.17	0.15	0.18	
	P52	0.44	0.28	0.18	P53

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
C-7 (A 区)	P53	0.19	0.19	0.10	P52
	P54	0.30	0.23	0.26	
	P55	0.22	0.18	0.14	
	P56	0.32	0.25	0.15	
	P57	0.34	0.28	0.06	
	P58	0.28	0.24	0.27	
	P59	0.24	0.21	0.37	柱痕
	P60	0.35	0.29	0.32	柱痕
	P61	0.24	0.21	0.17	柱痕
	P62	—	—	—	欠番
	P63	—	—	—	欠番
	P64	—	—	—	欠番
	P65	0.42	0.35	0.18	
	P66	0.30	0.27	0.51	
	P67	0.25	0.19	—	
	P68	0.20	0.17	—	SX3
D-6 (A 区)	P1	0.42	0.39	0.15	
	P2	0.48	0.41	0.21	
	P3	0.46	0.45	0.48	
E-2 (B 区)	P1	0.23	0.22	0.13	
	P2	0.24	0.21	0.14	
	P3	0.23	0.22	0.35	
	P4	0.17	0.15	0.08	
E-3 (B 区)	P1	0.36	0.31	0.25	
	P2	0.27	0.19	0.21	
	P3	0.23	0.21	0.34	
	P4	0.28	0.26	0.21	
	P5	0.39	0.37	0.36	柱痕
	P6	0.22	0.17	0.11	柱痕
	P7	0.29	0.24	0.29	
	P8	0.30	0.27	0.43	
	P9	0.30	0.29	0.27	
	P10	0.38	0.36	0.17	柱痕
	P11	0.64	0.38	0.22	
	P12	0.34	0.33	0.29	
	P13	0.22	0.18	0.14	柱痕
	P14	0.28	0.26	0.33	
	P15	0.46	0.38	0.58	
	P16	0.65	0.42	0.13	柱痕
	P17	0.69	0.44	0.10	
	P18	0.31	0.29	0.31	石
	P19	0.60	0.33	0.39	柱痕
	P20	(0.35)	0.28	0.10	SK101
E-4 (B 区)	P1	0.34	0.24	0.18	柱痕
	P2	0.50	0.28	0.20	
	P3	0.50	0.48	0.39	
	P4	0.66	0.60	0.63	柱痕 寛永通寶6
	P5	0.69	0.55	0.23	
	P6	0.31	0.27	0.19	
	P7	0.37	0.33	0.23	
	P8	0.62	(0.46)	0.34	寛永通寶2
	P9	0.34	0.27	0.15	
	P10	0.48	0.32	0.26	
	P11	0.43	0.32	0.18	
F-4 (B 区)	P1	0.60	0.53	0.38	
	P2	0.61	0.58	0.40	
	P3	0.29	0.25	0.15	
	P4	0.42	0.31	0.27	
	P5	0.68	0.62	0.59	
	P6	0.35	0.30	0.14	
	P7	0.45	0.38	0.41	
	P8	0.49	0.40	0.35	
	P9	0.58	0.54	0.34	
	P10	0.68	(0.40)	0.42	
F-5 (B 区)	P1	0.49	0.38	0.47	
	P2	0.55	0.47	0.41	柱痕
	P3	0.31	0.28	0.20	
	P4	0.33	0.31	0.17	
	P5	0.44	0.39	0.14	
	P6	0.38	0.32	0.34	

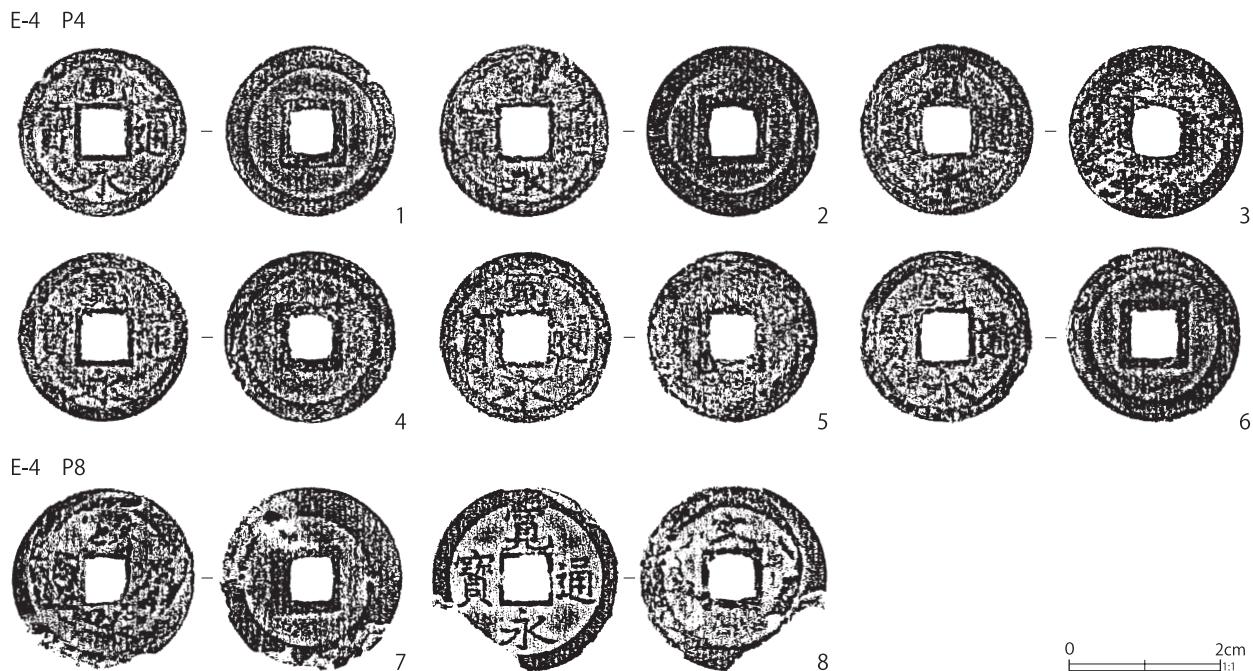
総計 426基(A区375基 B区51基)



第69図 ピット出土遺物（1）



第70図 ピット出土遺物（2）



第71図 ピット出土錢貨

第14表 ピット出土遺物観察表（第69・70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	(13.0)	[2.5]	—	GIJK	15	良好	灰	B-6 P2 南比企産	
2	須恵器	壺	—	[2.0]	(6.6)	GIJ	30	良好	灰	B-6 P2 南比企産 底部ヘラ描き・糸切痕	
3	須恵器	甕	—	[4.8]	—	EK	5	普通	灰	B-6 P26 古墳時代的な櫛描波状文	
4	須恵器	壺	—	[1.0]	(6.4)	GIJ	30	良好	灰	B-6 P58 南比企産 底部糸切痕	
5	須恵器	瓶	—	[6.3]	—	GI	10	良好	灰	B-6 P59 東金子産	
6	須恵器	甕	—	[2.9]	—	IK	5	良好	灰白	B-7 P6 東海産 外面自然釉 胎土緻密	
7	須恵器	壺	(13.0)	[3.2]	—	GIJ	30	良好	灰	B-7 P9 南比企産 体部下端ヘラケズリ	
8	須恵器	壺	(13.2)	3.9	6.0	GHI	45	良好	灰	C-5 P12 No.2・3 東金子産 底部糸切痕 外面刻書か 9c前	21-7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
9	須恵器	甕	—	[7.8]	—	CIJK	5	良好	灰	C-5 P12 No.1 南比企産	
10	須恵器	甕	—	[7.9]	—	EIJK	5	良好	灰	C-5 P12 南比企産	
11	須恵器	蓋	(8.8)	[1.6]	—	HI	5	良好	灰白	C-6 P4 湖西産 坏G蓋 外面降灰 7c後	
12	土師器	甕	(19.8)	[4.9]	—	GHI	25	普通	橙	C-6 P8 No.1 武藏型甕 くの字口縁 8c前	21-8
13	灰釉陶器	皿	—	[1.4]	(7.0)	I	25	良好	灰白	C-6 P95 猿投産 三日月高台に近い 内面施釉	
14	須恵器	甕	—	[4.6]	—	K	5	良好	青灰	C-6 P107 胎土緻密	
15	土師器	坏	(13.0)	[3.4]	—	CEG	25	普通	橙	C-7 P18 北武藏型坏 8c前	
16	土師器	甕	—	[3.0]	(5.4)	CGHI	40	普通	橙	C-7 P18	
17	須恵器	坏	13.3	4.2	5.3	GHI	85	良好	にぶい黄橙	C-7 P43 No.1 産地不明 酸化焰焼成	21-9
18	須恵器	甕	—	[2.6]	—	GIJK	5	良好	灰	E-2 P3 南比企産	
19	須恵器	皿	(15.0)	[2.0]	—	GHIK	15	普通	灰黄	E-3 P15 産地不明 9c後	
20	須恵器	坏	—	[1.1]	(6.0)	IJK	15	良好	灰白	E-3 P15 南比企産 底部ヘラ削り	
21	須恵器	坏	(12.0)	[3.6]	—	HIJ	10	良好	灰	E-4 P1 南比企産	
22	須恵器	坏	—	[0.9]	(6.0)	GIJ	50	良好	灰	E-4 P1 南比企産 底部糸切痕	
23	須恵器	甕	—	[13.4]	—	DIK	5	良好	灰	E-4 P1 外面自然釉	
24	須恵器	坏	(13.0)	[3.8]	—	IJK	5	良好	灰	E-4 P2 南比企産	
25	須恵器	甕	(20.0)	[4.5]	—	GI	10	良好	黄灰	F-5 P2 東金子産	
26	陶器	擂鉢	—	[3.0]	—	DHK	5	普通	にぶい黄橙	B-6 P26 濑戸美濃系 内外面錫釉 大窯第4段階	
27	陶器	皿	(12.4)	[2.3]	—	H	20	良好	灰白	B-6 P41 濑戸美濃系 内外面長石釉 17c前	24-10
28	かわらけ	小皿	—	2.1	—	CHI	10	普通	橙	B-6 P46 底部糸切痕(左) 胎土砂質	24-11
29	石製品	円盤	長さ[3.0] 幅3.1 厚さ0.5重さ7.2 緑泥片岩			—	—	—	—	C-5 P10 周縁部打欠き	26-2
30	かわらけ	小皿	—	[1.7]	(6.5)	AH	15	普通	にぶい黄橙	C-6 P6 底部糸切痕 全体磨耗 胎土粉質	24-12
31	陶器	皿	(11.8)	2.1	(6.7)	HI	5	普通	灰白	C-6 P22 No.1 濑戸美濃系 内外面長石釉 17c前	24-13
32	陶器	内禿皿	—	[1.6]	(6.8)	I	10	普通	灰黄褐	C-7 P39 濑戸美濃系 内外面灰釉・高台内ふきとり 内底面露胎 大窯第3-4段階	
33	石製品	砥石	長さ[3.0] 幅[2.9] 厚さ[1.3] 重さ20.2 流紋岩(緑色)			—	—	—	—	C-6 P52 下半部欠損 平面長方形 断面長方形 砥面5	
34	鉄製品	釘	縦[3.7] 横[1.1] 厚さ0.6重さ27.5			—	—	—	—	C-6 P53 先端部欠損	

第15表 ピット出土銭貨観察表 (第71図)

番号	種別	器種	法量 (単位: mm/g)					出土遺構	備考	図版
1	銅製品	錢貨	縦22.8	横22.8	厚さ1.3	重さ3.1		E-4 P4	寛永通寶 (新)	
2	銅製品	錢貨	縦23.0	横23.0	厚さ1.0	重さ2.9		E-4 P4	寛永通寶 (新)	
3	銅製品	錢貨	縦23.0	横23.0	厚さ0.9	重さ2.2		E-4 P4	寛永通寶 (新)	
4	銅製品	錢貨	縦23.0	横23.0	厚さ1.3	重さ3.4		E-4 P4	寛永通寶 (新)	
5	銅製品	錢貨	縦22.8	横22.9	厚さ1.3	重さ3.0		E-4 P4	寛永通寶 (新)	
6	銅製品	錢貨	縦23.1	横23.1	厚さ1.1	重さ2.7		E-4 P4	寛永通寶 (新)	
7	銅製品	錢貨	縦24.6	横24.5	厚さ1.1	重さ2.6		E-4 P8	寛永通寶 (古)	
8	銅製品	錢貨	縦24.8	横25.0	厚さ1.2	重さ1.9		E-4 P8	寛永通寶 文	

7 遺構外の出土遺物

表土掘削時や遺構確認時に出土した遺構の帰属が明らかでない遺物は、グリッド単位で取り上げた。このうち、図化したものを第72～79図、第16～19表にまとめた。

(1) 縄文時代の遺物（第72図）

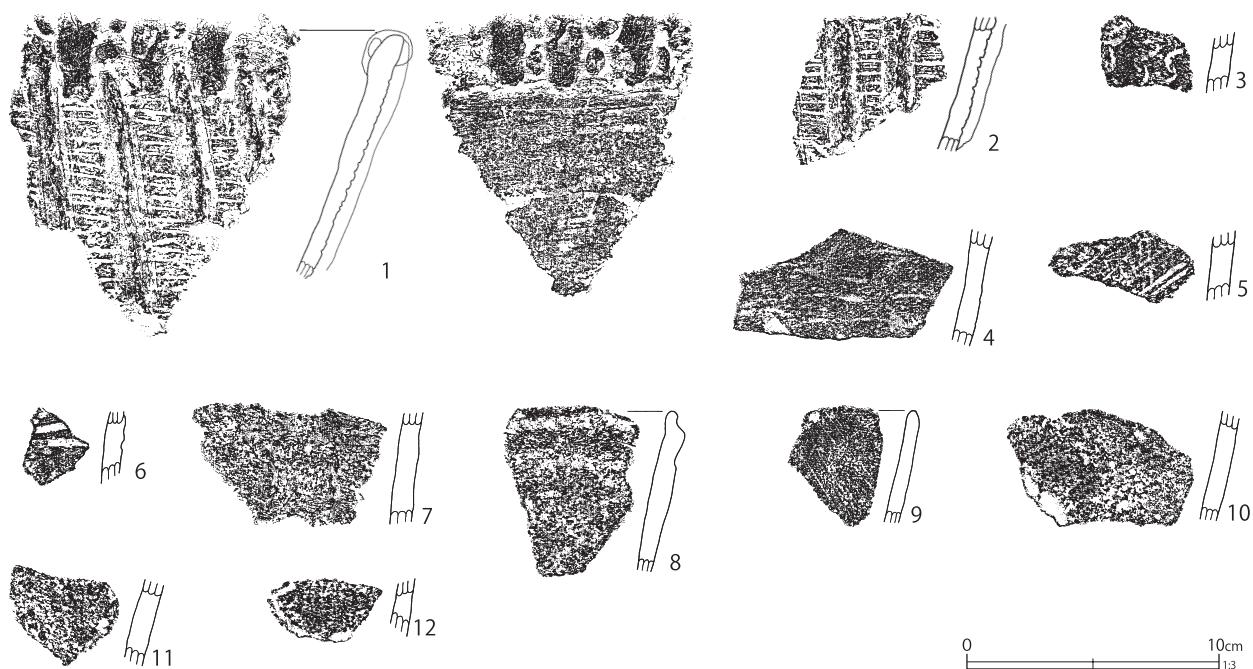
1・2は縄文時代前期末の諸磯c式土器で、同個体である。頸部で括れ、口縁部が開く深鉢形土器で、口唇部は折返し状を呈する。口縁部には地文沈線文上に等間隔の断面三角形状隆帯が垂下され、口唇上にも隆帯が及んでいる。口唇部上には垂下隆帯の間に、幅広の低隆帯が口唇部を巻き込んで施文される。口縁部裏面には低平隆帯と円形貼付文が交互に施文されている。

3は1段の縄の結節回転文が縦位に施文されるもので、前期末～中期初頭と考えられる。4～6は横位の平行沈線文が施文されるもので、4は器面のケズリ状成形が明瞭で、細砂粒を多く含むことから浮島・興津式系の土器と考えられる。いずれも前期末葉の土器群である。

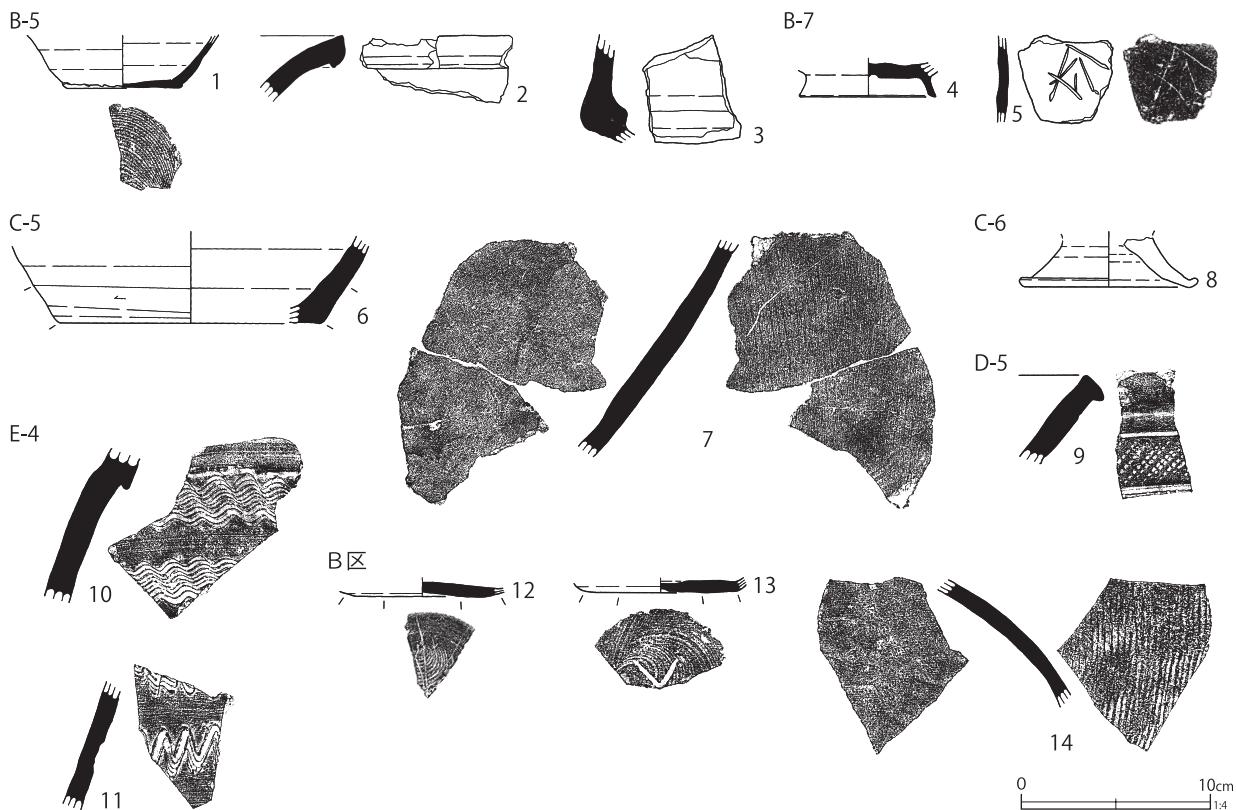
7は器面が荒れているが、雲母を含む中期中葉の阿玉台式土器である。8～12は後期前葉の土器群と思われる。8は口縁部に沈線が巡り、9は浅い沈線の格子目文が施文されている。10は単節L R縄文が横位に施文され、11・12は器面が荒れているが、無文土器であろう。

(2) 古代の遺物（第73図）

1は底部に回転糸切痕をもつ須恵器坏で、薄手のつくりである。東金子窯跡の製品で、時期は9世紀後半であろう。2は須恵器小型甕の口縁部で、南比企窯跡の製品と考えられる。3は頸部に補強帶を巡らした須恵器甕である。頸部補強帶甕は古墳時代における北関東型須恵器の特徴のひとつで、県内では荒川以北の児玉・大里地域の古墳から出土している。県南部では、さいたま市根切遺跡出土例がある。生産窯の特定は難しいが末野窯群の可能性が強い。時期は6世紀末葉から7世紀前半であろう。4は須恵器高台付坏で、東金子窯跡の製品である。5は須恵器瓶類の胴部片で、外面に



第72図 遺構外出土遺物 縄文土器



第73図 遺構外出土遺物（1）

掛かる自然釉のため判然としないが、浅い彫り込みの線刻画あるいは刻書と考えられるヘラ描きがみられる。6は平底の須恵器甕で、南比企窯跡の製品である。7は須恵器大甕の胴部で、外面に平行叩き、内面に無文当具痕を残す。8は土師器台付甕の脚台部で、強いヨコナデを施す。9～11は須恵器甕の口縁部である。9は湖西窯産に特徴的な櫛歯列点文が施される。時期は7世紀前半に位置づけられる。10・11は在地産の甕で、口縁部に櫛描波状文が施される。12・13は底部糸切後、回転ヘラケズリによる再調整の施された須恵器坏である。施工方法や使用工具は異なるが、双方の底部外面にヘラ記号がみられる。時期は8世紀後半に位置づけられる。14は須恵器甕の胴部片で、外面に平行叩き、内面に無文当具痕を残す。

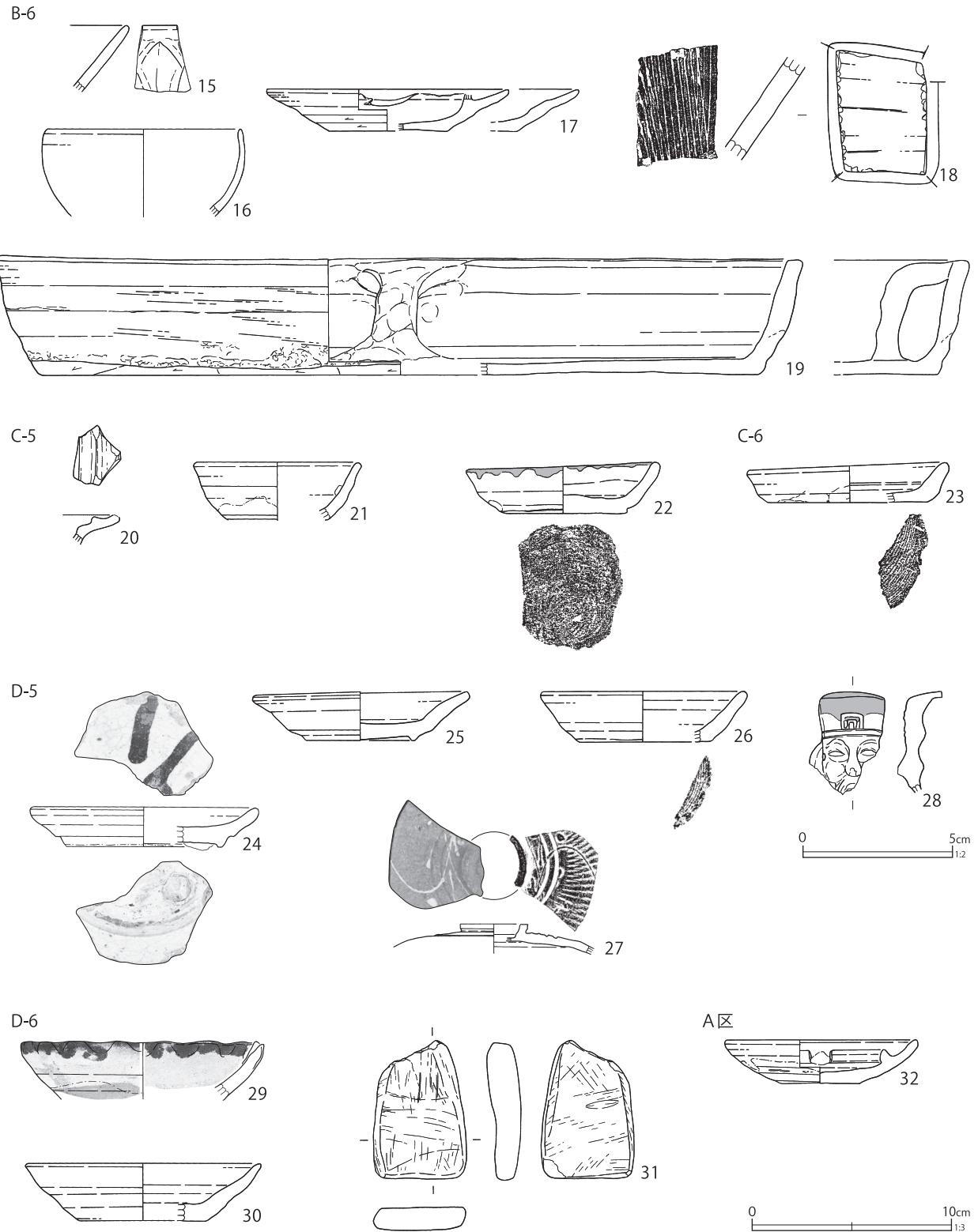
（3）中・近世の遺物（第74～79図）

第74・75図には中・近世の陶磁器、土器、土製品を示した。15は龍泉窯系青磁の蓮弁文碗で幅広

の蓮弁文を片切彫りで表す。16は京都信楽系陶器の丸碗、17は志戸呂系陶器の灯明皿でいずれも近世の所産である。18は堺明石系陶器の擂鉢である。砥具に転用されており、破損面をすべて研磨している。表面のみ破損部に沿って細かな敲打痕がみられる。19は瓦質土器の焙烙で、内耳部は下端が底面に接地する。外面は下端のみにケズリが施されている。18世紀代のものと考えられる。

20は灰釉が施された古瀬戸製品で、折縁深皿としたが、サイズがやや小さい。21は瀬戸美濃系陶器の坏で、黄色味の強い鉄釉が掛けられる。22・23はかわらけ小皿である。22は胎土が粗雑で角閃石を多量に含む。17世紀前葉～中葉の所産。23は全面炭化して特徴が観察し難いが、胎土には角閃石が含まれており、22と同じタイプと思われる。

24は瀬戸美濃系陶器で、いわゆる志野鉄絵皿である。17世紀前葉～中葉の所産である。25は瀬戸美濃系陶器で大窯期の稜皿である。16世紀末頃の所産である。26はかわらけ小皿で、全体が焦げて

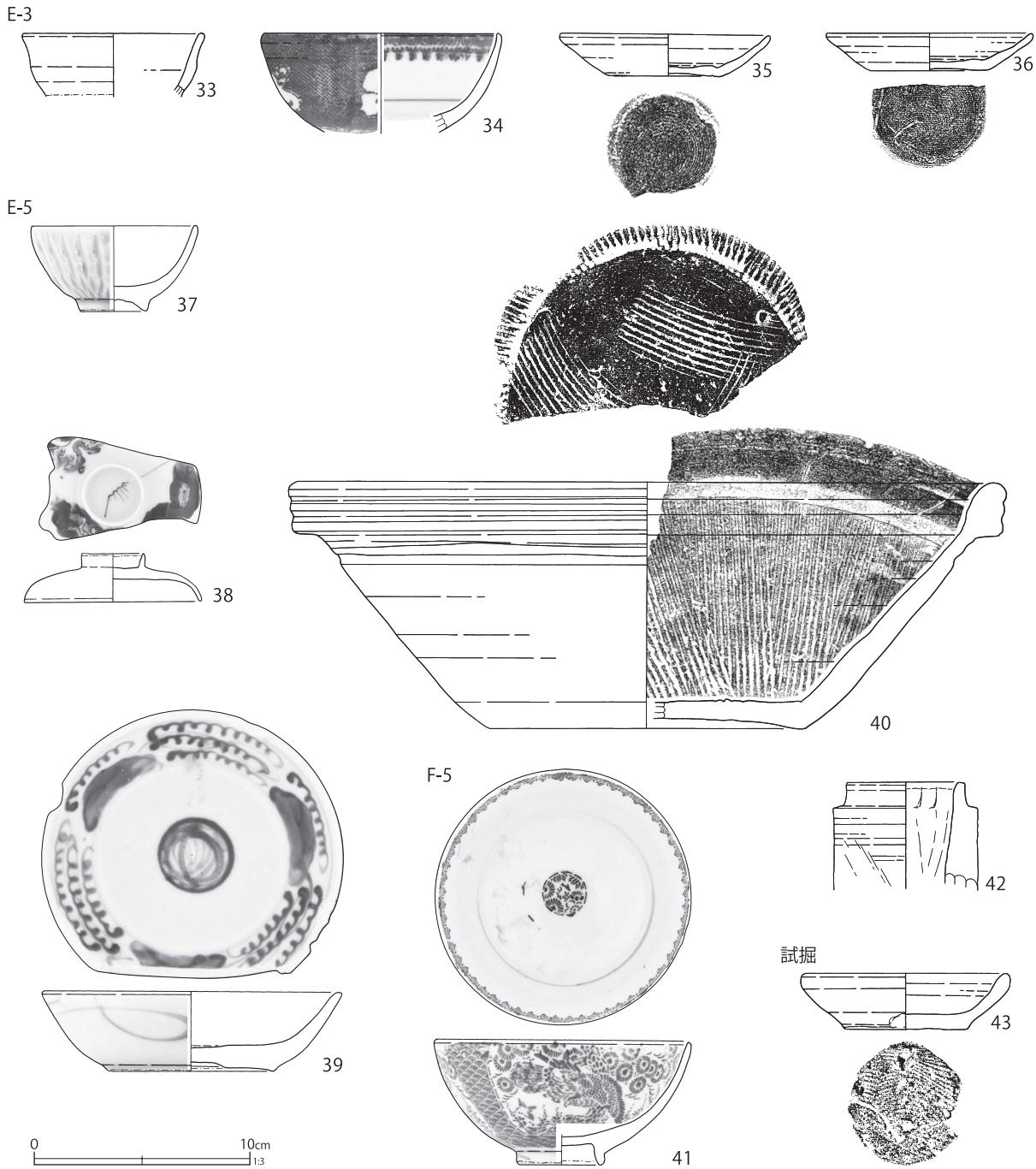


第74図 遺構外出土遺物（2）

おり灯明に用いられた可能性がある。胎土は粗雑で角閃石が多く含まれる。17世紀前葉頃の所産とみられる。27は陶器鍋の蓋で飯能焼である。28は

土製人形の頭部と考えられる。

29は陶器の皿だが、産地不詳である。ヒダ皿のような形態と想定される。30はかわらけ小皿

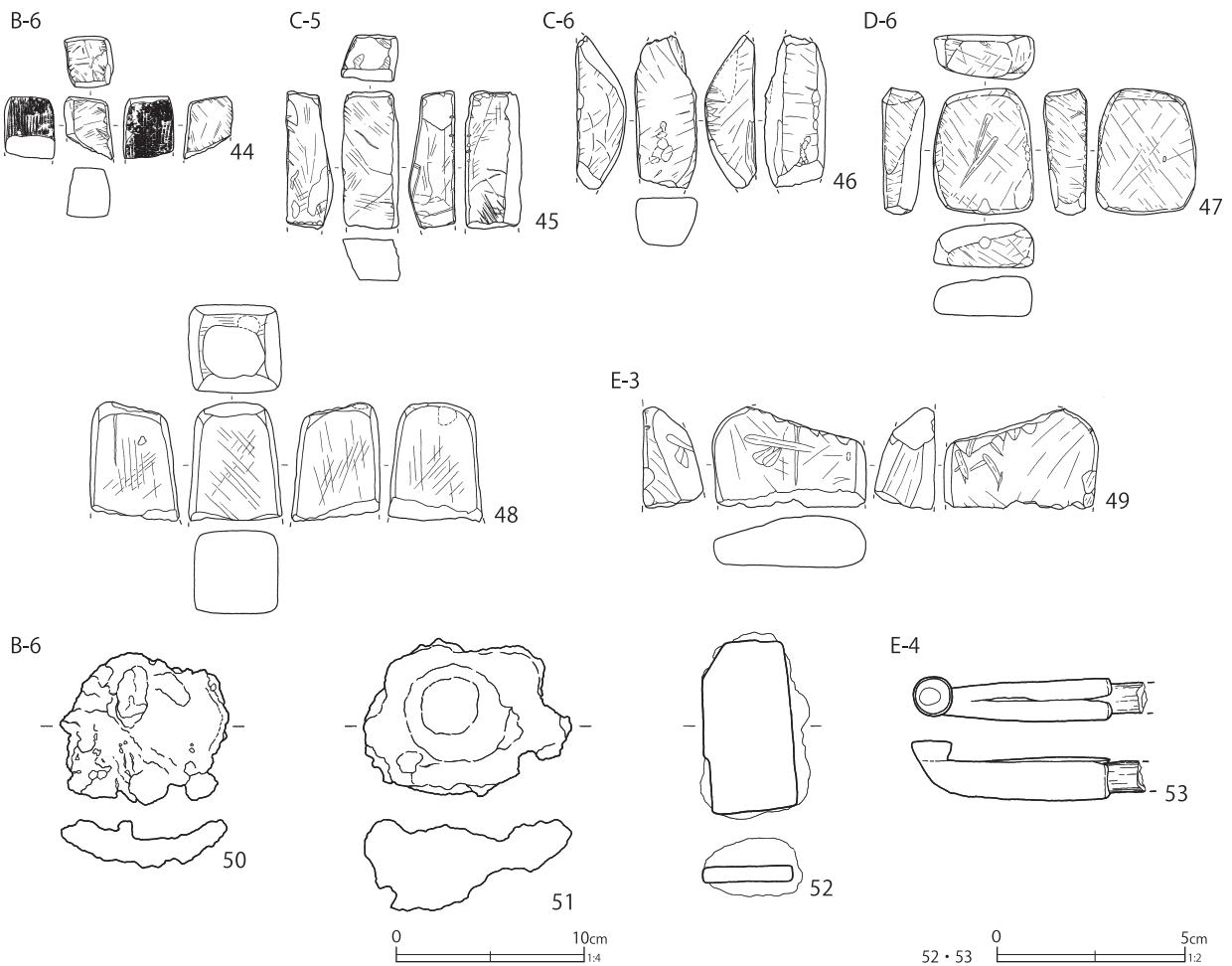


第75図 遺構外出土遺物（3）

で、口縁部の端部が尖る。31は瓦を転用した砥具でほぼ全面を使用している。32は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿で受部は低い。

33は瀬戸美濃系陶器の坏で、21に図示したものと同じタイプであるが別個体である。34は磁器の碗で型紙摺絵染付のものである。35・36は江戸在地系かわらけの小皿で、18～19世紀の所産とみら

れる。37は磁器の坏で、酸化クロム青磁釉の下に鎧状の施文がみられる。38は瀬戸美濃系磁器の丸碗蓋、39は瀬戸美濃系磁器、40は堺明石系陶器の播鉢で、いずれも19世紀前半頃の所産である。41は磁器の碗で、型紙摺絵染付のものである。42は土師質土器の焼塩壺で、板作り成形である。43はかわらけ小皿で、胎土は粗雑である。17世紀代の



第76図 遺構外出土遺物（4）

ものと思われる。

以上の陶磁器類は、15世紀以前のものが極めて少なく、16世紀後葉以降にまとまりがみられる。

第76図には石製品、金属製品を示す。44～46までは緑色を呈する流紋岩製の砥石である。44は櫛歯状工具痕が残り、18世紀以降の所産と考えられる。45～46は側面形が台形状を呈するものである。16～17世紀に類例が多い。47～49は砂岩製の砥石である。

50・51は椀形滓である。50は磁着がみられる。51の磁着は微かであるが、図示した右下に羽口を設置した際の痕跡が残る。鉄滓が出土した第2号性格不明遺構の所在するB-6グリッドから出土していることから、その周辺に鍛冶関連遺構が存在する可能性を示唆するものである。

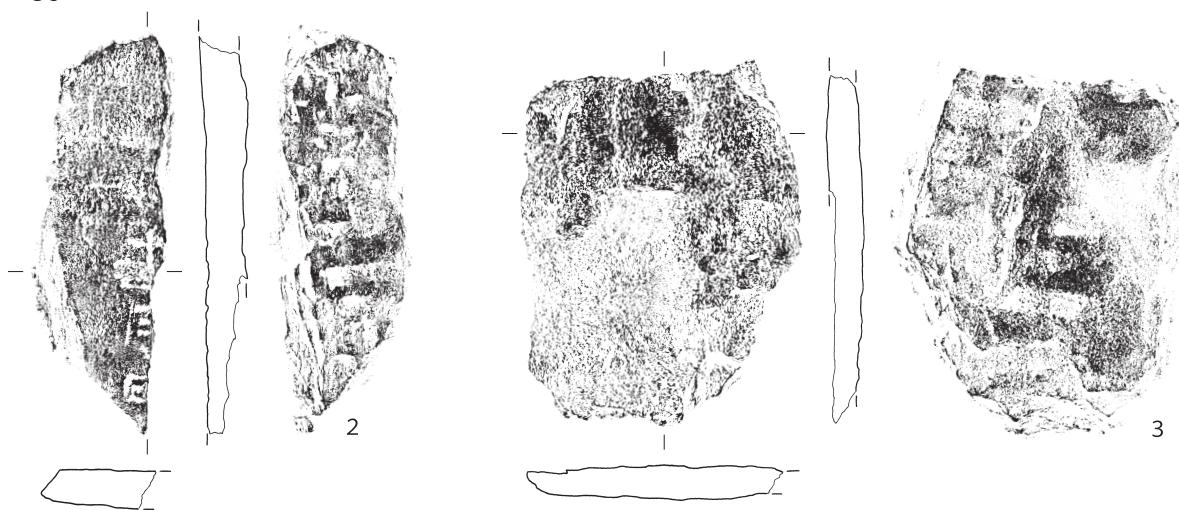
52は延板状の鉄製品で、用途・性格は不明である。53は19世紀代の煙管（雁首）である。鎌着けによる合わせ目が明瞭で、羅宇の一部が残る。

第77・78図は緑泥片岩製の石製品で、板碑と加工石材・砥石類がある。1は阿弥陀種子板碑の上部で小型の板碑である。15世紀～16世紀前半のものである。2は銘文「十一月日」が残る板碑の破片である。3は背面の工具痕から板碑の基部破片と考えられる。4は小型の阿弥陀種子板碑の上部破片で15世紀以降の製品とみられる。5は加工石材で、側縁部に工具による削痕がみられる。削痕が波打っており板碑の加工痕では無いが、その転用品である可能性は残る。6は研磨痕がみられる砥石である。7は板碑の破片であるが表面の大部分が剥落している。銘文が遺存するが判読できな

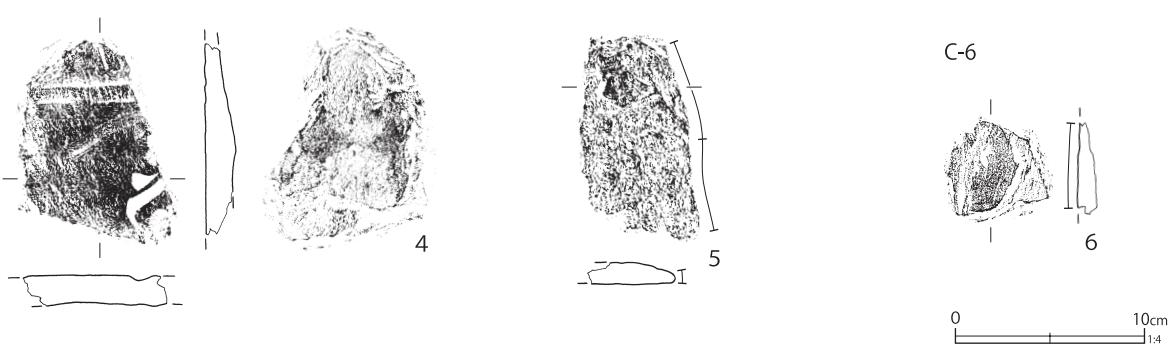
B・C-5



C-5

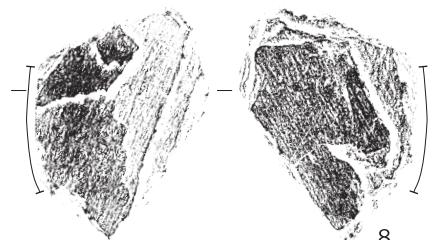
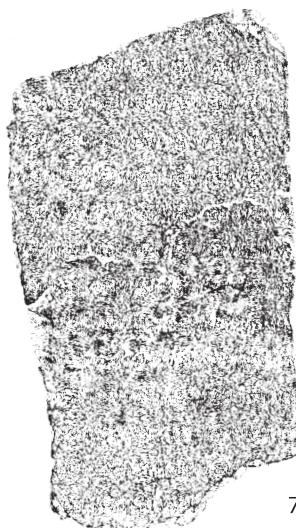


C-6

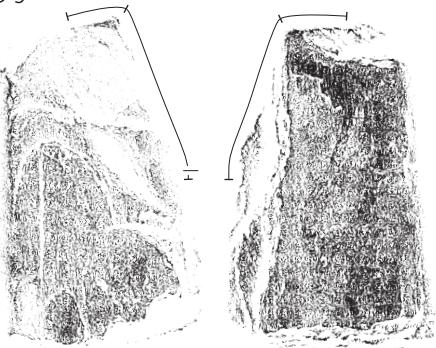


第77図 遺構外出土板碑 (1)

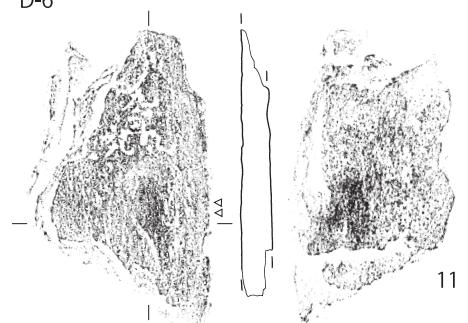
C-7



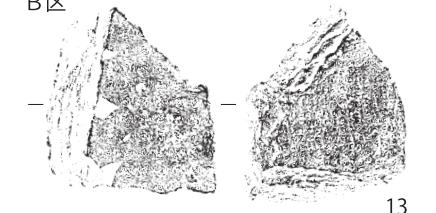
D-5



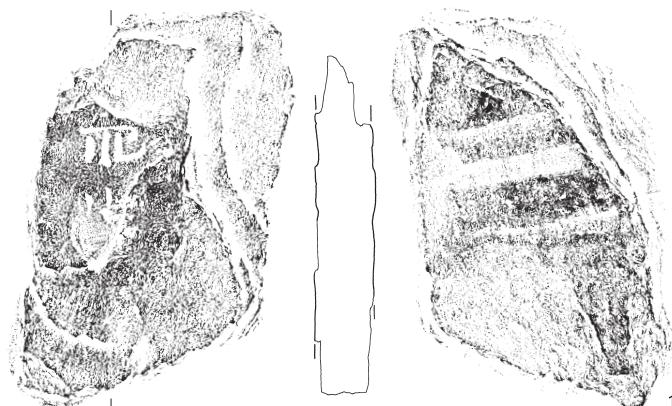
D-6



B区

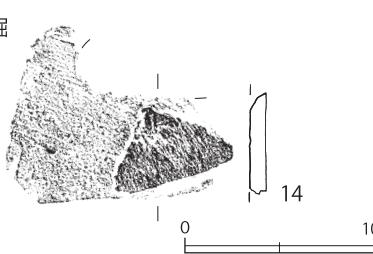


F-4



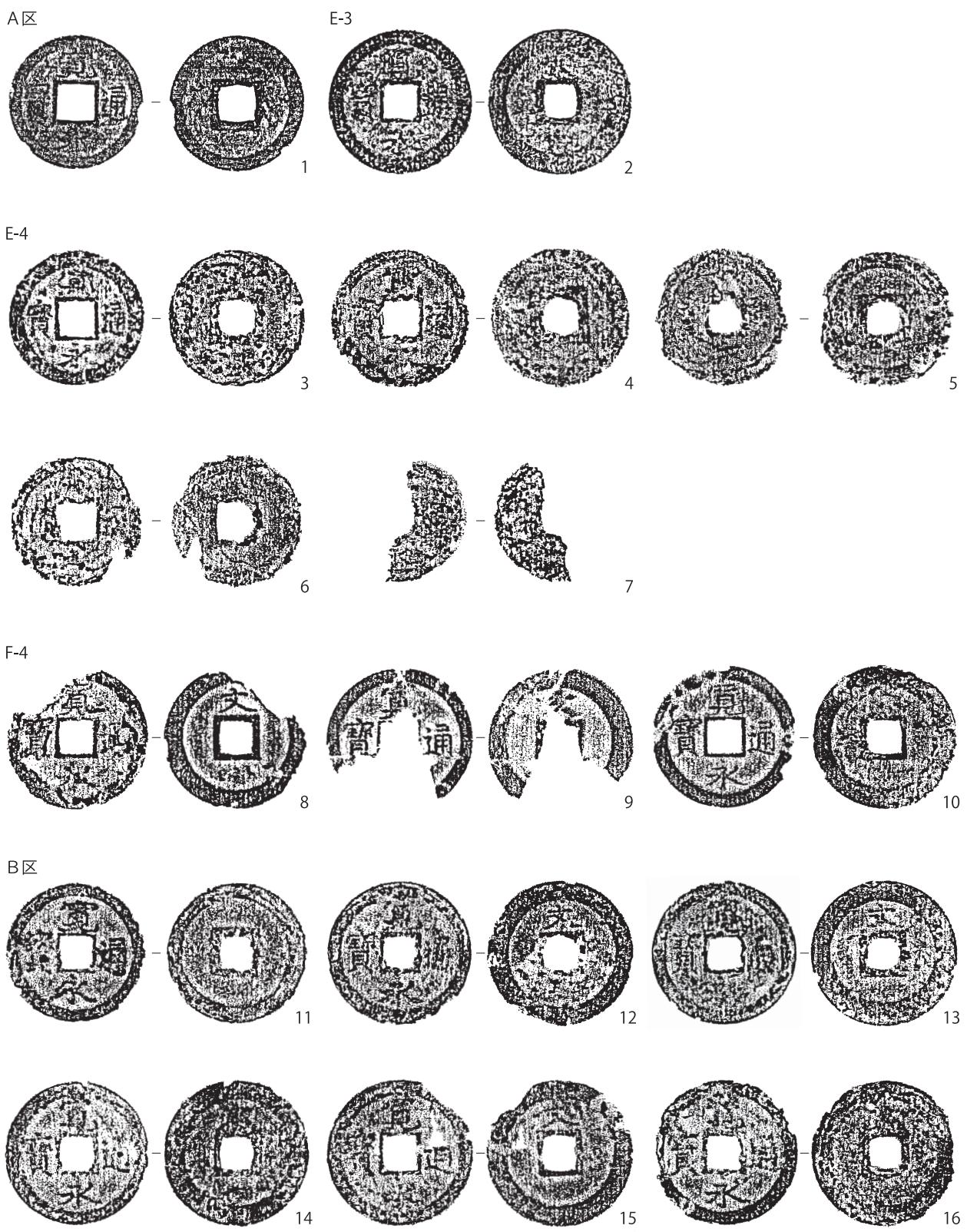
12

試掘



0 10cm
1:4

第78図 遺構外出土遺物（2）



0 2cm

第79図 遺構外出土錢貨

い。剥落面に二次的な研磨痕がみられる。8は側縁部が残る板碑の破片だが、二次的な研磨痕が認められる。9は枠線及び蓮座部分が残る。14世紀代の板碑と考えられる。破損部に二次的な研磨が加えられている。10は板碑の基部破片で、側縁部に二次的な研磨がみられる。11は板碑の紀年銘の一部で「元年〈乙亥〉」が読める。干支から「康正元年」(1455)の可能性がある。12は偈頌の一部が刻まれた板碑の破片である。14世紀代に遡る

比較的大型の板碑と考えられる。13は板碑で、アクリ点とみられる種子の一部が遺存する。14は弧状の加工痕が認められ、板碑の台石と推定される。

第79図には銭貨を示した。すべて寛永通寶の銅錢である。1・2は単体であったが、ほかは固着した状態で出土している。六道銭として副葬されたもの的一部であろう。1を除き、すべてB区からの出土である。組成は、文銭と新寛永から構成されるものが多い。

第16表 遺構外出土遺物観察表（1）（第73～75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	—	[2.8]	(6.0)	GI	30	良好	灰	B-5 東金子産 底部糸切痕 9c後	
2	須恵器	甕	—	[3.5]	—	GIJ	5	良好	灰	B-5 南比企産	
3	須恵器	甕	—	[5.7]	—	GI	5	良好	灰	B-5 頸部補強帶 北関東系須恵器	
4	須恵器	高台付壺	—	[1.8]	(7.2)	GI	40	良好	灰	B-7 東金子産 底部ヘラ切り後高台貼付	
5	須恵器	瓶類	—	[4.5]	—	IK	5	良好	灰	B-7 外面線刻 自然釉	
6	須恵器	甕	—	[4.6]	(14.0)	GIJK	20	良好	灰	C-5 南比企産 脊部下端ヘラケズリ	
7	須恵器	甕	—	[12.5]	—	EIJK	5	良好	灰	C-5 南比企産 外面平行叩き	
8	土師器	台付甕	—	[2.6]	(9.4)	AGHI	20	普通	浅黄橙	C-6 脚台部	
9	須恵器	甕	—	[4.6]	—	IK	5	普通	灰白	D-5 湖西産 櫛歯列点文 内面自然釉	
10	須恵器	甕	—	[8.2]	—	DEIK	5	良好	灰	E-4 櫛描波状文 内面自然釉	
11	須恵器	甕	—	[6.7]	—	EIK	5	良好	灰	E-4 櫛描波状文 内面降灰	
12	須恵器	壺	—	[0.8]	(6.8)	GIJ	20	良好	にぶい橙	B区 南比企産 底部ヘラ記号 8c後	
13	須恵器	壺	—	[0.8]	(8.0)	GHIJ	45	良好	灰	B区 南比企産 底部ヘラ記号「×」 8c後	
14	須恵器	甕	—	[6.7]	—	EIJK	5	良好	灰	B区 南比企産 外面降灰	
15	磁器(青磁)	碗	—	[3.3]	—	H	5	良好	灰白	B-6 中国龍泉窯系 内外面青磁釉 外面蓮弁文 太宰府碗II類 13c後-14c前	24-14
16	陶器	碗	(9.8)	[4.3]	—	K	15	良好	灰白	B-6 京都信楽系 内外面透明釉 18c後	
17	陶器	灯明皿	(12.0)	2.0	(6.0)	I	25	良好	黄灰	B-6 志戸呂系 内外面鉄釉 17c後-18c前	
18	陶器	擂鉢	—	[5.1]	—	DE	5	良好	橙	B-6 堆明石系 内面擂目 断面4面を砥具転用	24-15
19	瓦質土器	焰烙	(40.2)	6.0	(36.2)	CHI	40	普通	灰白	B-6 底部シワ状痕 燻す 体部外面スヌ付着 18c前	
20	陶器	折縁深皿	—	[1.5]	—	K	5	良好	灰白	C-5 古瀬戸 内外面灰釉 後期様式	25-1
21	陶器	壺	(8.0)	[2.8]	—	HI	25	普通	浅黄橙	C-5 瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c後-18c前	
22	かわらけ	小皿	(9.3)	2.5	6.3	C	50	普通	橙	C-5 底部糸切痕(左) 胎土砂質 口縁部スヌ付着	25-2
23	かわらけ	小皿	(9.8)	1.9	(7.9)	CI	15	普通	黒	C-6 底部糸切痕 全面炭化	
24	陶器	皿	(11.0)	2.0	(7.6)	DE	20	普通	灰黄	D-5 瀬戸美濃系 内外面長石釉 内面鉄絵・ピン痕1遺存 高台内窯道具付着 17c前-中	
25	陶器	棱皿	10.5	2.5	5.5	I	100	普通	橙	D-5 瀬戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第4段階	25-3

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
26	かわらけ	小皿	(10.0)	2.5	(6.5)	CI	20	普通	褐灰	D-5 底部糸切痕 胎土砂質 全体炭化	25-4
27	陶器	蓋	—	[1.4]	—	I	10	良好	黄灰	D-5 飯能焼 内面灰釉 外面トビガナナ状施文・イッヂン掛け施文 19c つまみ径(3.4)cm	25-5
28	土製品	人形	長さ[3.5] 幅[2.5] 厚さ[1.6]			AHI	—	良好	橙	D-5 型成形 内面布压痕 頭部黒色塗布物 耳付近に穿孔	26-3
29	陶器	皿	(12.0)	[2.9]	—	I	20	良好	灰黄褐	D-6 内外面糠白釉 口縁部鉄釉	
30	かわらけ	小皿	(11.7)	2.8	(3.2)	ACH	15	普通	橙	D-6 胎土粉質	25-6
31	土製品	転用砥具	長さ6.9 幅4.6 厚さ1.1-1.5			HI	—	普通	灰黄褐	D-6 平瓦転用 全面二次使用	25-7
32	陶器	灯明皿	9.4	2.2	4.0	I	80	良好	褐灰	A区表採 濬戸美濃系 内外面柿釉・底部ふきとり 体部外面重焼痕 19c前	25-8
33	陶器	壺	(8.2)	[2.9]	—	DIK	20	普通	淡黄	E-3 濬戸美濃系 内外面鉄釉 18c前	
34	磁器	碗	(11.0)	[4.6]	—	—	20	良好	白	E-3 濬戸美濃系 内外面施釉 型紙摺絵染付	
35	かわらけ	小皿	9.7	2.0	5.2	AHK	70	普通	灰白	E-3 江戸在地系 底部糸切痕(左) 近世	25-9
36	かわらけ	小皿	(9.4)	1.7	5.4	ACHI	55	普通	橙	E-3 江戸在地系 底部糸切痕(左) 内面上位一部スス付着 近世	25-10
37	磁器	壺	7.4	3.9	3.0	—	70	良好	白	E-5 濬戸美濃系 内外面酸化クロム青磁釉 外面トビガナナ状施文 19c後-末	25-11
38	磁器	蓋	(8.1)	2.2	—	—	40	良好	白	E-5 濬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 19c中 つまみ径2.8cm	
39	磁器	皿	13.6	3.7	7.5	—	75	良好	白	E-5 濬戸美濃系 内外面施釉・染付 蛇の目凹状高台 19c前	25-12
40	陶器	擂鉢	(32.0)	11.4	(14.7)	DEGM	25	良好	橙	E-5 塙明石系 砂目底 内面擂目 19c前-中	25-13
41	磁器	碗	11.6	5.7	3.8	—	100	良好	白	F-5 濬戸美濃系 内外面施釉 型紙摺絵染付 19c後	25-14
42	土師質土器	焼塩壺	(5.4)	[4.9]	—	DEGH	15	普通	浅黄橙	F-5 内面縦方向のナデ状痕跡 外面ヨコナデ	25-15
43	かわらけ	小皿	(9.5)	2.6	(5.7)	CK	40	普通	橙	試掘 底部糸切痕 胎土砂質 17c	25-16

第17表 遺構出土遺物観察表（2）（第76図）

番号	種別	器種	法量（単位：cm/g）	遺構	備考	図版
44	石製品	砥石	長さ[3.3] 幅2.6 厚さ2.7 重さ30.9 流紋岩(緑色)	B-6	下半部欠損 極歯状工具痕 砥面3	
45	石製品	砥石	長さ[7.3] 幅3.0 厚さ2.5 重さ82.0 流紋岩(緑色)	C-5	下半部欠損 平面長方形 断面長方形 表面鉄分付着 刃物痕・工具痕 砥面4	
46	石製品	砥石	長さ[8.1] 幅3.3 厚さ2.7 重さ85.3 流紋岩(緑色)	C-6	上下端部欠損 刃物痕 砥面4	
47	石製品	砥石	長さ6.7 幅5.3 厚さ2.3 重さ118.5 砂岩	D-6	完形 断面長方形 刃物痕 砥面6	
48	石製品	砥石	長さ[6.3] 幅[5.0] 厚さ[4.7] 重さ231.4 砂岩	D-6	下半部欠損 平面長方形 断面正方形 砥面4	
49	石製品	砥石	長さ[5.3] 幅8.2 厚さ[3.2] 重さ164.8 砂岩	E-3	上端・下半部欠損 刃物痕 砥面2 被熱	
50	鉄製品	楕円錐	縦8.1 横8.9 厚さ2.5 重さ161.7	B-6	磁着あり	
51	鉄製品	楕円錐	縦8.3 横11.0 厚さ4.9 重さ345.6	B-6	羽口設置痕 磁着微か	
52	鉄製品	延板品	縦4.5 横2.4 厚さ0.4 重さ31.8	B-6	刃部なし	
53	銅製品	煙管	長さ[6.2] 高さ1.5 厚さ1.1 重さ10.0	E-4	雁首 羅宇一部残存 鎏着け 19c	

第18表 遺構外出土板碑観察表（第77・78図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	遺構	備考	図版
1	石製品	板碑	[26.0]	19.3	2.6	1553.5	緑泥片岩	B-5 C-5	ケガキ線 二条線 種子(キリーク・正体字) 月輪 蓮座 側面打ち割り成形 背面押し削り痕(幅1.3cm) 15-16c前	28-5
2	石製品	板碑	[21.3]	[6.8]	2.3	482.1	緑泥片岩	C-5	銘文「十一月日」 背面押し削り痕(幅0.9cm) 被熱	28-6
3	石製品	板碑	[19.3]	[14.7]	1.7	854.0	緑泥片岩	C-5	側面打ち割り成形 背面押し削り痕(幅1.3cm/1.0cm) 表面剥離の可能性あり 弱く被熱	
4	石製品	板碑	[10.9]	[7.8]	1.6	202.3	緑泥片岩	C-5	二条線 種子(キリーク) 側縁打ち割り成形 弱く被熱	28-7
5	石製品	加工石材	[11.7]	[6.2]	1.1	94.2	緑泥片岩	C-5	元は板碑か 側縁部二次加工(削痕)	
6	石製品	砥石	[5.5]	[5.5]	1.0	39.4	緑泥片岩	C-6	板碑の二次利用か	
7	石製品	板碑	[28.5]	[15.2]	2.0	1487.1	緑泥片岩	C-7	銘文の一部(判読不明) 側縁部全面的にケズリ 黄鉄鉱含む 再加工痕あり・上面二次使用(研磨)	
8	石製品	板碑	[12.7]	[9.1]	1.4	210.7	緑泥片岩	C-7	側縁一部ケズリ 破損面二次加工痕(削痕)	
9	石製品	板碑	[17.2]	[10.3]	2.1	635.5	緑泥片岩	D-5	蓮座 桟線 側縁全面ケズリ 破損面二次使用(研磨)	28-8
10	石製品	板碑	[21.0]	[12.5]	1.5	522.8	緑泥片岩	D-5	基部 側縁部ケズリ 基部側は打ち割り成形 被熱(コゲ)	28-9
11	石製品	板碑	[16.3]	[9.3]	1.6	336.8	緑泥片岩	D-6	ケガキ線 銘文「[]元年乙亥」康正元年(1455)か 側縁部一部ケズリ 背面に浅い押し削り痕(幅1.1cm)	28-10
12	石製品	板碑	[21.2]	[14.0]	3.1	1349.4	緑泥片岩	F-4	銘文「衆生」(偈頌の一部) 背面押し削り痕(幅1.2cm) 14c	28-11
13	石製品	板碑	[10.4]	[7.7]	1.8	218.0	緑泥片岩	B区	種子(キリークか) 蓮座 15-16c 磁鉄鉱含む	
14	石製品	台石	[9.5]	[12.1]	[0.8]	136.9	緑泥片岩	試掘	裏面全面剥離	

第19表 遺構外出土錢貨観察表（第79図）

番号	種別	器種	法量(単位: mm/g)	出土遺構	備考	図版
1	銅製品	錢貨	縦23.3 横23.3 厚さ1.0 重さ2.3	A区	寛永通寶(新)	
2	銅製品	錢貨	縦25.1 横25.2 厚さ1.3 重さ3.4	E-3	寛永通寶(新)	
3	銅製品	錢貨	縦23.5 横23.6 厚さ1.4 重さ2.6	E-4	寛永通寶(新)	
4	銅製品	錢貨	縦24.4 横24.1 厚さ1.5 重さ3.2	E-4	寛永通寶(新)	
5	銅製品	錢貨	縦23.9 横[22.8] 厚さ1.4 重さ1.9	E-4	寛永通寶(新)	
6	銅製品	錢貨	縦22.7 横22.7 厚さ0.9 重さ1.5	E-4	寛永通寶(新)	
7	銅製品	錢貨	縦[20.1] 横[13.3] 厚さ0.9 重さ0.7	E-4	寛永通寶(新)	
8	銅製品	錢貨	縦[24.2] 横25.0 厚さ1.2 重さ2.0	F-4	寛永通寶 文	
9	銅製品	錢貨	縦[23.6] 横25.0 厚さ1.4 重さ1.3	F-4	寛永通寶 文	
10	銅製品	錢貨	縦25.0 横24.9 厚さ1.1 重さ2.4	F-4	寛永通寶(新)	
11	銅製品	錢貨	縦24.5 横24.3 厚さ1.1 重さ2.6	B区	寛永通寶(古)	
12	銅製品	錢貨	縦25.3 横25.2 厚さ1.3 重さ2.9	B区	寛永通寶 文	
13	銅製品	錢貨	縦25.3 横25.2 厚さ1.2 重さ3.1	B区	寛永通寶 文	
14	銅製品	錢貨	縦25.4 横25.3 厚さ1.2 重さ3.3	B区	寛永通寶 文	
15	銅製品	錢貨	縦25.5 横25.5 厚さ1.2 重さ1.9	B区	寛永通寶 文	
16	銅製品	錢貨	縦25.4 横[24.8] 厚さ1.3 重さ2.9	B区	寛永通寶 文	

V 調査のまとめ

1 上宿遺跡第1地点の調査成果

上宿遺跡第1地点の発掘調査により、これまで文献資料を中心に語られることの多かった志木市宗岡地区の歴史を、新たに考古資料をもとに読み解くことができるようになった。

今回の調査成果は、①平安時代、②中世後期から近世前期、③近世後期の3時期に大きく分けられる。以下、各時期の様相について概観する。

平安時代の様相

遺構としては、住居跡1軒、土壙3基、井戸跡2基、溝跡1条が検出された。

第1号住居跡はカマドをもつ一辺約3mの小型の住居跡で、口径12cm台の底部回転糸切離し未調整の須恵器坏を主体とする。時期的には鳩山窯跡群編年（渡辺1990）のVII期（以下、H〇期と表現）に並行する9世紀中頃から後半に位置づけられる。また、胴部外面に叩き整形を施す東関東系の土師器甕が伴出している点も留意される。

土壙（第12・13・109号土壙）は、住居跡と同時期か、やや後出するHVIII期に位置づけられる。このうち第12号土壙からは、鉄製紡錘車の紡輪が出土し、集落内で麻糸などの糸生産が行われていた可能性を示唆する。

2基の井戸跡のうち、第10号井戸跡からは底部糸切離し後、回転ヘラケズリ再調整を施す須恵器坏が出土しており、住居跡に先行するHVI期の8世紀後半から末葉に位置づけられる。一方、第18号井戸跡からは内面にのみ施釉する猿投産の黒笠90号窯式前期の特徴を示す灰釉陶器碗が出土しており、9世紀後半に位置づけられる。

このように平安時代の遺構数は少なく、集落の規模については不明である。そこで、中・近世の遺構に混在した平安時代の遺物も取り上げ、集落の消長を跡づけてみたい。まず、ピットから出土した土師器の北武藏型坏（第69図15）や「く」の

字状口縁の武藏型甕（同図12）から、8世紀前半には集落が成立していたことが想定される。続く、8世紀末から9世紀初めは、井戸跡や溝跡から底部再調整をもつ須恵器坏が出土しており、この時期が集落としての発展期であったと考えられる。そして、集落の終焉は第4号溝跡から出土した底部回転糸切離し未調整の須恵器坏（第37図9～13）などから、HVIII期の9世紀後半から末葉を想定することができる。

注目される遺物としては、第5号溝跡出土の「市」墨書土器（第37図22）が挙げられる。9世紀中頃の東金子窯産の製品で、逆台形をした器形が特徴的である。「津」などの交通の要所としての遺跡の性格を考えるうえで、今後検討が必要であろう（井上2004）。

7世紀後半以降、荒川の対岸には足立郡家に比定されているさいたま市大久保領家遺跡周辺の遺跡群が成立する。それを背景に、足立郡家と武藏国府を結ぶ最短ルートとしての陸路の拡大に伴い、まさしく水陸交通の結節点としての宗岡地区が重要な役割を果たすことになったのであろう。

中世後期から近世前期の様相

遺構としては、2条の薬研堀（第1・2号溝跡）、第4～6号溝跡、渡来銭を副葬する第4号土壙、板碑や大窯第4段階の瀬戸美濃系陶器を出土した第4・6～9・11号井戸跡、応永年間銘の板碑を出土した第4号性格不明遺構などがある。

第1・2号溝跡に伴う遺物は極めて少なく、16世紀以後に掘削されたほかの溝跡よりも古い可能性が高い。年代を推測する重要な鍵を握るのが、一連の溝と想定した第4号溝跡出土の古瀬戸折縁中皿（第40図54）である。これにより薬研堀の機能した時期が14世紀以降にあったことが想定される。しかし、周辺の井戸跡や溝跡から出土した陶

磁器類の時期からすれば、本格的に屋敷地として機能した時期は、16世紀後葉から17世紀前半と想定される。現段階では、本遺跡の性格を単純に中世館跡に結びつけて理解することは難しく、むしろ、中世末期以降における周辺地域の集落動態との関連の中で位置づけていくべきであろう。

出土遺物のうち、14世紀から15世紀にかけて製作された板碑が、井戸跡や溝跡などからまとまって出土している。第4号井戸跡から出土した南北朝（北朝）の応安四年銘（1371）を最古に、第11号井戸跡と第4号性格不明遺構からは南北朝統一後の応永年間銘（1394～1428）、第3・7号溝跡周辺からは匱正元年銘（1455）、第3号溝跡からは匱正四年銘（1463）の板碑がそれぞれ出土している。先述したように遺構から出土した陶磁器類には16世紀後葉から17世紀前半にまとまりがみられ、板碑の製作年代と遺構の年代との間には、大きな時間差が認められる。

併せて、出土した板碑の多くには二次加工痕としての顕著な砥具使用痕や被熱痕が特徴的にみられる。石材の乏しい当地にあっては、何らかの再利用を目的に板碑を他所から持ち込み、二次加工を施し、再利用した後に、井戸跡や溝跡へ廃棄するような過程が想定される。逆に考えれば、板碑が造立されていた「宗教的な空間」が、遺跡の近傍に存在していたことを意味している。

また、規模の大きな第3号溝跡と第7号溝跡は、出土遺物の様相から17世紀前半に掘削され、19世紀初めには埋没している。先述したように宗岡村には、大雨の際、北に連なる南畠村から押し寄せる溢水が宗岡村側に流下するのを遮断するために、正保年中から寛文の初め頃（1644～1662）に「佃堤」と呼ばれる、東西1,217mもの長い堤防が、この地を知行していた旗本岡部氏の家臣白井武左衛門によって築かれている（志木市教育委員会1988）。しかし築堤後も、たびたび宗岡村は洪水の被害を蒙っていたことが文献に残されてい

ることから、第3・7号溝跡は、根切溝などの單なる区画溝ではなく、洪水時の落とし（排水）としての機能も兼ね備えていたのであろう。

近世後期の様相

現代まで千光寺ものの墓地であったB区からは、近世後期から近代にまで続く墓壙群が検出されている。土壙墓は、墓壙の規模や形状の違いから、大きく3つに分類される。

A類…一辺1m前後の平面方形を呈し、深さ80cm前後まで垂直に掘り込み、底面が平坦なもの（第107・111・113号土壙）。

B類…直径70cm前後の平面円形を呈し、深さ80cm前後まで垂直に掘り込み、底面の平坦なB1類（第105・108号土壙、E-4グリッドP4）と、掘り込みの浅いB2類（第104・110号土壙、E-4グリッドP8）に細分される。

C類…長軸1.8m×短軸0.7mの平面方形を呈し、浅い掘り込みのもの（第101・102号土壙）。

以上の土壙墓の分類を基に埋葬形態を復元すると、小規模なB2類については不明であるが、A類は箱形の木棺による座葬、B1類は早桶などの円形の木棺による座葬、C類は伸展葬と想定され、概ねA・B1類⇒C類への変遷が追える。

副葬品には、第107号土壙から真鍮製の煙管が出土しているほか、寛永通寶6枚を六道錢として副葬する墓が多い。そこで、固着した状態で出土した寛永通寶の組成をみると、古寛永のみで構成された例はなく、古寛永+文錢（1例）、古寛永+文錢+新寛永（2例）、古寛永+新寛永（3例）、新寛永のみ（2例）となる。

出土した銭貨を基準とする土壙墓の構築時期は、新寛永通寶（文錢）の鋳造された寛文8年（1668）を上限とし、盛行年代は新寛永（無背）が鋳造された元禄11年（1698）以降の18世紀から19世紀が中心と想定される。下限の時期は、伸展葬の第101・102号土壙が、座葬中心の近世墓制から脱却したあり方を示すことから、明治期まで下がる可

能性もある。

江戸近郊の農村部における葬送習俗の変遷過程

の中に、これらの墓壙群を位置づけることが、今後の課題といえよう。

2 遺物からみた上宿遺跡の様相

今回の調査では、縄文時代や古墳時代から飛鳥時代の遺物も少量ではあるが、みつかっている。ここでは、遺物からみた上宿遺跡の様相について考えていくことにする。

縄文時代の様相

上宿遺跡で出土した最も古い遺物は、縄文時代前期末葉の諸磯c式土器と浮島・興津系土器（第72図1～6）である。前期後半には気候の寒冷化に伴い海退が始まり、沖積低地にも縄文人の足跡がみられようになる。しかし、当遺跡では単発的な様相を示し、安定的な集落は営まれなかつたようである。同じく中期から後期の土器片もみつかっているが、その量はわずかである。

古墳時代から飛鳥時代の様相

荒川下流域にひろがる沖積低地は、弥生時代には空白・無人期間がある程度の期間続いたものと想定される。再び、人々の足跡がみられるようになるのは、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭を待たなければならない。

遺跡周辺では、弥生時代後期終末の環濠集落が調査されたふじみ野市伊佐島遺跡や、富士見市上内出遺跡・山形遺跡、志木市馬場遺跡、和光市榎堂遺跡などで、古墳時代前期の集落跡や方形周溝墓が調査されている。遺跡数の少なさは、調査例

に比例しているが、当時の灌漑技術や土木技術では、安定した水量の制御が十分でなかったことが大きな要因と考えられる。

かかる空白期間の後、当遺跡でも古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺物が断片的ながら出土している。頸部に補強帯を巡らした北関東型須恵器の大甕（第73図3）、古墳時代的な櫛描波状文を口縁部に施文した須恵器甕（第69図3）は、6世紀末葉から7世紀初頭に位置づけられる。また、第3号溝跡出土した勾玉（第38図46）は、大理石に近い石英質の石材で作られ、長さ4cmを超える大型品に復元される。中・近世の溝跡からの出土であるため、後世の贋作の可能性も否定できないが、かつて上宗岡2丁目周辺からは蛇紋岩製の勾玉1個が採集されており（志木市1990）、周辺に古墳や祭祀遺構が存在する可能性も考えられる。

7世紀の飛鳥時代の遺物としては、湖西産須恵器が目立つ。壺Gの蓋（第69図11）や甕（第17図4、第27図20、第73図9）がみられる。いずれも精選された胎土で、湖西窯に特徴的な櫛歯文などを施文している。こうした遠隔地から運ばれてきた製品は、河川交通を媒介にもたらされたものであり、水陸交通の要衝として流通・交易が盛んであったことが分かる。

引用・参考文献

- 井上尚明 2004 「日本古代の市について」『白門考古論叢』中央考古会・中央大学考古学研究会
大久保 聰 2018 「志木市の遺跡」『新羅郡の時代を探る』シンポジウム資料集 和光市・朝霞市・志木市・新座市教育委員会
志木市 1990 『志木市史』通史編上 原始・古代・中世・近世
志木市教育委員会 1988 『水害と志木』志木市の文化財第12集
志木市教育委員会 1989 『宿遺跡試掘調査概要』
富士見市教育委員会 1994 『富士見市史』通史編 上巻
渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群発掘調査報告書第2冊—窯跡編（2）— 鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会